シークレットゲーム【episode２】

キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シークレットゲーム【ｅｐｉｓｏｄｅ2】

【Ｎコード】
Ｎ９９７１Ｌ

【作者名】
キセル

【あらすじ】
この閉ざされた廃墟に集う、無造作に選ばれた１３人。
彼らが巻き込まれるのは…【生死を賭けたゲーム】
１３台のＰＤＡ、１３通りの解除条件。
７２時間以内にこの解除条件を満たし、【ゲーム】をクリア出来なければ首輪の仕掛けが作動し、プレイヤーを殺害する。
誰がどのＰＤＡを持っているかわからない。

《闇》への７２時間が始まる――――。

第1話：序章（前書き）

※重要事項※

本作品はシークレットゲーム【ｅｐｉｓｏｄｅ1】の続編にあたります。
本作品だけでもシークレットゲームの二次創作として成り立つと思いますが多くのネタバレも含みますので先に【ｅｐｉｓｏｄｅ1】から読む事をオススメします。

※基本事項※

・シークレットゲームの二次創作作品です。

・ゲームは総一達の参加したものとは別なので全キャラオリジナルです。

・ルール、解除条件等は変更していません。

・ご都合展開がある場合も無い事は無いです。

以上の事がＯＫという方、先にお進み下さい。

第1話：序章

「…ん？」

目が覚めて最初に見えたのは薄汚れた天井だった。

いや、天井だけでなく部屋全体が長年掃除されていないのか埃まみれだ。

「…どこだ、ここは？」

見た事の無い場所に思わず首をひねる。

目が覚めたら見知らぬ場所にいた。

なんとも奇妙な話しだが俺の身体が瞬間移動したらしい。

んな馬鹿な。

テレポートじゃあるまいし。

記憶を整理してみる。

目が覚めたという事は俺は寝ていたか気を失っていたかだ。

そうなる前、どこまで俺の記憶はあった？

最後に見た景色は教室だ。

学校のいつもの教室。

そこに俺は忘れ物を取りに行った。

ただそれだけだ。

そこからの記憶が無い以上、そこで何かが起こったのだ。

「…んぁ」

立ち上がろうとすると頭がクラクラと揺れ、立ちくらみに襲われた。

そういえば身体中がダルい。

「…眠らされたか」

薬の後遺症、そう考えるのが自然だ。

俺は誰かに眠らされ、そのままここに運び込まれた。

そう考えれば俺がこの見知らぬ場所に居るのも辻褄があう。

「誘拐…、いや、違うか？」

これが誘拐ならば今現在、俺が自由に行動できるのはおかしい。

何一つ拘束等をされていない。

「…いや、待て」

首に…何かがある。

「首輪…か？」

首をぐるっと一周し、金属製の首輪がつけられていた。

この部屋で唯一、人を拘束できるような物だ。

だがその首輪にも紐等は無い。

つまりただ首につけられているだけだ。

「…なるほどな」

何の意味も無く首に付けられたはずが無い。

となればこの首輪一つで充分に俺を拘束できると判断したんだろう。

部屋を見渡すとまず目についたのは自分の持っていた学校用のカバンだった。

更にカバンの横には見た事の無い機械があったが先にカバンを手に取る。

中を見ると捕られた物も特に無い、携帯もキチンと残っている。

「携帯が残ってるって事は…」

画面を開くと予想通り、まず圏外の文字が目に入る。

当たり前だ。

そうでなければ誘拐犯共が持っていくに決まっている。

カシャッ

俺は携帯のカメラ機能で自分の首輪を写した。

首輪は予想していた通り、金属製の物だ。

そのシンプルさからアクセサリーと言っても問題は無いといえる。

そして首輪には何かを接続できるコネクターのような物があった。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

その時、部屋全体にアラームが響いた。

「あぁ、んな焦るなよ、無視してた訳じゃないんだから」

アラームはカバンの横に置かれていた機械から鳴っていた。

俺はそれを拾うと画面を見る。

画面はトランプでよく見るスペードの【A】だった。

「PDAか」

携帯より大きく、一般的な携帯ゲームより小さなその機械。

画面を見てもわかるようにトランプをモチーフにしているのか、かなり薄い。

大きめの画面、そしてしたの方にボタンがついていた。

ピッ

ＰＤＡをいじると画面が切り替わる。

【ルール】【機能】【解除条件】

現れたのはそんな三つの項目だった。

ＰＤＡはタッチパネル式だ。

ピッ

とりあえずルールの項目をタッチしてみる。

【ルール１】

《参加者には特別製の首輪が付けられている。
それぞれのＰＤＡに書かれた条件を満たした状態で首輪のコネクタにＰＤＡを読み込ませれば外すことができる。
条件を満たさない状況でＰＤＡを読み込ませると首輪が作動し、１５秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。
一度作動した首輪を止める方法は存在しない。》

【ルール２】

《参加者には1~9のルールが4つずつ教えられる。
与えられる情報はルール1と2と、残りの3~9から2つずつ。
およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。》

【ルール5】
《侵入禁止エリアが存在する。
初期では屋外のみ。
侵入禁止エリアへ侵入すると首輪が作動し警備システムに殺される。
また、2日目になると侵入禁止エリアが一階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館全域が侵入禁止エリアとなる。》

【ルール7】
開始から6時間以内は全域を戦闘禁止とする。
違反した場合、首輪が作動する。
正当防衛は除外する。

「…ど~やら厄介な事に巻き込まれたらしいな」

ルールだけを見ればむちゃくちゃも良い所だ。

だがこれで納得がいくのがこの首輪だった。

ルールが本当ならこの首輪一つで俺の命を自由にできる。

拘束としては充分だろう。

「あと気になるのは参加者…か」

ルールの2を見てもわかるが俺以外にもこの建物に何人かいるという事だろう。

ＰＤＡをトランプでモチーフにしている事を考えれば…。

参加者はトランプのカード、５４枚分の人数、いや…Ｊｏｋｅｒを抜いた５２人か？

もしくは単純にＡ～Ｋの１３枚、つまり１３人か？。

ルールが完全で無いのは他の参加者と情報交換をしろという事だろう。

そしてその為であろう、開始から６時間の戦闘禁止のルール。

「なるほどな…」

ルールの方は他の参加者にあって情報を得るしか無いか。

もちろん、このルールが本当で他の参加者が居ればの話しだが。

ピッ。

次に見た項目は解除条件だ。

ルールにはよく首輪の事が出ていた。

となればこれは首輪の解除条件なのだろう。

【Ａ】

《クイーンのＰＤＡの所有者を殺害する。

手段は問わない。》

「…チッ」

ある程度は予想出来ていたが、思わず舌打ちをした。

「本当に…厄介な事になったもんだ」

ルールの5、侵入禁止エリア。

ここに入ってしまうと首輪が作動するらしい。

だが最終的に侵入禁止エリアはこの建物全体と広がる。

つまり首輪を外さなければ最終的に死ぬらしい。

そして、首輪を外すには…【Q】のＰＤＡの持ち主を探し出して殺す事。

「さて…どうするか」

口ではそう言った。

だが…心の中では【Q】のＰＤＡの持ち主を探す事を考えていた。

誰が【Q】を持っているのかわかっていれば…最終的に――――。

「…ッ！」

心の中に出てきた黒い感情を静めていく。

「そういや…あいつを待たせたままだったな」

今頃あいつは怒っているのかもしれない、そう考えると苦笑した。

「まぁ待ってな慶吾、約束通り、ちゃんと帰ってパフェ奢ってやるから」

そんな事を約束していたのを思い出し、俺はニヤリと笑う。

「だって俺、王生　光一だぜ？」

第2話：二人の男女（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

？？？？？：？？？？？

第2話：二人の男女

「地図である程度は想像ついてたが…やっぱ広いな」

部屋を出た俺はＰＤＡの機能の項目にあった地図を開いた。

わかった事はこの建物の広さ、そして六階だてという事だ。

「闇雲に歩くのは効率が悪いな…」

特徴的な通路等をノートに地図として書いていく。

ＰＤＡの地図とノートに書いた地図。

２つを照らし合わせて現在地を知る事ができた。

「向かうべきは…こっちか」

ピッ

ＰＤＡに映し出されている地図を見る。

地図にはエントランスホールのような物が見える。

出られはしないだろうがここに閉じ込めた連中のやり方が見えるかもしれない。

それに誰かに出会う確率も高くはなるだろう。

ルールで言う、参加者か誘拐犯かはわからないが。

「―い―？」

「…ん？」

そこから少し進むと話し声が聞こえた　。

声からすると…男と女の二人か？

目的地のエントランスホールから少し順路を変え、話し声のした方へ向かう。

思った通り、通路に男と女が二人、壁に寄りかかって話しをしていた。

二人の共通点は長身という事、そして俺と同じ首輪をしている事だ。

特に男の方はかなり背が高く体格もいい、年は４０代くらいか。

女の方は黒髪のロングが特徴的だ、年は２０代前半くらいだろうか。

この薄汚れた建物とは不釣り合いな綺麗な顔立ちをしている

「……」

さて…どうするか。

首輪をしていると言っても誘拐犯の可能性もある。

迂闊に話しかけて今度こそ拘束でもされれば笑い話しにもならない。

少し様子を見てみるか…。

俺は二人からは見えないように通路に隠れ、二人の会話に耳を傾ける。

「…まさかお前が来ているとわな」

「あぁ、俺自身驚いている、だが同時に納得もした」

男は腕を組み、目を閉じる。

「どうやら俺は用済みらしい」

そして、その表情を変えないままそう呟いた。

「…受け入れるつもりか？」

「あぁ、どの道、生きる気力はもう無い」

「…そうか」

女も方も声色を一切変えず、そう返した。

会話を聞く限り、二人は見知った中なのだろう。

だが、建物に連れて来られたばかりの者同士がする会話にしては不自然すぎる。

「だが、知った顔に会えたおかげで少しは落ち着いた、君の方は任

務かい？」

「あぁ、そうだ…」

男の問いに女がそう頷きながら返す。

「…そうか、君も俺と同じか」

「一緒にするな、私は目的があって来た、お前とは違う」

女の方がギロリと鋭い目つきで男を睨む。

「…そう変わらんさ」

だが男は顔色一つ変えずにそう返した。

「…任務？」

二人の会話で特に気になったのはその単語だった。

このゲームが本当だとすれば当然、かなり大規模なものだ。

一人二人が企画できるようなゲームじゃない。

背後にはデカい組織があるのだろう。

【任務】

当たり前だが任務ってのは誰かに与えられる物だ。

そう考えると、女の方は誘拐犯の奴らか？

…逃げた方がいいかもな。

そう焦ってしまったのが悪かったのだろう。

「お前は本当に―」

「…待て」

言葉を返そうとする女に向け、男が両手を広げた。

「…何だ？」

女の方がそう聞くが男は俺の隠れている方を向く。

「そこに居るのは誰だ？他の参加者か？」

――バレた？

…俺は物音一つ出していないはずだ。

「…なるほどな」

女の方も俺に気付いたのは二人がこっちに向く。

―本当に逃げた方がよさそうだ。

「安心しろ、ゲーム開始から6時間の戦闘は禁止されている、私達に君をどうこうするつもりは無い」

「……」

ゲーム開始から6時間の戦闘禁止のルール。

だがそれは当然参加者だけのものだ。

誘拐犯が居るとして、その首輪が作動するかはわからない。

―だが。

「わかった…、今そっちに出る」

俺はあえて二人の前に姿を見せた。

誘拐犯ならば奴らの意図を知る事が出来る。

それに殺される確率は少ないと思えた。

殺すならば最初に眠らされた時に殺されたはずだからだ。

参加者ならばルール等の情報交換も出来る。

「先に聞いとくけど、あんたら誘拐犯じゃないよな？」

「あぁ、私達も状況は君と同じだ」

「……」

男の方も女の方も姿を見せた俺に対し、何かをする気配は無い。

「少年、君の名は？」

「人に名前を聞くなら自分からだぜ、おっさん」

相手の出方を見る為にとりあえず挑発してみる。

「ふむ…確かにそうだな」

だが男は俺の挑発にすんなりと頷いた。

「私は…、柳（やなぎ）　辰巳（たつみ）だ」

男、柳は自分の自己紹介をすると女の方を見た。

「…雨宮（あまみや）　鈴音（すずね）」

女の方、雨宮は興味無さそうにそう言うと黙り込んだ。

「これで我々の自己紹介は終わりだ、次は少年、君の番だ」

「王生　光一…」

俺は油断無く二人にそう返した。

「王生か…、よろしく頼む」

「状況は同じって言ってたな、あんた達も気付いたらこの建物に居たのか？」

「あぁ、この首輪をつけられてな」

柳はそう言いながら首輪を俺に見せた。

―嘘つけ。

この二人はこの建物について知っている。

少なくとも俺よりは…だが。

「…鈴音」

柳は雨宮の方を向くとそう呼び掛けた。

「…なんだ？」

俺達の話しを興味無さそうに聞いていた雨宮が答える。

「この建物で最初に出会ったのは俺か？」

「…そうだ」

雨宮がそう頷くのを確認すると柳は俺に視線を戻した。

「王生、君が出会った他の参加者は俺達が初めてか？」

「…そうだけど」

俺がそう返事をすると柳は満足そうに頷いた。

「ならこれから二人で行動すればいい」

「は？」
「なっ！」

俺と雨宮の声が重なる。

いきなり何を言ってんだ？

「単独行動にも限界があるだろう？」

「いや…そりゃそうだけど―」

「勝手な真似はするな」

俺の言葉を遮ったのは雨宮だった。

「焦るな鈴音、ゲームはまだ始まったばかりだ…」

「……」

「動くなら状況を把握してからでもいいだろう？」

沈黙する雨宮に柳が諭すように話す。

俺といえば意味がわからず、混乱していた。

「…二人で行動って、あんたはどうすんだよ？」

まず聞きだいのは柳の事だった。

自分は何をするかを言っていない。

「…俺はいい、最初から生き残るつもりは無いからな」

「…は？」

…死ぬつもりなのか？

こんな訳のわかないゲームで。

「何言ってんだ…？あんた」

俺の口から当然のようにその疑問が出る。

「王生」

だが雨宮はさっさと壁から身体を離し、俺に呼び掛けていた。

「死ぬ気の奴に何を言っても無駄だ」

「…あんたら知り合いじゃないのか？」

雨宮のその素っ気ない言葉に俺の疑問は増える。

「…余計なお節介は必要ないというだけだ」

雨宮はそう言って柳の方に身体を向ける。

「お前は脱け殻だ、生きていない」

「…自覚してるさ」

そう会話をかわすと雨宮は振り返り、先へ歩き出した。

「…なぁ、あんた…本当に死ぬつもりなのか」

「…あぁ」

俺の言葉にも柳は目をつむり、そう頷くだけだった。

「彼女…、鈴音に付いてやってくれ」

「……」

俺は何も言わず、もうかなり遠くまで行ってしまった雨宮を追う形で走り出した。

柳をその場に残して。

慶吾なら…どうしただろうか。

答えは決まっている。

だが俺はあえて考えないようにしながら先へと進んだ。

―――

「脱け殻…か、確かにそうだ」

一人その場に残った柳は他人事のようにそう呟いた。

「だが…鈴音、お前は見えていないだけだ、いや…考えないようにしているのか」

その視線は王生と雨宮、二人が進んだ通路へと向かう。

「自分自身を…な」

第3話：悪意を呼ぶ建物（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２

雨宮　鈴音：？：２．２

柳　辰巳：？：７．６

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

？？？？？：？？：？？？？？

第3話：悪意を呼ぶ建物

「なぁ、あんたはここに来る前の事、覚えてんのか？」

「……」

だんまりか…。

この女、雨宮と行動する事になってからしばらく歩いたがさっきからずっとこんな調子だ。

雨宮は基本的に何も喋らない、そしてこっちが喋っても無視してくる。

要するにコミュニケーションのしようがないのだ。

何を話しかけてもそれは俺の独り言になって通路に虚しく響く。

更に雨宮の歩くスピードもかなり速い。

俺の事などまるで気にしないかの速さだ。

というより本当に一人で進んでいるのだろう。

他人バリアー。

俺も持っているといえば持っているが雨宮のソレには＋数多くトゲがついているようだ。

他人を拒絶し、信じない。
信じれるのは自分だけ。
そんな言葉が今の雨宮からは感じた。
まぁ…、雨宮を信じていない俺が言えた事じゃないが。
「…待て」
不意に雨宮が立ち止まり、俺にそう言った。
ここまで二人で進んで来て初めての事だ。
「…なんだ？」
俺はふと雨宮の視線の先を見る。
床の一部分が不自然に盛り上がっていた。
…なんかの仕掛けか？
いや、仕掛けにしては位置が変だ。
床。足元に設置してあるという事は誰かに踏ませる事が目的のはずだ。
「…罠、か？」
「…わかるのか？」

雨宮は表情こそ変えないが言葉は若干だが感心混じりだった。

「あぁ、作動させてみないとわかんねーけど」

俺は仕掛けの場所まで行くとしゃがみ込む。

ガコッ…。

指で軽く押すと盛り上がった床は簡単に上下した。

軽く押すだけでここまで動くのだ、誰かが踏めば確実に床は押し込まれる。

「作動させてみてもいいか?罠にしてもどんな物があるか見てみたい」

「…好きにしろ」

了解を得たので俺は床の盛り上がった所に足を乗せる。

知らずにこれを踏んで罠が作動する事と罠だとわかっていて作動させる事はまったくの別物だ。

ある程度の対応はできる。

ガコンッ。

踏み込むと床は思った以上に簡単にへこんだ。

ヒュッ

「！？」

それとタイミングを合わせるように壁からある物が発射された。

―ボウガンの矢か！？

矢はまっすぐに俺に向かって飛んでくる。

「チッ…」

ボウガンの矢を避けようとする俺。

ヒョイッ

そんな俺はいきなり首を掴まれ、引っ張られた。

ガァンッ。

ボウガンの矢は壁に激突し、床に落ちる。

「……」

俺の首根っこを掴んで引っ張ったのは雨宮だった。

「…ありがとな」

一応、お礼は言っておく。

正直言って雨宮が俺を助けた事が意外だった。

「あんたは俺がどうなろうが構わないって思ってたんだがな」

「…勘違いするな、今怪我されたら足手まといだ」

「…へいへい」

俺は立ち上がると床に落ちたボウガンを拾う。

一応は武器にでもなるか。

「…ん？」

目の前にこっちに向かって歩いてくる二人が見えた。

男女の二人組みだ。

男の方はニット帽をかぶったチンピラ風の男。

女の方は金髪のショートカットが印象的だった。

さっきの音を聞いてやって来たのか。

「……」

雨宮も気付いているのかその二人に視線を向けている。

二人は俺達から少し離れた場所で立ち止まった。

「お前らに一つ聞くぜ！首輪とＰＤＡを見せろ！！」

そして男の方が男達に向けてそう声を上げた。

俺は雨宮と視線を合わせ、首輪とＰＤＡを二人に向け、見せた。

もちろん、画面は見せずにだが。

「どうやら状況は同じみてぇだな」

男はそれを見てニヤリと笑うと女の方にそう話した。

「それじゃあ話ししてみるのが一番ね」

女の方も頷くと二人は俺達に向けて歩み寄る。

「待てよ」

「あん？」

「え？」

俺は歩み寄る二人を止める。

「俺達だけに首輪とＰＤＡを見せさせておしまいってのはねぇだろ」

「…なるほど、最もだわ」

男は納得したのかその場で立ち止まる。

「ほら、これが俺の首輪とＰＤＡ」

男は首輪とＰＤＡを俺に見せてくる。

「私もね、ごめんなさい、気付かなかったわ」

女も苦笑混じりに首輪とＰＤＡを見せた。

これで俺の出会った参加者は全部で５人となった。

「よぉ、見た所、お前らも立場は同じみてぇだな」

男はそう言いながらＰＤＡを軽く振った。

「それじゃああんたらも気付いたらこの建物に居たのか？」

「そうね、最悪な目覚めだったわ」

女の方が溜め息混じりにそう答える。

「訳がわからないまま部屋を出て、しばらく進んだら彼、新城さんが居てね、ここまで一緒に来たって訳」

「それじゃああんたら、お互いに面識は無いのか？」

「えぇ、この建物で初めて出会ったわ」

「お前らはどうなんだ？面識あったのか？」

「……」

雨宮は無言で腕を組み、壁に寄りかかっている。

「まぁ…、見ての通り、かな」

俺と雨宮に面識が無かった事は見たまんまで感じられる。

「ねっ、そろそろ始めちゃわない？」

「…そうだな、全部のルールを埋めない事には行動のしようもないし」

ルールはおおよそ４～５人で集まれば全てを知る事ができるらしい。

この場に居るのは４人、上手くいけばルールを全て埋められる。

「いや、もちろんそれもあるんだけどね」

だが女の方は苦笑しながら首を横に振った。

「こういう場合、まずは自己紹介からじゃない？」

それもそうか…。

「それじゃあ言い出しっぺの私からね、春野夏喜よ（はるの　なつき）、春夏秋冬の春と夏、よろしくね」

「あぁ、よろしく、春野――」

「夏喜でいいよ、そっちの方が呼ばれ慣れてるから」

俺の言葉を遮るように夏喜はそういった。

「そうか、ならよろしく頼む、夏喜」

ペシンッ

そう言うなりいきなり額をはたかれた。

「年上の女性を呼び捨てにするのは頂けないわね～」

夏喜は冗談混じりにそう言って笑う。

まぁ普通はそうか。

雨宮が呼び捨てでも良かったのはただ単にあいつが無視してただけだし。

「細かい事は言わないのが若く見える秘訣だと思う」

「あら、生意気な事言ってくれちゃって」

そういって夏喜…さんはまた冗談混じりに笑った。

しかし目が笑って無かったのでこれ以上言うのは止めておく。

「それじゃあ俺か、新城（しんじょう）　渉（わたる）だ、お仲間に会えて嬉しいぜ」

男の方、新城はそう言いながらニヤリと笑う。

飄々とした雰囲気の男だ。

「それで、そっちは？」

「俺は王生　光一」

二人に向け、そう自己紹介をするとチラリと雨宮を見る。

「……」

予想通りだったが当の本人は相変わらず黙り込んだまま、壁に寄りかかっていた。

「おい、次はあんたの番だぜ、ちゃっちゃと済ませろよ」

新城は面倒そうに雨宮に早く自己紹介をするように促す。

さっさと終えてルール交換に移りたいのだろう。

俺としてもその意見に賛成だった。

「なぁ、あんたも早く情報交換に移りたいだろ？」

「…雨宮　鈴音」

俺がそう言うとようやく雨宮は自分の名前を言った。

「…鉄仮面みてぇな女だ」

「新城さん、女の人にそう言うのはあまり感心しないわね」

「こりゃ失礼」

新城はそう言いながらも顔は笑っていた。

「とにもかくにもまずはルールの確認だ、何も知らずにルール違反で死ぬなんて馬鹿らしいぜ」

新城の言葉に俺達は各々ＰＤＡを取り出した。

――――

――

「ククク…ヒャッハハハハハハ！！」

カラカラカラッ

目が覚めてからずっと男は上機嫌だった。

流石に数分間はこの状況の把握に手間取っていたがそばに置かれていたＰＤＡを確認するとそんな事はどうでも良くなった。

カラカラカラッ

この建物の中では自分を縛る物は何も無い。

何をしても自由なのだ。

その事を彼のＰＤＡのルールがそう裏付けていた。

カラカラカラッ

カラカラと通路に響く音。

それは床に彼が手に持つ鉄パイプが当たる音だ。

彼が上機嫌な理由は３つあった。

一つはこの建物が何をしても許される場所だという事。

一つは目覚めてすぐに鉄パイプを見つけた事。

最後の一つは――――。

「クッヒャヒヤヒャ…、こりゃ良いスタートがきれそうだ」

目の前に如何にもカモになりそうな男が居た事だ。

男は床に引きずるように持っていた鉄パイプを肩に担いだ。

「とりあえず…ぶっ殺しゃいいんだよな」

歪んだ笑顔で笑う男。

だが男は一つ、間違いを犯していた。

このゲームにおける序盤で最も重要なルール。

６時間の戦闘行為の禁止を男は知らなかったのだ。

第４話：足りないルール（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２
雨宮　鈴音：？：２．３
柳　辰巳：？：７．０
春野　夏喜：？：６．８
新城　渉：？：３．５
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？

第4話：足りないルール

【ルール3】
《ＰＤＡは全部で１３台存在する。
１３台にはそれぞれ、異なる解除条件が書かれており、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。
この時のＰＤＡに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。
他人のカードを奪っても良いが、そのカードに書かれた条件で首輪を外す事は不可能で、読み込ませると首輪が作動し着用者は死ぬ。
あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。》

【ルール6】
《開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人間全てを勝利者とし、２０億円の賞金を山分けする》

【ルール8】
《指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が発動する。》

ルール交換で新たにわかったのはこの3つのルールだった。

ある程度は予想していたが同じルールを書いてあるＰＤＡもあるので情報がダブってしまうのだ。

ルールの1と2は全員に初期情報として配られる。

そして俺のＰＤＡに記されていたルールは5と7。

これでわかったルールは1、2、3、5、7、8。

４と９のルールについてはまだ情報を集める必要がある。

「訳わかんないルールが増えたわね～」

夏喜は不満げにＰＤＡを睨みつけた。

「しかし…侵入禁止エリアとは考えたもんだ、ルールが本当なら嫌でも最終的にはみんな上の同じ階に居るはめになる」

新城達は侵入禁止エリアについてのルールを知らなかったのだろう。

「助かったぜ、ありがとよ」

「いや、俺としても参加者が全部で１３人って事がわかった」

ＰＤＡは全部で１３台。

トランプのＡ～Ｋまでの１３台なのだろう。

そして一人に一つそれを初期配布するとなるとゲームの参加者は全部で１３人となる。

「ところでな、お前らはどう思う？」

「…どうって？」

新城の問いに夏喜が首を傾げた。

「この状況だよ、例えば…そうだな、ルールが本当かどうか、とか

な」

「あまり考えたくない事を考えさせてくれるわね…」

夏喜が渋い表情をしながらも考える。

「…そうね、残りの２つのルールが何かわからない事には答えは出せないかな」

少ししてそう結論を出した。

「そりゃあ最もだ、んじゃ王生、お前はどう思うよ」

「……」

まず間違い無くルールは真実だろう。

拉致、建物、首輪、ＰＤＡ。

ここまで状況を作られておいて全て冗談でしたで終わる筈は無い。

「ルールの真偽はわからない、けど本当かどうかを試してみる訳にもいかないな」

だが俺はあえてそう答えておいた。

あまり注目されるのは良い事じゃない。

それに今の新城の質問は俺達を試しているようにも思えた。

「あんたの方はどうなんだ？ルールの真偽について」

今度は俺からそう質問を返してみる。

「俺か？そうだな…、ルールの６については真実であって欲しい所、かな」

そう言いながら新城がクククと笑う。

ルールの６はこのゲーム開始から３日と一時間が過ぎた時点で生存している者全員で２０億を山分けするというルールだ。

「ちょっと新城さん…、あなた正気なの！！」

夏喜がキッと新城を睨み付けた。

「あん？何がよ」

「２０億の賞金に目が眩んだって事でしょ」

ゲームの勝利者に与えられる賞金。

新城がそれを狙って積極的にゲームに参加する可能性を夏喜は考えていた。

「おいおい、勘違いしなすんなって、賞金にしか目がいってないのはあんたの方だぜ、ねーちゃん」

「なんですって！？」

新城の挑発するような言葉に夏喜がますます新城を睨む。

「俺が言いたいのは賞金の書いてある前ん所だ」

「…あ、勝利条件」

夏喜がルールの6に書いてある文に気付いた。

「そうだ、勝利条件は3日と一時間の生存、一応終わりは見えているだろ？」

3日と一時間と生存。

これが嘘だったならば終わりが存在しない事になる。

「…なるほど、確かにあんたの言う通りね」

これには夏喜も納得したのか素直に頷いた。

まぁその顔には新城に言いたい文句が山ほどあると言いたげだったが。

「んで…雨宮さんよ、あんたはどうだい？まただんまりか？」

「……」

まただんまりだった。

というよりさっきから喋っているのは俺達三人だけだ。

雨宮は腕を組み、壁に寄りかかっているままだ。
最早お決まりのポーズになっている。
「…やれやれ」
新城はわざとらしく肩を上げた。
「…ルールは全て真実だろう」
だがそこで雨宮が一言だけそう呟いた。
「…その根拠は？」
「……」
新城がそう聞くが雨宮は再び黙り込んだ。
雨宮、この女は油断できない。
新城や夏喜は知らないが俺はこの女と柳という大柄な男との会話を聞いていたからだ。
気まずい沈黙が流れる。
「…ねぇ、このままここに居るのもなんだし、そろそろ出発しちゃわない？」
「そうだな…、全てのルールを把握する為にも他の参加者に会う必

要がある」

残ったルールは４と９。

その２つを知り、ルールを全て把握しなければ満足に動く事もできない。

「問題は６時間の戦闘行為の禁止を知らねぇ先走る馬鹿が出てくるかもしれないって所か」

ゲーム開始から６時間の戦闘行為の禁止。

そのルールを初期配布のＰＤＡに記されておらず、なおかつ好戦的なゲームの参加者がいれば。

戦いは６時間を待たず、開始される。

もちろん、戦闘行為を仕掛けた方の首輪が作動し、戦闘を仕掛けた者が死ぬだろうが。

「……」

しかし…それでルールが真実だという事が確信できる。

おまけに好戦的で厄介であろうゲームの参加者も同時に死ぬ。

…その方が都合が良いんだろうな。

ドクンッ

「…ッ！」

黒い考えが俺の頭の中で膨らんでいく。

―落ち着け。

とにかく…今を考えるんだ。

それを払いのけるように俺は前に進んだ。

「…俺達、地図にあるホールみたいな場所に向かってました」

「…私達もよ、目的は同じって訳ね」

「俺達が出会ったのも偶然じゃないかもな」

俺達４人はそのまま最初の目的通り、エントランスホールへと向かった。

道中、歩きながら罠や部屋等の情報交換をしながらだ。

俺達は罠があるという事の情報を。

新城達からはいろんな部屋にダンボール箱が積まれているが中はガラクタばかりだったという事を。

お互いにルール以外の情報交換をした。

柳の事は言わなかったが雨宮も何も言わないのでこれで良いのだろう。

軽い雑談も入ってきた道中。

目的のホールに入った瞬間、それは起きた。

「ひぃぃいっ!!たっ、たた助けてくれぇぇぇえ!!」

男の切羽詰まった叫び声がホールに響いた。

第5話：狩猟者の失敗（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２
雨宮　鈴音：？：２．３
柳　辰巳：？：７．０
春野　夏喜：？：６．８
新城　渉：？：３．５
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？

第5話：狩猟者の失敗

――エントランスホール到達の少し前。

「ねぇねぇ、雨宮さんは普段何の仕事してるの？」

「……」

後ろで雨宮に話しかける夏喜の声が聞こえてくる。

『あんた達は男なんだから前に行きなさい、前に』

そんな夏喜の男女差別も甚だしい言葉に俺と新城は前を歩かされていた。

その後ろには雨宮と夏喜が付いて来ている。

「私は今保育士になろうと思ってるんだ」

「……」

夏喜は雨宮に日常会話的な話題をふるが雨宮は変わらず、無言のままだ。

どうやら夏喜が俺と新城を前に行かせたのは雨宮と話しをする為らしい。

俺から言わせれば無駄な努力だろう。

「それじゃあ雨宮さんが普段、何の仕事してるか私が当ててあげる」

自信満々に夏喜はそう言った。

ヤクザ関係。

真っ先に思い付いたのがそんな関係の仕事だった。

「う～ん…、あっ！じつはメイド喫茶のメイドさんとか？」

あ・り・え・ね・ぇ！

「……」

「夏喜さん、言葉のドッジボールはそんくらいでいいだろ」

いい加減ラチがあかないので俺は二人の方を振り返ってそう言った。

「言葉のドッジボールってどういう意味よ？」

「文字通りだよ、言葉ばっかぶつけても無駄って事」

これは体験談でもある。

俺の…だが。

「生意気言うのね、信頼関係はまず会話からよ」

その会話が成り立たないんだからどうしようも無いだろう…。

そもそもこんな状況で信頼関係も何も無いだろう。

「…呑気なもんだ」

思わずため息と共にそんな言葉が出た。

「良いじゃねぇか、呑気で」

「…ん？」

俺の横を歩いていた新城がそう答える。

「ピーピー泣き騒がれて足手まといになるよりは幾分もマシって事だよ」

「…なるほどな」

確かにそうだ。

新城の言葉に納得すると同時に俺の中にもう一つ別の考えが浮かんだ。

コイツは俺に似ている。

世の中には自分程信用出来ないものは無いと俺は考えている。

新城…、コイツの行動には注意した方がいいな。

目的のエントランスホールが見えてくる。

俺達がその悲鳴を聞いたのはそれから数秒後だった。

――――

――

目覚めた青年がまず真っ先に確認したのは自分のリュックの中身だった。

「あった…、良かった」

青年がリュックから取り出したのは携帯ゲーム機だった。

ただ普通の店で売っている物とは少し違い、可愛らしいアニメの女の子の絵が描かれている。

ピッ

電源を入れてセーブデータの確認をする。

「…ほっ」

セーブデータが無事だったのを確認し、安堵した。

そのゲームはジャンルで言う恋愛シュミレーションだった。

女の子のキャラと会話やデートを楽しむものだ。

青年がこのゲームに費やした時間は多い。

ここでセーブデータが消えるという事は青年にとって立ち直れない程つらいものなのだ。

「こ…、ここはどこなんだぁ？」

セーブデータの確認を終えた青年は今の状況を整理する。

半年ぶりに家を出た。

それは彼にとってとても重要な用事の為だ。

だが気がついてみれば自分はまったく知らない場所に居る。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「ひっ！」

ＰＤＡがその存在をアピールするかのように鳴らしたアラームに青年は身体を強ばらせた。

「な…なんだコレは」

恐る恐る、ＰＤＡに手を伸ばし画面を見る。

【ルール】
【機能】
【解除条件】

ピッ

「ふ、ふ～ん…」

青年はこういったゲーム機のようなものには慣れていた。

簡単にＰＤＡを操作し、項目を読む。

全てを読み終えた時、その口元がニヤニヤとしていた。

―――

―

それから僅か数分後の事だ。

「ひっ…！ひっ！！」

青年は追われていた。

腹が痛くなり、涙と鼻水が必然的に出てくる。

家に引きこもっていた彼は運動不足は当然だった。

「ま、まだ追って来てる」

チラッと後ろを振り返る。

「ヒャッハハハハ！いい加減諦めろよ！豚野郎がぁ！！」

自分を追ってくる鉄パイプを持った金髪の男。

まるまると太った自分とは違い、その動きは軽快だった。

「なんだよ…、俺は、俺は主人公じゃないのかよ」

ＰＤＡを見てこのゲームの内容を知った青年は歓喜した。

まるで非日常だが現実のゲーム。

その参加者となった自分。

青年は自分が主人公にでもなったかのような錯覚をしていた。

現実は部屋を出て少しの合間に鉄パイプを持った男に襲われたのだ

が。

それでも青年にもまだ運が残っていた。

一つは鉄パイプを持った金髪の男が青年を追い込む事を楽しんでいた事だ。

金髪の男が本気を出せば青年に追いつき、鉄パイプを振るう等は用意だった。

それをあえてつかず離れずの距離を置き、青年が無様に逃げ惑う姿を楽しんでいた。

そしてもう一つ。

逃げる中、青年の足は知らず知らず向かっていた。

エントランスホールに向けて。

―――

―

エントランスホールに辿り着いた直後の出来事だった。

「助けてくれぇ！誰かぁぁあ！！」

俺達とは別の場所から太った男がエントランスホールに向けて走って来た。

身体は汗だくで息遣いも荒い。

「ひっ！！」

走って来た男はエントランスホールの中央で身体のバランスを崩した。

何かにつまずいたというより足に限界が来たのだろう。

ドガッ

男は床に転ぶと男のリュックからいろんな物が床に散らばった。

ＰＤＡでは無く携帯ゲーム機（アニメの絵が描かれている）やポスター、フィギュアなんかもあった。

猫耳の巫女服っぽいメイド服を着た妹っぽいアニメのキャラクターのフィギュアだった。

…何でも混ぜれば良いってもんじゃないなぁと思う。

「あっ！あぁっ！！」

男は止せば良いのにリュックから落ちたそれらを拾おうとしている。

その男に向け――――。

「ククク…、馬鹿じゃねぇの？お前」

今度は金髪の男が現れ、太った男に近付いていく。

だがこの男は様子が違っていた。

明らかに武器になる物、鉄パイプを持っている。

人だって殺せる物だ。

「頭からいってやるぜぇ！！」

金髪の男が笑みを浮かべながら鉄パイプを振り上げる。

ゲーム開始からまだ6時間はたっていない。

この状況で誰が死ぬかは決まっている。

金髪の男だ。

当たり所によっては鉄パイプを頭に受けた事で太った方も死ぬだろうがそれは金髪の男の後だ。

まずルール違反で金髪の男が死ぬ。

この状況のままなら…だ。

夏喜は俺達の後ろに居る。

当然だが今の状況を把握するのは俺達の方が早かった。

雨宮の方は…気付いていたかもしれないが。

本来ならば止めるべきなのだろう。

このまま放って置けば人が一人死ぬのだから。

「……」

その事がわかっていても俺はすぐに行動を起こせなかった。

これで首輪が作動すればルールが本物だという実証が出来る。

それに金髪の男は明らかに好戦的だ。

こいつを野離しにしていれば危険だというのは確かなのだ。

こいつにはここで死んで貰った方が良い。

「…ッ」

俺は自分が自然と考えている事に顔を歪めた。

…これは黒い、間違った考え方だ。

自覚はしている。

だが肝心の行動には移せなかった。

「チッ…、おい！小僧！！」

「！？」

声を上げたのは意外な人物だった。

「新城…」

「先走って馬鹿な真似はやるな！！」

新城が前に出て金髪の男に向けそう語りかけていた。

第6話：正反対の二人（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２

雨宮　鈴音：？：２．３

柳　辰巳：？：７．０

春野　夏喜：？：６．８

新城　渉：？：３．５

？？？？？：？：？？？？？

？？？？？：？：？？？？？

？？？？？：？：？？？？？

？？？？？：？：？？？？？

？？？？？：？：？？？？？

？？？？？：？：？？？？？

？？？？？：？：？？？？？

第6話：正反対の二人

「……」

新城、コイツが金髪の男を止めたのは正直意外だった。

ルールが本物かどうかという実証が欲しいのは誰もが一緒だ。

新城ならば俺と同じでここで金髪の男を攻撃させ、ルールの真偽を確認する事を考えるはずだ。

「そのまま鉄パイプを捨てな！小僧！！」

だが今の新城は真剣な表情で金髪の男に呼び掛けている。

「…なんだぁ？てめぇらは！！」

金髪の男が俺達の方を見て叫ぶ。

楽しみを邪魔されたその顔は酷く憤慨していた。

「あっ！き、君達、助けてくれぇ！！」

逆に太った男の方は俺達を見て喜ぶ。

それでも金髪の男が鉄パイプを振り下ろせば頭に直撃する距離だが。

「俺達はお前達と立場は同じ…、いや、少し上だな」

「あん？どういう意味だ？」

金髪の男は俺達の姿を確認する。

首輪を見ているのだろう。

「…チッ！それで？みんなでこのデブを助けようってか？」

金髪の男は自分が標的としていた太った男を睨み付けた。

「逆だ、俺はお前を助けようとしてんだよ」

「…ハァッ！？この状況でか？」

金髪の男は首を傾げた。

丸腰の太った男に対し、鉄パイプで武装した金髪の男。

状況だけを見ればどう考えても金髪の男が有利だ。

ある一点を除けば…だが。

「お前、ルールを全部知らねーだろ？」

「……」

新城のその言葉に金髪の男が黙り込む。

金髪の男は全てのルールを間違いなく知らないだろう。

知っていれば今太った男を襲うはずが無い。

「当たりだろ、ルールが本物なら…このままじゃルール違反で死ぬぜ、お前」

「なんだとっ!?」

金髪の男が驚きに目を見開いた。

「今のままじゃルールの一つに引っかかるって事だよ」

「教えろ!そりゃ何てルールだ!!」

金髪の男が新城に向けてそう叫ぶ。

「慌てるな、まずは…そうだな、その物騒な物を捨てな、その男を襲うのは無しだ」

「…チッ」

カラン、コロンッ

金髪の男は素直に鉄パイプを床に投げ捨てた。

「それでいい、ところで俺達はまだ4番目と9番目のルールを知らないんだが、お前達はどっちか知っているか?」

「よ、4番目のルールなら俺のPDAにあった」

太った男が思い出したかのようにそう言った。

「9番なら俺のPDAにある、けどそっちがルールを教えてからだ！！」

「あぁ、わかってる、こっちに来な、ルール交換といこうぜ」

新城は手招きするように二人を呼び寄せた。

「……」

やり方が上手いな。

新城はルールを教えるより先に金髪の鉄パイプを捨てさせた。

ルールでは戦闘行為自体は違反だが武器の所持は禁じていない。

ここでルールを教えても金髪の男は鉄パイプを捨てなかっただろう。

だがルールを知らない今なら新城に言われた通り、鉄パイプを捨てるしか無い。

さらに二人にルール交換を持ちかける事でこっちの主導権も得た。

「おい、王生」

「…なんだ？」

二人がこっちに向かう中、新城がボソリと俺に声をかけた。

「お前、あの金髪の男でルールの真偽を試そうとしたろ？」

「……」

否定は出来ない。

事実、俺は金髪の男の戦闘行為を止めなかった。

「お前とは仲良くやっていけそうだが、命は大事にしねぇとな、ククッ…」

新城は意地悪く笑うと俺の肩を叩く。

「んな怖い顔するな、やっとルールが全部揃うんだ」

俺達は金髪の男と太った男と共に座った。

太った男は金髪の男にビクつき、離れて座っている。

「さぁ！さっさとルールを教えやがれ！！」

金髪の男が床に足を広げる。

…コイツはなんでこんなにエラそうなんだ？

「慌てないで、とりあえずあなたの名前は？」

「国枝（くにえだ）　克実（かつみ）…」

金髪の男、国枝は素直に自分の名前を言った。

「そう、ならよろしく、国枝君、それであなたは？」

「お、俺は…、ふ、藤木　洋介」

太った男は自分の名前をつげる。

襲われたばかりのせいかまだビクビクと身体を震わせている。

俺達は二人の自己紹介の後に各々で自己紹介をした。

「これで全員終わったわね、それじゃあルールの交換をしましょうか」

これで…白紙となっていたルールの４と９がわかる。

「藤木さん、ルールの４番目を教えて」

「あ、あぁ…」

太った男、藤木はＰＤＡを取り出す。

【ルール４】

《最初に配られる通常の１３のカードに加えて１台ジョーカーが存在している。

ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、トランプの機能を他の１３種のカード全てとそっくりに偽装する機能を持っている。

制限時間などは無く、何度でも別のカードに変える事が可能だが、一度使うと１時間絵柄を変える事ができない。

さらにこのＰＤＡでコネクトして判定をすり抜ける事はできず、また、解除条件にＰＤＡの収集や破壊があった場合にもこのＰＤＡで

は条件を満たすことができない》

「ｊｏｋｅｒ…か」

ＰＤＡがトランプを真似た物である事からもしかしたらとは思っていた。

他のＰＤＡに偽装できるＰＤＡ、ｊｏｋｅｒカード。

俺のＰＤＡは【Ａ】

首輪の解除条件は【Ｑ】のＰＤＡを持つ者の殺害。

つまり人を殺す事が条件だ。

こんなＰＤＡを公に公開すれば警戒されるのは当たり前だ。

ｊｏｋｅｒのＰＤＡがあれは他のＰＤＡと偽る事が出来る。

「なるほどなるほど、ｊｏｋｅｒねぇ…」

新城がなぜか納得したように頷いた。

「他のＰＤＡに偽装できるみたいだけど…何か意味があるのかしら？」

夏喜が首を傾げる。

各々のＰＤＡによって解除条件は違うらしい。

となれば夏喜の解除条件は殺害とは違う可能性が高いな。

「ククク…、クッハハハハハハ！！」

夏喜のその言葉に国枝が高笑いをした。

「…何？」

「お前らが何でのほほんと一緒に居るかわかったぜ！」

「…お前の知ってる９番目のルールか？」

「あぁそうだ…、俺のＰＤＡにあった９番目のルールはな、各ＰＤＡの解除条件なんだよ！」

「へぇ…、そいつぁ是非とも知りたいな」

新城が興味深そうにそう言った。

俺としても各ＰＤＡの解除条件を知る事は大きいと思える。

ある程度、他の参加者がどう動くのかを予想もできるからだ。

「…じゃあ、読み上げるぜ？」

国枝はＰＤＡを取り出し、９番目のルールを読み上げた。

第6話：正反対の二人（後書き）

雨宮「…！！」

…私は居るのに出番が一つも無いだと！？

王生「喋らないと小説じゃ居るのか居ないのかもわからんぞ」

【ルール】

注）ルールの番号はシークレットゲームの公式サイトの順です。

【ルール1】

《参加者には特別製の首輪が付けられている。
それぞれのＰＤＡに書かれた条件を満たした状態で首輪のコネクタにＰＤＡを読み込ませれば外すことができる。
条件を満たさない状況でＰＤＡを読み込ませると首輪が作動し、１５秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。
一度作動した首輪を止める方法は存在しない。》

【ルール2】

《参加者には1～9のルールが4つずつ教えられる、与えられる情報はルール1と2と、残りの3～9から2つずつ。
5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。》

【ルール3】

《ＰＤＡは全部で１３台存在する。
１３台にはそれぞれ、異なる解除条件が書かれており、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。
この時のＰＤＡに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。
他人のカードを奪っても良いが、そのカードに書かれた条件で首輪を外す事は不可能で、読み込ませると首輪が作動し着用者は死ぬ。
あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。》

【ルール4】

《最初に配られる通常の１３のカードに加えて1台ジョーカーが存

在している。
ジョーカーはいわゆるワイルドカードで、トランプの機能を他の１３種のカード全てとそっくりに偽装する機能を持っている。制限時間などは無く、何度でも別のカードに変える事が可能だが、一度使うと１時間絵柄を変える事ができない。
さらにこのＰＤＡでコネクトして判定をすり抜ける事はできず、また、解除条件にＰＤＡの収集や破壊があった場合にもこのＰＤＡでは条件を満たすことができない》

【ルール５】
《侵入禁止エリアが存在する。
初期では屋外のみ。
侵入禁止エリアへ侵入すると首輪が作動し警備システムに殺される。
また、２日目になると侵入禁止エリアが一階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館全域が侵入禁止エリアとなる。》

【ルール６】
《開始から３日間と１時間が過ぎた時点で生存している人間全てを勝利者とし、２０億円の賞金を山分けする》

【ルール７】
《開始から６時間以内は全域を戦闘禁止とする。
違反した場合、首輪が作動する。
正当防衛は除外する。》

【ルール８】
《指定された戦闘禁止エリアの中で誰かを攻撃した場合、首輪が発動する。》

【ルール9】

注）ルールはシークレットゲーム公式サイトに基づいています。

カードの種類は以下の１３通り。

Ａ：クイーンのＰＤＡの所有者を殺害する。
手段は問わない。

２：ｊｏｋｅｒのＰＤＡの破壊。
また、ＰＤＡの特殊効果で半径１メートル以内ではｊｏｋｅｒの偽装機能は無効化されて初期化される。

３：３名以上の殺害。
首輪の発動は含まない。

４：他のプレイヤーの首輪を３つ取得する、手段を問わない。
首を切り取っても良いし、解除の条件を満たして外すのを待っても良い。

５：館全域にある２４個のチェックポイントを全て通過する。
なお、このＰＤＡにだけ地図に回るべき２４のポイントが全て記載されている。

６：ｊｏｋｅｒの機能が５回以上使用されている。
自分でやる必要は無い。
近くで行われる必要も無い。

７：開始から６時間目以降にプレイヤー全員との遭遇。

死亡している場合は免除。

８：自分のＰＤＡの半径５メートル以内でＰＤＡを正確に５台破壊する、手段は問わない。
６つ以上破壊した場合には首輪が作動して死ぬ。

９：自分以外の全プレイヤーの死亡。
手段は問わない。

１０：５個の首輪が作動していて、更に５個目の作動が２日と２３時間の時点よりも前で起こっている事。

Ｊ：「ゲーム」の開始から２４時間以上行動を共にした人間が２日と２３時間時点で生存している。

Ｑ：２日と２３時間の生存。

Ｋ：ＰＤＡを５台以上収集する。手段は問わない。

第7話：人間観察（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２
雨宮　鈴音：？：２．３
　柳　辰巳：？：７．０
春野　夏喜：？：６．８
新城　渉：？：３．５
国枝　克美：？：５．２
藤木　洋介：？：８．６
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？

第7話：人間観察

9番目のルール。

それは国枝の話した通り、各ＰＤＡの解除条件にあった。

俺のＰＤＡの解除条件が【Ｑ】のＰＤＡの持ち主の殺害という事からある程度予想はできたが…。

「何…これ？本気なの？」

9番目のルールを聞いた夏喜が唖然としながらそう呟いた。

【Ａ】【３】【９】の３つのＰＤＡは殺しが条件だ。

おまけに他の解除条件も手段を問わないとある物が多い。

これは間接的に殺して集めろと言っているようなものだ。

「これでわかったろ！てめぇらがどんだけマヌケなのかをなぁ！！」

国枝が勝ち誇ったようにそう声を上げた。

「お前らの中にだって人を殺さなきゃならない奴も居る可能性があるんだぜぇ？」

更に挑発的に国枝は言葉を続ける。

「例えば…お前みたいなか？」

挑発する国枝に俺はそう言葉を返してやった。

「てめぇ…第一に死にてぇらしいな」

国枝はギロリと俺に睨み付けた。

「ち、ちょっと、本気でこんなふざけたゲームを信じる気？」

国枝の言動はどう考えてもゲームに参加するつもりだ。

そんな国枝を夏喜は信じられないという顔で見つめた。

「偽物だと思うならそう思ってな！そっちの方が都合がいいぜ！！」

だが国枝はそんな夏喜を見下すようにそう叫んだ。

「…みんなはどう思うのよ？」

たまらず夏喜が俺達に助けを求めるように聞いて来た。

この問いは先ほど新城が俺達にしたものと似ているが違う。

今の俺達はルールを全て把握した。

つまりこのゲームの全貌を理解したと言える。

「ル、ルールは…本物、だと思う」

藤木はどもりながらもそう答えた。

「だ、だから…ゲームには参加しないと」

「ヒャッハハハハハ！てめぇみてぇなデブでもその女よりは状況がわかってんな！！」

国枝は愉快そうに高笑いをした。

「…馬鹿ばっかりよ」

夏喜はそんな二人に向けてそう呟いた。

「…ったく、このままじゃ埒があかねーな」

そんな状況の中、新城が溜め息混じりに立ち上がった。

「…新城」

ルールは全て把握できた。

となればこうして団体行動をする必要もなくなるのだ。

ＰＤＡの条件には殺害のものもある。

裏切られる事を考えれば単独行動の方が利点は多いかもしれない。

新城は…ここで単独行動をとる気か？

そう考えていた。

「…何やってんだ？いつまでもここに居ても仕方ねーだろ、行こう

ぜ？」

だが次に新城の発した言葉は予想していたものとは別だった。

新城は団体行動を続けるつもりなのだ。

「新城さん…」

夏喜は安心した表情で新城の方を見た。

「ハンッ！あんたはもっと賢いと思ってたんだがな」

そんな新城の行動を国枝は鼻で笑う。

「ククククッ…、戦闘禁止が解除されるまで後一時間くらいか」

ＰＤＡの待機画面にはゲーム開始からの時間経過が映し出されている。

今はゲームが開始してから５時間６分の時間経過を知らせている。

戦闘禁止の解除が始まるまで約１時間だ。

「ルールを全て把握した俺は無敵だ！精々一時間後を楽しみにしてな！！」

そう言いながら国枝は俺達から背を向け、その場を立ち去ろうとする。

「待てよ、小僧」

「あん？」

その国枝に向けて新城は声をかけた。

「お前も俺達と一緒に来るんだよ」

「けっ！冗談じゃねぇ！！てめぇらの仲良しごっこに付き合ってられるか！！」

新城の言葉に国枝はうんざりしたように言葉を返した。

「お前みてぇな奴は目の届く場所に居ないと何をしでかすかわかんねぇからな」

それは正論だ。

「ふざけるんじゃねぇ！俺は誰の指図も受けねぇぜ！！」

だが国枝はそんな言葉に耳を貸さず、ホールから立ち去った。

「仕方ねぇな…、お前ら、ここに居な、俺が連れ戻しに行くから」

「え？ちょっと！新城さん――――」

夏喜に背を向けてひらひらと手を振りながら新城は国枝の後を追いホールから出て行った。

「…行っちゃった」

残されたのは４人。

俺と藤木と夏喜と雨宮だ。

「あ、あいつらはきっと戻って来ない！！」

突然、藤木は悲痛な叫び声を上げ、喚いた。

「き、きっと今頃武器を集めて俺達をこ、殺す準備をしてるんだ！！」

両手で顔をおさえ、ガクガクと震えだしている。

「６時間が経過したらここに来るんだ…、俺達を殺しに」

先ほど国枝に襲われた事を思い出しているのだろう。

「藤木さん、落ち着いて…大丈夫だから」

取り乱す藤木を落ち着かせようと夏喜はオロオロとしている。

「……」

国枝はわからないが…新城は戻って来る。

口論を続ける夏喜と藤木を見ながら俺はそう考えていた。

だがそれは俺達の為でなく奴自身の為だ。

自分の利となる行動以外はしない。

それが俺から見た新城の印象だ。
奴はまだ何かをやり残している。
「…潮時か」
夏喜はまだゲームを信じていない。
というよりも信じないようにしていると言った方がいいのだろう。
一緒に行動する中、良心的な意見が目立つ。
それは正しい事なのだろうが、このゲームにおいてあまり賢い考え方とは言えないだろう。
藤木はゲームを理解はしているのだろう。
だが、1時間後に新城や国枝が武器を持って戻って来ると考えるならばさっさとここを立ち去るのが普通だ。
少なくとも俺ならそうする。
それを藤木がしない理由は簡単だ。
ただ単に怖いのだ。
単独行動をとるのが。
また誰かに襲われるかもしれないという恐怖心が藤木をこの場に居

させる。

雨宮は…、まだ謎が多すぎてよくわからんが。

―わざわざ新城の狙いにかかってやる理由も無い…か。

「さて…」

ルールは全て揃った。

実際にルールに違反するとどうなるかまではわからなかったがこれで充分かもしれない。

俺は立ち上がると何も言わずにホールから立ち去ろうとした。

「って…光一君！あなたいったいどこ行くの！？」

俺の突然の行動に夏喜が目を白黒とさせる。

「…ちょっと調べて来る」

もちろん嘘だが。

「雨宮さん、光一君を止めて下さい」

夏喜は俺が一番長く居た事を考えてか雨宮にそう訴えた。

「奴の決めた事だ…、好きにすればいい」

「あんたならそう言うと思ってた」

俺はニヤリと雨宮に向けて笑う。

頭の中で考えていたのはこれからの行動についてだった。

だが考えれば考える程、一つの言葉が浮かんでくる。

―慶吾なら…新城を待っていただろう。

馬鹿正直に。

「……」

よく考えれば、これから何をするかって事も曖昧だ。

解除条件の事を考えれば【Q】のＰＤＡの持ち主を探すのが普通だ。

だが…見つけて、その後どうする？

殺すのか？

それは俺が目覚めてＰＤＡの解除条件を見てからずっと先延ばしにしてきた問題だ。

あえて考えないようにしていた。

「…残るか」

結局…俺はホールから出るのを止めた。

先延ばしなのはわかっていたがすぐに答えが出るものでもない。
だが、このまま戻るのは何か恥ずかしいものがあるなぁ…。
立ち去ろうとして途中で止めましたってのも。
急に湧き出てきた妙な感情に俺は苦笑した。

「夏喜さん、俺が調べるって言ったのはこのシャッターだ」

だから俺は進む先を目についたシャッターの方へ強引に方向を変えた。

ホールの入り口はシャッターで閉じられている。
俺達をここに閉じ込めた連中がやったのであろう。

「あぁ、それの事だったのね」

誤魔化しが成功した事に少しホッとなった。

「新城さんが戻って来るまでぼーっとしてるのも時間の無駄だし、ちょっと調べてみる」

「それなら私達も一緒に調べるわ」

夏喜のそんな言葉に俺達は閉じられたシャッターを調べた。

第7話：人間観察（後書き）

【おまけ】

夏喜「雨宮さん、光一君を止めて下さい」

雨宮（いいぞ…よく私に話しを振ってくれた）

雨宮「奴の決めた事だ…、好きにすればいい」

光一「嬉しそうだな、おい」

第8話：開始の狼煙、一人の少女（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．２
雨宮　鈴音：？：２．３
　柳　辰巳：？：７．０
春野　夏喜：？：６．８
新城　渉：？：３．５
国枝　克美：？：５．２
藤木　洋介：？：８．６
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？
？？？？？：？：？？？？？

第8話：開始の狼煙、一人の少女

「これ、なんとかして開けられないかしら…」

夏喜が恨めしそうに入り口を封じるシャッターを見上げた。

「こりゃ無理だな、人の手で持ち上がるもんじゃない」

ガンガンッ

軽く叩いてみるとその厚さがわかる。

防火シャッターか…、開閉を出来ない事は無いと思うが。

この建物の中にこういった物を制御する部屋があるかもしれないな。

そう考えると…、その制御室と言える場所には俺達をここに連れてきた誘拐犯がいる可能性も高い。

これがゲームだとすれば…当然誰かが見ているのだから。

「あっ！見て…ここ、穴が開いてる！！」

そう夏喜が嬉しそうに指を指した箇所は確かにシャッターに穴が開いていた。

「もしかしたら逃げ出せるかも」

夏喜は駆け足の穴の箇所に向かうとすぐに肩を落とした。

「ど、どうなってんだ!?」

藤木も穴を覗く。

太っている藤木はかなり窮屈そうに穴を見ていた。

「な、なんだよ…、なんだよ、なんだよ」

そのままよろよろと力を無くしたのか、後ろに下がっていく。

「なるほどな…、コンクリートか」

穴の先に見えたのはコンクリートの壁だった。

「…なんとか突き破れないかしら」

「いや、俺達を閉じられた奴らはそれは無理だってわかってるみたいだ」

「…どういう意味？」

夏喜が首を傾げながらもう一度コンクリートの壁を見る。

「誰かがこのコンクリートの壁を掘った後が残ってる」

これが薄いコンクリートの壁ならばすぐに補正しただろう。

だがそのままにしてあるという事はこのコンクリートの壁は想像以上に厚いのだ。

一階に入れるのはゲーム開始から初日のみ。
これを掘った者も途中で諦めたのだろう。
「溜まっている埃を見ると…かなり前からあるな」
「え…、それじゃあ」
「このゲームは相当繰り返し繰り返しで行われてるみたいだ」
「…正気じゃない」
夏喜が顔をおさえながら後ろに下がった。
よほどショックを受けているのか。
「……」
それとちょうど入れ替わる形で意外な人物が俺の横にやって来た。
「雨宮？」
珍しいな…、こいつも興味をしめしたのは。
「きっと…一生懸命頑張って掘ったんだろうな」
そう言う雨宮の表情にはいつもの険しさが消え、優しいものになっていた。

「…だろうな」

俺ももう一度掘られた後を見直す。

これを作った人物はどんな気持ちだったのだろう？

掘り続けても掘り続けても終わらず、光は見えない。

この掘り跡が残ってるのは人の生きようとした証なのかもしれない。

「ん？何やってんだ？お前ら」

新城が疑惑の表情をさせながら戻って来た。

「…けっ！」

国枝も渋々といった表情で後ろに付いて来ている。

その時には雨宮の表情はいつもの鉄仮面に戻っていた。

「ちょっとね、このシャッターを調べてたの」

「へ～、そいつは気がきくな、何かわかったのか？」

夏喜は新城に一通りシャッターを調べた結果を報告した。

「まっ、そんなとこだろうな」

新城の返事に落胆した様子はない。

最初からここから出るのは不可能だとわかっていたのだろう。

「とりあえず二階を目指そうぜ、侵入禁止エリアの事もあるからな」

新城の提案に俺達６人はホールから離れ、再び移動を始めた。

―――――

―――

移動し始めてから３０分はたっただろうか。

ＰＤＡで頻繁にゲーム開始からの時間を見ていた俺は神経を集中させた。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

―来たな…。

「な、なんだぁ！？」

突然のアラームに藤木は身体をビクッとさせた。

「ＰＤＡが鳴ったみたいだけど…」

夏喜がＰＤＡを取り出すのを合図に皆がＰＤＡを取り出す。

俺もＰＤＡを取り出し、画面を見る。
おおよその内容はわかっていた。
『お待たせしました、ゲーム開始から６時間が経過しました』
「６時間…、これって確か」
「あぁ、アレ…だな」
夏喜の言葉に新城が頷いた。
『建物全体の戦闘禁止エリアを解除しました』
そのメッセージを見た俺は注意深く今のメンバーを見た。
これで戦闘行為を縛るものは何も無い。
狂犬の鎖が外れたようなものだ。
誰かが動き出す可能性も出てくる。
「……」
―誰も動かない…か。
俺を含め全員に誰かを襲うような気配は無い。
国枝は苦々しくＰＤＡを見つめていたがすぐに自分のポケットにしまっていた。

新城は夏喜と誰かが襲って来るかもしれないという話しをしている。
藤木はビクビクと周りをキョロキョロと見渡していた。
雨宮は…、いつも通りか。
6時間の戦闘行為の禁止が解かれた後は奇妙なくらいに静かだった。
ギスギスとした俺達のグループだが結局、何の争いも起きず、先を進んだ。
…俺達のグループは、だ。
この建物全体は違うのだとわかったのはそれから1時間もかからなかった。
「…ん？」
先頭を歩いていた新城がそれに気付き、立ち止まる。
「んだよ…、さっさと、！？」
次に文句を言おうとした国枝がそれに気付いた。
俺達もすぐにそれを視野に入れる。
遠目だがはっきりとわかった。
人が、壁に寄りかかった形で座り、うなだれて動かない。

まるで糸の切れた人形だ。

「寝てるの…かな?」

夏喜が僅かな希望を託すようにそう呟く。

「この状況でこんな場所でか?だったらそいつはよっぽどの大馬鹿か大物だな」

新城が軽く冗談混じりにそう言うと夏喜は厳しい目で新城を睨んだ。

「とにかく…、近付いてみよう」

俺の言葉に皆が頷き、その人物に近付く。

その人物は女だった。

それも歳は俺とそう変わらない少女。

どこかの高校の制服を着ている事からもそれは明白だ。

遠目ではわからなかったが胸から血を流している。

凶器は刃物だろうがそれは見つからなかった。

「死んでるな」

新城がしゃがみ込んで少女を調べる。

「当然、時間はそう経ってない」

殺されたのは6時間が過ぎた後だろう。

「他にわかりそうな事は…」

新城はしゃがみ込んで少女を調べている。

「それで、ＰＤＡは見つかったかい？新城さん」

「……」

俺がそう言うと新城の身体が一瞬止まった。

「いや、持ってねぇな、殺した奴が持ってったんだろ」

だがすぐにまた余裕の表情をするとそう返した。

「…いったい、誰がこんな事」

夏喜が掠れた声を出す。

全員が少女の死体を見下ろす中、俺の頭には一つの考えが浮かんでいた。

ここでこの少女の首輪を作動させれば…、ルールに違反した者がどうなるかがわかる。

そしてルールが真実だという確証を得る事が出来る。

そんな考え方が俺の頭に浮かんでいた。

「え？ちょっと！！新城さん、何する気なの！？」

その時、不意に新城が自分のＰＤＡを取り出して少女の首輪を調べていた。

「何って…作動させてみるのよ、首輪を」

新城は邪悪に微笑んだ。

それは俺に向けて。

『お前の代わりにやってやるよ』

まるでそう言っているかのように感じた。

第9話：ペナルティ（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．５
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：？：７．０
新城　渉：？：３．２
国枝　克美：？：５．０
藤木　洋介：？：８．４
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第9話：ペナルティ

「……」

こいつ…俺とまったく同じ事を考えていたか。

俺と違う点は一つ、それを実行に移すかどうかだ。

新城は躊躇無く、首輪を作動させる事にした。

…敵になればかなり厄介だな。

「駄目よ、そんな死んだ人を実験材に使うような真似」

夏喜が今までに無いくらい鋭く、新城に釘をさすようにそう言い放った。

「だったら生きてる人間で試せ…、とそう言いたいのか？あんたは」

だが新城も余裕の笑みを崩さない。

不敵に笑うと夏喜にそう返した。

「そういう事を言ってるんじゃないわ！もっと他に…、ルールが本当かどうかわかる方法があるはず」

「あぁ…あるぜ、他の方法」

新城は夏喜に向けて手を差し出した。

「あんたのＰＤＡを見せてくれ、その解除条件を試してみてあんたの首輪が外れりゃルールは本物だろうよ」

「……」

新城の言葉に夏喜は言葉を返せなかった。

「なんだ？偉そうに言うわりに自分のＰＤＡは見せらんねぇってか？」

その夏喜の様子に調子を良くした新城が勝ち誇った顔で笑う。

「まっ…当然だな、結局あんたもこのゲームに参加してるんだよ」

「ッ！！」

新城の言葉に夏喜が表情を曇らせた。

苦々しく唇を噛み締める

新城の言葉はゲームを信じない《ようにしていた》夏喜の痛い所をついたのだ。

口論では新城は夏喜の一回りも二回り上手のようだ。

新城は挑発しているのだ。

―恐らく…新城の本当の狙いは。

「わかった！わかったわよ…、ＰＤＡを見せればいいんでしょ！！」

夏喜が新城を睨みつけると自分のＰＤＡを取り出す。

その瞬間、新城の口元が緩んだ。

「…チッ」

バッ…。

俺はＰＤＡを見せようとする夏喜を止めるように手の平を新城と夏喜の間に入れた。

「…その辺でいいだろ、新城さん」

新城の狙いはわかった。

奴は俺達のＰＤＡが何か探っている。

ここでわざわざ新城の思い通りに情報を与える訳にはいかなかった。

「…あん？」

楽しみを邪魔された事による憤慨。

今の新城の表情を見た印象がそれだった。

新城の勘ぐるような鋭い視線が夏喜から俺へと移る。

「…そう怖い顔すんなよ、取って食いやしねぇから」

だが新城はすぐに表情をいつもののものに戻した。

「だが、このままじゃラチがあかねぇのも事実だ、そこで民主主義にのっとって多数決といこうぜ」

新城はくるりと他のメンバーを見渡す。

「ここで首輪を作動させる事に賛成の奴は手を上げてくれ」

まずもちろん言い出しっぺの新城が。

国枝も真っ先に手を上げた。

その少し後、遠慮がちに藤木も挙手をあげる。

「三人、これで決まりだな」

新城が満足そうにそう言った。

「何言ってるの？私達は６人居るのよ、多数決なら同票になるはず」

「残念だがそいつは無理だと思うぜ、じゃあ首輪の作動に反対の奴は手を上げてくれ」

手を上げたのは夏喜だけだった。

俺と雨宮はどちらにも手を上げなかった。

別に雨宮と二人で示し合わせた訳じゃない。

お互いに考えてる事は同じらしい。

「…二人共」

夏喜はその状況を理解し、力無く上げた手を下ろした。

「賛成3、反対1、無投票2、決定だな」

新城は再びＰＤＡを取り出し、死んだ少女の首輪に近付ける。

今度は夏喜もとめなかった。

だが悔しそうな表情で新城を睨んでいる。

「あった…、こいつを俺のＰＤＡに繋げばいいのか」

少女の首輪に付いているコネクタを発見し、自分のＰＤＡを近付ける。

その瞬間、新城の動きが止まった。

「…なんだ？」

「いや…危ねぇ、危ねぇ、一つ忘れてた」

新城はわざとらしく首を横に振った。

「この中に１０のＰＤＡを持った奴はいねぇのか？」

「!?」

【１０】のＰＤＡの解除条件は首輪５つの作動だ。

「居るなら俺よりもそいつが作動させた方がいいだろ?」

「……」

へぇ…。

なるほどなるほど、そう来るかい。

確かに【１０】のＰＤＡの解除条件は首輪が５つ作動している事だ。

だが解除条件の文章には５つの首輪が作動(していて)とある。

嫌らしい言葉遊びだが、これでは自分で５つ作動させなければならないのか、５つの首輪が作動していてばいいのか曖昧だ。

「おいおい、せっかくのチャンスを見逃すのか?それとも単に誰も【１０】じゃないのか?」

新城は誰も名乗り出ない事に笑う。

当然とも言える。

ここで名乗り出るという事は自分のＰＤＡが【１０】だと公開するものだ。

「居ないんなら仕方ねぇな、首輪を作動させるぜ」

新城は再び、しゃがみ込むとＰＤＡを少女の首輪に向けた。

「ま、待ちがやれ！！」

その瞬間、国枝が血相を変えて止める。

―あいつが…【１０】か。

「俺だ！俺がやる…、俺にやらせろ！！」

国枝が小走りに自分のＰＤＡを取り出しながら少女に近付いた。

「お前が【１０】なのか？」

「うるせぇ！さっさとどけ！！」

新城が横にズレると国枝はすぐに自分のＰＤＡを少女の首輪のコネクタに接続した。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

『あなたはルールに違反しました、１５秒後にペナルティが発生します』

首輪のアラームと共に無機質な合成音声が流れる。

同時に少女の首輪のランプが赤く点滅した。

俺達は自然と少女から下がる。

何かに巻き込まれる可能性もあるからだ。

考えられるのは…爆弾や銃兵器の類だった。

シュルンッ。

「!?、見ろ…何か出てきたぞ」

新城がいち早くそれに気付く。

予想に反してそれはただのワイヤーだった。

ワイヤーが俺達の進むべき通路の奥の方から発射されて来た。

ガチャンッ。

それが少女の首輪にピッタリとくっつく。

ワイヤーの先には何か特殊な仕掛けがあるのか、首輪とワイヤーが強硬に繋がれた。

そのままワイヤーが巻き戻り、壁に寄りかかっていた少女は一度、床に倒れた。

ずる…ずる。

そのままワイヤーに引っ張られ、床を這う。

すでに死んだ少女に抵抗は無い。

だが死んだ人間を軽々と引きづるワイヤーの力はかなりのものだった。

「…なんだ？これだけなのか？」

その光景を見た新城は拍子抜けしたようにそう言った。

確かに…これで終わりなら馬鹿げている。

少女が生きていたとしても、ワイヤーで引っ張られただけだ。

そう思った瞬間、引きづられていた少女の身体が通路の先で止まった。

次の瞬間。

ズガァンッ

天井から…柱が高速で落下した。

すぐ下にある少女の身体めがけて。

グッ…

少女の骨は一瞬、それは時間にしても一秒も無かっただろうが、落下する柱に抵抗し。

グチャッ。

押し…潰された。

第１０話：協力（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．５
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：？：７．０
新城　渉：？：３．２
国枝　克美：？：４．８
藤木　洋介：？：８．４
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１０話：協力

「きゃぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

夏喜が両手で顔を抑えながら叫んだ。

「…はは、ぺしゃんこだ」

藤木は半笑いを浮かべながら。

「うっ…、うげぇッ！！」

すぐに表情を歪ませると嘔吐した。

柱はまるで元々その位置にあったかのように床についた。

たが…、その下からは確かに血が流れ出ている。

柱の周辺に少女のモノだったであろう指が散らばっていた。

柱に潰される事を逃れたその指は鋭利な刃物で切られた訳でなく、落下の際に人体から切断されたのだ。

―おい…。

《潰れた》ぞ…、目の前で…、人が。

その柱の仕掛けはアクションゲームで敵のボスの城なんかでよくある仕掛けに思えた。

ゲームでは操作している主人公キャラがそれに挟まれてゲームオーバーとなるようなありがちな仕掛け。

だが…、それが目の前で展開されていた。

「……」

これが…、敗者への仕打ちか。

想像していたものとはまるで違う、残酷な仕掛け。

だが…、なぜここまで残酷にする必要がある？

これじゃあまるて見せ物――。

―見せ物？

その瞬間、俺の頭の中にこれまでの情報が混じり合った。

見ず知らずの人々。

それぞれ異なった解除条件。

建物に仕掛けられた罠。

他人を騙す為にある・ｊｏｋｅｒカードの存在。

―これは単に殺し合いをさせるゲームじゃない。

単に殺し合いをさせたいなら解除条件は殺害のみで事足りる。
もちろんjokerなんてものも必要ない。
―このゲーム…もしかしたら。
ピロリン、ピロリン、ピロリン。
俺達6人のPDAが一斉に鳴りだした。
「…なんだ?」
PDAには今発動した仕掛けの説明が映し出されていた。
【アンカー射出/強制プレスシステム】
『首輪が作動した者の首輪に向け、アンカーが射出される。
アンカーは首輪が作動した者をプレス機の落下地点まで強制的に引きずっていく。
落下地点にさえ行かなければOKだからアンカーに抵抗すればなんとかなるかも!?』
仕掛けの説明分の最後には悪ふざけも含まれているのだろう。
例え生きている者にこの仕掛けが発動していたとしても…、結果は同じだ。
むしろ最後の瞬間、落下する柱の真下からその瞬間をその目にするのはどれだけツラい事なのか。

「俺達もこいつをなんとかしないとこうなるって事か…」

新城が自分の首輪を指差しながらそう話した。

「だから言っただろう！俺達は行動が遅すぎんだよ！！」

国枝が大声でそう怒鳴り散らす。

目の前で人の潰れるその瞬間を見た。

それは俺達の平静さを奪うには充分すぎる。

《恐怖》という感情は決して捨てられない。

「……」

その瞬間、雨宮がゆっくりと歩き出した。

「…待てよ、どこに行くつもりだ？」

俺はそれを見つけると呼び止める。

「知りたい事は全て知った…、私がここに居る理由はもう無い」

つまり…雨宮はここから単独行動をとるつもりか。

柳は雨宮と行動をするように言っていたが…。

「…私を止める気か？」

「別に…好きにすればいいさ」

雨宮が単独行動を望むなら別に止めやしない。

確かに動きがわからない分、厄介になるのは間違いないだろうが…。

他人の行動にとやかく言うつもりはなかった。

それに…、それよりも一つ、気になる事があった。

「あんた…、あんなの見てよく平静としてられるな」

雨宮の表情は以前として変わらない。

人の潰れた瞬間を見ても…だ。

「…ふっ、鏡で自分の顔を見たらどうだ?」

「…あん?」

「お前はそこまで動揺しているのか?」

「……」

雨宮のその言葉に俺は黙り込んだ。

俺は自分で言う程動揺していない。

その自覚はあった。

「ち、ちょっと！雨宮さん！！」

夏喜が一人で去ろうとする雨宮を止めようとする。

「おいおい…、やっと鬼が居なくなるんだ、余計な真似するんじゃねぇよ」

だが新城が厳しい目で夏喜を止める。

そのまま雨宮は通路の角を曲がり、俺達から見えなくなった。

「鬼…ですって？」

「あの雨宮って女…、あいつは危険だと俺は考えている」

反論しようとする夏喜に対し、新城は更に言葉を続けた。

「一緒に行動していてあいつ程恐ろしいと感じた奴は居ねぇな」

「そんなの…あんたの勝手な意見じゃない」

…その新城の意見には俺も賛成だった。

結局…雨宮という女の正体はわからないまま…か。

「それにだ…、去っていった奴よりも現在の話題をした方が有意義ってもんだぜ」

「よく言うわね…」

夏喜は苦々しい表情をする。

恐らく新城の事など信用していないのだろう。

「嫌われたもんだ」

新城はわざとらしく肩を上げるとタバコに火をつけた。

「じゃあ夏喜さんよ、あんた…このゲームで生き残るにはどうすりゃいいと考えている？」

一服して煙を吹き出すと夏喜にそう質問する。

夏喜の答えはおおよそ予想出来た。

「…ＰＤＡを見せ合ってみんなで協力するべきだと思う」

夏喜の答えは俺の予想通りのものだ。

みんなで協力し全員が首輪を外す。

理想的なハッピーエンドともいえる。

だがそれは理想論だ。

現実では【Ａ】の俺が居る以上、この中に【Ｑ】の持ち主がいればそれは不可能になる。

更にみんなで協力して首輪を解除するという事は解除条件を見せ合うという事だ。

解除条件を見せるという事は自分の手の内を明かす事に繋がる。
それに誰かがjｏｋｅｒでＰＤＡを偽る可能性だってある。
「…どーせ甘い考えだって思ってるんでしょ？」
夏喜の言葉には若干拗ねた感じもあった。
「いや、俺もあんたと同じ意見だよ、夏喜さん」
だが新城はニヤリと笑うとそう答えた。
「…え？」
「そうだ、俺は協力して首輪を外すのがベストだと考えている」
新城は俺達全員の顔を順に見ていった。
「新城さん…」
新城のその答えが意外なものだった事に夏喜は思わず呆然となった。
その答えは俺にとっても意外なものだ。
―こいつ…一体何を考えて。
「その為に俺は一つ、提案しようと思うんだが…」
新城はニヤリと笑うと右手を上げた。

「この中にゲームで人を殺さなきゃならない、もしくは殺そうと考えている奴、俺と組もうぜ？」

「！？」

新城が高らかに宣言したその言葉。

俺はその時、新城の考えている事の全てがわかった。

あの時、国枝を生かしたのもその意図があったのだろう。

それはいたってシンプルで…恐ろしい事だった。

新城は作ろうとしているのだ。

積極的に人を襲い、殺していく。

殺人集団を。

第１０話：協力（後書き）

【最速クリア】

「なんだ…ここ？」

目が覚めたら見知らぬ場所にいた。

すぐ近くには二台のＰＤＡ。

一台は道化師の描かれたｊｏｋｅｒカード。

もう一台もトランプを真似た物だった。

「ルール、機能、解除条件…ね」

こりゃ厄介だぞ。

解除条件の項目を開いてみる。

【２】

『ｊｏｋｅｒのＰＤＡの破壊～以下略』

「……」

ガッシャンッ↑ｊｏｋｅｒを叩きつける音。

第11話：殺人宣言（前書き）

【BET】

player：card：odds

王生　光一：A：3．6
雨宮　鈴音：？：2．7
　柳　辰巳：？：7．2
春野　夏喜：？：7．0
新城　渉：？：3．1
国枝　克美：？：4．9
藤木　洋介：？：8．4
？？？？：？：Death
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１１話：殺人宣言

「あなた…ふざけないで、それのどこが協力っていうのよ」

「立派な協力体制だと思うぜ、俺は」

目の前で出された殺人宣言に夏喜は動揺を隠せない。

「例えば…そうだな、【３】と【４】と…、【８】が手を組むとするだろ」

新城は少し考えると例え話しを作った。

「つまり三人で他の一人を襲い、【３】の奴がとどめをさす」

【３】のＰＤＡの条件は三人の殺人にある。

「そしてその死体の首を切り取って【４】の奴が首輪を持つ」

【４】の解除条件は首輪３つの取得だ。

「そして殺した奴のＰＤＡを【８】が持つ」

【８】の首輪を解除するにはＰＤＡ５つの破壊…か。

「なっ？完璧な協力体制だと俺は思うぜ」

確かに、それぞれが必要な条件を満たしている。

「人殺し、みんなでやれば怖くない、なんてな、人を殺そうって連

中が潰しあってもつまらねぇだろ？」

だから結託して人を殺して行く…か。

…殺人集団。

人を殺す事を目的とするチーム。

新城の考えはとても恐ろしい事だ。

だが…同時に的を得ているものだと思った。

「まっ…、当然【9】の奴は無理だがな」

新城のやり方では【9】のＰＤＡの持ち主がクリア出来ないだろう。

【9】の解除条件は自分以外の全てのプレイヤーの死亡だ。

「ククク…、てめぇの言ってた事ってコレの事か」

新城の提案に国枝はニヤリと笑った。

「いいだろう、今はてめぇの策にのってやるぜ！！」

まず一人…か。

まぁ国枝が新城につくのは予想出来ていた。

「一つ言っとくが協力する以上、ＰＤＡはきちんと公開してもらうぜ、【9】の奴はアウトだからな」

「構いやしねぇよ、俺は【９】じゃねぇし」

国枝のＰＤＡは恐らく【１０】だろう。

あの時、新城の言葉に焦ったあの表情が演技だとも思えない。

そもそも国枝はあの一瞬で俺達を騙そうと考えて演技をする程器用じゃない。

「歓迎するぜ、国枝よ」

新城が軽く笑いながら国枝の肩を叩く。

新城は国枝の攻撃的な性格を利用するつもりなのだろう。

その為に国枝でルールの真偽を確かめず、生かしておいた。

「んで、残りは？どうすんだ？」

そして新城は俺達の顔を見渡した。

「賢明な判断をしな、後悔しないように」

新城と国枝は俺達の目の前で堂々と殺害の意志を示した。

これは遠回しだがこう言っているとも受け止める。

これは一つの脅しなのだ。

『仲間にならなければ殺す対象にもなる』という。

「お…」

藤木がゆっくりと手を上げた。

「お、俺も…やる、仲間に入れてくれ！！」

藤木が新城達の仲間になるのはその脅しに対する恐怖心もあったのだろう。

「…チッ」

藤木は役に立たない、そう考えているであろう国枝がわざとらしく舌打ちをした。

「…いいさ、来る者拒まず、これで三人だな」

だが新城の方はあっさりと藤木の申し入れを承諾する。

…マズい流れだ。

もうすでに三人、人を殺すつもりの人間が出てきている。

「それで…夏喜さんよ、あんたはどうすんだ？」

「馬鹿言わないで！あなた達の仲間になって人を殺すなんてごめんよ！！」

「クックッ…、あんたならそう言うと思ってたよ」

新城は夏喜が拒むのを予想していたように笑う。
まるで予定通りにいったような表情だ。
「よし…、じゃあ王生よ、お前はどうする？」
「……」
やはり来たか。
「今ならもれなく初回特典として首輪かＰＤＡか、手に入れる事が出来るぜ？」
「…あんた、まさか」
それは新城が拒んだ夏喜に対し、予定通りと笑った表情の意味といえる。
ここで俺が新城達に加わればこの場で夏喜だけが外れる事になる。
新城がその夏喜をこのまま簡単に逃す筈がない。
つまり…殺してしまおうと考えているのだ。
殺して…自分達の解除条件クリアの踏み台にしようと考えている。
「王生よぉ、俺はお前の頭の良い所を買ってるんだぜ」
「……」

俺はチラッと夏喜の方を見た。

「？」

夏喜は自分の状況がわかったいないのか、その場から逃げる様子を見せない。

新城の本当の考えに気付いてないのか…？

その夏喜の横にはすでに国枝が移動していた。

夏喜が逃げる素振りを見せればすぐにでも捕まえるつもりなのだろう。

「……」

【Q】のＰＤＡの持ち主を殺すならば新城達に加わるのも悪くない。

襲った中に【Q】の持ち主が出ればそいつを殺せばいいのだから。

だが…それは同時に危険な手段でもある。

新城が作ろうとしている殺人集団は人を殺して首輪を解除しようって連中の集まりだ。

それと同じ理由にどうして俺を殺さないと断言できる？

奴らの仲間になるという事は常に殺人の意志のある者と行動を共にするという事だ。

「…俺は」

しかし…ここで俺が奴らの仲間になるのを拒めばどうなる？

新城は恐らく、俺が仲間になるものだろうと考えているはずだ。

拒めば…ここでコイツらと戦う事になるだろう。

そうなれば夏喜が加わっても3対2。

まともに戦って勝つのは難しいだろう。

そもそも夏喜の横にはすでに国枝がついている。

―仕方ない…か。

「俺は…悪いが遠慮する、あんた達は信用出来ない」

「!?、…チッ」

俺の答えが意外だったのだろう、新城は一瞬、驚きの表情を見せると舌打ちをした。

新城の予定では俺を加えた4人で夏喜を殺すつもりだったのだろう。

「…そうか、あれこれ悩んで考えた結果か？」

新城が残念そうに肩を落として近付いて来る。

「頭が良いってのも考えもんだな、深読みしすぎて間違った答えを出しちまう」

…近付いて来る。

「お前が仲間になってくれりゃ心強いんだがなぁ」

―チャンスは一瞬だ。

「だが…敵になるならお前みたいな厄介になりそうな奴らはまっ先に潰さないとなぁ!!」

―来た!!

シュンッ

その瞬間、新城の放った蹴りを俺は後ろに跳んで避けた。

「夏喜さん!逃げるぞ!!」

そのまま国枝と夏喜の方に向かう。

「…チッ!国枝!!」

「てめぇ…動くな!!」

「きゃあっ!!」

新城の声に国枝が夏喜の身体を掴み、強引に拘束した。

人質…そう考えているのだろう。

―助かった。

俺が一番警戒していたのは新城や国枝が武器を所持している事だった。

短い時間だったが新城と国枝は俺達から離れていた。

その間に武器でも拾われていたら厄介だった。

だが今の二人にその素振りは無い。

―それなら…。

俺はポケットから先の尖った、鋭利な武器を取り出した。

俺達を襲ったボウガンの矢だ。

「!?、てめぇ!何だそれは!!」

国枝がそれを確認した時にはもう遅い。

グサッ

俺はそのボウガンの矢を国枝の腕に突き刺した。

なるべく深く…、腕が使えなくなるようになればベストだった。

「クソがぁぁぁあ！！」

ドガッ

だが国枝は抵抗し、俺の身体を蹴飛ばした。

「痛ぇ！痛ぇ…痛ぇぇぇぇえ！！」

痛みに苦しむ国枝は拘束していた夏喜を離した。

「今だ！逃げるぞ！！」

「えぇ！！」

俺はすぐに夏喜の手を引いて走り出す。

だがすぐ近くには藤木が居た。

「藤木！奴らを逃がすな！！」

新城が藤木に声をかける。

コイツが動き出したらマズい。

新城と挟まれる事になる。

「ひっ…ひぃいッ！！」

だが藤木は俺に怯えているのか動かない。

俺が国枝の腕にボウガンの矢を刺したのが効いたのか。

―だが…助かった。

俺は夏喜の手を引いたまま新城達から離れる。

なるべく遠くへと――――。

「王生ぃぃぃぃ！てめぇだけは俺が地獄の果てまで追いかけてでもぶっ殺してやる！！覚悟しなぁ！！！」

具体的には…背後から聞こえる国枝の呪うような言葉が耳に聞こえない距離まで。

――――

――

「おい！新城！！すぐに奴らを追いかけるぞ！！」

国枝が王生達が去って行った方に向け、指差した。

「落ち着けよ、まずはお前の手当てが先だ」

だが新城は国枝をなだめるようにそう答えた。

「それに…奴らは後回しだ、先に殺す奴らは決まってる」

「…誰だ？

新城の答えに国枝は首を傾げた。

「さぁ…誰だろうな？とにかくまだルールを把握してない、例えるなら…このゲームにおいて生まれたての無知な赤ん坊、そんな奴らを狙おうと考えている」

このゲームの参加者は全部で１３人、いや、一人死んで１２人だ。

その全ての人物がルールを全て把握できるとは思えない。

特に序盤である今ならばなおさら狙い目とも言える。

「…チッ、わかったよ！だがもう一つ言いてぇ事がある！！」

「…何だ？」

国枝はわざとらしく藤木に向けて親指をクィッとやった。

当の本人は先程の戦いの影響からガクガクと震えている。

「あいつはどう考えても役立たずだ、ここで殺しちまおうぜ？」

国枝は邪悪な笑みを作ると獲物を見る目で藤木を見た。

「何言ってんだよ国枝君よ」

「…あん?」

「俺達はこれから協力し合う仲間だぜ?もちろんあいつも同じだ」

新城が国枝にそう言いながら笑い返した。

だがその表情は先程の国枝よりも邪悪な笑みだったが。

第１１話：殺人宣言（後書き）

短期集中おまけ小説。
明るいシークレットゲームを目指して。
途中で終わる可能性《大》。

【やっちまった】

「ｊｏｋｅｒもぶっ壊したし、３日間何すったかな～」

俺はぶらぶらと通路を歩いていた。

「あ、あの～」

「…ん？」

おぉ！すっげぇ可愛い娘じゃん。

「…あれ？あなた首輪は？」

「あんなの軽く外しちまったよ」

俺は外した首輪を見せた。

「わぁ…すごいですね」

「ふふ、良かったら君の首輪を外すのを手伝うよ」

これで可愛い娘とお近付きになれるぜ！！

「いいんですか!?ありがとうございます!!」

可愛い娘ちゃんはＰＤＡを取り出した。

「私のは…Ｊｏｋｅｒってカードの機能が５つ使用されている事です」

「……えっ？」

第１２話：意見の食い違い（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：？：７．１
新城　渉：？：３．０
国枝　克美：１０？：４．６
藤木　洋介：？：７．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１２話：意見の食い違い

「ふぅ…、ここまで来れば充分か」

まだ新城達とはそう距離は離れて居なかったが俺は立ち止まった。

「夏喜さん、もう大丈夫だ」

「…大丈夫なの？まだあいつらからそんなに離れてないと思うけど」

夏喜は走っていた時からちらちらと後ろを確認していた。

新城達が追いかけて来るのが心配だったのだろう。

「俺達は階段を目指して移動してたんだ、その階段から遠ざかるのは得策じゃない」

新城達から逃げるという事は自然と階段から離れる事になる。

「でも…あいつらが追いかけてきたら」

「いや…ある程度距離さえ離れりゃ新城達は追って来ないさ」

心配する夏喜に俺は首を横に振った。

「何でそんな事がわかるの？」

「新城は頭が良いって事だよ、わざわざ逃げる俺達を追いかけるよりも効率の良い方法を奴は考えているはずだ」

そうだ、この広い建物の中で一度見失った目標を追いかけるよりも簡単なやり方がある。

ましてや俺達はルールを全て知り、このゲームの内容を理解しているのだ。

「新城達が狙うのはたぶん…、ルールを何も知らない奴らだ、俺達のようにきちんと情報交換が出来ていない人物」

「でも…いくらルールがわからなくてもいきなり襲われたら抵抗するんじゃないの？」

「いや…新城の性格から見ても奴らがいきなり人を襲う事はしないはずだ」

さっき俺に攻撃して来た時もそうだった。

新城という男は正面から人を襲うタイプの人間で無い。

「例えば…そうだな、『ルールを全て把握していない者への戦闘行為は禁ずる』ってルールをルールを全て把握していない者に言う」

「って…そんなルール無いはずだけど」

「それは俺達がルールを全て知っているからこそ初めてそう言えるんだ、人によっちゃその嘘ルールを信じる人も出る」

偽物のルールを信用させ、油断させて殺す。

他にもやり方はいろいろあるだろう。

「だから俺達が標的になる事はしばらく無いはずだ、このチャンスに奴らより先回りして先手をとるべきだ」

俺がそう言うと夏喜は呆けた表情をしていた。

「そうね…、とりあえずはルールを知らない人達に早くルールを教えなきゃ」

…ん？

何でそうなるんだ？

「あんた…人の話し聞いてたのか？」

…俺達が標的にならない今が奴らより先手をとれるチャンスなんだぞ。

「え？だからルールを知らない人が狙われるんでしょ？だったら早くルールを教えてあげなきゃ大変じゃない」

夏喜はさも当たり前のようにそう答えた。

「…はぁ、夏喜さん、あんたちょっと危機感が足りてないと思う」

新城や国枝のようにやる気満々になるのもどうかと思うが…。

夏喜はこの状況では少し平和ボケしているとも感じた。

「さっきだって俺がもしあいつらの仲間になってたらどうすんだよ？」

そうなれば四対一。

確実に夏喜はその場で殺されていただろう。

「うーん…、そうなってたら困ったわね」

「困ったって…」

だが夏喜は本当に困った表情で苦笑した。

「でも、助けてくれたじゃない、ありがとね」

「…はい？」

いや…そういう事を言ってるんじゃないが。

「…俺はあんたが思ってるより親切な人間じゃない」

「あら…、だったらどうして私を助けてくれたの？」

目線を逸らした俺に夏喜は意地悪く笑った。

「どうしてって…、新城達は信用出来ないから奴らの仲間にならないだけで…」

「だってあの場で私を見捨てて逃げるって事もできたじゃない」

「……」

…確かにそうだ。

俺はあの場で夏喜を置いて新城達から逃げる事も出来た。

むしろその方が国枝との戦闘を避ける事も出来たはずだ。

無意識の行動…か？

「ふふ…黙っちゃって、可愛いわね」

そんな俺の様子を見て夏喜はますます調子に乗ったのか笑う。

「あんたを助けたのは…、今はまだ誰かと一緒に行動した方がいいって思っただけだ」

「まったく…素直じゃないのね、ツンデレってやつ？」

ツンデレって…、なんでそうなる？

「…とにかく、俺はすぐに上の階へ向かい、新城達に対抗できる手段を探すのが良いと思う」

「でもそれじゃ彼等による犠牲者が増える一方よ」

「だからってルールを知らない奴らを探して時間を浪費するのはマズい」

この広い建物でルールを知らない者を探す。

それはリスクばかりで得られる物は少ないと思えた。

「それに…新城達以外にも注意すべき奴が居る」

「…あの娘の事ね」

夏喜もすぐに思いついたのか、そう答えた。

俺達がこのゲームで初めて見た少女の死体。

あの場には新城や国枝、そして雨宮も居た。

つまり…奴ら以外にも好戦的なプレイヤーは存在しているのだ。

「最悪、ルールを知らないフリして俺達を襲うって奴もいるかもしれない」

「いろいろ考えてるのね…」

俺の言葉に夏喜は驚いた。

「でも…、やっぱり私としては他の誰かを助けたい」

「…はぁ」

新城達に対抗する為にも早く先に進みたい俺と他の人を探したい夏喜。

意見の食い違いという事だ。
落とし所は…やっぱアレか。
…仕方ない。
「じゃあこうしよう、俺達は今から――」

――
――

「さぁて、それじゃあＰＤＡを見せ合おうや、俺達の協力の為に」
いくつかの部屋を回り、新城達は国枝の応急処置ができるような救急箱を見つけていた。
「クソが…王生の野郎」
ボウガンの矢を抜き、消毒をして包帯を巻かれた国枝の目には怒りがこもっていた。

苦々しく唇を噛み締めている。

「お前の気持ちはわかるが今は待て、潰せる奴から潰すのがこういったゲームのセオリーってやつだ」

「…チッ、てめぇに言われなくてもわかってらぁ！！」

なだめるようにそう言った新城の言葉が気に入らないのか国枝が声を荒げた。

「ほらよ、俺のＰＤＡだ」

そして自分のＰＤＡを見せる。

【１０】のトランプをモチーフにしたカード。

その解除条件は首輪５つの作動にある。

すでに死亡した少女の首輪を作動させた事により、残るは４つだ。

「国枝が【１０】か…、藤木、お前のは何だ？」

「お、俺のＰＤＡは…」

藤木は少しＰＤＡを公開する事をためらっていた。

「チッ…、さっさとしろよ！！」

国枝の怒鳴り声にビクンと身体を震わせ、ＰＤＡを公開した。

「…ん？クッヒャヒャヒャヒャ！！おいおい…、マジかよ」

そのＰＤＡを見て国枝がおかしそうに笑う。

「藤木、お前は運が良かったな、俺達と組めて」

新城もそのＰＤＡを確認し、そう頷く。

ＰＤＡに記されたカードは…【３】だった。

その解除条件は…三人の人間の殺害。

「安心しな、トドメはお前にさせてやるからよ」

ポンポンと藤木の肩を叩き、新城が笑った。

「あ…、あぁ」

藤木は生返事でそう答えるとうつむいた。

「しっかし安心したぜ、お前らの中にｊｏｋｅｒを使って俺達を騙そうって不届き者が居なくて」

「あん？なんでそんな事がわかるんだ？」

ただ単にＰＤＡを見せただけではそれを本物と証明する手段にはならない。

新城の余裕の笑みに国枝は疑問を感じた。

「仮にお前らの誰かが俺達を騙そうとしてｊｏｋｅｒを使ってもすぐにバレたって事だよ」

そう言いながら新城は自分のＰＤＡを見せた。

【２】のＰＤＡ。

ｊｏｋｅｒの破壊が解除条件となり、同時にｊｏｋｅｒを封じる対抗手段となるＰＤＡがそこにはあった。

第１２話：意見の食い違い（後書き）

おまけ小説

【新米ゲームマスター、雪那ちゃん】

ディラー「ちょっと…どうなってるんですか、いきなりクリア者とクリア不能者が出るなんて…」

サブマスター「す、すいません！！」

ディラー「お客様方は不満でいっぱいですよ！！」

サブマスター「本当にすいません！すぐに何か手を考えますから！！」

ディラー「…頼みますよ」

ピッ…。

サブマスター「ちょっと！雪那さん！何考えてんスか！！」

雪那（ゲームマスター）「えっ？何が？」

サブマスター「ｊｏｋｅｒ関係の解除条件のプレイヤーにｊｏｋｅｒを持たせるなんて前代未聞スよ！！」

雪那「だって…ｊｏｋｅｒ必要なのに見つからなかったら可哀想だし」

サブマスター「…そのせいで同時にその.ｊｏｋｅｒ必要なのに永遠に見つからない可哀想のプレイヤーも出ましたよ」

第１３話：仕組まれた再会（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：？：７．１
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：４．６
藤木　洋介：３：７．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１３話：仕組まれた再会

「どう？誰か居る？」

先に通路を覗いていた俺の後ろから夏喜が話しかけた。

「いや、まだ誰も来ていない」

俺が確認したのは二階へと繋がる階段だ。

新城達が待ち伏せている可能性もあったがその様子も無い。

「新城達がもう先に行っちゃったって事は？」

「まったく無いとは言えないけど、たぶん大丈夫」

新城だってすぐに階段で待ち伏せするやり方を考えて来るはずだ。

どうやら国枝に与えたダメージが良い足枷になってくれたようだ。

「よし…、この階段はゲームを進める上で必ずと言ってもいいくらい通る場所になる」

闇雲に俺達以外のプレイヤーを探しまわるよりは効率的だ。

それに一応は上の階に進む事も出来る。

俺達はちょうど階段を上がってすぐのフロアを陣取る事を考えていた。

「気がかりなのはエレベーターか…」

この建物において階を移動する方法は2つだった。

階段とエレベーター。

階段の方はいくつか地図上にあったが一つ以外の全てにバツ印がついていた。

ここまでの道中、そのバツ印のついた階段を見ると沢山の瓦礫によって封鎖されていた。

使用出来る階段は一つの階に一つらしい。

問題はエレベーターの方だ。

これも地図上に掲載はされていたが意地悪く階段から遠い場所にある。

つまり両方を確認するという事は大幅なタイムロスを招く事になるのだ。

…個人的にはエレベーターを使うのも悪くないが。

この建物は6階建てだ。

ならば6階がどういう状態になっているかいち早く確認できるエレベーターも悪くない。

リスクとしてはエレベーターを止められる事や待ち伏せされる事もあるが…。

だがエレベーターを使ってしまうと他の無害なプレイヤーに出会う可能性がかなり低くなるので仕方ない。

「ねっ、ここなんかいいんじゃない？ちょうど階段を上がって来た人が見えるし」

二階へと上がった俺は夏喜の指差した場所を見た。

「…う～ん、理想とすれば相手からは俺達が見えない方がいいな、もちろん、すぐに逃げれる場所だ」

上がって来る奴がどんな奴かはわからない。

「最後に確認する、新城達が来た場合はすぐにここを離れる」

「えぇ…、わかってる」

俺の言葉に夏喜が頷いた。

俺達は待ち伏せの話しをした時、ある程度の決まり事を決めた。

まず最初に現れたのが新城達ならばすぐに離れる。

これは奴らの後手にまわるのを防ぐ為だ。

そして新城達以外にも好戦的な様子のプレイヤーも同様に離れる。

少女を殺した奴だっているのだから。

つまり俺達は本当に敵意を見せないプレイヤーとの接触を望むのだ。

俺は階段からはこちらが見えないような位置に移動する。

「ねっ、ただ待ってるだけってのも退屈だし、今の内にやっちゃわない？」

その隣に座った夏喜が咳払いと共に一つの提案をした。

「…何を？」

そう聞き返してはみたが夏喜の言いたい事はわかっていた。

「お互いのＰＤＡ、そろそろ教え合ってもいいかなって」

あ～ぁ…、やっぱりそう来たか。

俺のＰＤＡは【Ａ】だ。

首輪を解除するとなれば【Ｑ】のＰＤＡの持ち主を見つけ出して殺さなければいけなくなる。

こんなＰＤＡを公開すれば警戒されるのは当然だろう。

更に夏喜がその【Ｑ】だったならば本当に笑い話だ。

「…いや、ＰＤＡはお互い見せずにいこう」

少し考えた間を置いて俺はそう結末を出した。

「え…、どうして？」

さて…どう答えたものか。

「…ヘタにＰＤＡを見せ合うと今の状態が崩れるって事」

特に俺のＰＤＡに関してはそれが強い。

「納得出来ないなら仕方ないさ、ここで別れても良い」

夏喜としてもＰＤＡを見せたくない者と行動を共にするのは抵抗があるはずだ。

「う～ん…、それじゃあ仕方ないわね」

夏喜は難しく考え込むと。

「じゃあ私のだけ見せる事にする」

そう言って俺にＰＤＡを見せて来た。

「…は？」

俺は一瞬、理解が出来ずに間抜けな声を出してしまった。

「人の話し聞いてたのか？」

「ん？光一君がＰＤＡを見せたくないならそれでいいけど、私が見

せるかどうかは私の自由じゃない？」

にっこりと笑いながらそう答える夏喜。

確かに…自由と言われてしまえばそれまでだが。

「それに私だってちょっとは考えてるんだから、私のＰＤＡはコレだもの」

夏喜のＰＤＡは【４】だった。

解除条件は首輪を３つ取得する事だ。

そのやり方は二通り。

他人の首を斬り落とすか、首輪を外した他人の首輪を貰うかだ。

「だから私は他の人の首輪を外す手伝いをしようって思うの」

首輪を外す手伝いをし、外れた首輪を貰う。

夏喜に合った解除条件とも思えた。

「首輪の解除を手伝って外れた首輪を貰う、こういうのが本当の協力関係って言うと思わない？」

新城への皮肉を込めたであろうその言葉に俺は少し笑った。

「光一君のＰＤＡは光一君が見せたいと思ったらでいいよ、手伝える物なら手伝いたいし」

「……」

手伝う…か。

だが、俺のＰＤＡは――――。

「――せされて―る可能―はないか？」

「！？、夏喜さん…静かに」

ふと聞こえたのは話し声だった。

小さいが階段の下から聞こえて来た。

「…誰か来る」

俺が小声でそう呟くと夏喜もコクンと頷いた。

「俺が様子を見てきます」

耳をこらして見ると会話の内容が聞き取れた。

「…ん？」

その声が妙に懐かしいものに感じ、俺は首を傾げた。

聞いた事のある声。

だが…嘘だろ？

コツコツコツコツッ

階段を上がる音。

「光一君…、そろそろ見えるわ、…光一君？」

俺の表情を見た夏喜が困惑した。

当の俺は夏喜以上に困惑しているが、頭の中では一つの思いでいっぱいだった。

頼む…間違いであってくれ。

階段を上がって来た人物。

もう見間違えるはずが無い。

俺は隠れるのを止め、その人物の前に出た。

「…慶吾」

「コウ！？お前、何でここに？」

コイツは…藤原　慶吾。

俺の親友だ。

「それは俺が言いたいくらいだ…」

慶吾も…俺と同じようにここに連れて来られた。

だがあの時別々の場所に居た俺達をわざわざか？

…明らかに意図的にゲームの参加者として俺と慶吾が選ばれている
って事か。

「コウ、話しの前にちょっと良いか？」

「…ん？どうした？」

「階段の下に仲間を待たせてるんだが足を怪我してな、ちょっと
手伝ってくれ」

「…あぁ、わかった」

足を怪我した奴と一緒に行動か。

こんな状況になってもお前はお前のままなんだな。

安心した。

先に階段を降りる慶吾の背中を見ながら俺も後を追った。

第１３話：仕組まれた再会（後書き）

～おまけ小説～

【任ッせて！！】

サブマスター「それで…、今回の問題にどう対応するんですか？」

雪那「大丈～夫、大丈～夫、私に任ッせて、何年これで食って来てると思ってるの？」

サブマスター「いや、今日が初めての現場って聞きましたけど」

雪那「心配性だなぁ、ちゃ～んと手は打ってあるんだから」

サブマスター「それなら一安心ッスね、何をやったんです？」

雪那「２番さんと６番さんの通る先に予備のｊｏｋｅｒのＰＤＡを入れたダンボールを配置するように指示だしたから」

サブマスター「…え？」

雪那「食料と水と全種類のツールボックスもおまけに沢山入れたからこれで安心だよね、ピース」

サブマスター「ぴ…、ぴ～す」

―この娘をゲームマスターに採用したのは誰だよ…。

第１４話：怪我人（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：？：７．１
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：５．１
藤木　洋介：３：７．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：？：４．６
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１４話：怪我人

「少年、すぐに戻って来ないので心配したぞ」

階段を降りた所に一人の女性が座っていた。

年は二十歳中頃、くせ毛が特徴的な髪をしている。

綺麗な顔立ち、そして胸がデカい。

…一応言っとくがこれはこの女の特徴を説明する為だからな。

「…ん？そちらは誰だ？」

女性はすぐに俺に気付くと首を傾げた。

「観月さん、上の階に俺の友達が居たんです」

「ふむ…？見ず知らずの者達だけが集められた…という訳でも無いようだな」

「コウ、この人は神北　観月さん、ちょっと前に知り合ったんだ」

慶吾はそう言うと俺に観月を紹介した。

「神北　観月だ、よろしく、それでコウ＝ウラキ君」

「誰だそれは、俺は王生　光一だ」

「では光一少年、慶吾少年とは知り合い関係なのか？」

「あぁ、慶吾は俺の友達だ」

「そうか…」

俺がそう答えると観月は腕を組み、考え始めた。

観月の足には包帯が巻かれている。

怪我人…、それも足を怪我しているとなれば正直に言えば一緒に行動すれば行動の妨げになるだろうなぁ。

「…今私の事を足手まといになるだろうなぁと思っただろう？」

そんな俺の考えを見透かされたのか観月がジトーっと俺を見た。

…バレたか。

「まぁ君の言いたい事はわかるし、最もだと私も思うがな」

だが観月はすぐに苦笑するとある物を取り出した。

「だが、ここは協力して欲しい、ホレ」

観月が取り出したのは刑事物の映画で良く見る警察手帳という奴だ。

「あんた…警官か」

「刑事と呼んで貰えたら嬉しいな」

「観月さんはここを出たら犯人を捕まえるって意気込んでる」

慶吾が苦笑混じりにそう言う。

…無理だろうな。

犯人が俺達を拉致してこのゲームに参加させるとするなら、当然俺達の素性は調べ上げられているはずだ。

つまり観月が刑事だという事をわかった上で誘拐した。

警察なぞ犯人側からすれば何の問題も無い…か。

「…その足の怪我、誰かに襲われたのか?」

「いや、罠…と言えば良いかな?それに引っかかった」

…罠か。

俺と雨宮が見つけたようなボウガンみたいな奴以外にもあったんだな。

「罠なら俺も遭遇した、俺のはボウガンの矢が発射されるやつだ」

「私のかかった物以外にもいろいろと設置されているようだな、用意の良い事だ」

観月がこの建物へ皮肉を込めたようにそう話した。

「ちょっとぉ～…、何で誰も戻って来ないの！？」

気が付くと上の階から夏喜が顔を出していた。

…完全に忘れてた。

「とりあえず二階へ行こうぜ、あの人は待たせるとうるさい」

「みたいだな」

俺と慶吾は笑い合うと足を怪我した観月にそれぞれ肩を貸した。

「胸が当たってもセクハラで訴える事はしないから安心しろ」

「逆セクハラって知ってるか…」

―――

――

二階へ上がり、夏喜と合流した俺達は簡単な自己紹介を済ませた。

そして一応の為、まだ他の話しが出来そうなプレイヤーを待つ事に

した。

「なるほどな、夏喜君のＰＤＡの解除条件の為にここで人を待っていたという訳か」

「夏喜さんのＰＤＡが【４】なら俺達三人が首輪を外せば同時にクリアになるんだな」

慶吾がそうまとめるが俺のＰＤＡがある分、難しいだろう。

「二人のＰＤＡを聞いても良いか？」

「あぁ、俺のＰＤＡはこれだ」

慶吾のＰＤＡは【Ｊ】。

その解除条件はゲーム開始から２４時間以上行動を共にした者が２日と２３時間以上生存している事か…。

このまま俺達で行動をすれば条件はクリアできるだろう。

「少年の物は良いが私のは少々厄介でな…」

観月のＰＤＡ…。

「【７】か…」

その解除条件はゲーム開始から６時間以降に死亡者を除く全てのプレイヤーと出会う事。

足の怪我した観月の事を考えたら今の状況ではかなりクリアは難しくなる。

「それでコウ、お前のＰＤＡは？」

「俺か…俺のＰＤＡは」

…もう逃げ場もなくなって来たか。

「あっ！私は見ないからね！！」

夏喜が視線を俺から外し、階段へと向けた。

妙なプライドだなぁ…。

「ん？どういう事だ？」

そんな夏喜の様子に観月が首を傾げる。

俺と夏喜がお互いにＰＤＡを見せ合ったと思っているのだろう。

「俺のＰＤＡは夏喜に見せてないからな…」

「変わった協力体制をとっているのだな」

「まぁ…な」

そりゃそう言われても仕方ない。

「ふむ…訳ありという事か、ならば私も遠慮しておこうか」

だが意外にも観月はそう言葉を続けると夏喜と同じく、階段に視線を移した。

「…なぬ？」

「確かに君のＰＤＡは気になるが…、私は私で怪我をしている負い目もある、これでチャラといこう」

「それじゃあ観月さん、私達は少し離れますか」

「そうだな…、では男女別々に信頼関係を基づいていくとするか」

夏喜の言葉に観月が頷くと二人は俺と慶吾から少し距離を置いた。

「あとは若い二人に任せるとしよう」

「お見合いかよ…」

観月と夏喜が離れたのを確認し、俺はため息をついた。

「何考えてんだか…」

二人に関係の無い【Ａ】だから良かったがもし俺のＰＤＡが【３】や【９】だったらどうするつもりだったんだ？

「コウ、お前のＰＤＡは…」

慶吾はたぶん、俺のＰＤＡがどういった種類の物かの見当をつけているだろう。

「俺のＰＤＡはこれだ、【Ｑ】殺しのナンバー【Ａ】」

俺は素直に慶吾に自分のＰＤＡを見せた。

「コウ…」

慶吾はツラい表情で俺のＰＤＡを確認する。

「【Ｑ】のＰＤＡを持った人を見つけたら…どうするんだ？」

そして、ゆっくりと慎重な声でそう俺に聞いた。

「…俺のＰＤＡが【Ａ】だってお前にバラした時点でわかってるだろ」

慶吾なら…俺が人を殺める事を止めてくれるだろう。

「もしもの時はお前が俺を止めてくれ」

【Ｑ】の人物を目の前にしても俺が暴走しないように。

「だが…そうなるとお前は」

「んな顔するな、俺だってまだ諦めた訳じゃない」

俺は慶吾に向けてニヤリと笑ってやった。

「首輪の解除がダメなら別のやり方を探すだけだ」

口ではそう言ったが、その希望はほんの僅かしか無いという事はわかっていた。

慶吾、このゲームでの俺の行動方針って奴が決まった。

必ず…お前にこのゲームをクリアさせてやる。

…こんな事言ったらコイツは怒るだろうなぁ。

「さて…、んじゃ観月のねーちゃんと夏喜さんと今までの情報交換といこうぜ」

苦笑を隠しつつ、俺は少し離れた所で階段を見ながら会話をする観月と夏喜を指差した。

「コウ」

「…ん？」

「確かお前からパフェ奢って貰う約束してたな」

あぁ…そういやそんな約束してたっけ。

「チッ…、覚えてたか、相変わらず抜け目ない奴め」

「帰ったら一緒に食おうぜ、観月さんや夏喜さんも誘ってさ」

「あぁ…、そうだな」

そうなると…良いな。

「しかし…あの二人、人の金でむちゃくちゃ食べそうだ」

「…だな」

俺達は二人でニヤリと笑い合った。

「聞こえてるぞ、王生少年」

「光一君がお金を出してくれるんだよね～、ご希望にお答えしてあげないと」

「…聞こえてましたか」

すぐ背後にジトリと俺達を見る観月と夏喜が居た。

第１４話：怪我人（後書き）

～おまけ小説～

【プレゼント箱】

「なんだ？通路のど真ん中にダンボール箱が置いてあるぞ」

「中に何か入ってるんでしょうかね？」

「しかし…これは罠って可能性もあるな」

「は～、すぐに首輪を外せる人の考え方ってスゴいんですね」

「あ、あああああああ当たり前田のクラッカー！俺にかかればららららラクショーっよ！！」

「目が泳いでないですか？」

ダンボール箱を調べてみる。

なんか張り紙がはってあった。

【決して怪しい箱ではございません、中には素敵な物が沢山入ってますよ☆】

「…スルーしようか、なんか罠っぽいし」

「そ～ですね…」

―――

――

雪那「えぇ～！！何で！？」

サブマスター「あ～…、回収犯、一階のC通路のダンボールすぐに撤去してくれ」

第１５話：架空の解除条件（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：４：６．７
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：５．１
藤木　洋介：３：７．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．６
神北　観月：７：６．８
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１５話：架空の解除条件

「それでは…これまでの経緯を聞こうか、この建物に連れて来られるまでもな」

「刑事らしく事情聴取というやつか？」

「まぁそんな所だ、ちなみに私はさっき夏喜君の話しは聞いた」

さっき二人で話していた時に聞いたのだろう。

「私は幼稚園から帰る途中で襲われて意識を失ったの」

「幼稚園って…、夏喜さん、子供居たんですか!？」

何食わぬ顔でそう話す夏喜に慶吾は驚いた。

「あら失礼ね、もう子供が一人居るような年に見える？」

「二人は居るように見える」

バシンッ

「いてっ！？」

…叩く事無いだろうに。

「今のは君が悪いな、コウ少年」

「…すんませんね」

「私は保育士を目指してるから、その修行ってやつ？」

「なるほどな…」

「それでコウ少年、君の事を聞かせてくれ」

観月が俺に向き合って話しを聞こうとした。

「ちなみに慶吾少年の話しはもう聞いてある、君を待っている間に意識を失ったらしい」

「俺も忘れ物を取りに教室に戻った時にやられた」

「ふむ…単なる偶然で君ら二人が連れて来られたとは思えんな」

観月が興味深く顎に手を当てて考え出した。

考える事は俺と同じ…か？

刑事であるおかげが観月の洞察力はかなり良いと思えた。

…足さえ怪我してなけりゃ戦力になると思うが。

「その残念なものを見る目はなんだ？」

…鋭いな。

「別に、それよりあんたはどうなんだ？」

仕方ないので話題を変えていこう。

「私か？私は今日非番の日でな、朝から並んでパチンコ打ってた」

「おいおい…」

「…６万あれば何が買えたんだろうな」

負けたらしい。

「観月さん…、刑事ですよね？」

「何だ？警察がパチンコ打っちゃいけないって法律でもあるのか？」

「いや…無いですけど」

観月の剣幕にたじろぐ慶吾。

夏喜は苦笑いを浮かべていた。

「じゃあパチンコ屋でさらわれたのか？」

「いや…その後、ツダヤに借りていたＤＶＤを返しに行く途中に」

「…あ～ぁ」

「２０本くらい借りて返却日は今日だったんだが…、誘拐犯達はちゃんと返却してくれたんだろうか…」

落ち込みながらため息をつく観月。

「いや、知らないけどさ、つーか何をそんな借りたんだ」

「ん？アニメだ」

…朝からパチンコ、んで大量のアニメのＤＶＤ。

「…どんだけ暇な生活してんだ、あんたは」

「独身の一人暮らしをなめるな！！」

観月がカッと目を見開いて声を上げた。

「仕事柄休みの日が友人と合わない…、休みの日に襲ってくる孤独感をわかるまい！！」

「わ、わかったから少し落ち着いてくれ」

予想以上にキレられた事に焦った。

本人も目がうるうるになってるし。

「え、えっと…、これでみんながさらわれた状況がわかったわね」

夏喜が苦笑のまま話しをまとめてくれた。

「次は…そうだな、ルールの交換だな」

「あぁ、ルールなら俺達は全て把握している、事前に何人かと出会

ってるからな」

「うむ…、それは良かった、私達はまだ7つしか埋まってないからな」

「…ん？」

ルールを7つ知っている？

ルールの1と2は共通、残るルールはランダムに2つだったはずだ。

慶吾と観月に与えられたルールが別々の物だとしても埋められるルールは6つのはずだ。

「もしかして…、俺達以外にも他の誰かに会ったのか？」

「鋭いな、まぁ出会ったのは私じゃなくて慶吾少年の方だ」

「俺は夏喜さんと会う前にもう一人、中村ってじーさんに出会ってる」

…つまり、慶吾は中村というじぃさんと出会い、情報交換をして別れた後観月と出会った訳か。

「…珍しいな、お前がそんなじぃさんを一人にさせるなんて」

慶吾の性格を考えればそのじぃさんと行動を共にしていてもおかしくない。

慶吾は決して相手が年寄りだから足手まといなる…とは考えない。

むしろ逆に助けたいと思うはずだ。

「俺だってできれば中村さんについてってやりたかったけどさ」

慶吾はバツが悪そうに目を伏せた。

「でも中村さんの首輪の解除条件が【ゲーム開始から数えて４８時間以上単独で行動する事】だからしょうがない」

「なっ…」

「えっ！？」

慶吾のその言葉に俺と夏喜は驚きの声を上げ、顔を見合わせた。

「光一君、それって…」

「あぁ…、わかってる」

「ん？どうしたんだよ、二人共」

「君達だけで納得していたら私達が困るぞ」

俺と夏喜の様子に慶吾と観月がキョトンとしながらそう言った。

「慶吾、ルールの９はまだわかってないだろ？」

「ん？あぁ…よくわかったな」

「口で説明するより見た方が早いな」

俺は慶吾と観月にルールの一覧を書いた紙を見せた。

「…9番目のルールに各ＰＤＡの解除条件表が載ってる」

「みたいだな…、えっ！？」

慶吾もそれに気付いたのか目を見開いた。

「中村という老人の言っていた解除条件は存在しないな…」

つまり…中村というじぃさんは嘘をついたのだ。

「でも…何の為にそんな事を？」

「自分のＰＤＡの解除条件が他人に知られれば不利になるんだろう」

このゲームでの勝敗は最初に配られるＰＤＡによって大きく変化する。

比較的簡単な物から難易度の高い物まで様々だ。

比較的簡単な物としてはＰＤＡを5つ集めるだけでいい【Ｋ】だろう。

運が良ければ他プレイヤーとのルールを交換する段階で解除条件を満たす事ができる可能性もある。

夏喜の持つ【４】も死体から奪っていけば簡単かもしれないが本人

はやらないだろう。

一番解除条件の困難なＰＤＡは言うまでもなく皆殺しの【９】だが。

「ふむ、人に知られて困る条件…か、この一覧表から予想すれば【Ａ】、【３】、【８】、【１０】、そして…」

「【９】…ですか」

人を殺す、もしくは殺した方が都合が良い条件。

ちなみに【Ａ】は俺だが。

「つまり中村ってじぃさんには注意した方が良いって事か」

「私の方からも良いか？ルールを全て把握して居るという事はすでに何人かのプレイヤーと出会っているはずだ」

観月が手を上げながら質問して来た。

「そういや…その人達はどうなったんだ？」

「えっと…」

慶吾と観月の問いに夏喜はたじろぎながら助けを求めるように俺をチラチラと見た。

「そうだな、それも話さないとな」

自分のＰＤＡを偽った中村も確かに厄介だろうが。

それよりも厄介になるであろう、例の三人組。

そして行動の意図が不明な雨宮。

奴らの事を話さなくてはならない。

「…シッ、誰か来るぞ」

その時、観月が階段の方を注目しながら口に手を当てた。

「…本当だ」

俺達もすぐに会話を止め、次に現れるであろう人物に備える。

「二階にはついたが…、相変わらず同じような通路が続いてんな」

…この声。

「チッ！結局今まで誰とも会えやしねぇ…、広すぎんだよ！この建物は！！」

二階へと上がって来た三人の男達。

三人が三人共鉄パイプや家具を壊して作ったであろう木の棒等の武器を持っていた。

間違いない…、新城達だ。

第１５話：架空の解除条件（後書き）

～おまけ小説～

【解除条件】

「ここも…知らない天井だ」

目覚めると見知らぬ部屋、見知らぬ天井。

「なんだろ…これ？」

そして自分の横にはＰＤＡが置かれていた。

その画面には――――。

「これ…知ってる、見た事ある」

《封印されしエグゾディア》

星☆☆☆☆

攻撃力：１０００

守備力：１０００

「……え？」

―――

―

サブマスター「ちょ…、なんスか！？あのＰＤＡ」

雪那「毎回トランプばっかりってのもありきたりかな～って」

第１６話：三人組（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：４：６．７
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：５．１
藤木　洋介：３：７．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．６
神北　観月：７：６．８
中村　真：？：４．２
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１６話：三人組

「…見るからに物騒な連中だな」

観月が新城達を見て最初に呟いた答えがそれだった。

それもそうだろう。

鉄パイプ、木の棒、金属バッドでそれぞれ武装した三人組。

「普段なら即職務質問といった所か」

「あいつら…、何がやりたいんだ」

慶吾も奴らの異常性に冷や汗を流していた。

「…光一君」

「あぁ…、わかってる」

積極的に人を殺そうと動く連中が目の前にいるのだ。

当然、奴らに気付かれる事は避けたい。

だが…それは通常なら、だ。

今は状況が少し違う。

その原因は観月のＰＤＡの解除条件、全参加プレイヤーとの遭遇。

話しを聞くと観月はまだ新城達と出会っては居ない。
ここで新城達の前に出るという事は観月のＰＤＡの解除にも繋がるのだ。
…馬鹿か、それじゃリスクがデカすぎるぞ。
観月は今足を怪我している。
それは当然、一緒に行動する俺達にとっても足枷となる。
新城達にとってはまさに絶好のカモとなろう。
今ならまだ新城達の行動はルールを知らない者達に向いているが、俺達が標的となる可能性も出る。
問題なのは今、奴らの前に出るか否か…か。
よし――――。
「観月さん、慶吾、あの三人に気付かれないようにここを離れよう」
少し考え、俺はそう結論を出した。
「ふむ…、どうやら彼等の事を知ってるようだな」
「理由は後で…、今奴らに気付かれると厄介な事になる」
「ふむなるほど、危険…という訳か」

「だけどコウ、観月さんのＰＤＡが…」

慶吾が心配気にそう言おうとすると観月がそれを手で静止した。

「良いさ、私一人のせいで皆を危険に晒す訳にもいかんからな」

「でも…」

「少年、君は優しいな…、だが皆を危険にする優しさは正しいとは言えまい？」

「……」

小さく微笑む観月に慶吾は何も言えなかった。

「慶吾、大丈夫だ、観月さんのＰＤＡの事も考えてある」

「…どうするつもりなの？」

夏喜が不安気な表情をさせてそう聞いて来た。

「それは…」

…黒い考えだ。

俺がまず考えたのは観月のＰＤＡ、全プレイヤーとの遭遇に当てはまらない状態についてだ。

ルールにある通り、言うまでもなくそれは死亡者だ。

死亡者との遭遇は免除されている。

それは言い方を変えれば一度解除条件の為に誰かに遭遇したとして、その人物が死亡したなら無駄足という事になる。

つまり…。今新城達と遭遇し、襲われるとしても後に奴らが死亡すれば不必要に危険な目にあったという事になるのだ。

奴らに会うのはゲームの終盤がベストだろう。

一番の理想は新城達がお互いに殺し合う事。

その可能性もかなり高いだろう。

奴らに元々仲間意識等は有りはしない。

一人でも私利私欲に走ってくれれば崩壊も早い。

「それより今は奴らから離れるのが先決だ」

「…そうね、私もまたあいつらに襲われるのはごめんだし」

夏喜は少し間を置いたが素直に頷いてくれた。

「たぶん、新城達はしばらく階段の前に居座るはずだ、今の内にここを離れよう」

事実、新城達は階段の所で何か話している。

「ふむ、了解だ」

俺達は新城達に気付かれないように移動を始めた。

――

――

「よし…、んじゃ行くか」

王生はこの時、一つ誤算をしていた。

新城達はほんの数分会話をすると再び行動を開始したのだ。

王生がもう少し新城達の様子を見ていれば彼等が階段で他のプレイヤーを待たない事がわかっただろう。

「んで、どっちに進むんだよ？」

「ん～…、どっちでも最終的には同じ道になるんだろうから変わらねぇけどな」

新城はＰＤＡをいじりながら何の気なしに答える。

王生の誤算は必然でもあった。

新城も直前までは階段に止まる選択肢を選んでいたのだから。

「…こっち行こうぜ、なんとなくな」

新城が今見ているのはＰＤＡの機能にある地図だった。

しかしそれはただの地図では無い。

地図上に４つの光点が表示されていた。

それは国枝や藤木の地図には表示されていないものだ。

新城はその光点へ向かう事を考えていた。

彼にとって確かめるべき事があるのだ。

王生が新城の行動を見誤ったのはそれが原因だった。

―――

――

「…あいつら、そんなヤバい奴らだったのか」

一段落ついてから、俺は慶吾と観月に新城達についての説明をした。

これまでの経緯、新城の殺人宣言とそれについて行った国枝と藤木。

別れた雨宮の事。

一通り話すと慶吾も観月も深刻そうに口を閉じた。

「雨宮という女も気になるが…、やはり一番気がかりになるのは例の三羽カラスか…」

ここで観月の言う三羽カラスとは新城達三人組の事だろう。

「奴ら黒い三連星は明らかに殺人の意志を示している、このまま奴ら夢幻三剣士をほっておけば被害は増える一方だろう、だが奴らドーマの三銃士はそれぞれにしっかりと武器を所持している、三本柱マン…、手強い奴らだな」

「呼び方を統一してくれ、ややっこしくてたまらん」

「む？それもそうだな…、ではさわやか三組に統一する事にしよう」

「それは三人組じゃないだろ…」

この観月という女はどこまで本気なのかわからんな。

「ふむ…、しかし奴らの武装に比べると我々は少々、心細いな」

「何かしらの武器を持つ必然がある…って事ね」

観月の言葉の意味を理解した夏喜が慎重に頷いた。

武装した新城達に対し、今の俺達は丸腰と不用心すぎる。

いや…新城達だけでは無い、他の好戦的なプレイヤーに対抗する手段としても武器は必然だった。

「新城達が鉄パイプやバッドを持ってる事を考えるとやはり部屋にそういう武器があるんだろう」

「そういえば観月さんが巻いている包帯ってどこにあったんですか？」

慶吾が観月の足に巻かれた包帯を見ながらそう話した。

「うん？これか…、これは一階の部屋のダンボールの中に入っていた物だ」

「って事は武器以外にもいろいろありそうね」

「あると思うぜ」

考える夏喜に俺はそう言った。

「連中は俺達をここで3日間生活させるつもりなんだ、なら食料や

飲み物だってあるはずだ」

そう自分で言っておいて、自分が今まで何も食べていない事を思い出した。

「…そういえば、腹へったな」

慶吾も考えた事は同じだったようで、呟いた声を出す。

「…決まりだな、各部屋を周り、武器や食料を調達していこうか」

「…あぁ」

この利点は俺達の装備が充実する以外にももう一つある。

それは階段で他のプレイヤーを待ち伏せしている新城達よりも先に武器等を回収できる点だ。

「それで、部屋を回りながら三階に行くの？」

「俺はそれが理想だと思う」

とにかく…早め早めに先へと進みたい。

「ふむ…、私の意見だが良いか？」

だが、そこで手を上げたのは観月だった。

「…ん？」

「私はここで一度、戦闘禁止エリアへ向かうのが良いと思う」

「戦闘禁止エリアか…」

ルールではそのエリアでの戦闘行為を行った者は処罰の対象とされる。

「確かに先へ進むのも重要だが、それ以上に重要な事もある」

「…確かにそうですね」

観月の言葉に慶吾が頷く。

…それもそうか。

人間、どうやったって必要なものがある。

それは食事や睡眠だ。

７３時間、ぶっ通しで行動を続けるなど、最初から不可能な話しだ。

食事や睡眠を怠れば、もしもの時に満足に動けない事になる。

「戦闘行為が禁止された場所なら寝込みを襲われる可能性も低くなる…か」

襲われる可能性がまったく無くなるとは言えないが。

少なくとも適当な部屋で寝るよりは数段マシだろう。

「夜這いの心配も君達だけになるからな」

「こんな状況でそんな事するかよ…」

「あら、私達に魅力が無いって言うのかしら？」

意地悪くニヤニヤと笑う観月と夏喜。

「…慶吾、ツッコミ役を変わってくれ」

「頑張れ！」

俺の肩に手をのせ、慶吾はグッと親指を立てて来た。

「……」

グググッ

「いてててててッ！！」

とりあえずヘッドロックをかけておいた。

「それでどうする？戦闘禁止エリアへ行くのか？」

「そうだな…」

現在、ゲーム開始から１０時間以上は経過している。

だがこれはあくまでもゲームが開始されてからの時間であり、現在時刻とは別だ。

ケータイを見ると現在時刻は深夜と言ってもいい時間帯になっていた。

…どのみち、休息は必要か。

「よし、それじゃ各部屋を回って使えそうな物を回収しながら戦闘禁止エリアを目指そう」

俺達の行動方針が決まった。

後は新城達が階段からすぐに動かない事を祈るくらいか…。

俺達はまず地図を確認し、戦闘禁止エリアへ向けてのルートを探した。

第16話：三人組（後書き）

観月「三柱神、三幻神、3アミーゴ、死の旋風、絵札の三剣士、三馬鹿トリオ、ズッコケ三人組、レッツゴー三匹、ボマー、どれにしようか迷うな…」

王生「もっとマシな案は無いのかよ…」

第17話：アイテム（前書き）

【BET】

player：card：odds

王生　光一：A：3．6
雨宮　鈴音：？：2．7
　柳　辰巳：？：7．2
春野　夏喜：4：6．7
新城　渉：2：3．0
国枝　克美：10：5．1
藤木　洋介：3：7．9
？？？？：？：Death
藤原　慶吾：J：4．6
神北　観月：7：6．8
中村　真：？：4．2
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第17話：アイテム

「水と…これは食料か」

ダンボールの中から見つけたのはペットボトルに入った飲料水と缶詰。

「マトモな缶詰なんだろうな？」

それを見た慶吾が胡散臭さそうに缶詰を眺めた。

「少なくとも毒は入ってないと思うぜ」

これが俺達を誘拐した者が設置したとなるなら、毒は無いだろう。

まさか人肉缶詰なんて事も無いだろうし。

「でも…下の階に比べるといろんな物が見つかるね」

下の階でも部屋を回っていた夏喜が少し悔しそうな顔をする。

戦闘禁止エリアへのルートを決めた俺達はその道中、部屋を回り、装備を充実させる事にした。

一階に比べ、思いの他食料や飲料水等が見つかってくれる。

とは言え、４人分必要な事を考えると適量かもしれないが。

「でも持ち歩くにしてもかさばりそうね」

「その心配はいらないぞ、夏喜君」

見つけた戦利品が多くなって来た所で観月が良い物を見つけてくれた。

「これは…、リュックですか、普通のより少し大きめですね」

「用意の良い事だな…」

俺達は少し呆れながらも見つけたリュックに食料と水を詰めていく。

「…重くなるな、少し減らすか」

このままじゃリュックを担ぐ分、体力を消耗してしまいそうだ。

「ふむ…、だがこの先、満足に食料が手に入るとは限らんぞ」

「…それもそうか」

現状では食料や飲料水の確保に困る事は無さそうだが、これはあくまで現在状況の話しだ。

上の階にマトモに食料がある保証は無い。

「という訳で君達、早くリュックを担いでくれ」

「…選択肢は俺達だけかよ」

「まさか怪我人の私やか弱い女性である夏喜君に重たい物を持たせ、

まだまだ青春を存分に楽しんでいる現役バリバリの高校生である君達が手ぶらでいる…、なんて事は無いだろう？」

ニッコリと笑いながら早口で観月はそう話した。

「…はぁ、やるか、コウ」

「仕方ねぇな…」

「ふむ、頑張れ、男の子」

男女差別もいい所だ。

「よし…」

「やるか」

俺と慶吾は同時に拳を後ろにやる。

「「ジャンケン…ポンッ」」

―――――

――
―

「…これは」

いくつかの部屋を回ってそれは見つかった。

ちなみに食料や飲料水が詰まった重たいリュックは俺が背負っている。

…ジャンケン弱ぇな、俺。

「どうした？慶吾」

「コウ…」

慶吾が俺に見せた物に俺は息を呑んだ。

―やっぱりありやがったか。

慶吾のもつソレは鈍く光りを反射している。

ナイフだ…。

それも一般的に流通しているような物でない。

大型のアーミーナイフ。

「これはまた随分と具体的な物が出てきたな」

観月は慶吾からアーミーナイフを受け取ると眺めた。

「これを使って戦えって言ってるようなもんだな」

「…ふざけてる」

慶吾がアーミーナイフの入っていたダンボール箱をさらに探る。

見つけたのは先ほどのアーミーナイフに比べると長さに劣るがもう一本、ナイフがあった。

更に草刈りによく使うカマもあった。

二階には刃物って事か…。

「どうするの…これ？」

夏喜が不安が混じった声で遠慮がちに聞いてきた。

「そりゃ…持ってくしかないな」

「奴ら三馬鹿トリオが武器を持っている以上、丸腰という訳にはいくまい」

夏喜にそう答えた俺に観月が説明を加えてくれた。

「しかし…、このダンボールは他の物に比べると毛色が違うな」

確かに…武器を詰め込んである。

「他に何か使えそうな物は無いのか？」

「目立つのはそんな所だけど…ん？」

何かを発見したのか慶吾がダンボール箱に手を突っ込んだ。

「…なんだ？これ」

そして取り出したのはマッチ箱くらいの大きさをしたプラスチックの箱だった。

何かに接続できそうなコネクターがある。

それが２つダンボール箱から見つかった。

「…何か書いてあるな」

慶吾がプラスチックに書いてある英語を見る。

「コウ、パス」

「訳すの面倒だったんだろ」

俺は慶吾からプラスチックの箱を受け取る。

「…通信機能、Ａ？」

「こっちにはBと書いてあるな」

「2つセットみたいだけど、どう使うのかな？」

夏喜がプラスチックの箱をいじる。

「…そうだ、確かＰＤＡに」

俺はＰＤＡを取り出す。

「そのプラスチックの箱、ＰＤＡと接続できるみたいだ」

「コウ、罠って事は無いのか？」

「…どうだろうな」

可能性が無いとは言えないが。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

その時、俺達のＰＤＡのアラームが鳴りだした。

「…なんだ？」

『このツールボックスをＰＤＡの側面のコネクターに接続することで、ＰＤＡに新たな機能をもったソフトウェアを組み込み、カスタマイズすることが可能です』

俺達のＰＤＡの画面に映し出されたのはこのプラスチックの箱についての説明文だった。

『ソフトウェアを組み込めば他のプレイヤーに対して大きなアドバンテージとなりますが、強力なソフトウェアは起動するとバッテリー消費が早まるように設定されています』

「なるほど、ＰＤＡの機能拡張の為のツールボックスって訳か」

しかし機能によってはバッテリーを激しく消耗し、バッテリー切れをおこす危険も出るって事か。

『使い過ぎてＰＤＡが起動できなくなり、首輪を外せなくなる事がないように注意しましょう。なお、一つのツールボックスボックスでインストール可能なＰＤＡは１台のみです』

やはり…バッテリー切れは首輪の解除が不可能になるって事か。

『どのＰＤＡにインストールするかは慎重に選びましょう』

そんな文章を終わりに目の前のプラスチックの箱、ツールボックスの説明が終わった。

「自分の手でＰＤＡを自由にカスタムできる…、最近のゲームによくあるな」

「俺達を誘拐した奴らのやり方は気に入らないが…、これは使えそうだな」

このツールボックスを使えば行動の選択肢も増えてくる。

「でも…誰のＰＤＡに使うの？」

夏喜がツールボックスを手の平の上で転がしながらそう話した。

「そうだな…、このソフトウェアがインストールされたＰＤＡ同士は通信機能が使えるみたいだし」

仲間内で使うとなると…。

「では王生、慶吾両少年で使うと良い」

「…良いのか？」

「例えば今我々を２つのチームで分けるとしたら自然と君達二人はバラバラになる、そう考えた」

「…確かにな、慶吾、お前もいいか？」

「あぁ、わかった」

俺と慶吾はそれぞれ、２つのツールボックスを接続し、インストールを開始した。

第17話：アイテム（後書き）

～おまけ小説～

【何かが足りない】

サブマスター「雪那さん！あまりゲームをかき乱さないで下さいッス」

雪那「え～…私何も悪い事なんてしてないよ」

サブマスター「いいッスか…、我々の目的はこのゲームを見ているお客様の為にゲームを盛り上げる事ッスよ！！」

雪那「あっ！それなら私に良いアイデアがあるよ～」

サブマスター「…はい？」

雪那「このゲームには足りないものがあるんだよ」

サブマスター「えっと…、じゃあお願いします」

雪那「お任せ～」

――

――

―

館内スピーカー「～～～♪♪～～～♪♪♪（音楽、※天国と地獄）」

※運動会によくかかるやつです。

雪那「うん、やっぱりＢＧＭが無いと盛り上らないよね」

サブマスター「…つか、なんでこの曲？」

雪那「テンション上がるからだよ～」

第１８話：一息（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：４：６．７
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：５．１
藤木　洋介：３：７．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．６
神北　観月：７：６．８
中村　真：？：４．２
？？？？：？：？？？？
？？？？：？：？？？？

第１８話：一息

『どうだ？コウ、俺の声が聞こえるか？』

ＰＤＡから聞こえる慶吾の声。

「あぁ、感度良好、よく聞こえる」

俺達は早速ＰＤＡにインストールしたソフトウェアを試しに使ってみた。

と言っても戦闘禁止エリアへ向けて移動しながらとなっているが。

インストールの際に出てきた説明文によるとコイツは館内のネットワークを利用したトランシーバー機能らしい。

「これで離れてて連絡が取り合えるな」

「でもよっぽどの事が無い限り、これから私達は一緒に行動するんでしょ？」

「あぁ、もちろんそれはベストだろうが、そう都合良くもいくまい」

夏喜の言葉に観月が返事を返す。

「…そうね、誰かに襲われて仕方なく別れちゃうって事もあり得るし」

その返事を聞いて夏喜が慎重に頷いた。

「……」

確かにそれもあるが…、他にも何かありそうだな。

「っと…、戦闘禁止エリアはここら辺か」

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「お？」

【あなたが入ろうとしているのは戦闘禁止エリアです、部屋の中ではあらゆる戦闘行為は禁止されてます、違反者は例外なく処分されます】

一つの部屋の前でＰＤＡのアラームが鳴りだし、そんな文章が標準された。

「…この部屋か」

ガチャンッ

扉を開け、中に入ると確かにその部屋は他の部屋とは感じが違っていた。

まずキチンと清掃がされている。

他の部屋ではあった埃が見当たらないのだ。

椅子やテーブルも用意されており、簡単なキッチンもあった。

「ふぅ〜、ここならゆっくり休めそうだな」

慶吾が戦闘禁止エリアの椅子に座る。

「充分休んでるだろ、俺ばっかに重たい荷物持たせて」

俺は俺で食料や調理道具の詰まったリュックを床に置く。

「公平なジャンケンの結果だ、悪く思うな」

慶吾はニヤニヤと笑いながら椅子に座る俺を見た。

―ジャンケン弱ぇな…、マジで。

「ちゃんとキッチンもあるみたい、私もうお腹ペコペコ〜」

夏喜はキッチンを覗くと嬉しそうに笑った。

「うむ、早速だが飯にしようか」

「あっ、それじゃあ私が腕を振るっちゃおうかな」

夏喜が観月の怪我の事を察し、真っ先に名乗り出た。

「助かる、ところで男性陣は誰も料理はしないのか？」

「俺は…すいません、まともな料理は」

慶吾が申し訳無さそうに謝る。

「簡単な物だったら作れる」

俺は…まぁこれでも一応一人暮らししてるし。

「そうか…、なら王生少年、夏喜君の手伝いを頼めるか？」

「それは構わんが、あんたはどこ行くんだ？」

観月が怪我をした足を木の棒で支えながら隣の部屋を覗いていた。

ちなみにこの木の棒は適当な家具を壊してその場しのぎの為に作った物だ。

「なに、この先の部屋はシャワー室のようだからな、ここらで包帯を変えようと思う」

確かに隣の部屋には寝室やシャワー室があった。

「一人で大丈夫ですか？なんだったら手伝いますが」

慶吾が観月を心配してそう提案した。

「なんだ？私の生足をじっくりと延髄するかのように堪能しながら包帯を巻きたいというのか？」

「…すんません」

「心配するな、この包帯だって私が巻いたものだ」

観月はそう言いながらシャワー室の方へと入っていった。

「覗きはきっちりと刑罰を受けて貰おうか」

そんな余計な言葉を付け足しながら。

「あはは…、それじゃあ私らも始めちゃおうか」

「そうだな、ここで手に入れた食材で作るとなると…」

夏喜が率先してリュックの中から食材を取り出していく。

俺も食材を出して今日のメニューを考えていた。

4人分の量、そしてこれからの3日間を考えないとな。

「お～い、コウ、夏喜さん、何か手伝う事無いか？」

慶吾が椅子から立ち上がる。

「う～ん…」

「無いな」

さすがに三人も入るほどキッチンも広くないし。

「慶吾君はそこでちょっと待ってて」

「…あ、はい」

慶吾を待たせ、俺と夏喜は食材と調理器具を持ってキッチンに向かった。

「光一君、料理もできるのね」

うろうろ。

「一応は一人暮らししてるから」

うろうろ。

「へぇ…その年で大変ね」

うろうろうろうろ。

夏喜が感心したように頷く。

「始めのうちはコンビニで買ってたんだけどさすがに飽きて、自分で作った方が安くつくし」

うろうろうろうろ。

「うんうん、料理のできる男の子ってポイント高いわよ」

うろうろうろうろ。

「だぁあッ!!うろつくな慶吾!大人しく待ってろ!!」

唯一特にやる事が無い慶吾が寂しそうに部屋をうろうろとしてた。

―――――

「ほう…なかなかどうして、美味そうでは無いか」

テーブルの上に並べた料理の数々。

とりあえず４人居ても足りるだろう。

「…どうした夏喜君、不満そうな顔だが」

「女としての自信がちょっと…」

「あ～…コウは料理が上手いからな」

そういや最初料理を始めた時は夏喜が率先していたが最終的に俺になってたっけ。

「そう落ち込むな、この焼きうどんなんか美味ではないか」

「それ…光一君が作ったやつ」

「気にすんな、その女の場合、たぶんわざとだ」

「はっはっはっは！慶吾少年、麦茶をいれてくれたまえ」

コップをずぃっと慶吾の前へ。

「了解です」

コポコポコポ

慶吾はペットボトルに入っていた麦茶を観月のコップにそそいだ。

「さて、飲み食いしながらで良いから今後の話しでもしようか」

「だな…、とりあえず寝る場所は確保したが」

ここにずっと居れるというのならそりゃ出て行く必要は無い。

ここに居れば《今の所》襲われる心配も無いのだから。

だがこのゲームをクリアする上ではどうしてもここを出て先に進む必要がある。

侵入禁止エリアが徐々に下の階から上へと上がって行く為。

そして何より首輪の解除条件を満たす為。

行動をしなければ生存は有り得ないだろう。

…俺が良い例となっているが。

「問題は私か…、すまないな」

今の俺達の中で一番の問題となっているのは当人もわかっている通り、観月だろう。

【7】のＰＤＡは１３人の参加者全員と会う必要がある。

つまりは新城達を中心とする好戦的なプレイヤーとの接触が必要だ。

だが観月は足を怪我している。

足を怪我した観月を上手く全プレイヤーに接触させる…、そんなやり方を考えなければいけない。

「…首輪を外しに動くなら、終盤の方が良いと思う」

終盤になれば生き残っているプレイヤーも限られてくる。

終盤まで生き残るかわからない他プレイヤーに今から接触するより観月の首輪を解除するのならその方が良いかもしれない。

終盤になれば慶吾の首輪も外れるだろうし。

観月と慶吾の首輪が外れれば…、夏喜の首輪を外すのに必要なのは後一つ。

俺のは使えないとして…、やはりもう一人仲間が居るか。

…いや、何言ってるんだ?もっと簡単な方法があるじゃないか。
誰でも良い、新城達が誰かを殺したなら…、その死体の首を――――。

「―ウ!コウ!!」」

「ん…?」

「ちゃんと話し聞いてたのか?観月さんが明日朝すぐに三階へ行くって」

「…ちょっと考え事、もう大丈夫だ」

…ったく、もちっと綺麗な考え方は出来ないのかね、俺の頭は。

「それで…どうだろう、時間帯を考え、早朝の段階で動こうかと思うが」

ここでの時間帯とはゲームの残り時間では無く、通常の時間の事だろう。

「新城達との鉢合わせを回避する為…か?」

奴らと俺達は今同じ階に居る。

あまり良い状況とは言えないのだ。

「その通りだ、今彼等に私が怪我をしている事を知られるのは得策では無いだろう?」

「そりゃそうだ、間違いなく狙われる」

新城の話しが出てきてふと気になった。

奴らを階段で見かけてから時間もかなりたつ。

…さすがに動き出しているだろう、奴らも。

第18話：一息（後書き）

～おまけ小説～

【戦闘禁止エリア】

「ここが戦闘禁止エリアってやつか」

「キッチンがありますね、何か作れるみたいですけど…」

「…その必要は無いかな」

「…え？電話が置いてありますね」

「こんなんもあった」

【キッチン、戦闘禁止エリア】

《メニュー表》

――――

――

サブマスター「…なんすか？アレ？」

雪那「だって缶詰めとかじゃ身体に悪いと思うから」

挿入話Ａ：動き出した殺人者

血。

床にそれは広がっていた。

血を流している本人はその床に横たわり、動かない。

―否、かすかにピクピクと身体を動かしている。

血が流れ出している所はその人物の足だった。

その足の《ケン》に当たる部分から血を流している。

「こうしておきゃあ人間は動けなくなる、便利だろ？」

「へぇ…、なるほどなぁ」

その人物を見下ろしながら新城と国枝がタバコを吸っていた。

その手には血に染まったナイフ。

「はぁ…ハァッ！き…君達は…いったい…何…を」

床に倒れている人物は微かな息をしながら必死に声を出す。

「悪く思うなよ、おっさん…、御子柴さんっつったっけ？」

新城は悪びれた様子もなく、床に倒れている…、御子柴に声をかけ

る。

「おい！デブ！！さっさと殺っちまえよ！！」

国枝がイライラしながら御子柴の前でボーっと立っている藤木に声をかけた。

「う…、うぅぅ…」

藤木の手にはクロスボウが握られていた。

その標準は御子柴の頭に向かっている。

だが装着された矢が発射される様子は無い。

ガタガタと藤木の身体は揺れていた。

人を殺すという踏ん切りがついていないのだ。

「ったく…イライラさせやがる！いい加減にしねぇと俺がソイツぶっ殺すぞ！！」

「ま、待って！待って…くれ」

イラつく国枝に藤木は必死に頭を下げた。

藤木のＰＤＡは【３】。

その解除条件は三人の人間を自らの手で殺害する事。

ここで国枝が御子柴を殺せば藤木の首輪の解除は遠退いてしまう。

新城達三人は一人で行動するこの中年の男を見つけた。

それまでの道中、部屋を回り武器は見つけていた。

新城達はまず男に話しかけた。

自己紹介からルール交換、基本的な社交。

そして御子柴が自分達を信用した所で…新城が御子柴を拘束し、国枝がナイフで切りつけた。

藤木は身体を震わせながらその様子を眺めていた。

「藤木よ、早く殺らねぇと俺達が殺さなくても御子柴さんは出血多量で死ぬぜ」

御子柴は足から血を流している。

このまま何もしなくても勝手に死ぬだろう。

「ひぃ…、ふぅ、ふぅ」

藤木は息を荒くしてクロスボウの引き金に指をかける。

だがそこから引き金を引く事は出来なかった。

「チッ…、ラチがあかねーな」

「仕方ない…、藤木、ちょっとどけ」

「えっ…」

新城が藤木をどかすと御子柴の首にナイフを当てた。

「ま、待ってくれ！頼む！！」

「決断が遅い奴はそれだけ後悔する奴だ」

新城のナイフは御子柴の首に小さな傷をつける。

「後十秒待ってやる、それまでに決めな」

「ククク…ヒャハハハハハ！そりゃあいいぜ！！」

新城の提案に国枝が愉快そうに笑った。

「い、いきなりそんな事――」

「はい、十、九、八――」

藤木の言葉も聞かず、新城がカウントダウンを始めた。

「ひっ！ひぃっ！！」

「七、六、五、四――」

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

ヒュッ

藤木がクロスボウの引き金を引き、矢が発射された。

バスンッ

矢は御子柴の頭に突き刺さり、御子柴はビクンッと身体を震わせるとすぐにピクリとも動けなくなった。

「おー、やりゃあできるじゃねぇか」

「良かったな、これで首輪の解除に一歩近付いたぜ」

新城と国枝が藤木の肩をポンポンと叩いた。

「俺が…殺したのか？」

藤木は呆然としながら御子柴の身体を見下ろす。

「あぁ、お前が殺した」

「俺が殺した…、俺が…」

藤木はゆっくりとクロスボウを再び御子柴に向けた。

「そうだ！俺が殺したんだ！コイツは！！」

シュッ

藤木はもう一度クロスボウから矢を発射させ、御子柴の頭に矢を突

き刺した。

「なんだ！簡単なんだな！人を殺すって！！」

そのまま藤木は大きな笑い声をあげた。

「あいつ…どうしちまったんだ？」

「一人殺してようやく踏ん切りがついたんだよ」

「ずいぶん遅い決断だったじゃねぇか」

「そりゃそうだ、人間ってのはみんな良い奴になりたいだけなんだから」

その中身は全員、悪。

新城はそう考えていた。

善良ぶっている夏喜だっていよいよとなれば人を殺していたはずだ。

「さて…後は御子柴さんからＰＤＡを頂くか」

新城は御子柴の死体からＰＤＡを取り出す。

【５】のＰＤＡ。

と言っても新城にはそのＰＤＡが何なのか、大方の予想はついていたが。

「どうやら･Ｊｏｋｅｒじゃないようだ」

「そのＰＤＡはどうすんだ？」

「一応持っておこうぜ、場合によっちゃあ交渉にも使える」

新城はそう言いながらＰＤＡをポケットにいれた。

「それじゃあ…次はお前の番だ、国枝」

「言われなくてもわかってんだよ！俺に命令するんじゃねぇ！！」

国枝は自分のＰＤＡを取り出すと御子柴の首輪に接続した。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

『あなたは首輪の解除に失敗しました、１５秒後に首輪が作動します』

「さて…今回はどうなるかね」

ウィィィィンッ

御子柴の首輪が赤く点滅し、天井が開いた。

そこから飛び出して来たのは、ホースのような物だ。

同時に鼻につく妙な臭いがする。

「こいつは…、おい！さっさと逃げるぞ！！」

いち早くその正体に気付いた新城がその場から離れる。

「なんだよ！急に！！」

国枝と藤木も新城につられる形でその場から離れた。

「まぁ見てろよ、たぶんえげつないもんが見れるぜ」

プシャ～

新城達が見ている中、ホースから妙な液体が御子柴の身体に向けて大量に発射された。

「うげぇ…なんだよ、この臭い」

同時に漂ってきた刺激臭に新城達が鼻をつまむ。

「硫酸…、もしくはそれに近い何かだろうよ」

「硫酸…」

「つまり、御子柴さんは今特性の硫酸のシャワーをぶっかけられているって事だ」

新城はゴクリと息をのんだ。

「いいか？しくじれば俺達もあぁなるって事だ」

そして国枝と藤木を見渡し、再び確認する。

「そ、そんなの嫌だ！俺は死にたくない！！」

藤木はそう声をあげる。

その目は血走り、狂気がうつっていた。

「殺してやる…、人を殺すなんて簡単なんだから」

そしてクロスボウを担ぐとぶつぶつと小さな声を出した。

「ククク…、これであいつも立派な戦力になったって訳だ」

新城はそんな藤木の様子を見て笑う。

「危ない事はあいつにやってもらおうぜ」

「へっ！てめぇはやっぱり悪い奴だな」

「悪人ってのは楽で良いぜ、何でもできる」

「違いねぇな」

新城達はその場から再び移動を始めた。

後には硫酸を浴びせられ続け、ぐちゃぐちゃとなった御子柴の死体だけが残った。

第１９話：モニタールーム（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：４：６．７
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：５．１
藤木　洋介：３：７．９
？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．６
神北　観月：７：６．８
中村　真：？：４．２
御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ
？？？：？：？？？？

第19話：モニタールーム

「ふむ…、時間通りに起きてこれたようだな」

「まぁな…」

「ちょうどコーヒーも沸いた所だ、飲むか？」

「あぁ…」

眠気覚ましに観月からコーヒーを貰う。

戦闘禁止エリアと言っても見張りくらいは必要という事で俺達は交代で見張りを取る事にした。

その際、観月が俺と一緒の見張りを申し出た。

『慶吾、光一両少年は友人同士の様だが我々はまだ知り合ったばかりだ、そこでお互い、一緒に居た者以外とペアを組もう』

観月の言い分はそんな言葉だった。

それで最初の見張りを慶吾と夏喜に任せ、後の見張りを俺と観月がやる事になった。

「光一少年、砂糖とミルクはどうする？」

「いや…何も入れなくていい」

「大人だな」

コーヒーをブラックで飲むかどうかに大人も何も無いと思うがなぁ…。

単に甘いのが嫌いなだけだし。

観月からコーヒーを受け取り、飲む。

「…それで、何が聞きたいんだ？」

「はて…何の事かな？」

俺の言葉に観月はとぼけたように曖昧に笑う。

「とぼけなくていい、俺とペアで見張りをやる事にしたのはその為だろ」

観月は俺に聞きたい事があるから俺とペアになる様にした。

俺はそう考えている。

「ふむ…、君に隠し事は出来ないな」

観月は少し悔しそうな顔をする。

「では聞こうか…」

だがそれも一緒でそのまま俺と向き合った。

観月が聞きたい事というのはたぶん、俺のＰＤＡの事だろう。
その解除条件について。
「君と夏喜君はもうチュ～まではやっちゃってる系か？」
「ぶはっ！？」
コーヒーを吹いた。
…しかも鼻から。
「う…、うぉぉぉぉお！！」
「はっはっは！ようやく光一少年から一本取れたな」
観月は俺の苦しむ様を見て愉快そうに笑う。
「いきなり何を言ってんだ？あんたは！？」
俺は鼻から出てきたコーヒーをティッシュで拭き取る。
「いや、君達が一緒に行動していたので気になってな」
「…成り行きだよ、あんたと慶吾だって似たようなもんだろ」
「まぁ…、それはそうだな」
俺と夏喜の間に何も無い事がわかったせいか観月はつまらなそうだった。

「だが…向こうの方はどう思っているかな？」

「…ん？何か言ったか？」

「気にするな、そうか…恋愛感情は無いか、まぁ安心はしたぞ」

「…どういう意味だ？」

「古来から集団行動においての色恋沙汰はろくな結果にならんと相場が決まっている」

…そういうもんだろうか？

「私の職場でも知り合いが次々と寿退社を決めやがりやがったからな」

「単にあんたのひがみじゃねぇか…」

俺は一度ため息をつくとコーヒーを飲み直した。

「…てっきり俺のＰＤＡについて聞くかと思ったが」

「大方の予想はつくからな…」

それもそうか。

観月の言葉に俺は心の中で笑ってしまった。

ここまで一緒に行動していてＰＤＡは見せたく無い。

殺人が必要なＰＤＡ…、観月はそう予想しているだろう。

「君は…これからどうするんだ？」

「別に…、大層な事をやろうなんて思ってないさ」

もしこの建物で慶吾に会えなかったならば…結論は違ったかもしれない。

「とりあえず慶吾の首輪を外す、あんたらの首輪もついでにな」

俺はそう言ってニヤリと笑ってやった。

「…少年、君はそれで良いのか？」

「良くはないな…、まぁ俺の首輪は後回しだ」

「…立派だな、君は」

感心したように頷く観月。

「…そうでも無いさ、ｊｏｋｅｒか他のプレイヤーのＰＤＡがあったなら俺は確実にそいつを使ってみんなを騙してただろうし」

今回はたまたま…何も無かっただけだ。

「深く考えない方が良い…、君は今、私達を騙していない、それで良いじゃないか」

「…あぁ、ありがとう」

俺と観月はまたコーヒーを飲んだ。

「しかし…見張りというのは退屈でいかんな」

観月は大きな欠伸をすると伸びをした。

「あんたは刑事なんだし、慣れてるだろ」

「そうだ、慶吾少年と夏喜君の様子でも見ようか」

悪戯っぽく笑うとそう言って観月は立ち上がろうとする。

慶吾と夏喜は隣の寝室で寝ているはずだ。

「おいおい…、せっかく見張りが終わったんだし、大人しく寝かせてやれよ」

「もしかしたら我々が見張りをしている隣で何やら良からぬ事をしているかもしれんぞ」

「……」

―少しくらい良いか。

最初に言っておくが別に気になった訳じゃなくて、それで観月の気が済めばって話しだ!!

観月と一緒にそっと寝室を覗く。

2人はぐっすりと眠っていた。

「なんだ…つまらんな」

「ほら…、これで気が済んだだろ、見張りを続けるぞ」

寝室の扉を閉め、見張りに戻ろうとした。

「…光一少年、私は今猛烈におんぶを望んでいる」

だが観月は駄々をこねるようにそう言うと動こうとしない。

「却下する、あんたにはお手製の杖があるだろ」

「あ～、足が割れるように痛い～、一歩も動けない～」

素晴らしい棒読みで観月はそんな事を言う。

「ったく…、何で俺がこんな目に」

結局俺が観月を背負う事になった…。

「まぁ良いでは無いか、こうして女性をおんぶする機会なんてめったに無いぞ、ほれ」

そう言って得意気に笑う観月。

しかしこの女…、胸がデカいな。

「俺は昼間に糞重い荷物を背負ってたんだがな…」

「つまり私はその糞重い荷物と同じという事か？ん？」

観月がグィッと俺を締め付けて来た。

口調は笑っているが顔は絶対笑っていない。

「…勘弁してくれ」

なんで見張りでこんな疲れなきゃなんないんだ…。

そんなこんなで俺達の1日目は終わった。

俺達がこうしてふざけ合っているのはまだ危機感が無かったのだろう。

2日目が始まり、すぐに俺達は思い知る事になる。

このゲームの本質、その性格の悪さに。

俺達が仲間としてずっと行動をする事を…奴らが望んでいるはずが無いのだ。

――――

？「…どうですか？今回の参加者達は」

部屋の一室。

そこには多数のモニターがあり、そのそれぞれに別々の映像が映し出されている。

新城達三人や王生達四人、そしてクロスボウを持つ雨宮の姿もあった。

この部屋はモニタールームのようで、そこに椅子に一人の老人が座っていた。

老人は数時間前に一度、慶吾と会話をした中村という男だ。

「なかなか面白そうなのが集まっとるよ」

中村はモニタールームにある通信機能で建物外の場所の人物と会話をしている。

「それで、初めに渡した資料を見てもわかると思いますが今回、我々が用意したイベントは２つなんですが…」

「言われんでもわかっとるよ、そこまでボケとらん」

中村はそう言うと老眼鏡をかけて資料を見た。

「…一つは失敗じゃな、対象の人物が一人、死んでしまっとる」

「えぇ…、この三人が一緒に行動となれば面白い事になったと思いますが」

資料には王生、慶吾、そして最初に死んだ少女の写真が貼ってあった。

「そうなると…、メインはこっちか」

中村は彼等の用意したもう一つのシナリオの書かれた資料に目を通す。

「えぇ、一つのイベントが駄目になった以上、そちらは成功させたいです」

「そうで無いとこのメンバーを集めた意味が無い、という事か」

「お察しが早くて助かります」

「ふん、何年この仕事をしとると思っとるんじゃ」

中村は通信の相手に向けてそう悪態ついた。

「しかし…そうなると彼等は邪魔じゃの」

中村はモニターの一つに映し出されている王生達四人を鋭い目で見た。

「人数が多い分、確かに他のプレイヤーに対して有利ですが…、それなら【8】、【10】【3】の三人組の方が…」

「かっかっかっかっか！だからお前はひょっこなんじゃ！！」

中村は通信相手の言葉に大きく笑った。

「【8】番達三人にはもっと働いて貰わんとな」

「これは性格が悪い」

通信相手と中村は共に笑った。

「それで…、どうするんですか？」

「何…心配せんでも手はうってあるよ、もうサブちゃんに連絡してあるから」

中村は王生達の映し出されているモニターを見る。

「はてさて、明日もそうやって笑っておれるかの？」

第19話：モニタールーム（後書き）

「俺はカツ丼頼んでみようかな」

「あ、じゃあ私はお蕎麦を」

――――

――

サブマスター「というかこんな場所まで届けてくれる奇特な店があったんスね」

雪那「何言ってるの？ある訳無いよ」

サブマスター「えっ？それじゃあどうやって？」

プルルルルッ

雪那「あっ！はい、もしもし、こちら『キッチン、戦闘禁止エリア』です」

サブマスター「えっ？ちょ…雪那さん？」

雪那「あっ！はい、了解しました、すぐにお届けします」

ガチャンッ

雪那「カツ丼と掛け蕎麦を一つずつだって」

サブマスター「え～っと…、何がッスか？エプロンつけてますけど」

雪那「注文が来たんだから、作らないとね」

サブマスター「マジですか！？」

第２０話：作（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６
雨宮　鈴音：？：２．７
　柳　辰巳：？：７．２
春野　夏喜：４：６．７
新城　渉：２：３．０
国枝　克美：１０：５．１
藤木　洋介：３：７．９
？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．６
神北　観月：７：６．８
中村　真：？：４．２
御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ
？？？：？：？：？？？？

第２０話：作

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

『あなたが入ろうとしている部屋は戦闘禁止エリアに指定されています、部屋の中ではあらゆる戦闘行為が禁止されています、違反者は例外無く処分されます』

「っと…、ここだここだ」

ＰＤＡに表示された戦闘禁止エリアの説明に新城が立ち止まった。

といっても彼等はここが戦闘禁止エリアに指定されている事に気付いていた。

「この地図の通りだな」

彼等は事前にＰＤＡの拡張機能、ソフトウェアによって地図の機能を拡張させていた。

各部屋に対する詳しい説明書きが地図に追加されたのだ。

「誰か別の奴が居たらどうすんだ？」

「そん時ゃ殺っちまうさ、当たり前だろ」

「でも…ここは戦闘禁止エリアだし」

戦闘禁止エリア内で攻撃を仕掛けてしまえば首輪が作動してしまう。

「だったら戦闘禁止から出た所を狙うまでさ」
新城は余裕の表情を見せると戦闘禁止エリアのドアを開けた。
「…誰も居ねぇみたいだな」
部屋の中に人の気配は無い。
「まっ…それならそれで一休みといこうぜ」
新城がそう言いながらキッチンを覗いた。
まず目についたのは流し台についた水滴だった。
「…ククク、どうやら一休みは中止だな」
それを見つけた新城はすぐに含み笑いを始める。
「…どうした？」
「キッチンを使った跡がある、それもそう時間がたっていない」
新城はそう言うと戦闘禁止エリアのメインとなる部屋に戻った。
ちょっと見れば誰もその部屋を利用してないように思えたが、疑いの目を向けると違和感が感じられる。
「しかもこりゃ…一人じゃ無ぇな、上手く隠してはあるが何人か居たみたいだ」

「…追いかけるのか？」

「当然だろ、ここの戦闘禁止エリアに居たって事は目的は一つだ」

新城はＰＤＡの地図を開くと国枝と藤木に見せた。

「ここは三階への階段に近い、奴らもそこへ向かったはずだ」

「俺に殺させろ！誰だろうと皆殺しにしてやる！！」

「あぁ、わかってるよ」

クロスボウを構えて叫ぶ藤木を新城はなだめる様にそういった。

「それじゃすぐに行こうぜ、ぐずぐずしてると見失っちまう」

新城達はすぐに戦闘禁止エリアから出ると三階へと向かった。

「ククク…、用心深い奴が居たようだが、俺にはお見通しだぜ」

―――

――

ガチャンッ

新城達が戦闘禁止エリアを立ち去って間もなく。
戦闘禁止エリア内のキッチンの流し台や寝室のタンスに隠れていた王生達が姿を現した。
「ふぅ～…生きた心地がしなかった」
慶吾が安堵の息を吐きながら地面に座る。
「いやいや、大胆な事を思いつくな、君も」
観月も感心したようにそう話した。
「新城達に追われる展開は勘弁だったからな」
「でも…もしアイツらがこの戦闘禁止エリアで一休みしてたらって思ったら」
夏喜が緊張した声で呟く。
「新城は頭が良い、必ずこの戦闘禁止エリアを誰かがつい先ほどまで使用していた事に気付くはずだ、そして気付いたならば必ず後を追うはず」
曲がりなりにも新城の事を評価し、信じた結果の作だ。
これで新城達は居もしない、自分達の作り出した俺達を追うはずだ。
「あの…、光一君、ちょっと気になったんだけど」

夏喜が不安な表情をさせる。

「あぁ…俺も、たぶん気付いた事は同じだろう、藤木の奴だろ？」

「えぇ、何だか…前に会った時と感じが違うというか」

「…藤木って、あの太った男か？」

慶吾が首を傾げながら聞いて来る。

「前に会った時は…、こう、おどおどしてて、怯えている感じだったんだけど」

「今さっき見た藤木の様子はまるで別人だったな」

ギラギラと血走った目。

迷いの無いクロスボウの構え方。

「…もしかしたら、アイツら、もう」

俺の考えが正しいのなら…だが。

「…光一君？」

「…一線、越えてしまったのかもな」

首を捻る夏喜に観月がそう付け足した。

「…どういう意味ですか？」

慶吾も戸惑ったように観月に聞く。

「…大量殺人犯の全てが最初から殺人を快楽としていた訳では無い」

「…最初の一人目、つまりはそういう事だろ？」

人を殺したという事実。

それを一度でも認識してしまえば…人は変わる。

奴らはもうすでに…最低一人は人を殺している。

「さて…新城達の後を追うか、こっそりとな」

俺達も新城達を追う形で戦闘禁止エリアから出た。

―――

―

「団子三兄弟は今、架空の別のプレイヤーを追っていると考えている、だから三階の階段で待ち伏せって事はやらないだろう」

「それじゃあ三階へついたらタイミングを見計らって奴らより先に進まないと駄目ですね」

観月と慶吾が先に進みながらこれからについて話している。

ちなみに団子三兄弟とは新城達の事だろう。

その後ろには夏喜。

そして最後尾には例によって食材や調理器具を収納した糞重たいリュックを背負った俺が居た。

俺達は新城達の後を慎重についていく。

新城達の後を追っている…、そう考えていたのが失敗であった。

―

―

―

「…見つけた」

四人で行動する王生、それぞれのメンバーを確認し、雨宮がそう呟いた。

その手にはすでに矢の装着されたクロスボウが握られている。

彼女はその武器の扱い方についてはすでに熟知していた。

多少距離があろうと、対象が動いていようと、彼女にはさほど関係が無かった。

「…任務を遂行させる」

スッ…

雨宮は通路に出るとクロスボウをゆっくり構えた。

その狙いは――――。

――――

――

「！？」

最後尾に居たおかげだろう。

いち早く後ろの雨宮を見つけたのが俺だった。

夏喜、そして先頭を進む慶吾と観月はまだ気付いていない。

単に雨宮の存在を発見しただけならばそれほど動揺は無かっただろう。

だが彼女は今、俺達にクロスボウを向けている。

その距離はまだ遠い。

昨日今日始めるクロスボウを握った者であるなら当てるのは難しい距離だ。

だが…俺は雨宮は違うと瞬時に判断した。

時間は少ないが…一緒に行動していた俺にはわかる。

雨宮は必ず当ててくる。

―どうする？

思考を巡らせようとした瞬間、雨宮のクロスボウの矢が発射された。

―考える時間もくれねぇって訳か。

考えるより早く、俺の身体は動いていた。

こちらに向けて発射されたクロスボウの矢へ向けて。

ドスッ

鈍い、嫌な音。

―思ったより…痛みは無いもんだな。

自分の身体の、特に強く衝撃を受けた場所を確認する。

矢は俺の脇腹に突き刺さっていた。

第２０話：作（後書き）

～おまけ小説～

【暇潰し編】

「ところでさ、そのずらーっと並んでるのは何？」

「えっと…、ＤＶＤですね、アニメとか洋画とかドラマとかの」

「…ツダヤ並の品揃えの良さだな」

「あっ！こっちにはゲームソフトもありますよ、パーティーゲームとかあります」

「マジで？梅鉄もある？」

「えっと…これですか？」

「あっ、じゃあそれやろうぜ、暇だし」

「そうですね」

――――

――

――

サブマスター「なんかやけに戦闘禁止エリア内が充実してますが…」

雪那「だって、何も無かったら暇かなって…」

第２１話：三つ巴（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：３．６

雨宮　鈴音：？：２．７

柳　辰巳：？：７．２

春野　夏喜：４：６．７

新城　渉：２：３．０

国枝　克美：１０：５．１

藤木　洋介：３：７．９

？？？：？：Ｄｅａｔｈ

藤原　慶吾：Ｊ：４．６

神北　観月：７：６．８

中村　真：？：４．２

御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ

？？？：？：？：？？？？

第２１話：三つ巴

「ッ！！」

糞重たいリュックを背負っていたせいもあって俺は床に膝をついた。

幸い、矢自体はそれほど深くに突き刺さった訳では無い。

元々雨宮が狙っていた標準から無理やり矢を受けた事が効果的だったのだろう。

―狙いは…観月だったか。

俺が前に出て矢を受けなければ矢は観月に命中しただろう。

雨宮の狙いは正確だった。

ギリッ…

声を上げたくなる衝動を必死に押さえつける。

まだ俺達の前には新城達が居る。

ここで悲鳴を上げようものなら奴らをおびき寄せるものだ。

まだ声を上げていない分、今の雨宮の襲来を知るのはクロスボウの矢を受けた俺だけだ。

先を歩く慶吾達でさえ、今の状況を知らない。

このまま新城達に気付かれないまま、雨宮をやり過ごせれば…。

―いや、待て。

このまま雨宮から逃げ切れるのか？

雨宮には新城達三人組とは別の怖さを感じる。

積極的に人を殺そうとする新城達三人組とはまた別の、得体の知れない怖さ。

―戦うにしても分が悪い…か。

その瞬間、俺の中で一つの選択肢が生まれた。

それはらしくない賭けでもある。

「慶吾！！」

俺は声を上げた。

「コウ…？」

「えっ！？ちょっと…、何？その矢！！」

突然大声を上げた俺に気付き、慶吾と夏喜が驚きに目を見開いた。

「逃げるぞ！クロスボウで狙われてる！！」

「…彼女か！！」

観月が遠目から雨宮の姿を確認した。

「慶吾！お前は観月さんの移動を手伝ってやれ！！」

「でも…コウ、お前だって…」

「早く！ぐずぐずしてるとニ発目が来るぞ！！」

本来、クロスボウという武器は連射が効かないはずだ。

一発撃ってしまえば次の矢を装着する時間が必要になる。

だがクロスボウという武器の扱いに慣れた者ならば…ニ発目を装着するのにそう時間はかかるまい。

「…ん？」

だが雨宮はただ呆然と立ち尽くしていた。

クロスボウも持っては居るが、今は下に下ろしている。

その表情はどこか焦ったような、困惑したような。

そして憎しみがこもっているようにも見えた。

だが…これはチャンスともいえる。

「こっちだ！そこの通路に入るぞ」

慶吾に肩を預けながら、観月はＰＤＡを見ると通路の途中に見えた脇道を指差した。

「雨宮さん！どうしてあなたがこんな事を！！」

共に一緒に居た夏喜が雨宮に声をかける。

「夏喜さん、説得が通用する状況じゃない、早く逃げるぞ」

「…でも！！」

夏喜が雨宮に声をかけようとした瞬間だった。

ガシャンッ

雨宮はクロスボウを捨てるとこちらに向けて走り出した。

―なぜクロスボウを捨てた？

動きながら狙うのなら確かに精度は落ちるだろうが…遠距離の武器としてクロスボウは必要なはずだ。

そもそも雨宮がすぐにニ発目を発射しなかったのがおかしいが…。

「…来たぞ！！」

だが今はそんな事を考えるべきで無い。

「光一君！手を…」

夏喜が俺の手を掴んでくれた。

「…あぁ」

夏喜に引っ張られる形で俺も行動を始める。

―マズいな…。

脇腹に突き刺さった矢は致命傷とは言わなくても俺の体力を奪うには充分すぎる。

おまけに血が流れる以上、どこまで逃げても後を追われるだろう。

俺達の少し前には足を怪我している観月とそれを支える慶吾。

そして脇腹をやられた俺を引っ張る夏喜。

雨宮に追いつかれるのは時間の問題…か。

「!?、光一君!!」

案の定、雨宮がすぐに俺達に追いついて来た。

あの右手に持ってんのは…ナイフか。

遠距離だけでなく、接近戦もお手の物ってアピールしたいのかよ。

…だったら後悔させてやらぁ!!

「夏喜さん…悪い」

「…え？」

ドンッ

俺は手を掴む夏喜を強引に突き放した。

「うぉぉぉぉおらぁあああ！！」

そして雨宮に向け、全力でソレを振るう。

ピキッ…

「うぐっ！？」

同時に酷い激痛にも襲われた。

当然か…、こんな身体でこんな糞重たいリュックを振り回しゃな。

「！？」

流石の雨宮もこれには面食らったのか、　目を見開いた。

バァンッ

―入ったか…？いや、そんな感覚じゃないな。

リュックは雨宮の顔の直前で止まっていた。

雨宮がその手のナイフをリュックに突き刺し、防御をしたのだ。

「…ゼェッ、ゼェッ」

クラクラと…見える景色が怪しくなっていく。

「それ以上動くな、傷が広がるぞ」

「…あん？」

雨宮が小声で呟いた言葉に俺は耳を疑う。

―俺を心配してる…のか？

雨宮がリュックからナイフを引き抜き、再び行動を始めようとする。

ヒュッ

その瞬間、クロスボウの矢が飛んで来た。

発射したのは雨宮ではない。

矢はまったく別の方向から。

先ほどまで俺達が通って来た通路から飛んで来た。

ガァンッ

狙いはむちゃくちゃで矢は俺達に当たる事なく、通路に当たり、床へと落ちた。

―――

「…なんだ?今の声」

新城達が王生の大声を聞いたのは今より少し前だった。

―――

「…後ろに誰か居やがるな、近いぞ」

「行くんだろ?」

「当然だろ、声を聞くとなんだか切羽詰まった状況のようだしな」

新城はそう言いながら笑う。

三人はこれまで来た道を一旦引き返す事にした。

その事自体は王生の狙い通りとも言えた。

新城達が見つけたのが現在の王生達の状況だった。

「ククク…なんだよ、ずいぶんと面白い事になってんなぁ」

王生のリュックをナイフで防御した雨宮。

新城達はその状況を通路に隠れて見ていた。

「!?、王生の野郎が居やがる…」

自身の傷への恨みか、国枝が王生へ向け、飛び出そうとした。

「まぁ待てよ、今飛び出すより決着がついた所をまとめてやっちまおうぜ」

「だが…王生の野郎は!!」

新城と国枝が口論を始めようとしたその瞬間だった。

ヒュッ

藤木が2人に何も言わずにクロスボウの矢を王生と雨宮に向け、発射していた。

「!?、てめぇ…勝手に」

「お…、俺は直接殺さなきゃ、駄目なんだ!!」

藤木の身体はガタガタと震えていたがその表情は笑っていた。

「チッ…馬鹿が」

―――

「…来たか」

新城の性格を考えれば、俺達の決着がつくまで動かないという最悪の自体もあったが。

どうやら上手く先走る奴が出てくれたらしい。

「奴らは…」

雨宮も三人の姿を確認した。

「王生、お前…わざと」

「へへ…、餌にかかってくれたようだ、と言っても餌はあんたと俺だがな」

俺は慶吾達の方を向いた。

「今だ…！さっさと逃げろ！！」

「クソッ…逃がさない！！」

「王生ぃいいいいいい！ぶっ殺してやるぜぇ！！」

藤木と国枝が通路からこちらに向けて飛び出して来た。

「コウ！！」

慶吾が俺の方を振り向き、叫ぶ。

―そうか、お前が言う事聞く訳は無いわな。

「…観月さん、ちょっと待ってて下さい」

「…あぁ、君の好きにすればいい」

「ありがとうございます！！」

慶吾は観月に礼を言うと俺の方へ向けて駆け出した。

その瞬間。

ガラガラ…、ガシャンッ。

天井から勢い良く鉄格子が落下し、慶吾の行動を静止させた。

第２１話：三つ巴（後書き）

～おまけ小説～

【大人向け】

サブマスター「しっかしこんないろんなＤＶＤ、よく集めましたね」

雪那「簡単だよ、家から持って来ただけだし」

サブマスター「そうなんスか？」

雪那「うん、アニメとかドラマとか映画とかいろいろ見るから」

サブマスター「へ～…、他には何があるんスか？」

雪那「う～ん…、あっ！ちょっと大人向けのやつもあるよ」

サブマスター「…え？えぇっ！？家から持って来たんですよね」

雪那「そうだよ、あっ！なんなら今から一緒に見ない？」

サブマスター「…マジッスか！！」

雪那「マジですよ、その…私一人だと見てて頭がぼーっとなって、おかしくなっちゃうから…」

サブマスター（これは…もしや）

雪那「誰かと一緒に見たら…平気かなって」

サブマスター（ついに来たかぁぁぁぁぁぁぁ！！）

つづく。

サブマスター「…え？つづくの？」

第２２話：分断（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：５．４
雨宮　鈴音：？：２．５
　柳　辰巳：？：６．８
春野　夏喜：４：６．９
新城　渉：２：２．８
国枝　克美：１０：４．７
藤木　洋介：３：６．１
？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．８
神北　観月：７：７．０
中村　真：？：３．８
御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ
？？？：？：？？？？

第２２話：分断

「チッ…」

先走り、王生達に向かっていった国枝と藤木を見て新城が舌打ちをした。

「賢い奴より馬鹿の方が扱いやすいとは思ったが…、頭が悪すぎるってのは問題だな」

新城はまだ動かない。

動くとすれば明確に自体が動く、その瞬間だった。

ガッチャンッ

「!?、なんだ…」

そして…今、この瞬間がまさにその時だった。

――――

――

「なっ…なんだっ！！」

「コウ！！」

その瞬間、その場に居る誰もの動きが止まった。

天井から落下した鉄格子。

それも数は一つでは無い。

慶吾と観月を囲むように一つ。

そしてちょうど俺達の真ん中（俺が突き飛ばした為だが）にいた夏喜を囲むように一つ。

つまり…鉄格子によってメンバーが分断された。

―慶吾と観月―夏喜―そして…俺か―

いや…俺のすぐ横にはこいつが居たか。

「…くっ」

雨宮は恨めしそうに鉄格子を睨むと通路を戻ろうとした。

その行動は俺など眼中に無いといった感じだ。

この鉄格子を壊すつもりなのか？

バスンッ

そんな雨宮に向けて藤木がクロスボウを放った。

「う、動くな！こっち来るなぁ！！」

その狙いはむちゃくちゃだ、おまけに俺達は望まないとはいえ鉄格子で守られている。

だがそれでも偶然という事がある。

「……」

藤木の行動に雨宮の動きが止まった。

その瞬間だった。

ガタンッ

「おわっ！！」

「見ろ少年！天井が開いていく！！」

観月と慶吾の二人が閉じ込められた場所の天井が開き、床が上昇していく。

「慶吾君！観月さん！！」

それを見た夏喜が目を丸くさせた。

「！？」

そうか…ただ閉じ込めるなんて真似流石にやらないか。

ご丁寧に階ごとに分断させるつもりかよ。

「慶吾！お前達は強制的に三階へ行かされる！！」

慶吾と観月を乗せたまま上がる床に向け、俺は力を振り絞り、叫んだ。

「コウ！待ってろ…すぐに助けに行く！！」

慶吾も顔を出し、声を上げる。

あの馬鹿…。

「落ち着け！慶吾少年！顔を挟めるぞ！！」

観月が気付いてくれたのか、慶吾を引っ張ってくれたようだ。

ガチャンッ

床だった所は完全に天井へと上がりきった。

ガラガラガラッ

と同時に夏喜を閉じ込めていた鉄格子が開く。

だが俺達を囲む鉄格子は開かない。

夏喜ー俺と雨宮ー

と状況的に夏喜は向こう側への移動のみを許されてという事だ。

「光一君…」

「いいからあんたも行ってくれ！慶吾達と合流するんだ」

「…雨宮さん！！」

夏喜が雨宮に向けて声を上げた。

「…！」

それに気付いた雨宮は目線だけを夏喜へ向ける。

クロスボウを向けられた時から雨宮は鉄格子の中から藤木と国枝を威圧するように睨み付けていた。

鉄格子がある分、お互いに攻め倦ねいている。

「糞がっ！邪魔なんだよ！！」

国枝は鉄格子に向けてナイフをガンガンとぶつけていた。

ナイフでの鉄格子越しの攻撃と言えば相手に向けて投げるくらいだ。

つまりこの場で一番効率的な武器は藤木の持つクロスボウとなっている。

「そうだ藤木！てめぇのそれを貸しやがれ！！」

「い、嫌だ！これは俺のだ！！」

国枝もその事に気付いたのか、藤木からクロスボウを奪おうとし、藤木はそれに抵抗した。

奴らの間に生まれた僅かな隙だ。

「…なんだ？」

その時、雨宮が夏喜に言葉を返した。

「…光一君をお願い」

「…ぁ？」

何言ってんだと俺は耳を疑った。

まず俺達を襲ったのが雨宮自身なのだから。

「私はお前達を襲った本人だぞ」

もちろん、襲った当の本人である雨宮も少し戸惑った表情を見せていた。

「その…上手く説明出来ないんだけど、雨宮さんなら頼めると思う

から」

―なんだそりゃ。

言葉を返そうとして…気付く。

自分の意識が遠退いていく事に。

「お願いします！雨宮さん！！」

夏喜は大きく頭を下げると進めるようになった通路を走っていく。

その後ろ姿を確認し、俺は一息ついた。

たぶん…助かんねぇな。

慶吾と観月は三階へ。

夏喜は二階を。

俺達のメンバーを階ごとに分断させるつもりなら…俺がどうなるか、想像できる。

「ったく…、ぐだぐだやってんじゃねぇよ」

その時、新城がクロスボウの取り合いをする藤木と国枝からクロスボウを奪い取っていた。

「面倒な事になる前に殺っちまうのが一番だ」

ヒュッ

新城はそう言って俺にクロスボウの矢を放つ。

避けようにも身体はもう動かない。

これは…直撃だろうな。

そう思っていた時だ。

グィッ

俺の身体は雨宮に引っ張られ、矢は俺の横を通り抜けた。

「…ちょっと意外だったな、あんたが助けるとは」

「……」

当てが外れたようにそう言う新城を雨宮は無言で見つめた。

「だが…どこまで守れるかな？」

新城は次の矢をクロスボウに装着させる。

「あま…みや…」

「…あまり喋るな、本当に死ぬぞ」

そうは言っても、伝えなければいけない事がある。

俺の予想が正しいなら。

「床が…抜けるぞ、俺達は…一階に、落と…され」

「何っ！？」

ガタンッ

その瞬間…俺達の居た場所の床が抜けた。

俺達は真っ逆様に下へ落ちていく。

「逃がすかぁ！ぶっ殺す！！」

最後に国枝が俺達に向けナイフを投げて来たのが見えた。

――――

――

カァンッ

国枝の投げたナイフは壁に当たり、王生を追いかけるように下へ落

下した。

王生は完全に意識を失っていた。

ヒュンヒュンッ

ナイフは落下しながらもその刃は王生に向かう。

まるで国枝の執念が乗り移ったかのように。

パシッ

そのナイフの柄を雨宮が掴み取った。

「…遠退いたか」

再び閉じていく天井を睨むように見つめながら雨宮が呟く。

「まったく…、お前のせいだぞ」

そしてその視線は意識を失った王生に向けられた。

口ではそう言いつつ、その表情は少し微笑んでいるようにも見えた。

「頼む…か」

―――

――

「…？」

どれだけの時間がたったのだろう。

目覚めた俺は辺りを見渡した。

意識は覚醒していなかったがこの場所が戦闘禁止エリアだと把握するのに時間はかからなかった。

戦闘禁止エリアの寝室にあるベットで寝かされていたようだ。

脇腹を見ると刺さっていたクロスボウの矢が抜けており、かわりに包帯が巻かれていた。

応急処置とすれば完璧だろう。

だが…誰がやったんだ？

ガチャンッ

「…ん？」

その時、隣のシャワー室から物音が聞こえた。

―誰だ?誰が居る?

よほど血が足りなかったのだろうか、身体は目覚めているが頭は目覚めていない。

考えようとしてももやもやとしていてまとまらない。

「…見てみるか」

ここは戦闘禁止エリアだ、いきなり襲われる事は無いだろう。

俺はゆっくりと身体を起こし、シャワー室への扉を開けた。

ガチャンッ

「…ん?」

「ッ!!」

恐らくと言うか、絶対そうだろうが。

…シャワーの個室から出たばかりであろう素っ裸の雨宮と目があった。

第２２話：分断（後書き）

～おまけ小説～

【一安心】

トタタタタタタタッ

離れ離れとなってしまった他の仲間と合流する為、夏喜は走っていた。

夏喜「慶吾君の事は観月さんに任せちゃったけど…、彼女なら大丈夫…よね」

自分が今まで来た道を振り返りながらそう呟く。

夏喜「慶吾と観月さんは上の階に行っちゃったから新城達もなかなか手は出せないと思うし、一安心…かな？」

トタタタタタ…ピタッ。

ふと夏喜が動きを止める。

夏喜「あ…あれ？」

…今一番危ないのって、あたし？

《ＹＥＳ》

第２３話：ハプニング（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：５．４
雨宮　鈴音：？：２．５
　柳　辰巳：？：６．８
春野　夏喜：４：６．９
新城　渉：２：２．８
国枝　克美：１０：４．７
藤木　洋介：３：６．１
？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．８
神北　観月：７：７．０
中村　真：？：３．８
御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ
？？？？：？：？？？？

第２３話：ハプニング

ザァー…

少し前、シャワー室。

シャワーのお湯を全身に浴びながら雨宮は目をつむり、立ち尽くしていた。

「……」

雨宮の心の中でざわざわと沸き立つ思い。

自分の使命。

雨宮がこのゲームで最優先すべき事はそれだった。

そして今自分のしている事はその目的から外れている。

「…何をやっているかな、私は」

自らを笑うかのようにそう呟いた。

そこには後悔の思いがあった。

『コウ！待ってろ…必ず助けに行くからな！！』

『…光一君をお願い』

ふと思いをよぎるのは夏喜と慶吾の言葉。

王生にクロスボウの矢を当て、今の状況に追いやったのは自分自身だ。

「私の…責任か」

もちろん、本来なら王生を助ける責任なんて無いのだ。

王生は雨宮の狙いを邪魔し、結果的に傷ついたのだから。

雨宮が本来の目的を果たすならばなおのことである。

だが…結局雨宮は王生を助けた。

彼を戦闘禁止エリアまで運び、傷の手当てをし、今回復を待っている。

「……」

キュッ…

お湯を止め、タオルを取ると彼女はシャワー室を出た。

「彼は…まだ寝ているだろうか」

シャワーを終え、濡れた身体をふく。

ガチャンッ

そんな時、扉が開いた。

――

――

眠っていた頭が一気に覚醒していく。

あぁ…そっか、こいつが助けてくれたのか。

目の前に立つ者はこのゲームが始まってから少し一緒に行動していた女性。

俺達を襲って来た雨宮。

そして素っ裸。

「……」

俺は突然の事に（という事にしておく）ボーっと彼女の身体を見ていた。

襲って来た姿からは想像しずらいが案外細い身体だ。

彼女の身長を合わさってモデルのような身体に思えた。

綺麗な肌をしてるんだな…。

ただ…まぁ、胸が。

何ていうか…観月の胸を知っているせいもあるが。

小さ――――。

ゾクッ

「!?」

その瞬間、俺は凄まじい危機感を感じた。

ふと雨宮の顔を見ると。

「なっ、なっ、な…」

雨宮はすぐに身体にバスタオルを巻いたが顔は真っ赤にしていた。

普段の無表情なキラーマシンとも思えた表情とは大違いだ。

―って、んな事考えてる場合じゃねぇ!!

「～～～～ッ!!」

雨宮がこちらに向けて床を蹴った。

「ち、ちょっと待てって！ほら、ここがどこかわかってるだろ！！」

言うまでもなくここは戦闘禁止エリアである。

「ッ！！」

俺の言葉に雨宮も動きを止めた。

それはそうだろう。

こんなアホみたいな事故で死ねる訳が無い。

―それよか雨宮が近付いた分、距離が近い。

俺のほぼ目の前にはバスタオル一枚の雨宮が居た。

「い…、いつまで見ているつもりだ！！」

雨宮はそう叫ぶように言うと猛スピードでシャワー室へと入って行った。

―なんつーか…、うん。

良いものを見た。

あ、いや…、雨宮の裸の事じゃ無くて。

出会った時からずっと能面が張り付いたかのような雨宮の意外な一

面が見れた事にだ。

うん、…そういう事にしとこう。

いや…、良かった。

ザァー…

その時、再びシャワー室からシャワーの音が聞こえて来た。

…もう一回シャワーを浴びるつもりか？

まぁ…、ここは謝っといた方がいいか。

「その…、悪かったな、ノックくらいするべきだった」

ザァー…

「……」

シャワー室からの返事は無い。

「…雨宮？」

「傷は…もう平気か？」

ふと、シャワーの音に混じり雨宮の声も聞こえてくる。

「あぁ…、あんたが助けてくれたんだろ？感謝してる」

「気にするな…、もともと私がつけた傷だ」

「……」

俺はこの傷について、雨宮が責任を感じる必要は無いと考えていた。

明らかに雨宮の狙いは俺とは違っていたからだ。

俺が今怪我をしているのは自分から雨宮の放つクロスボウの矢に当たったという話しだ。

―雨宮の狙いを知る必要があるな。

「それに…私も、まぁ、お前に…助けられたからな」

急に雨宮の言葉の歯切れが悪くなる。

あぁ…、さっきのアレか。

「悪かった、起きたばかりで寝ぼけてた…ってのは言い訳にならないか」

「…テーブルの上に食事を置いてある」

「…誰のだ?」

「お前が起きた時のだ」

…どうやら俺の為に飯を用意してくれたらしい。

しかし…雨宮の言葉はいつも簡潔だな。

自分の用件意外の事は言わないつもりだろうか。

まるで主語だけで話すような。

それじゃあ逆に相手にとってもわかりにくいと思うが…。

「そうだ、一つ聞いていいか？」

雨宮に聞きたい事は多いがまず一番はこれだ。

「…なんだ？」

「シャワー、もっかい浴びるのか？」

「…湯冷めしただけだ」

少し間を置いてそんな答えが帰って来た。

―――

――

バタンッ

シャワー室の扉を閉じた。

つーか鍵とか無いのかよ。

「さて…」

とりあえず…雨宮がシャワーを浴びてる間にやる事がある。

俺はＰＤＡを取り出すと機能の所をタッチした。

雨宮の事を信用していない…という訳では無いが。

あまりこちらの詳しい状況を知らせるのもどうかと思う。

「頼む…出てくれよ」

『…コウ！！』

ＰＤＡから聞こえてくる慶吾の声。

『良かった…、繋がった』

慶吾の一安心したような声。

どうやら俺が寝ている間に何度か連絡を取っていたようだ。

「今は何階に居るんだ？」

『三階だ、コウは？』

「俺は…落とし穴で一階まで落とされた」

『無事なのか？光一少年』

観月の声も聞こえてくる。

「あぁ、雨宮に助けられた」

『…彼女が？』

ＰＤＡから聞こえる観月の声は疑問混じりだった。

「雨宮については俺が調べとく、夏喜さんは居るのか？」

『いや…まだ合流できてない、あの後夏喜さんはどうなったんだ？』

「…夏喜さんは二階に残されたはずだ、新城達と一緒に」

一応、鉄格子がある分、新城達もすぐに夏喜を追えないはずだが。

『…新城達ならすでに三階に登って来ている、一度姿を見かけた』

「…なんだって？」

あの後の新城達には３つのグループに別れた俺達全てを追う事が出来た。

三階に登って慶吾達を追う事も。

二階を逃げた夏喜を狙う事も。

一階の俺達を待ち伏せる事も。

しかし…新城は雨宮を警戒してたはずだ。

俺が怪我をしているとしてもわざわざ来た道を戻ってまで俺達を狙う可能性は低い。

また、すでに上の階へと上がってしまった慶吾達を追う…というのも少し変に思えた。

つまり…あの時点で最も危険な状況になったのは夏喜だ。

新城達がもうすでに三階に居るという事は…。

夏喜は――――。

『…そうだ、コウ、大事な話しがある、三階にある武器の話しだ』

「…なんだ?拳銃でもあったのか?」

『…よくわかったな』

観月が驚いた声を出す。

「別にわかってた訳じゃない、予想じゃもう少し後の方かと思って

たからな」

予想よりもずっと出てくるのが早いな。

『…どういう意味だ』

「一階には武器らしい武器は無かった、だが二階へ上がってみるとナイフやらクロスボウやらが置いてある、つまり」

『上の階へ行くほど…強力な武器があるって事か』

「俺の予想じゃ拳銃は四階辺りかと思ったが…、こりゃ最上階はもっと酷くなるな」

流石に核ミサイルなんてのは無いと願いたいが。

「…しかしマズいな、新城達が三階に来てるとなると」

『あぁ、彼らが銃を手に入れるのは時間の問題だろう』

そうなると同じ階にいる慶吾達が危なくなる。

「慶吾、観月さん、そのまま上の階を目指してくれ」

『なっ…、それじゃあコウ、お前や夏喜さんはどうすんだよ!!』

俺の提案に慶吾は唖然となっているだろう。

「俺はもう動ける、このまま夏喜さんと合流して上を目指す」

『つまり…最終的に六階で合流、という訳か』

「幸い、連絡はこのＰＤＡの機能で取り合えるからな」

当面の問題は夏喜との合流になる。

『…わかった、無茶はすんなよ』

慶吾も渋々ながら納得したようだ。

「あぁ、わかってる、なんかあったらまた連絡する」

ピッ

俺は通話を終えるとＰＤＡのツール機能を切った。

「…そういや雨宮が飯用意したって言ってたな」

言われた通り、テーブルへと行ってみる。

テーブルの上には皿に乗ったおにぎりがあった。

形は不格好というか…、いびつな出来だ。

毒とか入って…る訳はないか。

んな回りくどい真似する必要は無いだろうし。

一つ掴んで口に入れてみる。

「…ッ！！」

その瞬間、俺の味覚は妙な違和感を感じた。

―まさか、嘘だろ…。

おにぎりの中身はコンビニ等でよく見る固形栄養ブロックが入っていた。

「どんな組み合わせだ…？」

…普段の食生活が見えるな。

ふと見ると俺が担いでいた食料の入った糞重たいリュックが置いてあった。

雨宮が運んで来てくれたのだろう。

「…よし、作るか」

俺はリュックから食料と調理器具を取り出すといそいそと料理の準備を始めた。

第２３話：ハプニング（後書き）

～おまけ小説～

【特別ゲスト】

ディーラー「おい…、今回のゲームマズいんじゃないか？」

オペレーター「いまだに戦闘らしい戦闘が起きて無いな」

係員「た、大変です！お客様からの不満の声が！！」

ディーラー「くっ…我々ではこれ以上の不平不満をさばくのは…」

？「何を騒いでいる！！」

オペレーター「あ…あなたは」

ディーラー「【きんた】様！？」

金田「【かねだ】だ！！！」

第２４話：えくすとらげーむ（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：５．４
雨宮　鈴音：？：２．５
　柳　辰巳：？：６．８
春野　夏喜：４：６．９
新城　渉：２：２．８
国枝　克美：１０：４．７
藤木　洋介：３：６．１
？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．８
神北　観月：７：７．０
中村　真：？：３．８
御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ
？？？：？：？？？？

第２４話：えくすとらげーむ

「…ん？」

シャワーからあがり、雨宮が部屋に入るなり立ち止まった。

―いい匂い。

「あぁ、シャワー、もういいのか？」

「お前は…何をしているんだ？」

「見てわかんないか？料理だよ」

俺はバックに入っていた適当な野菜を炒めていた。

調味料なんかも自己流で加えていく。

「……」

雨宮は俺の言葉に返事は返さず、適当に椅子に座った。

チラリと自分の作ったおにぎりを見ている。

そういや…一個食ってそれっきりだったな。

つーかもしかしたら自信作だったのか？

「…っし、できた」

俺は調理した野菜炒め的な物（食材のあり合わせなので）をフライパンから皿へと移す。

皿は2つ。

俺はその一つを雨宮の前に置いた。

「…何のつもりだ？」

雨宮は皿に盛られた野菜炒めを見ながら呟く。

「助けてもらったお礼ってやつだよ」

俺はそう言うと雨宮手製のおにぎりを一つ取って口に入れた。

―微妙な味だ。

米と固形ブロックが上手い具合に噛み合わず、微妙な味を引き出している。

「……」

雨宮を見るとただ無言で俺の出した野菜炒めを見ている。

「心配しなくても毒なんて入ってないって、ほら」

俺はアピールするように自分の所にある野菜炒めを口に入れる。

「なんなら取り替えてもいいからさ」

「……」

俺のそんな様子を見て雨宮がゆっくりと野菜炒めを口に入れた。

「…美味い」

「そっか、そりゃあ何よりだ」

雨宮の小さく呟いたその一言に返すように俺も小さく微笑む。

「飯ってのは人を幸せにするらしいぜ、覚えてて損は無しだ」

実質、一人暮らしの時はずいぶん助けられている。

「……」

結局、食事の間雨宮の言葉を聞いたのは最初の一言だけだった。

ただ自分の作ったおにぎりと俺の作った野菜炒め的な物を見比べていたが。

俺も野菜炒め的な物をつまみつつ、雨宮のおにぎりを食べ終わる。

「もう動けるようだな…」

食べ終え、雨宮が俺の様子を見ながら呟いた。

「まぁ…動けるくらいには」

身体の調子を確かめるように動きながら俺もそう答える。

実際、身体の調子は悪くなかった。

派手に動けば傷は開くだろうが、動く分には問題ない。

雨宮の応急処置は完璧だったおかげか。

「…そうか」

雨宮はそう言うなり、いきなり戦闘禁止エリアを出ようとした。

「ち、ちょっと待てよ！！」

俺はそんな雨宮を止めようと声をかける。

「…夏喜の頼みはもう果たした」

通訳すると俺が無事なのを確認したからもういいって事か。

…ここで雨宮と別れるのは良くないな。

そうなると雨宮の行動を掴めず、目的もわからないままだ。

―あんまりやりたくないが…。

「…じ、じつは強がりを言っただけでまだ少し痛む…かな」

俺はちょうど矢をくらった脇腹をおさえながらチラリと雨宮を見る。

「……」

雨宮はジッと疑いの視線を俺へと向けていた。

―やっぱ駄目か？

「まだ…痛むのか？」

「え？あ…、あぁ」

予想に反して雨宮の見せた心配気な表情に俺は曖昧な返事をした。

「…だが―」

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

雨宮の次の言葉を遮るようにＰＤＡが鳴る。

『ゲーム開始より２４時間が経過しました、これより三時間後、一階が侵入禁止エリアとなります』

ＰＤＡの画面にはそんな説明が映し出されていた。

「侵入禁止エリアか…、もうそんなに時間がたってんだな」

俺は結構長いこと寝ていたようだ。

「…とりあえず、上へ目指す以上、どっちみち途中までは一緒なんだ、一緒に行かないか？」

「……」

俺の提案に雨宮は一瞬、驚いた顔を見せたがすぐに無言になる。

考えているのだろうか。

「……」

だが雨宮はすぐにまた戦闘禁止エリアから出ようとした。

「あ、おい！！」

「…すぐに準備しろ」

「…あん？」

「置いていくぞ」

「…へいへい」

だから一言で済まさずにちゃんと言えよ。

俺は糞重たいリュックの前に立った。

―持ってかなきゃ…なんねぇよな、やっぱ。

ヒョイッ

そう考えていると雨宮がその糞重たいリュックを背負った。

「…ありがとうな」

「……」

素直に感謝をする俺に雨宮は無言で返す。

「…そういやさ、あんたのＰＤＡってなんなんだ？」

戦闘禁止エリアを出る中、俺は率直にそう聞いてみた。

「…これだ」

意外にも雨宮は隠す事無く、あっさりとＰＤＡを見せてくれる。

【２】のＰＤＡがそこにあった。

―――

―

モニタールーム。

そこで中村はモニターの画面と手元にある資料を見比べていた。

手元の資料は古く、今回の物ではない。

「どうしたんですか？いきなり過去のゲームの資料を見せてくれなんて」

「なに…、年をとると用心深くなっての」

「…？」

中村はディーラーに過去のゲームの資料を要求していた。

その事を疑問に思ったディーラーに中村が笑って答える。

資料は数年前の物へとなっていった。

ゲーム事にそれぞれ参加者。

それぞれの解除条件。

誰が死に、誰が勝利者となったか。

ゲーム事の情報がその資料には記されている。

「…むぅ」

資料を見る中村の視線が止まる。

そしてその視線はモニターに映し出された人物へと変わった。

「…一つ頼みをしてよいかの？」

「え？…何でしょうか？」

「えくすとらげーむ…、を提案したいのじゃが」

「エクストラゲーム…ですか、しかし、今のゲーム進行上は必要無いかと」

「なぁに…、ちと確かめたい事があっての、ヘタをすれば、【2】の彼女、招かれざる者かもしれんぞ」

モニターには共に行動を始めた雨宮と王生の姿が映し出されていた。

―――

―

順調に二階へと戻って来る。

とはいえ、移動によって時間がかかったのは事実だが。

「なぁ、あんたは何で俺を殺さないんだ？」

「…必要が無いからな」

それはそうだ。

ｊｏｋｅｒの破壊が目的ならば俺を殺す必要は無いと言える。

だが、それは同時に俺達を襲う必要も無いと言う事だ。

「俺達の誰かが…ｊｏｋｅｒを持ってたってか？」

雨宮のＰＤＡを見てから俺は内心、気が気でなかった。

「……」

雨宮は答えない。

ただ、その可能性もあるだろう。

一番可能性が高いのは観月だ。

俺はｊｏｋｅｒなんぞ持ってない。

もっていたら…使ってる事に否定出来ないだろうし。

夏喜は一度もＰＤＡを雨宮に見せていない。

慶吾は…、人を騙せる程器用な奴じゃない。

観月ならば…有り得るな。

ｊｏｋｅｒを使って俺達を騙す器量も度胸もありそうだ。

だが…、そうなると厄介だな。

慶吾は観月と一緒に行動している。

その事が俺の心に動揺を与えている。

「なぁ、あんた…、観月と会った事があるのか？」

「……」

「…大事な事なんだ！ちゃんと答えてくれ！！」

俺は雨宮の動きを止める為に雨宮の前に立った。

「…ずいぶんと焦っているな」

「焦っている…か」

実際、そうなのだろう。

「…友達が居るからな」

「友達…？」

「人を疑わない馬鹿な奴だからな…」

「疑わない…か」

雨宮は遠目で通路の先を見つめる。

「あの女とはあの時初めて会った…」

「そうなのか？」

少し安心した。

それと同時に疑問も浮かび上がる。

「あんた…なんで俺達を襲って来たんだ？」

「……」

―だんまり…か。

雨宮は…ゲームとは関係無い目的で動いているのかもしれない。

普通にゲームをクリアするのなら、誰でもまず解除条件を優先するはずだ。

雨宮の行動にはゲームクリアへの意志が見えない。

「…先へ進むぞ」

「あぁ…」

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

俺達の行動の出鼻をくじくかのようなＰＤＡのアラーム音。

「…なんだよ、こんな時に」

ＰＤＡの画面を見ると今まで見て来た物とは違っていた。

「エクストラ…ゲーム？」

「なんだとッ！？」

雨宮の顔色が変わり、食い入るようにＰＤＡを見る。

「知ってんのか？」

「あ…、いや」

テッテレテッテ、テレテッテテ～テ。

ＰＤＡから大音量で軽快なＢＧＭが流れて来た。

今までの味気ないアラーム音とは違う。

画面にはカボチャの頭をしたＣＧのキャラクターが映し出されていた。

ハロウィンでよく見るキャラクターだ。

『お楽しみ、エクストラゲィィィイムッ！！』

カボチャのキャラクターが片指を立てて振るい、そう宣言した。

第２４話：えくすとらげーむ（後書き）

～おまけ小説～

【金田様伝説】

ディーラー「き、…金田様だ」

金田「今きんたって言おうとしただろ」

オペレーター「状況をややこしくする事に定評のある金田様だ！！」

ディーラー「変なエクストラゲームを提案する事に定評のある金田様だ！！」

金田「お前ら後で覚えとけよ」

第２５話：混乱（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：５．４
雨宮　鈴音：２：２．５
　柳　辰巳：？：６．８
春野　夏喜：４：６．９
新城　渉：２？：２．８
国枝　克美：１０：４．７
藤木　洋介：３：６．１
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．８
神北　観月：７：７．０
中村　真：？：３．８
御子柴　得司：？：Ｄｅａｔｈ
？？？？：？：？？？？

第２５話：混乱

『雨宮　鈴音、年齢は２１歳、戦闘経験あり』

「事前の調査資料を見るにそれらしい事は書いてないの」

通信越しにディーラーが読む資料を中村がポリポリと頭をかきながら聞いた。

『戦闘能力の高さに彼女の容姿端麗さも合わさってＢＥＴでの人気を集めてます、生存候補の一人ですね』

「若くてピチピチで強い、人気が出る訳だの、彼女を参加者として選んだ理由は？」

『今回のイベントの対象者…、という事になってはいますが』

「ふむ…、なるほどの、理屈は通っているという訳か…」

それでも納得していないのか、中村はモニターを見つめた。

「まぁ…、このえくすとらげーむですべてわかるがの」

―――――

――

―

「エクストラゲーム…」

唐突にカボチャのキャラクターが宣言したエクストラゲームの言葉。

当然、嫌な予感を感じずにはいられなかった。

雨宮はＰＤＡの画面を睨むように見つめている。

『やぁやぁやぁはじめまして！僕の名前はスミスって言うんだ』

カボチャのキャラクター…、スミスは自分の事をそう自己紹介した。

「…なんだ？コイツは」

「…スミス？」

雨宮の方もスミスを知らないのか目を細める。

『コイツじゃないよ、スミスだよ、失礼だなぁ』

スミスのＣＧは不満そうな表情に変わった。

機械音声で作られたその声は耳に障る。

「スミス…ね、さしずめお前はこのゲームのマスコットキャラって

所か」

『…へぇ、光一君、君、どこまで理解してるのかな?』

「さぁてな…、それはお前の言うエクストラゲームの内容にもよるな」

『まぁ…いいけどね、それより君達、大変だよね、一階に落ちちゃうなんて、ついてないなぁ』

よく言うぜ…。

俺は正直呆れていた。

俺達を分断させた罠の発動したタイミングは絶妙だった。

誰かが意図的に作動させた…と考えた方がしっくり来る。

『このままじゃ他のみんなに差をつけられちゃう、そんな君達二人に朗報だよ、このエクストラゲームをクリアしたら豪華な商品をプレゼントしちゃう』

「…なるほどね、要するにサブイベントって所か」

ゲームをクリアする上で必要は無いが、クリアすれば強力なアイテムが手に入る。

『チッチッチッ…、ちょっと違うなぁ、エクストラゲームには全員強制参加の楽しいイベントだってあるんだよ』

スミスは得意気に指を軽く振ってみせた。

「…へぇ、それじゃあゲームが上手く進行しない場合はそんなイベントを起こすのか」

スミスは言わば俺達を誘拐した、このゲームの主催者側だ。

コイツの言動一つ一つを聞き逃さず、情報を仕入れていきたい。

『…君、嫌な性格してるね』

「よく言われる」

スミスの言葉にしたり顔で返してやる。

『でも安心していいよ、今回のエクストラゲームをやるやらないは任意、期間は2日目終了までだから』

「参加も不参加もまずはそのエクストラゲームの内容を聞いてからだ」

『それもそうだねぇ、それじゃあ発表しようか！君達の命運を分けるエクストラゲームを！！』

デレデレデレデレ～。

ＰＤＡからよくテレビ等の結果発表の時に流れるＢＧＭが聞こえてくる。

エクストラゲーム…、確かにスミスの言う通り、コイツの内容によ

って俺達の行動方針は変わって来るだろう。

エクストラゲームを軸に行動するかどうかを。

『【ゲーム開始から最初に遭遇したプレイヤーの首輪を自らの手で作動させる、複数との遭遇の場合はその全員とする】』

「…は？」

「！！？」

だが、次にＰＤＡに表示されたそのメッセージに俺は首を傾げ、雨宮は目を見開いた。

ゲーム開始から最初に遭遇したプレイヤー全員の首輪を作動させる？

これじゃあまるで解除条件じゃないか。

俺が最初に遭遇したプレイヤーと言えば雨宮と柳の二人だ。

雨宮の場合は柳一人がその対象になる。

だが柳は一階に残って死を待つと言っていたし首輪作動の為にわざわざ雨宮を相手にする必要もない。

このエクストラゲームをクリアした所で首輪が外れるという訳じゃないのだから。

リスクだけは高く、その癖得る物といえば連中の言う豪華なアイテムだけ。

「……なんだかな」

連中が何かを狙っているのは確かだろうが、ヒントが少なすぎる。

『何度も言うけど期間は2日目終了までだからね、行動はお早めに』

そう言ってスミスは画面の奥へ引っ込もうとしてまた戻って来る。

『そうそう、一階が侵入禁止エリアになったから次はこの階だよ、タイムリミットはあと9時間、頑張って三階へ上がって来てね～』

…一階が侵入禁止エリアになったか。

柳が一階に残っているのなら…首輪が作動しているはずだが。

―そうなると…エクストラゲームのクリアは元々不可能じゃねぇか。

…何が目的なんだ?

『それじゃあ、僕は安全な場所で君達の健闘を祈ってるよ、頑張ってね～、”鈴音ちゃん”』

スミスはバイバイと手を振ると今度は本当に画面の奥へと消えた。

同時にＰＤＡの画面が通常画面に戻り、機能が使えるようになった。

「…とりあえず、エクストラゲームは無視しておこうぜ」

俺は隣でＰＤＡの画面を見たまま動かない雨宮を見る。

「……」

雨宮は俺の言葉なんて聞こえていないのか、じっと画面を見て動かない。

「…？」

なんか…様子がおかしいな。

カラランッ。

そう思っていた時、雨宮が持つＰＤＡが床に落ちた。

「あっ…、おい、壊れるぞ」

ＰＤＡの形状はトランプのカードをモチーフにしているせいか薄い。

それも精密機械となれば衝撃で簡単に壊れる事もあるだろう。

「ったく…」

俺は雨宮の落としたＰＤＡを拾い上げた。

どうやら壊れてはいないらしい。

「…雨宮？」

それを雨宮に渡そうとした時、雨宮の様子が明らかにおかしい事に気付いた。

「…嫌、嫌嫌、いや…、イヤ、いや、イヤ、嫌――――」

ゆっくりと後ろへ下がりながらガタガタと身体を震わせ、目は虚ろなものになっていた。

「…嫌ぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁあああ!!!!」

そのまま頭をおさえ、叫び声を上げた。

「おっ…、おい!どうしたんだよ!!」

俺は意味がわからず、雨宮を肩を掴む。

ヒュンッ

「ッッ!!」

その瞬間、雨宮が俺に向けてナイフを振るった。

だが雨宮の振るったナイフにはキレが無く、突然の事であったが避ける事は出来た。

「雨宮!しっかりしろ!!」

…俺が首輪を作動させると思っているのか?

「落ち着け!俺はエクストラゲームには乗らない、柳の事があるだろうが!!」

「う…、あぁあ…」

説得する俺に対し、雨宮はガタガタと身体を振るわせながらナイフを向ける。

目の焦点が定まっていない。

「…う、うあぁ、嫌」

ぶつぶつと何かを呟きながら、雨宮はその手のナイフを。

グッ――――。

自分の首元へと突き付けた。

「おいっ！馬鹿ッ！！」

俺は雨宮の方へ走り、ナイフを無理矢理奪った。

考えている暇は無かったのでその拍子に雨宮を床に倒してしまう。

「何考えてやがる…」

俺はナイフをしまうと床に倒した雨宮を見た。

「…おい」

雨宮は床に倒れたまま、気を失っていた。

そこまで強く倒した訳でも頭をうった訳でも無いはずだが。

「意味がわからねぇ…」

愚痴るようにそう呟く。

問題はこれからどうするかだ。

つまり、雨宮をどうするか。

このままほっておけば他のプレイヤーか侵入禁止エリアのルールに殺されるだろう。

だからと言って俺達を襲って来たコイツを助ける義理は―。

…義理はあるんだよな。

雨宮は戦闘禁止エリアで、俺の怪我を治療し、わざわざ目覚めるのを待っていた。

借りは返す物…か。

「よい…せっ！！」

糞重いリュックをその場に置き、俺は雨宮をおんぶした。

意外と軽いんだな。

ピキッ―。

「痛つつ…」

とはいったものの、鋭い痛みが身体中に走る。

「…なんでこうなんだかな」

自然と愚痴が出てくる。

だが…誘致にしている暇は無い。

この階だって侵入禁止エリアになるのだから。

雨宮をおんぶした事で必然ながら背中に雨宮の身体が密着する形になる。

そこで俺は思った。

戦闘禁止エリアで素っ裸の雨宮を見た時から思ってはいたが。

「…胸、小さぇな」

―アホな事考えてる場合じゃないか。

進行スピードはだいぶ遅くなるな、急がねぇと。

―――

「…ぜぇ、ぜぇッ！！」

身体中が悲鳴を上げながらも三階への階段を登りきる。

人一人を背負いながらの移動は予想以上に過酷だった。

特に階段が最大の難所だった。

「つ…、疲れた、もう動けねぇ」

よろよろとしながら雨宮を床におろし、ペタリとその場にしゃがみ

込む。

無事に三階へ上がれた事で多少、心に余裕が生まれた。

しばらくは侵入禁止エリアに悩まされる必要は無くなる。

「ふぅ…、これで…しばらくは大丈夫か」

そう思っていた時だった。

スチャッ

「！？」

俺は拳銃を向けられた。

「人間、何かをやり遂げた瞬間が一番、心に油断が生まれる物だ」

拳銃を向けたその人物は俺にそう語りかけた。

「少年、覚えておくといい、夜明け前が最も暗いのだという事を」

「…言いたい事はわかるが、勘弁してくれないか、見ての通り、へろへろなんだ」

「ふっ…、みたいだな」

拳銃を向けた人物は軽く笑うと拳銃を下げた。

「まさか…、ここであんたに会うなんてな、柳さん」

「俺としては…待っていたかいがあった、と言える」

柳はそう言いながら拳銃を服の中へとしまった。

第２５話：混乱（後書き）

～本編版おまけ小説～

【雨宮の装備品】

王生「…待てよ」

気を失っている雨宮をおんぶしようとして気付いた。

雨宮は錯乱した瞬間、ナイフを俺に振るって来た。

おんぶしての移動の最中、それをやられたらたまったもんじゃない。

王生「一応…武器を確認しといた方が良いよな」

確認するとなると…雨宮の服を探らなければならない。

気を失っている女性の服を探る。

端から見ると変態だ。

「…確認の為だ、うん、大丈夫、悪く思うなよ」

自分にそう言い聞かせる。

以下、見つかった武器のリスト。

大、中、小のナイフが各一本ずつ。

スタンガンが2つ。

クロスボウの矢がいくつか。

なぜか手錠、鍵は無い。

「…やっといて良かった」

どうやって入ってたかは聞かないお約束☆

第２６話：少女（前書き）

※ただいま電子機器のトラブルによりＢＥＴ情報を記載できません、
お客様のご了承をお願いします。

《シークレットゲーム運営委員会よりお客様へ》

スミス『まぁ平たく言うと作者が携帯変えただけなんだけどね』

第２６話：少女

「待っていた…？まるで俺達がここを通る事がわかっていたみたいだな」

そりゃあこのゲームの性質上、嫌でも参加者は上の階を目指す為に階段を通るが。

それでも俺達が柳より上の階に居る可能性だってあるだろう。

「あぁ、君達が下の階に居るのはわかっていた、君の知り合いにそう聞いてね」

「…知り合い？」

ふと慶吾の事を考えたがその可能性は薄いか。

柳に出会ったのならＰＤＡで連絡をとった時にその話題が出るだろうし。

「…夏喜か」

「あぁ、少し前、襲われいた彼女を助けた」

夏喜が無事だった事にホッと息をついた。

「ありがとな、襲ってたのは三人組の男達だろう？」

「君はそちらとも知り合いなのか？」

「あぁ…、嫌ってくらいにな」

しかし柳はあの三人を一人で相手にしたのか。

雨宮とも面識があるようだったし、何者なんだ？

「…鈴音？」

柳が俺の横で気を失っている雨宮に声をかける。

「なぁ、あんた何か知らないか？雨宮の奴、いきなり暴れ出して気を失って意味はわからないんだが」

「暴れ出した…？彼女がか？」

「ちょうどエクストラゲームってのが始まった時だ、その内容を見た後、急に様子がおかしくなった」

「…その内容は？」

内容を話そうか一瞬躊躇した。

エクストラゲームで俺達のターゲットになっているのは柳なのだ。

もちろん、クリアした所で旨味の薄いこのエクストラゲームに乗るつもりは無いが。

「ゲーム開始から最初に会ったプレイヤーの首輪を作動させる、つまり俺と雨宮の場合、あんたが対象だな」

少し脅すふうに言ってみた。

「そうか」

俺の言葉に柳はなんでも無いようにあっさりと頷く。

「心当たりは無いのか？雨宮とは知り合いなんだろ？」

「特別知り合いという訳でもない、顔見知りとは言えるがな」

「……」

柳ならば俺の知らない事を知っていそうだと感じた。

雨宮の事はもちろんだがこのゲームについてもだ。

それに一階で死ぬと言っていた柳が今、この階に居る事も気になる。

「なぁ…、ちょっと聞いてもいいか？」

俺がそう言うと柳は人差し指を身体で隠すように上へと向けた。

―上？

俺は顔をそのままに目線だけを上へと向ける。

天井には監視カメラが設置されている。

―なるほどな、見ている奴に聞かれちゃ困る話しか。

「…夏喜は今どこに居るんだ？あんたとは別れたのか？」

俺は柳に聞きたい事の中で一番当たり障りの無い質問を選んだ。

「いや、彼女は俺達と一緒に行動している、案内しよう、彼女の居る場所へ」

柳は頷くと雨宮を背負い歩き出した。

俺はその柳の言葉の中に一つ、気になる所があった。

「…俺達と一緒にって事は、あんたと夏喜以外に誰か居るのか？」

「そうだ、今は夏喜君に一緒に居て貰っている」

柳は通路を少し進むと一つの部屋の前で立ち止まった。

最初に柳が居た場所は階段もこの部屋も見える場所だった。

「…仲良くして貰えれば嬉しいな」

「…は？」

ガチャッ

柳が扉を開ける。

「離して下さい！これ以上はセクハラで訴えます！！」

「もぉ～、いいじゃない、減るもんじゃないんだしぃ～」

部屋の中には夏喜と…初めて見る顔の少女が居た。

少女は俺よりも若い、というか小さい。

まだまだ幼さの残る顔に細い身体。

中学生…？いや、小学校高学年くらいか。

まぁそれはいい。

問題は今の状況だ。

夏喜が悦の表情をさせながら少女に抱き着き、少女は必死に夏喜に抵抗している。

「も～、本当に可愛い～！！」

「う～…」

ほお擦りする夏喜に対し、少女はぐったりとしている。

「…楽しそうだな、おい」

心配していた俺からすれば複雑な気分だ。

「彼女には良いムードメーカーになって貰っている」

「まぁ…、確かにな」

隣で優しい表情で見つめる柳に俺もそう返した。

「あっ…」

夏喜が俺に気付いたのかパッと少女を拘束している腕を解いた。

「光一君!!」

「…ずいぶんと楽しそうじゃないか、夏喜さん」

嬉しそうに俺の名前を呼ぶ夏喜に苦笑いをする。

「いやぁ～小さい子供とか見ちゃうとテンション上がっちゃって」

夏喜はそい言って恥ずかしそうにてへへと笑った。

そういえば夏喜は保育士を目指してるとか言っていたな。

「可愛いよねぇ、ちっちゃい子って、なんかこう…、キュ～って抱きしめたくなるっていうか…」

そう言って少女を抱きしめる夏喜。

「……」

おいおい…、大丈夫なのかよ、この人が保育士になって。

女のロリコンじゃねぇか…。

「…誰ですか？」

少女の方はキョトンとした表情で俺を見つめている。

しかし…驚いたな、柳と一緒に行動していたのがこんな子供とは。

「…なんか弱っちそうな人ですね」

…訂正、こんなナマイキそうなガキとは。

「お前がそれを言うか、お子様が」

「様付けありがとうございます」

少女はお辞儀で返した。

喜ぶなよ、お子様呼ばわりで。

「ですが私の名前はお前ではありません」

少女はつーんとした態度でそっぽを向いた。

「そりゃ悪かった、なんて名前ていうんだ？」

「人に名前を聞く時は自分からと学校で習ったはずです」

…めんどくせぇ。

「ね、日向ちゃん可愛いでしょ」

「夏喜さん、空気読んで下さい」

サラッと名前を夏喜に言われてナマイキな少女、日向はため息をついた。

「速水(はやみ)　日向(ひなた)です、以後お見しりおきを」

「ん？あぁ…」

歳のわりに随分としっかりしてんな。

こんな状況に置かれたら普通、この歳くらいだと泣きわめくかと思うが。

「あなたの事は夏喜さんから聞きました、こーいちさんですよね？」

「そうか、よろしくな」

「腹黒くて頭の中じゃ何を考えているかわからないそうですね」

「あっ！ちょ、ちょっと日向ちゃん！！」

「…夏喜さん？」

「ん～…、あっはっはっは…」

笑って誤魔化すな。

「悪ぶっているけどじつは優しくて頼りがいがあるって夏喜さんが――」

「はいストップ、それ以上言うとぎゅ～の刑よ」

「う～…、卑怯ですよ」

にっこりと笑う夏喜に日向がぶーっと口を膨らませた。

「夏喜、俺は王生に話しがあるんだが鈴音を頼めるか？」

柳はそう言ってまだ気を失っている雨宮を床におろした。

「それはいいんだけど…雨宮さん、どうしたの？」

「…それは――」

夏喜にも状況を軽く説明しておく。

「―って事で気を失った雨宮をここまで連れて来た」

「そうなんだ…お疲れ様、光一君、怪我は平気なの？」

「傷はそこまで深くなかったし、応急処置も受けたからな」

俺と夏喜がそんな話しをしている中、日向が気を失っている雨宮を眺めていた。

「…弱そうな人ですね」

「雨宮が気絶している事を言っているなら的外れだぞ」

未知数な柳を抜かせば今この中で断トツに強いだろうし。

「いえ…、すごく悲しそうな顔なもので」

日向にそう言われて雨宮の表情を見ると確かにそう思えるものがあった。

「ちなみにこーいちさんは全体的になんか弱そうです」

「全体的にってなんだよ…」

「一言でいうならオーラとか気みたいなものです」

「漫画の読みすぎだ」

しかし…本当に肝の座ったお子様だな。

「鈴音は今は寝かせておいてやれ、いいか？王生」

「俺はいいんだが…夏喜達を残して大丈夫なのか？」

「あら、私達を心配してくれるのね」

夏喜は嬉しそうに笑った。

「大丈夫です、悪い奴が来たら日向がこの日向特製の科学兵器をくらわせますから」

日向はそう言いながら俺にサランラップと輪ゴムで作られた科学兵器（日向が言うにはだが）を見せてくる。

見た感じ料理で使う調味料がぐちゃぐちゃに混ぜられている。

「…そっか、任せたぞ」

「はい、任されました」

恐らく相手に投げつけるつもりだろうか…。

「俺達は隣の部屋に居る、なにかあればすぐに呼んでくれ」

「なぁ、何するつもりなんだ？」

俺がそう聞くと柳は俺の肩に手を置いた。

「ついて来い、俺の知る全てを話そう」

「！！」

小声でそう呟いた柳に俺は表情を変えないように頷いた。

「よし…良い子にしてるんだぞ、日向」

「愚問ですよ、私はいつでも良い子ですから、柳さん」

…それは無いな。

第２６話：少女（後書き）

《本編おまけ小説》

【何もなかった】

夏喜「…光一君さ、私らの居ない間に雨宮さんと何かあった？」

王生「はぁ？どうしたんだよ、いきなり」

夏喜「だって雨宮さん、気絶してるし」

王生「ちゃんと説明しただろ、雨宮とは何も……」

王生の脳内でシャワー室の出来事再生中…。

王生「……」

…無かったよ」

日向「気絶した女性を良いようにするなんてケダモノです！！」

王生「…は？」

夏喜「光一君！最低！！」

王生「んなッ！？」

柳「感心しないな、そういうのは」

王生「あんたものるな！！」

第２７話：レクチャー（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：４．６
雨宮　鈴音：２：５．６
　柳　辰巳：？：２．３
春野　夏喜：４：５．９
新城　　渉　：２？：３．１
国枝　克美：１０：４．８
藤木　洋介：３：５．１
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．４
神北　観月：７：６．４
中村　　真　：？：３．６
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ
速水　日向：？：８．７

第27話：レクチャー

「ここだ…」

ガチャッ

柳が扉を開けて部屋に入る。

「…？」

天井を見ると二機の監視カメラが設置されている。

ここじゃあ話しを聞かれちまうぞ。

「王生」

「…ん？」

俺が天井を向いていると柳が俺にある物を渡して来た。

持たされた瞬間、手にずっしりと重い感触が伝わる。

「拳銃…か」

テレビや漫画で見慣れたものが今俺の手の中にある。

警官等がよく持っているようなリボルバー式の拳銃だった。

「俺はもう持っている、使うといい」

「簡単にいうなよ…」

「ニューナンブＭ６０だ、その銃ならまだ比較的扱いやすいはずだ、名前くらい聞いた事はあるだろう」

「名前くらいは…」

弾倉を見ると装置されている弾は５発か。

そういえばさっき階段で柳が俺に向けた拳銃はこれよりも大型だったな。

「あんたの持ってる銃はどんなのなんだ？」

「これは止めておけ、扱い方によっては肩を壊すぞ」

そう言って柳が見せたのは俺のより随分大口径な拳銃だ。

リボルバー式では無く、オートマチックのようだ。

「デザートイーグルだ、防弾レベルの低い物なら防弾チョッキだって貫通できる」

「へ～…」

俺はジーッとデザートイーグルを見つめた。

「…なんだ？こっちが良かったのか」

「いや、扱えない物を無理に使うつもりは無い」

実際に戦闘となっても威力ばかりで使えないとなれば意味が無い。

「良い判断だ、身分相応の武器という物がある」

柳はデザートイーグルをしまうと俺のニューナンブを手にとった。

「まずは拳銃の使い方を教える、拳銃とはいえ慣れない内は片手で撃とうとせずに両手で構えろ――」

柳から俺への銃のレクチャーがスタートした。

銃の構え方から狙い方、シングルアクションとダブルアクションの違い等を教わる。

「それでは的を狙ってみるか」

一通りのレクチャーが終わり、柳がそう言った。

「的って言われても…何かあるのか？」

「…そうだな」

柳はふと天井に目をやった。

上には二機の監視カメラが設置されている。

「…あれを狙ってみるか」

…なるほどね、よく考えてらっしゃる。

「まずは俺が手本を見せる」

チャッ

柳はニューナンブを持ち一機の監視カメラに向けた。

本来なら片手で撃てるのだろうが両手で構えたのは俺へのお手本の為だろうか。

バンッ

弾丸はまっすぐに監視カメラを直撃し、破壊した。

「もう一機はお前が狙ってみろ」

柳がニューナンブの柄を俺に向けた。

「だから簡単に言わんといてくれ」

そう言いながらも俺は柳からニューナンブを受けとる。

「さて…」

ゆっくりと監視カメラに向けてニューナンブの標準を合わせる。

リボルバー式の拳銃はオートマチックに比べてシンプルな分、暴発や弾詰まりを回避できるらしい。

引き金に指をかけ…。

ダァンッ

俺の撃った弾は柳のように中心とは言えなかったが監視カメラに当たり、破壊した。

「ふぅ～…」

肩の力を抜き、息を大きくはいた。

「上出来だ、初めて撃って体勢も崩れていない」

「そうなのか？」

「教えている時から思っていたが飲み込みが早い、鈴音よりスジが良いな」

「銃の扱い方を褒められても喜んでいいかわからんな…」

「…それもそうだな」

そう言って柳は軽く微笑む。

「…ん？雨宮よりスジが良いってのはどういう事だ？」

「あぁ、鈴音に拳銃の使い方を教えたのは俺だからな」

「あぁ、なるほど……、へっ！？」

初耳の事に俺は間抜けな声を出した。

「……」

天井に設置してあった二機の監視カメラが完全に機能を失った事を確認する。

「…柳さん、あんた、一体何者なんだ?」

「そうだな、もう良いだろう」

柳はそう言いながらポケットから小さな袋を取り出し、俺に投げ渡した。。

「これは?」

「ニューナンブの予備の弾だ、リロードしておくといい」

袋の中には五つの弾丸が入っていた。

その中から二つ弾を取り出し、ニューナンブに詰める。

残りの弾は全部で8発か。

俺が弾を詰める中、柳が壁に寄り掛かった。

「そうだな…、王生、お前はどこまで裏の世界について考えている?」

「この建物に連れて来られてからは確実にそういうのは存在するってくらいか」

唐突な質問に一瞬答えに戸惑ったが俺はそう結論づける。

「ならば話しは早い、単刀直入に言おう、このゲーム、そしてそれを主催している組織についてだ」

「…やっぱ背後にはデカイ組織があるってやつか」

「あぁ、このゲームはその組織にとって資金源となっている」

資金源…、なるほどね、納得がいく。

俺達をこの建物に連れて来てゲームをさせる。

普通に考えれば恐ろしい手間と金がかかるはずだ。

だが…、それを商売にすれば話しは別だ。

「組織は君達をこの建物に拉致し、ゲームをさせる、そしてそのゲームを外から見ている者達が賭けをする」

「賭け…、ギャンブルか」

「そうだ、賭けの内容は様々だ、誰が生き残るかは当然として誰が裏切るか、誰が一番人を殺すかというものもある」

なるほどね…。

その人物の行動なんていうのは他人からすれば神のみが知る世界。
その行動を予想し、大金を賭ける。
それも自分達は安全な場所で…だ。

「そりゃあ楽しいだろうな、賭けてる連中は、暇を持て余した金持ちの娯楽か」

「あぁ、組織はこのゲームを主催し、客が大金を賭ける、それがこのゲームが行われる理由だ」

「…なるほど、このゲームの仕組みについてはわかった」
だが現段階では仕組みがわかった所で何もできはしない。
結局はこのゲームに従わなければ首輪が作動するのだから。

「んで…、あんたは何者なんだ?どうしてそこまで組織の事を知っている?」

問題は柳が何故ここまでゲームや組織について知っているのか。

「俺か?俺はただの何でも屋だ」

「…何でも屋?」

あきらかに胡散臭いその言葉を俺は繰り返した。

「そうだ、何でもやるから何でも屋、依頼ならば組織の仕事だってな」

何でも…ね。

依頼さえあればどんな事でもやるって事か。

例えそれが公に出来ないものだとしても。

「…組織の依頼まで受けるあんたが何でまたこのゲームに参加してるんだよ」

「…君達と同じだ、組織の兵隊に連れて来られた」

「あんたが？簡単にか？」

ここまでの行動を見ると柳があっさりと拉致されるはずがない。

「…もともと俺は死ぬつもりだったからな」

一階で初めて柳に会った時もそう言っていたな。

「それじゃあもう死ぬのは止めたのか」

「いや…だが目的は出来た、俺が死ぬのはそれを達成してからだ」

俺の言葉に柳は首を横に振る。

だがその目はとても力強かった。

「…目的？」

「組織の連中が俺をこのゲームに参加させた意味がわかった…、奴らは俺をイベントのメインにしている」

柳はそう言いながらポケットから写真を取り出した。

「これを見ろ」

それを俺に渡してくる。

その写真に写る人物を俺は知っていた。

ついさっき初めて会ったが。

「…日向じゃねぇか、あんたら、親子だったのか？」

その写真には柳と日向、そしてもう一人綺麗な女性が写っている。

親子の写真と言えるだろう。

「そこに写っている少女は日向じゃない」

「…は？」

「…一ヶ月前に殺された、俺の娘、里沙だ、妻と一緒にな」

第27話：レクチャー（後書き）

～本編おまけ小説～

【一方その頃】

夏喜「あ～…、雨宮さんは目を覚まさないし、柳さんと光一はどっか行っちゃうし、暇だなぁ」

日向「そうですね」

夏喜「ねっ！せっかくだし退屈凌ぎにおねーさんとゲームしない？」

日向「良いですけど…ここに遊ぶ物なんて無いですよ」

夏喜「ムフフ～、そんな時の為のアプリなのですよ」

日向「なのですか」

夏喜「それじゃあ将棋でもやろう、私が勝ったらこれから日向ちゃんは私をお姉ちゃんと呼ぶ事！！」

【※大人のズルさ全開です】

日向「良いですよ、じゃあ私が勝ったら今後一切抱き着くのは止めて下さいね」

夏喜「あうっ…」

第２８話：真実（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：４．６
雨宮　鈴音：２：５．６
　柳　辰巳：？：２．３
春野　夏喜：４：５．９
新城　　渉　：２？：３．１
国枝　克美：１０：４．８
藤木　洋介：３：５．１
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．４
神北　観月：７：６．４
中村　　真　：？：３．６
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ
速水　日向：？：８．７

第２８話：真実

「なんだって！？」

柳の言葉を聞いた俺はもう一度写真を見た。

そうだ…確かに違う、写真の少女は日向では無い。

だが…似ている。

「あんたが参加させられた今回のゲームに、あんたの娘に良く似た日向が参加している…」

「偶然だとは考えられないだろう、これが今度のゲームのイベントとなっているのだろう」

「…イベント」

柳のその言葉が気にかかる。

俺と慶吾がこの建物内で再開した時から思ってはいたが…。

このゲームの参加者１３人…、それは無造作に集めた訳では無いのかもしれない。

「…そのイベントってのはなんだ？」

「ゲームの主催者側、つまり組織がゲームを盛り上がる為に用意した演出…、それが一番わかりやすいだろう」

ゲームを盛り上がる為…。

柳の話しによるとこのゲームには賭けをする客が居る。

その客を楽しませる為の演出、つまり今回のゲームの売り。

「自分が生き残る為に死んだ娘そっくりの少女を殺すかどうか、それが組織の用意したシナリオだ」

そう言い、柳は自分のＰＤＡを取り出した。

特定の人物の殺害が必要なＰＤＡの解除条件として真っ先に考えつくのは【Ａ】だ。

だが【Ａ】のＰＤＡは俺の解除条件になっている。

【３】のＰＤＡは人物の指定は無く、無差別殺人で良い。

だから…柳の持つＰＤＡは。

「Ｎｏ【９】、その解除条件は皆殺しにある」

【９】

自分以外の参加者、全員の死亡が解除条件となる。

今ゲーム最大にして最悪のキラーカード。

ふと俺のポケットにまだ雨宮の【２】のＰＤＡが入っている事を思

い出した。

返すタイミングが無かっただけだが…、柳の持つＰＤＡがＪｏｋｅｒの偽装等で無く、正真正銘、本物の【９】だという事がわかる。

「俺が解除条件を満たした時は俺以外の全てのプレイヤーが死亡した時だ、君も、そして…日向もだ」

ゾクッ

柳のその言葉に俺の全身を寒気が走った。

額を冷や汗が流れる。

柳は【９】という皆殺しのＰＤＡに対し、何の重圧も感じてはいない。

柳が本気でＰＤＡの解除を目指したなら…、俺達はどうなっていたのか。

「…そんなに警戒しなくていい、むしろ【９】のＰＤＡが俺で良かったと考えれる」

柳はそんな俺の様子を見て小さく微笑む。

「もともと死ぬつもりだったんだ、自分のＰＤＡが何かは俺にとって大きな問題じゃない」

「…死ぬつもりだったのはやっぱり殺された家族の事か？」

「あぁ…、一ヶ月前家族を殺されて以来、俺は生きる気力を無くした」

「だから…一階で死ぬつもりだった？」

「それどころか…最初に会ったのが鈴音で無かったら俺は本能的にそのプレイヤーを襲っただろうな」

「あんた自身が…死ぬ為に、か」

柳はもう死を受け入れている。

「だが俺は日向に会った、娘そっくりの少女に、彼女は必ず俺が生きて生還させる、俺のＰＤＡもその時だけは役に立つ」

「つまり…日向のＰＤＡの解除条件ってのは」

「【Ｋ】だＰＤＡを五つ以上集める必要があった」

「…なるほどね、それじゃあ日向の方はもうリーチなのか」

【Ｋ】を除けば今あるＰＤＡは【Ａ】【２】【４】【９】

あと一台…か、慶吾と合流すれば話しは早いが。

「…君に頼みがある」

「ん？」

ふと柳が改まったように俺を見た。

「日向の事を…守ってあげてくれ」

「…あんたが守るんだろ?そっちの方がよっぽど安全だと思うが」

「俺に何かあったら…という話しだ、その時は彼女の事を頼みたい」

―もしもの時か。

確かに柳は俺よりも格段に強い。

だが…それでも絶対は無い。

柳だって人間だ、銃で撃たれれば死ぬだろうし、予期せぬ出来事ってのがある。

「…わかった、でもあまり期待はしないでくれよ、俺に戦闘経験なんて無いんだから」

「すまない、その言葉だけで充分だ」

柳は俺の返事に満足したように微笑んだ。

「本当なら鈴音に言おうと思っていたが…、今の彼女には無理だろう」

今の雨宮は心が壊れている。

錯乱した雨宮を見た俺にはそれがはっきりとわかっていた。

「雨宮の正体を教えてくれ、あんたと同じ何でも屋ってやつなのか？」

雨宮はどう考えても柳の言う裏の社会側の人間だ。

戦闘技術や俺にした応急処置がそう教えてくれる。

「いや、彼女は違う、俺と違ってある組織に所属している、いわばテロリストだ」

「…組織だって？まさかこのゲームの―」

「安心しろ、雨宮の所属する組織はこのゲームを主催している所とは別だ、このゲームに関係あるとは言えるが」

「…？」

俺は頭の中で？のマークを浮かべる。

別の組織というのはわかったがこのゲームと関係がある？

「もうわかっているとは思うが…このゲームは何年も前からずっと続いている、なぜそんな事ができると思う？警察や政府はなぜその事に気付かない？」

「…警察や政府は気付かないんじゃない、黙認してる、簡単に言えばグルって事か」

「察しが良いな、酷い者は客として賭けを楽しむ者だっている」

つまり…このゲームは警察や政府は公認しているものだ。

街にあるパチンコ店や競馬場と何も変わらない、公営ギャンブル施設。

「警察や政府も頼れない、そこで被害者達が集まり、一つの組織が誕生した」

「…その組織が雨宮の所属する」

「対テロリスト用テロリスト集団、《エース》、鈴音はそこに所属している」

《エース》。

裏の組織に対抗する為に誕生したテロリストの集団。

雨宮はそこで戦闘訓練を受けたのか。

「…雨宮が強い訳だ」

「彼女はおそらく、エースの任務でこのゲームに参加したのだろう、それがどんなものかはわからないが」

ふと、雨宮の信念のこもった鋭い目が思い浮かぶ。

エースは組織の被害者が集まったテロリスト集団といっていた。

雨宮は…もしかして、過去に。

「…俺の知っている事はこれくらいか、他に聞きたい事はあるか？」

「…え？あぁ、そうだな」

このゲームの概要、柳と雨宮の正体はわかった。

「…もう充分か」

「そうか、…そろそろ戻るとしよう、鈴音も目を覚ましたかもしれない」

柳に言われ、部屋を出ようとする。

「そうだ…、もう一つ、言っておく事があった」

ふと柳が立ち止まり、俺に振り返る。

「ゲームの参加者の中に、組織側に人間が居る、彼等はゲームマスター、そしてサブマスターと呼ばれ、ゲームに介入してくる」

「その方が盛り上がるから…か？」

「そうだ、常に警戒し、油断しない方が良い」

柳の言葉が頭の中で引っ掛かる。

…何か重要な事を見逃しているのか？

その答えが出ないまま、俺達は夏喜と日向、雨宮の居る部屋に戻っ

て行った。

――――――

――――

――

「びんご…じゃな」

モニタールーム。

画面に映る雨宮の姿を見ながら中村が静かにそう呟く。

『…申し訳ありません、私共の調査不足でした』

「いや…、情報が操作されていると考えた方が良いかの」

『だとすれば…【2】番の彼女』

「可能性としてはあるかの、わしらの周りを飛び回る小煩い蝿、≪エース≫」

中村は手元の資料を見てその言葉を出した。

「疑わしき者は罰せよ、それが一番手っ取り早いが」

『では…暗殺部隊を派遣させますか？』

「ふむ…」

まだ雨宮がはっきりとエースとわかった訳では無い。

だが…その可能性は充分にある。

ここで殺しておいた方が後々、面倒は無いだろう。

「いや、確信できる事が無い以上、むやみに兵を動かせば客が不審がるの」

『確かに…お客様方に知られれば大事になりますが』

このゲームがギャンブルとして成立しているという事は当然、雨宮に賭けている者も居る。

組織が自分達の勝手な都合で雨宮を殺した事が客側に知られればカジノの信用問題にかかわるのだ。

だが…エースの可能性がある雨宮をそのままにしておくのも都合が悪い。

雨宮を殺すならば客に知られぬよう、内密に殺さねばならない。

「彼等にやって貰うかの」

そこで中村が目をつけたのは同じ階に居る他のプレイヤーだった。

モニターには新城と国枝、藤木の三人が映っている。

『彼等…ですか？』

「正式なゲームで死んだのならば誰も文句は言うまい？」

『ですが…彼等では荷が重いのでは？柳との合流もありますし』

「そこはわしらが応援してやろう、彼等に対抗できる武器を与える」

『…了解しました、中村さんに任せます』

「ふむ…、しかし―」

中村はもう一度資料を見た。

「なかなか美人に育ったではないか、鈴音ちゃん」

資料には雨宮の写真が貼付けてある。

その写真の雨宮は今よりも小さい。

その解除条件の欄に過去のそのゲームの解除条件が記されていた。

そこに記されていたのは――。

《ゲーム開始より最初に遭遇した人物の首輪を自らの手で作動させる、複数との遭遇の場合はその全員とする》

第２８話：真実（後書き）

～本編おまけ小説～

【一方その頃２】

夏喜（大丈夫…私が日向ちゃんくらいの時は金とか銀の動かし方がわかんなかったし）

夏喜「よぅし！やろっか？」

日向「はい」

――――

――

―

日向「では桂馬も頂きますね」

夏喜「あの～…日向ちゃん？」

日向「はい？夏喜さんの番ですよ」

夏喜「玉以外…もう駒無いんだけど」

日向「私の勝ちですね、約束通り…」

夏喜「抱き着き…禁止？」↑うるうるな涙目。

日向「……」

日向「少し回数を抑えて貰えれば…」

夏喜「日向ちゃん…、優しい！！」

ギュッ

日向「あぅっ…」

挿入話B：殺人への布石

「…チッ、ここも似たようなもんか」

3階の部屋を見回り、拳銃を見つけても新城はイライラを隠せなかった。

いや…それは新城だけに限らず国枝や藤木にも同じ事が言えるが。

罠によって王生達を狙えなくなり、彼等は2階に一人残される形となった夏喜を狙った。

だがそれも日向を連れた柳の介入により失敗に終わる。

同じ三対三の状況になりながらも向こうは女子供が二人。

実質、柳一人に新城達三人は手も足も出なかったのだ。

「何者なんだ…あのおっさん」

恨み言のように自然とその言葉が出てくる。

唯一の救いは柳の連れていた日向だった。

最終的に新城達は日向にクロスボウの矢を向けた。

このまま戦う事になるのならば自分達は日向を狙うという意思を見せ、戦いを終了させた。

圧倒的に有利な立場であったはずの自分達がなりふり構わずに逃げ出したのだ。

3階に上がり見つけたのは拳銃だった。

一瞬、これでもう一度襲う事を考えたが新城はすぐに諦めた。

自分達が拳銃を手にしているという事は柳達も拳銃を手にしているという事なのだから。

柳の力は未知数だったが明らかに一般の人物とは違う。

もちろん拳銃の扱いにも慣れていると考えた方が良い。

対する自分達は拳銃の扱いに関して心許ない。

だがこのまま柳達を諦める訳では無い。

柳さえ殺してしまえば後は平和主義な夏喜と少女なのだ。

拳銃を上回る決定的な武器。

新城達三人が探しているのはそれだった。

そしてそれは思いの外早く見つかる事になる。

「ん？なんだよ、これ」

部屋に入り、すぐに違和感を感じる。

部屋の真ん中にこれまでの段ボール箱とは違う、鉄製の箱が置かれていた。

「おいおい、こりゃもしかしたら…」

国枝が鉄製の箱の蓋を持ち上げ、乱暴に床に落とした。

「くはは！ビンゴだ！大当たりだぜ！！」

そう歓喜の声を上げた国枝が箱から拾い上げたのは銃だった。

だがそれは今まで見つけていた拳銃とは違う。

「こりゃ…サブマシンガンか？」

「こっち来てみろよ！沢山あるぜ！！」

「ほ、本当か！？」

国枝の言葉に藤木が鉄製の箱に向かう。

「す…すげぇ！ライフルとか…日本刀もある！！」

国枝と藤木はまるで新しいおもちゃを買って貰った子供のようにはしゃぎながら鉄製の箱から武器を取り出していく。

「……」

ただ一人、新城だけは冷めた表情でその光景を見つめていた。

―馬鹿が…、おかしいとは思わないのか？

３階を探索して来た中で見つけれた銃は拳銃だけだった。

それも何丁も同時に見つけた訳で無く、ポツリポツリと見つかる程度だ。

それがここに来てサブマシンガンやライフル？

おまけにそれらの武器が入ったこの鉄製の箱は俺達の進行方向に得に隠す訳でもなく置かれている。

誰かが意図的に設置したとしか思えない状況だ。

そして自分達はその誰かに良いように操られている。

新城からすれば気に入らないだろう。

「…どうやら神は俺達の味方みてぇだな、いや、この場合悪魔か」

だがこれらの武器を使うかどうかはまた別の問題だった。

使えと言うのならば有り難く使わせて貰う。

床に置かれた銃火器よりも新城が目についたのはマッチ箱程度の大きさのプラスチックの箱だった。

国枝と藤木が武器を積極的に取り出していた為かそれは乱暴に床に

三つ置いてある。

「ツールボックスもあんのか」

新城達は一度、これを使った事がある。

その時ＰＤＡにインストールした機能によって地図の拡張がされた。

「三つあるな…」

その三つのツールボックスにはそれぞれ異なった文字が英語で記されていた。

一つは罠を探知できるソフトウェア。

一つはドアのリモコン操作が可能になるソフトウェア。

そして残る一つ。

「こりゃ…首輪を探知できるのか？」

当然だが首輪は解除条件をクリアして外さなければずっと首についたままだ。

つまり首輪を探知するこの機能さえあれば誰がどこに居るのか、何人居るのかが手に取るようにわかるのだ。

「新城、あんたは何を使いたいんだ？」

ふと国枝が新城に話しかけた。

その手にはサブマシンガン、そして腰には日本刀をぶら下げている。

「おいおい…刀なんか使うのか？」

そりゃあナイフよりは切れ味もリーチの差も歴然の差があるだろうがいかんせん、重く扱いにくい、新城はそう言いたいのだ。

「あん？なんか文句あんのかよ？」

国枝は新城のその言葉に不満そうな表情をする。

本人からすれば日本刀という武器自体が持つ価値のある物なのだろう。

「いや、好きにしな、それに俺は残り物でいい」

「おいおいマジかぁ？こんな良い物が沢山あんだぜ」

「変わりといっちゃなんだが、この三つを好きに使わせてくれ」

信じられないという表情をさせながら国枝はもう一度武器を選びに行った。

「さぁ…てと」

新城は床に並べた三つのツールボックスの前に座り込み、タバコに火をつけた。

自分のＰＤＡは直接殺す必要は無い、ある程度武器を持たせれば国

枝や藤木が勝手に人を殺していくだろう。

それよりも自分がやるべき事は現状の把握、そして作戦だった。

まず新城はツールボックスの一つ、首輪探知の機能を御子柴の持つ【5】のＰＤＡにインストールした。

これで今柳達がどこに居るのかを把握できる。

インストールが完了し、早速新城は首輪探知の機能を使う。

「…チッ」

思わず舌打ちが自然と出てしまった。

首輪の反応が五つ集まってる所がある。

3階、状況的に考えて柳達と見て間違いは無いだろう。

二人増えたのだ。

おまけにこの増えた二人も新城は大方の予想ができた。

「王生と雨宮の二人か…」

二人について知っていた新城にはその厄介さもわかっている。

王生が怪我をしていると考えても柳と雨宮は厄介だった。

確かに自分達には今強力な武器を手に入れた。

だがそれで確実に勝てるかどうかは別だ。

正面から挑めば相手が拳銃を持っている分、こちらも相応の被害が出る可能性だってある。

「…はっ！らしくねぇな！！」

そこまで考えた後、すぐに新城はそう声に出し、その考えを捨てた。

なんだかんだ言いつつも強力な武器を手に入れた事で自分も多少舞い上がっていたのかもしれない。

正面から挑むなんてのは無能者の馬鹿がやる事だ。

いかに相手の不意をついて殺すか…、それが新城にとってこの建物で得た快感でもあった。

罠をはり、相手がそれにかかった時の表情。

自分は傷つかず、相手を殺す楽しさ。

相手が自分よりも強い者ならばその快感も増大するであろう。

「…考えろ」

だから新城は思案する。

柳や雨宮と真正面からやり合えば勝ち目は薄い。

「…考えろ」

だが…罠をはれば別だ、あの二人も人間なのだ。

銃で撃たれれば死ぬのは格闘技の世界チャンピオンだろうが赤子だろう変わらない。

だから考えろ。

頭をフルに回転させ、策を巡らせろ。

使えそうな物といえばドアのコントロール機能だ。

説明文を読むとドアの開閉だけで無く、ロックもできるらしい。

これで上手く二人を閉じ込めて爆弾でも使えば勝ちは見えるが…。

鉄製の箱には小型の爆弾もあったが同封された説明文には腕一本吹き飛ばす程度の小規模な威力らしい。

「とりあえず…インストールしてみるか」

新城はＰＤＡの画面をタッチしてソフトウェアをインストールする。

「なるほどな…タッチすればそのドアの開閉やロックができるのか」

地図上のドアに直接タッチする事で機能が使えるようだが…。

「…ん？」

地図をみていると新城は一つの違和感に気付いた。

地図上のドアにあるはずのリモコン操作の為のパネルが一カ所だけ別の所にある。

なんの事はない、そこは床だ。

「…くははっ！そうか、そういう事かい！！」

だが新城はそれを見てすぐにピンと来た。

突然の事に国枝と藤木は呆気にとられる中、新城は構わず笑った。

「なら…こいつをどう上手く活用するかだ！」

生き生きとした表情をさせながら新城は頭をフルに回転させる。

インストールしていないＰＤＡがまだ一つ残っている。

これは罠を探知できるものだ。

「…決まったな」

新城は軽く微笑むと国枝と藤木に向け、高らかに宣言した。

「上の階に行かれると面倒だ、この階で決着をつけようぜ」

第２９話：開戦を告げる絶望（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：４．６
雨宮　鈴音：２：６．６
　柳　辰巳：９：２．３
春野　夏喜：４：５．９
新城　　渉　：２？：３．１
国枝　克美：１０：４．８
藤木　洋介：３：５．１
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．４
神北　観月：７：６．４
中村　　真　：？：３．６
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ
速水　日向：Ｋ：８．７

第２９話：開戦を告げる絶望

「雨宮が目を覚ましたって？」

部屋を出た俺達はちょうど日向に会った。

日向の方も俺達を呼びに来たようだ。

「はい、今は夏喜さんがついてくれています」

そう言うなり、日向はペットボトルを取り出した。

「この日向特製のお目覚めドリンクを飲めば一発です」

ペットボトルの中身は水ではなく、日向が調味料を混ぜて作った謎の液体だった。

ペットボトルの底には沈澱物が沈んでいる。

「それを飲ませたのか？」

「いえ、残念ですがこーいちさんじゃないので…」

「俺だったら飲ませたってか？小娘」

日向の頭に手を置き、わしゃわしゃと強引になでた。

「柳さん、こーいちさんが虐めます」

そう言って日向は柳の後ろに隠れ、柳の服をギュッと掴んだ。

「卑怯者め」

俺は冗談でそう言うと日向はふふんと誇らしげな顔をした。

「それで…鈴音の様子は？」

いい加減、痺れをきらせた柳が日向にそう聞く。

「そうでした…、それなんですが…」

日向は言いにくそうにもじもじとすると。

「上手く説明できないので実際に見て貰えれば嬉しいです」

そう言いながら雨宮と夏喜を残した部屋に向かう。

「……」

「あま…みや？」

部屋に入るなり、俺は雨宮の姿に唖然となった。

力無く、だらりと壁に寄り掛かる雨宮。

その姿は糸のきれた人形も同然だ。

だがそれ以上に俺を唖然とさせたのは雨宮の目だった。

そこには一切の光が無い。

どこを見ているのかもわからない、時々思い出したかのように瞬きをする程度しか雨宮の目は動かなかった。

「光一君…、柳さん」

俺達に気付いた夏喜が涙目になりながら振り向く。

「雨宮さん…何も言ってくれない、何をしても、反応してくれない」

「…どうなってんだよ」

俺は壁に寄り掛かる雨宮に近付くとしゃがみ込んで同じ目線まで身体を持っていった。

「おい、雨宮！いい加減目を覚ませ！！」

「……」

雨宮から返事は無い。

それどころかその目はまったく動いていない。

雨宮が目覚めればもっと状況は好転するかと思ったが…。

今の雨宮に戦う力なんて何一つ存在しないだろう。

雨宮の心が崩壊している。

どうする…？どうやって雨宮の心を元に戻す？

「…なぁ、雨宮、お前…胸無いよな」

刺激を与えてみる事にした。

漫画やドラマなんかでお決まりの悪口を言って正気を取り戻す的なアレだ。

「……」

雨宮の様子は変わらない。

まぁ当然といえば当然か、現実にゲームや漫画が通用する程甘くない。

「光一君…、こんな時に何言ってるの？」

「こーいちさん、最低です、しばらく私に近付かないで下さい」

変わりに女性陣二人に冷たく凍える目で睨まれた。

現実はゲームや漫画のお決まりが通用する程甘いものでは無い。

というか厳しい。

「悪かったよ、ちょっと試したかっただけだ」

俺はそう言って立ち上がると雨宮から離れようとした。

ギュッ…。

「…ん？」

服を引っ張られた感覚に俺の動きが止まる。

「……」

雨宮は相変わらず何も話さず、目に光が無い。

だがその手は俺の服を掴んでくれていた。

「…雨宮」

俺はそんな雨宮の様子を見て小さく微笑んだ。

時間がたてば雨宮も元の雨宮に戻るだろうと。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

だがそんな俺の考えを嘲笑うようにＰＤＡが鳴った。

『ただいまの時間を持ちまして2階が侵入禁止エリアとなりました…』

ＰＤＡがそう告げる。

2階が侵入禁止エリアとなったなら次はこの階だ。

思ったよりも時間はあまり無い

「…柳さん」

「あぁ、そろそろ俺達も動こう」

俺は柳の方を向くと柳は俺の言いたい事をすぐに察し、頷いてくれる。

「新城達がまだこの階に居るかもしれない、油断せずいこう」

俺は釘をさすように夏喜と日向にそう言った。

「新城達とは前に夏喜さんを襲ってた人達ですか？」

「えぇ、そうよ、とってもこわ～くておそろし～人達」

「…なんとなくわかってました」

日向の問いに夏喜がそう返すと日向は表情を曇らせる。

「…何がだ？」

「その…、三人の中の一人が私の事をずっと見てて」

日向はブルッと身体を震わせながらそう話す。

なんとなく誰かは想像がついた。

俺はアニメやらのグッズが入ったリュックを背負った太った男を思い出す。

となれば日向が狙われる可能性が高くなる。

「日向、狙われたら絶対に戦おうなんて考えるなよ、逃げる事だけ考えろ」

「わかりました、最悪、日向が作った特製日向ボムを駆使して逃げ切ります」

「頼んだぞ」

日向の頭に手を置くと今度は優しく撫でてやった。

「王生、鈴音の事を任せても良いだろうか」

「……」

柳にそう言われて僅かに悩んだ。

雨宮自身の身体に力が入っていない以上、移動させるには手を引っ張っていくしかない。

敵に狙われれば行動が遅れるのは必然である。

だが仕方ないか。

柳は誰かが襲って来てもすぐに対処できるようにしなくてはならないし夏喜や日向に雨宮を引っ張らせるのも気が引ける。

「立てるか？雨宮」

俺が雨宮の手を引っ張ると彼女は力無く立ち上がった。

だがその状態は俺が手を持っていなきゃ軽く押した程度で倒れてしまいそうなほど弱々しい。

「…出発しよう」

柳から順に、しんがりを夏喜に任せ、俺と雨宮、日向を間に歩く。

当面の目的は慶吾、観月との合流だ。

柳は俺と出会う前から夏喜に二人について聞いたらしい。

慶吾達に会えればＰＤＡが集まり日向の首輪を外す事ができる。

柳としても慶吾達との合流は必要なのだから異論は出なかった。

まぁ次はこの階が侵入禁止エリアとなる事を考えれば移動は当然だったが。

俺達は階段に向けて進み出した。

―――

―――

「夏喜さん、この辺りに罠は無いのか？」

「ん、ちょっと待ってね」

俺の言葉に夏喜が立ち止まり、ＰＤＡを操作する。

移動は順調だった。

先頭を歩く柳が警戒してくれているので俺達も安心して後をついて行く事ができた。

そしてなにより大きいのが。

「大丈夫、辺りに罠の反応無しっと」

道中に見つけたＰＤＡのソフトウェア、その罠を探知する機能にあった。

夏喜のＰＤＡにインストールしたそれは地図上に罠の位置を映してくれる。

これで移動の際、罠を警戒して行動する必要がなくなった。

移動にかかる余計な手間が省けた分、思ったより早く四階へつきそうだ。

「面白そうですね、日向もやってみたいです」

「ん～、いいわよ、はい」

後ろでは日向が夏喜からＰＤＡを貸して貰い、いじくっている。

「ちゃんと罠の反応があったら教えろよ、お子様」

その光景が正に新しいおもちゃを買って貰った子供のようにみえたので思わずそう言った。

「わかってます、それと私は様と呼ばれる程偉くないですよ」

「そのわりには嬉しそうだよな…」

お子様と言われて喜ぶ子供が居るとは。

「ふっ…、楽しそうだな」

そんな俺達のやり取りに先頭を歩く柳が小さく息をついた。

「あぁ…悪い、雑談しながら歩く雰囲気じゃないわな」

「いや、日向のあの楽しそうな表情が見れたんだ」

柳はそう言うと恥ずかしそうに声を小さくした。

「…娘に何一つ父親らしい事はしてやれなかった、正直にいれば彼女ぐらいの年齢の娘にどう接すればいいかもわからない」

その後に情けないな…と言葉を続け。

話しを聞くと柳の奥さんと娘を殺したのはこのゲームを主催した組織では無いらしい。

柳の仕事上、恨みを買うなんて当たり前なのだろう。

軽く雑談を交えつつ、俺達は順調に進んでいく。

「……」

後は雨宮が元に戻れば新城達も相手ではなくなる。

順調だった。

いや…順調だ、と思わされていた。

ガコンッ

それは突然だった。

それは開幕の合図だった。

それは俺達にとって最悪の一瞬だった。

「!?」

柳の真下、”床が抜けた”。

「なっ――」

言葉を発するには余りにも短い《一瞬》。

「ぐっ…」

柳の身体は真下、つまり2階へと落下した。

もはや侵入する事が許されない2階へと。

「柳ッ！！」

叫んだ時にはもう柳の身体が見えるはずもない。

それは突然だった。

それは開幕の合図だった。

それは俺達にとって最悪の一瞬だった。

その一瞬、僅かな時間の間に俺達は最大戦力であった柳を失った。

第２９話：開戦を告げる絶望（後書き）

～本編おまけ小説～

【将棋】

夏喜「光一君～、仇…とって欲しいの」

王生「仇？いったいなんの？」

夏喜「将棋！日向ちゃんにボロ負けしちゃって」

王生「何やってんだ、あんたは…」

日向「玉以外全部取りました」

夏喜「うぅ…」

王生「まぁ勝負は無理だ、移動しなきゃいけないし、ケータイをいじってる場合じゃない」

夏喜「…それもそうね、ゴメンね、わがまま言っちゃって」

日向「なら…将棋板も駒もケータイアプリも必要無い将棋をしますか？」

夏喜「なに言ってるの日向ちゃん、そんな事できる訳…」

王生「目隠し将棋ができるのか？」

日向「はい、近所のお爺ちゃんに教わりました」

夏喜「えぇっ！？」

挿入話C：狩る者、追う者、企む者

「おい、なんだってせっかく手に入れたツールボックスをこんな場所に置いちまうんだよ？」

国枝には新城のしている事が理解出来なかった。

新城は罠を探知できる機能が追加されるようになるソフトウェアをインストールする事なく、ツールボックスを手放した。

「決まってんだろぉ？あのおっさん達に使わせるんだよ」

「はぁ？なんでわざわざ連中を有利にさせんだよ？」

「な、何か上手いやり方が浮かんだのか？」

国枝と藤木が新城にそう問い詰める。

「……」

その時新城は二人の問いとはまったく別の事を考えていた。

新城はこの階で決着をつけるつもりだった。

今自分の仕掛けた罠に柳がかかればそれは難しくは無いだろう。

―だとすると、最後までこのコイツらに付き合う必要はねぇな。

薄く口元に笑みを浮かべながら新城はポケットの中を探る。

新城は現在、三台のＰＤＡを所持していた。

一つは御子柴から奪った【５】のＰＤＡ。

一つは国枝と藤木に見せた【２】のＰＤＡ。

そしてもう一台。

国枝と藤木はそのＰＤＡを新城が所持している事さえ知らないだろう。

【８】のＰＤＡだ。

新城が目を覚ました部屋には二台のＰＤＡが置かれていた。

一つは【８】のＰＤＡ。

そしてもう一つは道化師の絵柄のｊｏｋｅｒカードだった。

その効果はＰＤＡの擬装機能にある。

新城はｊｏｋｅｒのＰＤＡを【２】に擬装させ、国枝と藤木に自身が【２】のＰＤＡの持ち主であると宣言した。

「ちょっと待ってな、今説明してやっからよ」

新城はそう言ってｊｏｋｅｒのＰＤＡを取り出し、【２】の擬装を解いた。

そして”ある番号”に再びｊｏｋｅｒを擬装させる。

「っと、こっちじゃなかったな、間違えた」

そう言って擬装したＰＤＡをポケットに戻すと今度は【５】のＰＤＡを取り出す。

首輪探知のインストールされたＰＤＡだ。

「国枝、お前のＰＤＡを見せてくれ」

「あん？なんでだよ？」

「お前のＰＤＡの地図と見比べた方が説明しやすいんだよ」

「チッ、変な真似したらぶっ殺すからな…」

新城がそう言うと国枝は渋々自分のＰＤＡを取り出し、新城に渡す。

「少しは信用しなって、曲がりなりにも俺達は《仲間》ってやつなんだからよ」

「へっ…、てめぇの口からそんな言葉を聞いたら寒気がするぜ」

「俺もだわ、似合わない台詞は言うもんじゃねぇな」

新城は小さく笑うと国枝のＰＤＡの地図を表示させる。

そして自分の【５】のＰＤＡのドアのリモートコントローラを起動させた。

「見な、こいつに映し出されている光点、こいつを操作してドアの開閉やロックができる」

「んな事はわかんだよ、だったらなんだっていうんだ？」

「なら…だ、このドアの開閉やロックはこの建物内で罠として扱われていると思うか？」

「ぴ、ＰＤＡの機能だって考えたら…罠じゃない、よな？」

新城の言葉に藤木が答える。

国枝の方はまだイマイチピンと来てないのか首を傾げている。

「そして俺が注目したのはここだ」

新城は部屋のドアでなく、床に映し出されている光点を指差した。

「ほら、国枝のＰＤＡを見て貰えればわかりやすいがここに部屋は無い、だが開閉やロックの機能が使える、どういう事かわかるよな？」

新城の口調は出来の悪い生徒に物事を教える先生のようだ。

「知るかよ、何が言いたいんだ？」

そんな口調にイライラした様子で国枝が答えた。

「床…に、開閉やロックが使えるって事…なのか？」

国枝に変わり、藤木がそう答えを出す。

「そういう事、正確には床ってより”３階と２階を繋ぐドア”ってところか」

これさえ使えば、自身の手で好きなタイミングを見て落とし穴を発動する事が可能となる。

しかもそれは建物内に予め配置された罠とは違うのだ。

罠を探知する事ができるＰＤＡを連中に拾わせれば当然使うだろう。

罠の反応がなければ床などの仕掛けを警戒する事はない。

新城はそこを利用しようと考えていた。

「まっ…、俺の説明はそんな所か」

新城はそい言いながら２台のＰＤＡを自分のポケットに入れる…。

「っと…、コイツはお前のだったな」

だがすぐに思い出したように国枝に【１０】のＰＤＡを投げ渡した。

「連中が階段を行くとしたら必ずここを通るはずだ、通れば…」

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

新城の言葉の途中、ＰＤＡのアラームがなった。

2階が侵入禁止エリアとなったのだ。

「床を開け、最低でもあのおっさんには下の階、いや…地獄に堕ちて貰うか」

新城はゆっくりと深呼吸をし、間を置いてそう言いながら笑った。

―――

―――

―

「くっはははははは！最ッッッ高だ！！」

そして今――、新城は自身のはった罠が成功した事に喜びを隠しきれなかった。

連中の中で一番厄介で強敵であろう柳は下の階に落とした。

後は侵入禁止エリアのルール違反で首輪が作動し、建物内の仕掛けが勝手に殺してくれるだろう。

おまけに柳と同じくらいに警戒していた雨宮だが、様子がどこかおかしい。

連中の中でまともに戦闘が出来そうな王生も怪我をしているのは確認している。

自分達に不利な事など、何一つ無いのだ。

「おっと…油断大敵ってな、連中だって拳銃くらいは持ってんだろう」

だが新城はすぐに湧き出る嬉しさをおさえると冷静になる。

最後の最後で失敗しましたでは話しにならない。

「あとは事前に話した作戦の通りに残った連中を殺せば終了だ、行くぜ？」

新城は確認するように国枝と藤木の方を見た。

「てめぇにいちいち言われなくてもんな事わかってんだよ！！」

腰からは日本刀をぶら下げ、その手にサブマシンガンを持った国枝がそう反抗するように言葉を返した。

「くっはは！王生ぃ～、ここがてめぇの墓場だぜぇ！！」

サブマシンガンを肩に置き、喜びの表情で笑う。

「……」

対する藤木はライフル銃を手に何か言いたそうにしていた。

「?、どうしたんだよ?」

「い、いや…なんでも」

だが新城の言葉に藤木はそう言って首を横に振った。

この時、藤木には一つの計画があった。

それは新城と国枝には何も言わず、一人でずっと考えていた計画だ。

「…さぁて、仕上げだ、派手に行こうぜ」

新城の言葉を合図に国枝と藤木が各々の銃を手に王生達へ突撃した。

第３０話：絶望が沸き立たせる本能（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：５．２
雨宮　鈴音：２：７．６
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ
春野　夏喜：４：６．１
新城　　渉　：８：２．８
国枝　克美：１０：３．７
藤木　洋介：３：４．９
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ
藤原　慶吾：Ｊ：４．４
神北　観月：７：６．４
中村　　真　：？：３．６
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ
速水　日向：Ｋ：８．７

第３０話：絶望が沸き立たせる本能

「なっ―」

あまりに一瞬の出来事に言葉が出なかった。

俺達の目の前で柳の居た場所の床が抜け、柳は下へと落下した。

床が抜ける仕掛けとなると…罠か？

夏喜は罠の反応は無いと言っていたが。

「嘘…、そんな」

夏喜の方を見ると夏喜もただ唖然と立ち尽くしている。

「柳のおじさん！！」

ガタンッ

日向が柳の落ちた床に向かうも床はその寸前で閉じた。

―なんだ？一体何が起きた？

思考を巡らせる前に俺の視線は目の前の現実を見た。

事態は俺達に現在の状況を理解させる時間さえ与えないつもりらしい。

「みんな！とにかく横道に入れ！！今すぐだ！！！」

だから俺は強く叫ぶ。

目の前にこちらに向けて突撃してくる国枝と藤木を見た。

遠目ではっきりとしないがその手にある銃は俺が今持つ拳銃とは違う。

「光一君！？」

俺の声に反応した夏喜も国枝と藤木の姿に気付いてくれた。

「おじさん…、おじさん！おじさぁぁぁぁぁあん！！」

だが日向は…、柳の落ちた床の所をガンガンと叩いている。

「日向ちゃん！こっち！！」

夏喜がなんとか日向の腕を引っ張って横道へ入る。

俺も夏喜の所に行こうとした瞬間だった。

ズダダダダダダダダッ

豪雨のような激しい銃声が通路に響き渡る。

国枝がこちらに向けて銃を撃ってきた。

「くっ！」

通路の真っ只中に居た俺は雨宮の腕を掴み、床に伏せた。
国枝はこちらに向け走りながら銃を撃って来ているぶん、この方が当たる確率を減らせると考えたからだ。
だが実際はこんな事気休め以外のなんでも無い。

「クソッ！」

「光一君！！」

横道から夏喜が俺に向けて叫んだ。

「馬鹿野郎！さっさと逃げろ！！」

俺は雨宮の手を強引に引っ張ると近くの横道に滑り込む。

「今は逃げろ！とにかく…できるだけ奴らから遠ざかるんだよ！！」

――

――

「くはは！逃がすと思ってんのかよ！！」

王生達の言葉を聞いた国枝が笑う。

元々新城達に夏喜達を追う考えはなかった。

新城は殺人に対する優先順位、つまり誰から殺していくかを事前に国枝と藤木に話していた。

まず第一に柳。

そして雨宮と王生だ。

例えここで夏喜と日向をとり逃したとしても首輪の探知機能を使えばすぐに居場所は知れる。

それよりも様子がおかしいうちに雨宮を殺しておいた方がいい。

王生を狙う国枝もそれに賛同し、新城の思い通りに事は進んでいた。

だから国枝は夏喜と日向の逃げて行った横道を通り抜ける。

だが…、この男は違った。

「ハァッ！フゥッ…、フゥ～！！」

藤木は走って来た事によって息を大きく乱れさせ、そこに立ち止まった。

「あん？おい！たらたらしてんじゃねぇよ！愚図が！！」

国枝がそれに気付いて立ち止まり罵声を飛ばすが藤木は動じていない。

「う、うるさい！俺は俺の好きにやるんだよ！！」

「はぁ？なんだと…てめぇ！！」

国枝が藤木にサブマシンガンの銃口を向けた。

「も、もう我慢しない、限界だ…、俺は、俺は！！」

だが藤木は国枝を相手にせず、そのまま夏喜と日向を追いに走って行った。

「チッ…、行っちまいやがった」

藤木が怯えて謝るものだと考えていた国枝は反応に遅れてしまった。

「なっ…、あのデブ、やりやがったな！！」

この出来事は新城にとって計算外であった。

藤木を完全に手駒として考えていた新城は藤木の様子に気付かなかったのだ。

新城も国枝も藤木を見くびっていた、だが、それが幸いし藤木は新城達からの離脱を成功したのだ。

「フーッ！フーッ！！」

鼻息を荒くさせ、藤木が走る。

彼の狙いは一つ。

ただ自らの欲望にその身体を走らせた。

――

――

新城と国枝、藤木の間で起こった出来事は時間にしてほんの数十秒だろう。

だがその数十秒は王生達の命運に大きく左右していた。

「はぁッ！はぁッ、はぁッ…

王生達はある程度国枝と距離をとれていた。

とはいえあのまま追い掛けられるよりはマシという程度のものだ。

「こんな時に…何をやってんだよ！あんたは！！」

「……」

変わらず、雨宮の目に光りは無い。

ただ王生が手を引っ張ればそちらに向かう、まるで凧のように。

こんな状態では国枝にすぐ追いつかれるだろう。

「くそ…どうする」

俺はまずＰＤＡの地図をチェックした。

国枝達から逃げるのに一番良いルートを見つける為だ。

「チッ…」

だが、それはすぐに無駄だとわかる。

この先、道の別れている所はあるが最終的には行き止まりになるものばかりだ。

「王生ぃぃぃぃ！どこに行きやがったぁ！！」

「！？、来たか…」

通路に響く国枝の怒声。

「隠れても無駄だぁ！俺と勝負しやがれぇ！！」

サブマシンガンをいつでも撃てるように構えた国枝が叫ぶ。

「くははは！てめぇの持つ拳銃やナイフより俺は良いのを持ってんぜぇ！！」

国枝は高らかに笑いながら一つの部屋のドアに手をかけた。

ガチャッ

「…チッ！糞がッ！！」

中が無人な事に国枝は舌打ちをし。

ガタンッ

乱暴にドアを蹴り閉めた。

「こんな事なら新城に探知機能をやるんじゃなかったぜ！！」

…探知機能？

「どうりでタイミングが良い訳だ…」

迂闊だった。

この広い建物では他のプレイヤーを探して見つけるという事にも骨が折れるはずだ。

ゲームを順調に進められるように組織がそういった物を用意してい

るというのは考えればわかる事だった。

「臆病者が！どこに逃げたって必ず追い掛けて殺してやるからな！逃げまわるだけ無駄なんだよぉ！！」

「好き放題言いやがる…」

しかし国枝の俺に対する執念は異常だ。

俺が奴の腕に矢を突き刺した事が原因か？

「……」

今、この状況で国枝からは逃げられないだろう。

だったらどうする？

「…決まってる」

俺は拳銃を強く握りしめた。

こんな所で死んでたまるか…。

退路を防がれたなら前に進む。

前に進むという事は国枝達と戦い、倒すという事だ。

「…アホか、俺は」

倒すという言葉は単なる逃げだ。

もうわかっている。

奴らが俺達を殺しに来るのならば俺が奴らを殺してやる。

殺される前に殺すしかない。

「ふーっ…」

呼吸を落ち着かせる為に息を強く吐いた。

不思議と覚悟を決めてしまうと頭は冷静になっていく。

冷静に…連中を殺すやり方を考えるようになる。

幸い、奴らは強力な武器を手に入れ、油断している。

自分達”だけ”が強力な武器を持っていると。

ならばその驕りを利用してやる。

国枝の武器を奪い、新城と藤木を殺す。

どちらにせよ、国枝に対しては今の装備のまま挑まねばならないな…。

正面からの戦いはまず無い。

日本刀はともかくサブマシンガンの餌食になるのは目に見えている。

拳銃とサブマシンガンでは拳銃の不利は明らかだ。
ならば…不意打ちか？
「…国枝の注意を引き付けられるようなもの」
言葉に出して、その案はすぐに思い浮かんだ。
だが実行にうつすとなると躊躇してしまう。
俺は…あいつに、殺人の手伝いをさせてしまうのだ。
「いい加減諦めて出てきやがれ！王生ィイッ！！」
国枝の怒声が近くなってくる。
今の状況は迷えばそれだけ危険になっていくだけだ。
「…悪い」
懺悔にもならない一言を呟くと俺はＰＤＡの機能の一つを起動させた。
慶吾のＰＤＡと通話ができる起動だ。
―まさか…出ないなんて事は無いよな？
一瞬そんな不安が過ぎったがすぐに通信が繋がる。
『王生少年か？』

だが通信に出たのは予想外に慶吾ではなく観月だった。

「観月…？慶吾はどうした？」

『さんをつけろよ、デコ助野郎…と言いたい所だが、なんだ？慶吾少年に用なのか？』

一瞬、いつもの調子でふざけようとした観月だったが俺の切羽詰まった様子に真面目な口調に変わる。

『慶吾少年ならば今シャワータイムだ、なんなら後でかけ直すが…』

「い、いや…、あんたでいい、少し頼みたい事がある」

一瞬、慶吾に頼まなくて済む…、と考えた罪悪感が頭によぎった。

「今から二分後に俺にかけ直してくれ」

『…それだけか？』

「あ、あぁ…、それだけだ、頼む！！」

『そうか…君も必死なのだな、了解した』

観月は俺に多くは聞かず、すぐに了解してくれた。

「…これでよし」

俺は通話を終えるとＰＤＡをポケットにしまう。

後やる事は…。

「……」

俺はすぐ横に居る感情の無い抜け殻の雨宮を見た。

「いい気なもんだ…」

小さく笑うと雨宮の手を引き、ロッカーの方へ向かう。

「狭いだろうが、ちょっと我慢してくれ」

雨宮をロッカーの中に隠れさせ、戸を閉める。

連中がこちらの位置のわかるＰＤＡの機能を所持しているのならば…こんな事をしても無駄だろうが、やらないよりはマシだろう。

「ふぅ…」

急場仕事ではあったが…準備は整った。

国枝を殺す準備が。

「さっさと出てきて俺と勝負しやがれぇ！王生ィイイッ！！」

国枝はもうすぐ近くまで来ていた。

「…俺との勝負を望んでいたな、国枝」

あとは俺が拳銃の引き金を引ければ良い。

拳銃の扱い方は柳に教わっている。

「…後悔させてやる」

第３０話：絶望が沸き立たせる本能（後書き）

～本編おまけ小説～

【野郎】

王生「馬鹿野郎！さっさと逃げろ！！」

夏喜「野郎？（びきっ…）」

王生「すんませんでしたぁ！早くお逃げになって下さいぃぃぃ！！」

分岐話：本能が選択する決着（前書き）

【ＢＥＴ】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ

王生　光一：Ａ：５．２

雨宮　鈴音：２：７．６

　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ

春野　夏喜：４：６．１

新城　　渉　：８：２．８

国枝　克美：１０：３．７

藤木　洋介：３：４．９

？？？？：？：Ｄｅａｔｈ

藤原　慶吾：Ｊ：４．４

神北　観月：７：６．４

中村　　真　：？：３．６

御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ

速水　日向：Ｋ：８．７

分岐話：本能が選択する決着

「王生ィィィイッ！！！

王生を呼びながら国枝は通路を歩く。

その表情は険しいものに変わっていた。

「チッ…、がっかりだぜ！てめぇはそんなに臆病者だったのかぁ！？」

―違うだろう？そうじゃねぇはずだ。

「こんな状況になったらてめぇなら考えるだろう！この俺を殺すってなぁ！！」

国枝が欲していたのは殺人への渇望だった。

それも弱者を一方的に殺害するというものではない。

殺し合いという名の決戦だ。

「一目でわかったぜ！てめぇは常に最も手っ取り早いやり方を考えている！このゲームにおいてそれは殺人だろぉ？」

国枝の言う事は的を得ていた。

解除条件が他人の殺害では無い者でも人を殺した方が早い解除は多い。

そして王生は常にそれを考えていた。

「そういや新城から聞いたぜぇ！てめぇ、俺を使ってルールを試そうとしてやがったよなぁ！！」

一階、エントランスホール。

国枝が一人でエントランスホールを出た時、新城が追い掛けていた。

その時、新城が国枝に伝えたのだ。

国枝に王生に対する執念の念を植え付ける為に。

「くははは！だが安心しなぁ！それが普通さ！てめぇも俺も正常なんだ、おかしいのは薄っぺらい平和語ってる連中だ！！」

国枝にとっては夏喜のような平和的に解決しようという者が気に喰わなかった。

「てめぇはそんな連中とは違うんだろぉ？殺したかったはずだ…、ずっとなぁ！！」

国枝が通路に叫ぶ声は虚しく響くだけだった。

王生は姿を見せない。

ピロリンッ、ピロリンッ、ピロリンッ。

その変わり、国枝にはＰＤＡのアラーム音が聞こえた。

ピロリンッ、ピロリンッ、ピロリンッ

アラーム音は鳴り止む事無く、聞こえてくる。

すぐ近くの部屋からだ。

「くははは！そこかぁ？王生ィイッ！！」

国枝はすぐに部屋のドアを乱暴に開けた。

すぐに発射できるようにサブマシンガンを構える事は怠らない。

ピロリンッ、ピロリンッ、ピロリンッ

だが部屋は無人であった。

無人の部屋にＰＤＡのアラーム音だけが虚しく響いている。

「なっ…！どこに隠れやがった！！」

国枝が部屋を見渡している時。

ギィッ…

国枝の背中、後ろの部屋のドアがゆっくりと開いた。

―――

「かかったな…」

ゆっくりと国枝の背中に拳銃を剥ける。

鳴り止む事の無いＰＤＡのアラーム音に国枝の神経は集中している。

撃つならば今しか無い。

「べらべらと喋るその口…黙らせてやる」

俺は柳に教わったように拳銃を構え、国枝の身体に狙いを絞った。

狙うならば胴体だ。

頭を撃ち抜けば一撃で仕留められるだろうが如何せん、的が小さい。

撃ち直しは許されないのだ。

国枝に致命傷さえおわせてしまえばいい。

俺はゆっくりと拳銃の引き金に指をかけ。

ダァンッ

その引き金を引いた。

「グハァッ！！」

銃弾は国枝の背中に命中し、国枝は押し込まれるように部屋の中へとおちた。

ガシャンッ

同時に持っていたサブマシンガンを床へと落とす。

「…ふぅ」

息を吐くとすぐに気を引き締めた。

まだ終わりじゃない。

国枝はここで確実に殺しておかなければならない。

―トドメを刺す。

俺はすぐに国枝の居る部屋のドアを開ける。

「！？」

そこに国枝が立っていた。

平然と。

その手の日本刀を大きく上へ振りかぶり。

「くはは！ようやく会えたなぁ！！」

国枝は俺の姿を見て震えるように大きく笑うと。

「会いたかったぜぇ！王生ィッ」

日本刀を…振り下ろした。

「ッ、。、」

突然にして予想外な出来事に対応する為に俺は無理矢理身体を動かした。

ブォンッ

間一髪…、俺が後ろに下がった事で国枝の日本刀は空を斬る。

だがその振りは想像以上に速い。

構え方を見れば国枝が日本刀に対してまったくの素人である事はわかったが、振りは速さは恐ろしいものがある。

「くっはははは！やるやるぅ！よく避けたじゃねぇか！！」

ブンッ

国枝は床を蹴り、俺に近付きながら振り降ろした日本刀をそのまま振るう。

「クソッ！！」

俺はとにかく避ける事に集中した。

幸い、国枝の振りは速いが直線的で大振りだ。

しかしどうして国枝が平然と立っていれる？

そこで俺は国枝の背中に血さえ流れていない事に気付いた。

「なんだぁ？俺が生きてんのがそんなに不思議かぁ？」

国枝はそんな俺の様子に気付いたのか日本刀を振るうのを止め、楽しそうに笑う。

「そういや言い忘れてたなぁ！俺がてめぇより良い物持ってんのは何も武器だけじゃないんだぜぇ！！」

そう言いながら国枝は自分の服を親指で指差した。

「そうか、防弾チョッキ…」

そういえば柳が言っていた。

柳の持つデザートイーグルなら薄い防弾チョッキなら貫けると。

国枝の着ている防弾チョッキがどんな物かはわからないが俺の拳銃では銃弾は国枝の身体に届かない事はわかった。

ダメージは与えられるだろうが致命傷にはならない。

拳銃と日本刀、状況を知らない者がそれを見れば圧倒的に飛び道具である拳銃が有利に見えるだろう。

だが防弾チョッキという物を含めると話しは違う。

こちらは一太刀でも貰えば致命傷だがこちらが致命傷を与えるには限られた箇所、つまりは防弾チョッキで守られていない所を狙わなければならない。

頭、腕、足、首。

どれも的が小さく、狙いを定める時間を国枝はくれないだろう。

ならば防弾チョッキがあるとわかっても胴体を撃っていくしかないのか？

俺の持つニューナンブの総弾数は五発。

すでに一発撃ったので残りは四発だ。

―駄目だ、無駄撃ちは出来ない。

「さぁ始めようぜ！殺し合いよぉ！！」

国枝が日本刀を手にこちらに向かって来る。

「くっ！？」

ダァンッ

反射的に国枝の頭に向けて撃ってみるが弾は大きくそれた。

「くははは！ハズレだぜぇ！！」

ビュッ

国枝が縦に大きく日本刀を振るう。

―避けられない。

拳銃を撃った直後の反動、時間にすれば一秒も無かっただろうが、身体は国枝の斬撃に反応できずにいた。

「くっ！！」

なりふり構わず、無我夢中で俺は行動を起こす。

「ヒャッハハハハハ！貰ったぜぇ！！」

ガキンッ

それは奇跡ともいえた。

国枝の日本刀は俺の持つ拳銃にぶつかり、止まった。

グンッ

変わりに俺の拳銃が犠牲となり、弾き飛ばされ、床に転がる。

「くっはははは！しぶといなぁ！だがそこからどうするかなぁ？」

「……」

床に落ちた拳銃を拾う時間は無い…、国枝がそれを見逃すはずが無い。

俺は何も言わず、ナイフを構える。

俺の持つ最後の武器でもあった。

「あーん？おいおい…、正気かぁ？本気でそいつで俺とやり合おうってかぁ？」

国枝は次に俺が何をするか楽しみにしていたのだろう、その表情の落胆は大きかった。

「がっかりだぜ…、もう手が残ってねぇなんてな」

国枝はゆらりと刀を構える。

「つまんねぇ幕切れだが…、もうてめぇに用はねぇ！！」

ヒュンッ

「ツッ！！」

俺は身体の神経の全てを国枝の振るう日本刀を避けるのに集中させた。

国枝が横に大きく振るった日本刀をしゃがみ込んで避ける。

「潔く諦めなぁ！王生ィィィィイッ！！」

間髪入れずしゃがみ込んだ俺に向けて国枝が縦に刀を振るう。

ブンッ

俺は床に滑り込みながら転がって日本刀を避けると部屋の隅、壁へと駆けた。

「くは！くっはははははは！残念だが、そっちは行き止まりだぜぇ！！」

国枝はすぐに俺に追いつくと日本刀を大きく振り上げた。

「ちょこまかとしやがって…もう逃げられねぇだろ！！」

ブンッ

快感に浸るように笑うと、国枝は振り上げた日本刀を俺に向けて振り下ろす。

国枝は確信していただろう。

日本刀は俺の身体を斬り、それで決着がつくと。

ガキンッ

「なっ―」

だから振り下ろした日本刀が俺の身体に届く前に途中で何かにぶつかり、止まった事にその目を丸くさせた。

訳がわからないという表情だ。

「ハァッ…、ハァッ！逃げ回ったんじゃねぇ、誘い込んだんだ…」

俺は息を荒げながらも素早く国枝の喉元にナイフを突き付けた。

俺と国枝の頭上には壁に設置され、わずかに飛び出した棚があった。

国枝の日本刀は俺に届く事なく、日本刀を振り下ろした曲線上にあるその棚にぶつかり、止まる。

「王生ィィィィィィィィイッ！！！」

「ここなら…防弾チョッキも関係ねぇだろ」

勝敗は決した。

だが決着はまだついていない。

だから俺は決着をつける為に――

《A》【国枝を殺すのを躊躇う】

《B》【国枝の喉を掻き斬る】

分岐話：本能が選択する決着（後書き）

～本編おまけ小説～

【国枝、一話の中で二度も罠にかかる男】

――

――

そこに国枝が立っていた。

平然と。

その手のマイクを持って。

「くはは！ようやく会えたなぁ！！」

国枝は俺の姿を見て震えるように大きく笑うと。

「会いたかったぜぇ♪会いたかったぜぇ♪会いたかったぜぇ♪イエイッ♪♪」

マイクを手に、振り付け有りで踊りだした。

「ッ、。、」

突然にして予想外な出来事に対応する為に俺は唖然となった。

「会いたかったぜぇ♪会いたかったぜぇ♪会いたかったぜぇ♪イエイッ♪王生ィィイイッ♪」

ダァンッ

拳銃の引き金は自然と引けました。

特別話：分岐話について（前書き）

※今回は前話にある分岐話について司会を観月に、アシスタントを慶吾に任せて唯と御子柴を交えたギャグ風味で説明していこうと思います。

『シークレットゲームにギャグなんぞ必要無い！！』
という硬派な方には――。

Aルート【このまま読み進める】
Bルート【近々更新されるBルートの小説へ】

を選択した方から読み進めて下さい。

次更新は二つのルートを同時更新予定なので作者の仕様上、更新が遅れるかもしれないです。

特別話：分岐話について

観月「しぃくれっとぉげぃむ…」

慶吾「Ｅｐｉｓｏｄｅ2分岐特別話」

慶吾「スタートッ！！」

観月「たぁとぉ…」

慶吾「初っ端からやる気無しですか？」

観月「ふむ…昨日は徹夜だったからな」

慶吾「へぇ…、警察ってやっぱり仕事大変ですね」

観月「いや、借りていたアニメの返却日が今日だったからぶっ通しでな」

慶吾「自業自得じゃないですか…」

観月「Ｅｐｉｓｏｄｅ1が終わり、次のルートはどう考えても私だろう…、と思っていた時期が私にもありました、司会の神北　観月だ」

慶吾「アシスタントを勤めるのはＥｐｉｓｏｄｅ1で見せ場のほとんどをコウにくわれ、Ｅｐｉｓｏｄｅ2では数話にしか出てない元主人公の藤原　慶吾です」

慶吾「…言ってて悲しくなって来た」

観月「奇遇だな、私もだ」

慶吾「さて、そんなＥｐｉｓｏｄｅ2不遇組の二人でお送りするのは…」

唯「あの～…」

観月「ん？どうした？唯君」

御子柴「真のＥｐｉｓｏｄｅ2不遇組は我々二人だと思うのだが…」

観月「まぁ君達は影薄いからな」

唯「あの…Ｅｐｉｓｏｄｅ1ヒロインですが」

観月「ヒロインを自称したいのならツンデレ属性か妹属性か天然属性を引っ提げてからにすべきだ」

慶吾「それ、単に観月さんの好みってだけでしょ…」

御子柴「しかしこのメンバーが集まるのも久しぶりだな…」

唯「Ｅｐｉｓｏｄｅ1の中盤以来ですよね」

慶吾「みんなで前話にあたる分岐話の説明…というのが主旨ですよね」

御子柴「分岐…とはいったい何かな？観月君」

観月「ふむ、簡単にいえばギャルゲー式選択肢システムだ」

慶吾「そりゃ身も蓋も無い！！」

観月「人生において選択肢というのは重要だ、もちろん現実でもな」

唯「そうですね」

観月「世の中にはみんなで一緒に様子を見に行く事にしたばっかりに死んでしまう事だってある」

慶吾「それ、明らかに特定の選択肢言ってませんか？」

御子柴「しかし…、原作、シークレットゲームやキラークィーンには選択肢と言えるものがないな」

唯「そうですね…、共通ルートみたいなのが無いですね」

観月「それはこのシークレットゲームというコンセプトである以上仕方ないとも言えるな」

慶吾「どういう意味ですか？」

観月「例えば…そうだな、原作で私と同じ【7】のＰＤＡを持った漢が居たろう」

唯「はぁ…そういえば」

観月「彼はＥｐｉｓｏｄｅ1では惜しまれながらも最初の犠牲者となり、ゲーム開始早々に散ってしまった訳だが、これが共通ルート

だった場合はどうだ？」

慶吾「毎回最初の犠牲者となってゲーム開始後にすぐ死にますね」

観月「そうだ！他Ｅｐｉｓｏｄｅにある彼の活躍を見る機会は延々に無くなる！！」

漆山『わしは金には興味無いが…必要ならやるぞ』

漆山『スマートマシンガンというものを…知っているか？』

漆山『このゲームを見てるみんな…、わしと勝負しようか？』

漆山『さぁ…どうするかね？君も…わしを見捨てるかね？』

観月「っといった他Ｅｐｉｓｏｄｅで見せた彼の素晴らしい活躍っぷりが…」

慶吾「いや…そんなシーン一つも無いから、あとなんか腹立つ」

観月「まぁこういったデスゲーム物は人が死んでからが本番だ、だが共通ルートで人が死ねばそのキャラの活躍は不可能だ」

御子柴「だから各シナリオをＥｐｉｓｏｄｅとして分けた…そういう事か」

唯「あの～…、それじゃあなんでＥｐｉｓｏｄｅ２で分岐話なんですか？私も御子柴さんも死んでますが…」

観月「…そんな時もあるさ」

唯「！！」

御子柴「しかし肝心の選択肢が…なんというか物騒だな」

慶吾「コウが国枝を殺すかどうか…か」

観月「そうか？学園内で女の子を見かけて声をかけるかどうか…みたいなものだろ」

慶吾「…そんなわかりやすい選択肢でも無いと思うけど」

観月「国枝を殺さない場合は国枝の好感度がアップして国枝ルートへ、殺せば好感度ダウンといった具合に」

慶吾「いや、殺したらダウンも何も無いというか…」

御子柴「確かに生殺与奪の選択肢だ…、選択肢としてはずいぶん意地が悪いな」

観月「作者は意地が悪いからな、しかも汚い」

唯「なんでそんな選択肢にしたんですかね」

観月「あぁ、それは動画と一緒にコメントが流れる動画サイトがあるだろ」

慶吾「あぁ、ありますね」

観月「作者がそれでシークレットゲームの動画を見た時に『ここは殺す所だろ』や『なんで見逃すの？』みたいなコメントが目立ってな、作者自身、そう考えていたのもあってじゃあ選択肢にしてみようという考えになった」

慶吾「…本当に意地が悪いな」

唯「それで…これからどうするんですか？」

観月「ふむ、この選択ではあなたが他人にどれ程支配されたいか、つまりドM度を知る事が出来ます」

慶吾「…は？」

観月「Aを選んだあなた、あなたは…」

慶吾「いや、心理テストじゃないんだから、つーかドM度って何！？」

観月「軽いジョークだ」

唯「観月さんのジョークは重いです…」

観月「ふむ…、Aを選んだ人はこのまま読み進める、Bを選んだ人は近々更新予定のBルートの小説へ、といった感じにしようと思っている」

慶吾「二つのルートを同時更新でやる気なのか？この作者の怠け癖からして無理のある気が…」

観月「くくく、いや…その心配は不要だ」

慶吾「…？」

観月「この作者は意地が悪いという事だ、さて…肝心の次の更新はＡとＢを同時に更新しようと思っている」

唯「どちらを選んでもすぐに続きから見れるんですね」

慶吾「どちらを先に見るかは選択肢を選んだ人の自由…って事ですか」

観月「まぁ選択肢の時のセーブは基本だからな、ロードしてＣＧを回収すればいい」

慶吾「また身も蓋も無い…」

御子柴「……」↑話しについていけないので黙っている。

観月「シークレットゲーム、Ｅｐｉｓｏｄｅ2もそろそろ佳境といった所だ」

慶吾「序盤は全然出番の無い俺達だけどまだ活躍のチャンスは残って…いるよな？」

唯「…まだ生き残ってますもんね」

慶吾「ゆ、唯さん！？」

御子柴「我々の所もそう居心地は悪くないぞ？」

慶吾「変な勧誘は止めてください」

観月「シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ2もいよいよ佳境、より激しくなる戦いや心理戦が目白押し…の予定だ」

唯「私と御子柴さんはもう死んじゃいましたが、これからもＥｐｉｓｏｄｅ2をよろしくお願いします」

御子柴「思わぬキャラの活躍や大どんでん返しもあるかもしれんからな」

慶吾「……」

観月「どうした？慶吾君」

慶吾「…もう言う事が残ってない」

観月「ふむ、だろうな、たが何か言わないと格好がつかないぞ」

慶吾「何か…って言われてもな」

御子柴「そうだな、確かにここは一つ、決めて欲しい所だな」

唯「お願いします、慶吾さん」

慶吾「あー…うん」

慶吾「原作も続編の発表がされ、二次創作もどんどん増えて来て絶好調なシークレットゲームシリーズをこれからもよろしくお願いし

ます」

観月「それだけか？」

慶吾「まぁ…一応」

観月「どこぞの回し者かのような宣伝文句だが…、まぁいい、それでは皆々様、近い内にまた会おう」

特別話：分岐話について（後書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：５．２：無し
雨宮　鈴音：２：７．６：ナイトホークさん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：６．１：無し
新城　　渉　：８：２．８：無し
国枝　克美：１０：３．７：ナージャさん
藤木　洋介：３：４．９：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：無し
中村　　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．７：マッチさん

観月「とまぁ、これが現在のＢＥＴ状況だ」

慶吾「見てて悲しくなってきた…」

観月「奇遇だな、私もだ」

慶吾「以外だったのは中村や国枝といった主人公側と対立するキャラにもきちんとＢＥＴされてるって事ですかね」

観月「そうだな、有りがたい事だと思う」

慶吾「もし自分もＢＥＴしたのに書かれてないという人が居たら是非教えて下さい」

観月「もちろん、これからのＢＥＴも歓迎だ、私ならば大歓迎だ」

慶吾「卑怯じゃないですか」

観月「ふむ、損はさせませんぜ旦那、…という奴だ」

唯「もちろん、私達へのＢＥＴも」

御子柴「大歓迎だ、まだ何が起こるかわからんからな」

観月「じつは生きてました、みたいな感じでな」

慶吾「そんな超展開…」

観月「いや、案外考えられるぞ、じつは生き返れるアイテム持ってて生き返ったが修行の為に洞窟に篭ってて終盤に現れるみたいな…」

慶吾「それ、明らかにモデルの人居ますよね」

第３１話：殺し合いの待ち合わせ（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．１：無し
雨宮　鈴音：２：７．６：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：６．１：無し
新城　　渉　：８：２．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：７．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：４．９：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．７：マッチさん

第３１話：殺し合いの待ち合わせ

「―ッ」

不思議な事に顔をしかめているのはナイフを突き付けられた国枝よりもナイフを手にしている王生の方であった。

ほんの少しでも腕を前に出せばナイフは国枝の喉に突き刺さる。

後はそれを横にスライドさせてやればいい、それで目の前の敵は殺せる。

「――ッ」

頭では理解していた、国枝は野放しに出来ないと。

このままコイツを生かしておいても危険しか生まないと。

「――――ッ」

だが…それでも王生はその手のナイフをこれ以上動かす事が出来なかった。

「あん…？」

いつまでたっても振るわれる事のないナイフに国枝は眉を細めた。

「おい？おいおいおいおい！なんなんだァ！？てめぇ今更人は殺せないとか言うんじゃねぇだろうなァ！！」

ナイフを喉に突き付けられながらも国枝は叫んだ。

「違うよなァ！てめぇはそんな奴じゃねぇよァ！違うんだろ！早くそれを証明して見せてみなぁ！！」

「ッ！」

王生の身体は自然と一歩後ろに下がってしまった。

状況だけを見れば圧倒的に有利に見えたが国枝の剣幕に押されてしまう。

「く、そ…」

ナイフを持つ手が震える。

王生はそんな自分の身体に何より違和感を覚えた。

まるで身体は人を殺す事を拒否するように動かない。

「！？」

その瞬間、王生はナイフを引っ込めるとバックステップで国枝から距離をとった。

それは国枝の殺害を諦めた…という訳では決して無かった。

国枝の背後、部屋の入り口であるものを見たのだ

「どういうつもりだァ！てめぇ俺をナメてやがんのか！！」

その王生の行動が国枝の怒りを買う。

勝手なものだ…と王生は冷や汗を流しながら考えた。

なぜなら今、この部屋の入り口には。

「まぁそう言ってやるなよ、国枝、コイツは今正しい事をしたんだからよ」

サブマシンガンを持つ新城が笑っていたのだから。

その横には感情の無い瞳のままの雨宮も居た。

「正しい事が出来るお前なら当然、自分が何をすればいいかわかるよなぁ？」

そう言いながら新城は雨宮にサブマシンガンを向ける。

銃口を向けられたというのに雨宮の表情は何一つ変わらなかった。

「……」

その事が王生をいらつかせた。

ガチャンッ

王生がナイフを床に捨てた。

「よぅし、素直だ、そのまま動くなよ」

王生が新城を睨みつけるが当の新城はそんな事気にもしていない。

いや、王生が睨みつけていたのは新城だけではなかった。

新城の隣。

銃口を向けられた今でも身動き一つしない雨宮。

「ンだァ！てめぇ！新城！！」

ふと、不意に国枝が烈火の如く怒声をあげた。

「余計な真似するんじゃねぇよ！ぶっ潰すぞ！！」

「…はぁ？お前何言ってんだ？ついさっきまで殺されそうだったくせによ」

国枝の怒声が自分に向けられていると知った新城は呆れた声を出した。

「うっせェ！こんなくだらねぇ勝敗の付き方なんざつまんねぇんだよ！！」

新城と国枝が討論を始めたが王生にとってどうでも良かった。

ただ雨宮にいらついていた。

銃を突き付けられた今でも行動を放棄している雨宮。

王生は雨宮にどんな過去があったのかはわからない。

ただ今の雨宮を見れば先ほど、国枝と殺し合った死闘が馬鹿らしくなった。

王生は生きたいと願っていた。

そして守りたいとも思った。

それなのに雨宮は生きる意思も気力も見せない。

「…ふざけんなよ、雨宮」

王生の呟いた一言は国枝と新城の討論を停止させ、その注目を集めた。

しかし王生はそんな二人の視線等気にもとめなかった。

それよりも王生が気になったのは雨宮だった。

雨宮の視線が王生に向けられていた。

その目は感情の無いままであったが、雨宮は王生を見ていた。

「あんたは何をする為にここに来た?そうやって何もせず!何も成さず!ただ殺される事で満足かよ!!」

だから王生は言葉を続ける。

雨宮は言っていた。

自分には任務があると。

「違うだろ！あんたにはやるべき事があるんだろ！いつまでそうやってるつもりだ！！」

「！？、国枝！王生を殺せ――――」

そう言い終わらぬうちに、新城は自分の身体が宙に浮いた感覚を感じた。

グルンッと新城の身体が回転し、新城の頭が床に打ち付けられる。

「ぐはっ！？」

視線が天井に変わった新城は立ち上がり、自分を見下ろす雨宮を見た。

「な…なんだと」

新城はその姿を確認すると同時に意識を失った。

頭を強打した事が原因だろう。

「…雨宮！」

「光一！しゃがめ！！」

「！？」

雨宮の言葉に王生はすぐに反応し、王生は身体を低く落とした。

ブォンッ

日本刀を持った国枝の横斬りが王生の頭上をかすめた。

「国枝ッ！！」

「ンだぁ？よそ見とは余裕だなァ！！んならさっさと勝負再開と行こうぜェ！王生よォ！！」

スチャッ

「…あん？」

吠える国枝に雨宮が新城から奪ったサブマシンガンを向けた。

その一連の動作は洗礼されたように素早い。

「…動くな」

雨宮の静かに、威圧するような一言に国枝はぎりっと歯を食いしばる。

「どいつもこいつも人の邪魔ばっかりしやがる！まったく…頭にくるぜ！！」

サブマシンガンを向けられてもなお、国枝のギラついた獰猛な瞳は

変わらない。

「光一、国枝の武器を回収してくれ」

雨宮はそんな国枝を無視し、そう言った。

「…あぁ」

王生は雨宮がサブマシンガンを撃つ気が無い事に気付きながらも国枝が床に落としたサブマシンガンを拾う。

「王生ィ！テメェ、これで勝ったと思ってンのかよォ！！」

国枝はそんな王生を見て叫んだ。

「くはっ！くっはははははは！！俺はまだ生きてるぜェ！生きてる限りテメェを殺しに来てやる！！」

獰猛に雄叫びを上げる獣の如く、国枝は王生に向けて叫んだ。

「……」

―狂ってる。

王生は直感した、国枝はすでに解除条件、いや…このゲーム自体も眼中に無いと。

コイツが望むのは自分とのどちらかの死をもっての決着をつける事だけだと。

だが…それならば王生は自分のやるべき事を理解した。

「そんなに俺と一対一で殺し合いがやりたいってか？」

「…光一？」

王生の突然の言葉に雨宮が王生の方を向いた。

「当然だァ！どちらかが死ぬまでやり合うのが殺し合いってもんだぜェ！！」

「…だったらお前の望み通りにしてやるよ」

「！？、光一、お前は…」

王生のその言葉に雨宮は眉を細めたが王生は何も答えない。

「く、はッ！くはッ！くははッ！！面白ェ！最高最高、最ッッッ高だぜ！！そうこなくっちゃなぁ！！」

逆に国枝はこれ以上無い程に歓喜の表情を見せた。

「ただし二つ条件がある」

王生が二本指を立てて国枝の前に突き出した。

「いいぜェ、言ってみろよ」

言葉こそ笑うのを止めた国枝だがその表情は喜びに満ちていた。

「一つはお前の相手をするのは三日目、ゲーム終了の3時間前からだ、今の俺にはやる事が多すぎる」

「…もう一つは？」

「それまで俺の仲間に手を出すな、今いる三人はもちろん、前に居た二人もだ、これを守れるなら一対一で殺し合いをしてやる」

王生の出した二つの条件に国枝は思案する。

【10】の解除条件は首輪五つの作動以外にもう一つ、必要な事があった。

それは最後の首輪がゲーム開始から二日と23時間の経過の前に作動している事だ。

「テメェをぶっ殺して首輪を作動させてクリアってのも良いなァ」

国枝はニヤリと笑うと王生に頷いた。

「くくく…、くっはははははははは！いいぜェ！テメェの条件、のんでやらァ！！」

サブマシンガンの銃口を向けられながらも国枝は終始笑顔のままだった。

第３１話：殺し合いの待ち合わせ（後書き）

観月「さて、皆さんは最初にどちらのルートを見たのかな？」

慶吾「散々ルート分岐に期待させといてあれ（ネタバレになるので伏せます）とは…、この作者はどんだけ性格悪いんだ？」

観月「だから言っただろう？意地が悪いと、あとがきではぁ言っていたが作者は最初から読み手の皆さんを騙す気満々だったらし――」

慶吾「わー！わー！皆さん！すいませんでした！！しかし何だってこんな事したんですかね？」

観月「ぶっちゃければやってみたかった、後悔はしていない、らしい」

慶吾「それであんな目に合う俺達って…」

観月「まぁ書く人が悪かったと諦めるしかないな」

慶吾「まさか初の（違ってたらすいません）シークレットゲーム二次創作の〇〇エンド作品になるなんて…」

観月「これも一つの可能性だ、そしてもう一つの可能性は今、まだ続いているだろう？」

慶吾「Ａルート…、簡単にいえば今のこの小説の事ですか？」

観月「あぁ、言っただろう？ゲームはまだ続いている…と」

第３２話：大ほら吹き（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：５．２：無し
雨宮　鈴音：２：７．６：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：６．１：無し
新城　　渉　：８：２．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．７：ナージャさん
藤木　洋介：３：４．９：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．７：マッチさん

第３２話：大ほら吹き

タタタタタッ

「……」

タタタタタタッ

「……」

タタタタタタタタタッ

「……」

―超気まじぃ…。

国枝から離れてから王生と雨宮は夏喜や日向と合流する為に通路を走っていた。

そこに会話は生まれて来ない。

感情が戻ったとはいえ雨宮は元々無口ではあったが、この沈黙の原因は別にあると王生は感じた。

「……」

なぜなら今の雨宮はえらくムスーっとした表情で王生を睨みつけながら走っていたのだから。

「…はぁ」

本来ならばここで【祝！雨宮さん復活記念パーティー】として雨宮に労いの言葉でもかけてやりたい所ではあったがこうも睨みつけられてはやりずらい。

かと言ってお互い無言（というか雨宮に睨みつけられた）まま走り続けるのはあまり気分の良いものとは言えない。

もちろん、この状態の雨宮に話題の提供を求める程、王生は馬鹿ではない。

「な、なぁ…、さっきから何怒ってるんだ？」

とはいえ、本人には面と向かって聞きづらい事ではあった王生は言葉につまりながらも雨宮にそう聞いてみた。

ぴくりと雨宮の表情が反応を見せる。

自分は怒って等いないとそう言いたげな表情であった。

「光一、お前…本気か？」

しかし雨宮はすぐに真剣な表情に変わると王生にそう問い掛けた。

「えーっと…何が？」

しかし当の本人は雨宮の問い掛けが理解できず、首を傾げた。

「国枝と殺し合いの約束をした、という話しだ」

そんな王生の態度にイラッとしたのか、雨宮は無表情なままではあったが声に鋭さが増していた。

「…あぁ、そんな事か」

雨宮の言葉の意味がわかった今でも王生の返事はまるで他人事のようだった。

「そんな事だと？お前はこの事態の意味を――」

「嘘に決まってるだろ、あんな約束」

言葉を続けようとした雨宮に王生はあっさりと何でも無いようにそう告げた。

「……」

あまりにあっさりといつもの調子で王生がそう告げたので雨宮の王生の言葉をすぐには理解出来なかった。

「…嘘？」

続けて出てきた言葉も驚いていたせいかぽつりと呟くような言葉だった。

「誰があんな狂人とまともに相手するかよ、つーか気づかなかったのか？」

「…？何をだ？」

雨宮がキョトンとした表情で首を傾げる。

その子供のような仕草に王生は思わず顔を逸らしてしまう。

「あー…ほら、俺はあいつに戦う時間は行ったが一つ言ってない事があっただろ」

「…そうか」

雨宮は王生の言葉を聞いてすぐに答えを出したようだ。

「場所…か」

「その通り、例え時間になっても国枝は肝心の戦う場所がわからないままこの建物をうろうろするしかないって事」

そう言いながら王生は意地悪っぽく笑った。

「……」

だが笑う王生に対して雨宮は俯き、顔を伏せていた。

その表情は見えない。

「え～っと…雨宮さん？」

そんな雨宮の対応に戸惑った王生が声をかける。

「……」

その返事が返って来ない事に王生はさらに戸惑った。

―やべ…なんか怒らせるような事言ったっけ？

と、王生が焦りながら思考を巡らませていた時だった。

「…ふふっ！」

「…は？」

不意に雨宮の口から聞き慣れない声質が聞こえて来た。

「あっはははははははは！！」

その数秒後に雨宮は大声で笑い始めた。

「…なっ！は？はぁ！？」

雨宮の口からでた”らしくない”笑いに王生は”らしくない”反応をとってしまった。

「あの場面でそんな大ほらを言うとはな、まったく、お前という奴は…」

若干呆れた口調ながら、雨宮の表情は笑っていた。

王生はそんな雨宮の表情をポカーンとしながら見つめる。

「ん…？どうした？」

そんな王生の様子に気付いたのか、雨宮が不思議そうに尋ねた。

「いや…あんたでもそんな風に笑うんだな」

それは思わず王生の口から出た本心だった。

「…お前は私をどんな風に見ていたんだ？」

―キラーマシン。

と一瞬考えたがそんな事を言えば自分の身がどうなるかわからないのでやめておく。

「しかし…そうだな、確かに久しぶりだ、笑ったのは」

雨宮の口元に手をあてて考えている仕草を見ると本当に久しぶりらしい。

「そりゃなによりじゃないか、良かった良かった」

王生はうんうんと頷きながら話題を終わらせようとする。

「…だがあぁいう危険な真似は感心出来ないな」

「なんでだよ？少なくても時間になるまで国枝は俺達に手出しはし

ないと思うぜ、あいつにとっちゃゲームもルールも意味がなくなっている」

「だからだ、確かに時間になるまで国枝が襲って来ないかもしれない、なら逆を言えば時間になってお前が来ないと知れば血眼になってお前を探すはずだ」

「そん時ゃ逃げ回るさ」

「…私の言いたい事はそこだけじゃない」

「…なんだよ？」

そう聞き返しながらも王生には雨宮の言いたい事がわかっていた。

「これで国枝という人物の標的は王生光一ただ一人となった、お前は国枝の標的となる事で他の仲間が国枝から襲われる可能性を無くした…違うか？」

―ご明察。

まったく…頭の良い奴はやりにくい、と王生は心の中で呟いた。

これで時間になり国枝が襲って来ても自分さえ相手にすれば奴は満足するだろう。

他の誰にも手は出さないはずだ。

「まぁ…なんとかなるだろ」

「まったく…、お前は人がこうやって心配しているのに――」

そう言いかけて雨宮の動きがピタリと停止した。

そこから先の言葉が出て来ない、というより一瞬思考が停止したという感じだった。

どうやら自分が誰かを心配しているという事実に気付いた雨宮が自分自身に戸惑っているようだ。

「なんだ？心配してくれてんのか？」

そんな様子に気付いた王生がニヤニヤと意地悪く笑いながら尋ねた。

「わ、わわ！悪いか！？私がお前の心配をしちゃいけないか！？」

そう答えを返した雨宮の声はひどく裏返っていた。

吹っ切れて答えた、というよりもとっさに出てきた言葉だったのだろう。

その証拠に言い終わらぬうちに雨宮の顔は真っ赤になっていた。

その顔が王生の中にあった普段の冷静沈着な雨宮のイメージとは掛け離れたもので王生は思わず見つめてしまった。

「な、なんだ！？人の顔をじろじろと…」

「いや、可愛いと思って」

王生としては言うつもりのなかった言葉だった。

見たまんまの感想をそのまま口に出した事に王生の表情が赤くなっていく。

「んなっ！？」

一方雨宮の方はそう一言口に出すと思考を完全に停止させた。

「う…ぁ、お、お前はぁ…私をからかっているのか！！」

まぁそれも数秒の事ではあったので雨宮はすぐにあたふたとしながらも王生に答える。

「いや、そんなつもりはなかったんだけど…、それにあんたが誰かの心配すんのもおかしくねーと思うし」

「…お前は勘違いをしている」

王生の言葉を聞いた雨宮は悲しそうな表情を見せた。

「私が…親殺しの人間だとしても、か？」

「！？」

ピクリと王生の身体が止まった。

《親殺し》というキーワードは王生にとって思い出したくない事でもあるのだから。

第３２話：大ほら吹き（後書き）

【上杉龍哉さん！バトル受けました～、回す人居ない（泣）】

☆ルール

必ず回す。（うん、すいません）

回す人５人の名前を書いてびっくりさせましょう　という企画らしい

上杉龍哉さんから回ってきたのでとりあえず回しておこうかなっと。

☆名前・年齢・職業

ＨＮ：キセル

年齢：２２歳

職業：作業員

☆資格

普通自動車免許

危険物取扱資格、乙１～６全種類、内容覚えてない（笑）

☆今の悩み

彼女！！

☆自分の性格を一言で

天然キャラと言われるけど自覚無いなぁ。

☆誰かに似ている

ハッチポッチステーションのジャー二ー（人じゃねぇ（泣））。

☆社交的ｏｒ人見知り？

シャイボーイ。

☆ギャンブルは好き？

キセルの由来はキセル予告から。

☆好きな食べ物・飲み物

ご飯さえあれば…。

☆嫌いな食べ物・飲み物

カボチャ関連、給食のトラウマだった。

☆理想の彼氏（彼女）のタイプを５つ

幼なじみ
巫女さん
ツンデレ
病弱

といった冗談を笑顔で受け流してくれるような女性。

☆彼氏（彼女）とケンカしたら自分から謝る？
泣かれたらどうしようもない、あれはマジ卑怯。
☆親友と呼べる人は何人？
４人？
☆バトンを回してくれた人は？上杉龍哉
☆人生談
仕事で先輩に

「何で～～したんや？」
「～～やったからです」
「言い訳するな！！」

これの対象方求む、いや、本気で。

☆何の為なら一肌脱ぐ？
寒い時。
実際の所友達がピンチなら。
☆この為なら一食抜ける！
パチンコは確変中、スロットの高設定なら三食抜く。
☆趣味・特技
趣味はギャンブル？一人ならパチンコ、友達とは麻雀。
特技は…身体が柔らかい事？（笑）

☆今行きたい所は?
無限のかなたへさぁ行くぞ。
☆今自由に使えるお金があったら?
借金（ギャンブルじゃないですよ?車ですよ、一応）
☆将来の夢
幸せな家庭。
☆その為にしている事
今の悩みの所見て貰えればわかると思います（泣）
☆もしバトンを回してくれたら何かやってくれる?
募金します。

第３３話：仮面を外した少女（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．９：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：６．１：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：７．６：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：４．９：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．７：マッチさん

第３３話：仮面を外した少女

―綺麗だった。

夜、真っ暗な暗闇に対抗するようにそれは光を放つ。

光は赤い、パチパチと大小を不規則に辺りを照らしていく。

王生はその光景をただただ眺めていた。

眺めていられた。

その表情にはなんら変わりが無い。

驚きや落胆は存在しない。

例えそれが今、光を放っているのが王生自身の住んでいた家だったとしても。

王生の表情は冷めていた。

王生は燃え上がる自身の家をただただ一人で見つめていた。

―――

王生は脳裏に浮かぶその光景を思い出し、呆然としていた。

「…光一？」

「…ん？あぁ、どうした？」

怪訝な表情の雨宮の呼び掛けに王生は生返事で答える。

そんな王生の答えに雨宮は更に怪訝な表情を強めた。

「…驚かないのか？」

雨宮からしてみれば王生に告げた言葉はとても重要な事なのだ。

普段の彼女ならば自分の身の上の話し等絶対にしない。

例えそれが同じ組織でもあるエースのメンバーでさえそうなのだが、

目の前の少年にはいとも簡単に話してしまった。

「自分の親さえ殺して生きてきた私が他人の心配をするはずがない」

そんな自分に違和感を覚えながらも雨宮は王生の次の言葉を待った。

「……」

王生は言葉に迷っていた。

彼の中にある真実を話すかどうかを。

「…奇遇、って言ってしまうのも変な話しだよなぁ」

やがて王生は意を決したようにぼりぼりと頭をかいた。

「…？」

王生のその言葉の意味が理解できず、雨宮は目を細める。

「…俺もあんたと似たようなもんって事」

「なっ！？」

王生の答えがあまりに予想外だった事に雨宮は声を上げた。

「俺はあんたと同じ境遇なんだ、だからこそ言える事がある」

それは王生自身が過去に一人の少年に教えて貰った事でもある。

「過去なんざ関係無い、今あんたが誰かの心配をしているならそれでいいじゃないか」

王生はその少年を究極のお人よし馬鹿と考えていた。

「…私は他人の心配なんてできる人間じゃない」

「ったく…、なら教えてやるよ、あんただってわかってたはずだ」

主張を曲げない雨宮に王生は言葉を続ける。

「だったら何で今俺と一緒に夏喜と日向を追い掛けてるんだ?」

「……ッ」

雨宮の言葉が止まる。

雨宮の意識が戻ったのなら、夏喜も日向も、王生も関係は無い。

無理して王生に付き合わずにさっさと別行動する事だってできるのだ。

「も一つ、だったら何であの場面で新城と国枝を”殺せなかった?”」

当然の事ながら殺”せ”ないと殺”さ”ないは言葉の意味が圧倒的に違う。

王生は雨宮が国枝に銃を構えた時に理解していた、だからこそ嘘の殺し合いの約束をしてあの場をおさめたのだ。

雨宮に国枝や新城は殺せない。

これは柳からエースという組織について聞いていた時から思ってい

た。

柳はエースはゲームの被害者が集まって出来た組織だと言った。

ならばそのエースに所属する雨宮も当然ながらそうなのだろう。

殺人を良しとする新城や国枝だって結局はこのゲームに巻き込また被害者だ。

同じ被害者である新城達をどうして雨宮が殺せるというのか。

「あんたは敵である新城や国枝の心配までしてるんだ、俺からすれば十分甘いぜ」

「…光一」

そう言った王生の腕を雨宮が掴む。

「ん？」

突然の事に王生が動きを止める、その様子は雨宮が感情を失い、王生が手を引いていた時に似ていた。

だが一つ違うのは雨宮はまっすぐに王生の顔を見つめていた事だ。

「その…、まだ、言ってなかったな、お礼」

雨宮は一語一語考えながらゆっくりと言葉を作っていく。

「暗い、真っ暗な暗闇だったんだ、私の心の中は…」

あのエクストラゲーム、その内容。

それが雨宮とどんな関係があったのは、今の王生にはわからない。

だがそれが雨宮の心の中にある、一種のトラウマのようなものを蘇らせたのだろう。

「そんな暗闇の中、私に声を届けてくれたのがお前だ、ありがとう、光一、お前のおかげで目が覚めた」

そう穏やかな口調で言いながら雨宮は優しく微笑む。

「いいさ、そんな事」

そんな雨宮の言葉に王生が答えを返そうとした時だった。

「と、そういえば…だ」

雨宮の口調がガラリと変化した。

「そんな暗闇の中、一つ変な言葉が聞こえたな」

鋭い刃物の先のような目つきに鋭い刃物の先のような言葉。

「…へ？」

穏やかな口調、そして優しく微笑む表情はどこへやら、と王生は冷や汗をかいた。

それもそのはず、王生には次に雨宮が言おうとしている言葉に心当たりがあったのだから。

「確か、私の胸が、その、小さい、と」

雨宮は言いにくそうに言葉を小さく分けてそう話した。

「…あ～、あはは」

王生は冷や汗が次から次へ、ダラダラと流れるのがわかった。

心の中では『やべーよ！マジやべーよ！！てか無反応だった癖にしっかり覚えてんなよ！！』みたいな言葉がぐるぐるとループされていた。

「キ、キノセイジャナイノカ？」

苦し紛れに答えた言葉が片言だった事に気付き、王生はパチパチと瞬きを繰り返す。

「聞こえた、胸が小さいって」

雨宮の返事、一言。

「俺は何も聞こえなかったな～」

王生はわざとらしく口笛を吹く動作を交えてみた。

「私は聞こえた、貧乳って」

雨宮の返事、ちょっと追加された一言。

「いや、絶対気のせいだって！だって俺が言ったのは胸が小さいじゃなくて無いって言ったはず！！…あっ」

王生の思考がピタッと停止した。

焦って馬鹿な事を口走った事にたいしてはもちろんであったがそれ以上にその理由はあった。

プツンという音が聞こえた気がした。

続けて恐る恐る雨宮を見るとふるふるとふるえながらどす黒い殺意が見えた。

「余計に…悪いだろ！！」

―死。

王生がまず思い浮かべたのはそんな言葉だった。

「いや、待て！違う！いや、違わないけど違う！！いや、この違わないってのはお前の胸が無い事が違わないんじゃなくて、その、いやいや、違うんだって、つまり俺が言いたいのはお前の胸は違う、いや、この違うってのはその違うじゃなくて―」

国枝の更に上をいく殺意に王生は無茶苦茶な言葉を並べながらも全力で対抗策を考えていた。

「気にしているのに…、気にしているのに…」

ぶつぶつと涙目になりながらそう呟く雨宮に王生はぶんぶんと手を振る。

「いや、胸の大小なんてそんな重要じゃないって！！」

苦し紛れに出たその一言に雨宮の動きがピタッと止まってくれた。

王生は心の中でホッと一息をつく。

「…本当？」

雨宮はうるうるとした涙目な表情のまま、上目遣いで王生を見た。

普段の彼女を知る人物ならばその光景を見れば誰かと心が入れ替わったのかと思うだろう。

「少なくても俺はあんまり気にしない」

「そ、そうか？そうなのか？その…恥ずかしい所を見せたな」

急に恥ずかしくなったのか、雨宮は顔を真っ赤にさせると『その…』の所から口調や言葉遣いをいつものものに戻した。

「…ぶっ！」

それは冷静沈着ないつもの口調だったのだがついさっきの様子を知った王生にとってはギャグにしか見えず、思わず吹き出してしまった。

「あっはははははは！！」

「なっ！？なんだ！どうして笑う？！」

そんな王生の様子に雨宮自身は意味がわからず、慌てていた。

冷静沈着な口調はどこへやら、だ。

「くっくっく、いや、もしかしてあんた、本当はそっちが素なのか？」

「む…」

王生の言葉に雨宮は状況を理解したのか、一度不機嫌な表情を見せると。

コホンッと一度咳ばらいをすると。

「…いい加減にしろ」

冷静沈着な口調でそう言った。

「ぶっはははははははは！！」

再び沸き上がる笑い声、もはやギャグと化した雨宮の冷静沈着口調は王生にしてみれば完全にツボだった。

「～～～、なんだ！私をからかうのがそんなに楽しいのか！！おい！！」

我慢も限界になり、雨宮は王生の頬っぺたをつまんだ。

「痛ててててててッ！！」

そのまま引っ張られ、王生は悲鳴を上げた。

「まったく…、お前と居るといつもの調子が崩れる、いいか、もう笑うなよ、絶対だぞ！！」

雨宮は王生にそう告げるともう一度口調を冷静沈着な物に戻そうとした。

「別に、無理して冷静な口調にする必要無いだろ」

だが真っ赤になった頬っぺたを摩りながらそう言った王生に雨宮の動きが止まる。

「確かに最初のあんたは冷静沈着で他人を寄せ付けないって所があったけどこうして話すと全然違うってのがわかった」

無口で冷静沈着な人物。

そのイメージが最初に会った時から雨宮に他人を寄せ付けない、近付きにくい印象を与えていた。

確かに他人と行動をしたくないならばそれが一番だろう。

「…私は別に、そんなつもりじゃ」

雨宮はそう答えながらも王生の考えが図星だという事に気付いてい

た。

なるべくならば雨宮は他人と関わりたくなかった。

というよりも自分の目的に他人を巻き込みたくなかったと言った方がいい。

だから壁を作った。

他人が自分に近寄りにくいようにする為に。

「無理して作った口調で話してたって疲れるだけだぜ？」

だが目の前の少年はその壁を破りつつあった。

雨宮がつけていた仮面はほとんどはがされたと言ってもいい。

「せめて…、そうだな、俺と一緒の時くらい、普通に話してみたらどうだ？」

「……」

雨宮はすぐに頷けなかった。

これ以上王生と関われば、王生は雨宮の目的に巻き込まれてしまう。

そんな事はわかっていた。

わかりきっていた。

「うん…、そうする」

雨宮は頷いた。

それは恐らくはこのゲームが始まって初めて雨宮が見せた無防備な表情と声だった。

そこには嘘も偽りも無い。

まるで少女のような表情だった。

第３３話：仮面を外した少女（後書き）

【おまけ小説】

～気絶した時～

雨宮「ところで光一」

王生「ん？」

雨宮「私が気絶した時、変な事とか…してないだろうな？」

王生「ぶはっ！いきなり何言ってんだよ！！」↑心当たりはあったりする（おまけ小説で雨宮の武装を解除する話しを参照）。

雨宮「少し…、ほんのちょっとだぞ？本当だぞ！その…気になったというか」

王生「してないって、だいたい変な事ってなんだよ」

雨宮「例えば…、その、胸…触る、とか、大丈夫、怒らないから正直に言って」

王生（何を言えば言いんだよ）

《次より選んで下さい。》

【A】

触ってないと言う。

【B】
触ったと言う。

【C】
胸ってどこに?と言う。

【A】
雨宮「貧乳は触る価値も無いと言いたいのか!そうなんだな!!」

―殴られる。

《BADEND》

【B】

雨宮「それでやっぱり胸はでかくなくちゃなーとか考えたんだろう！！」

―蹴られる。

《ＢＡＤＥＮＤ》

【Ｃ】

雨宮「……」↑笑顔で弾を拳銃に詰めている。

―撃たれる。

《ＢＡＤＥＮＤ》

第３４話：足音（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．９：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：６．１：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：７．６：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：４．９：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．７：マッチさん

第３４話：足音

「くくく…、くっはははははははは！あ～ぁ…まったく笑いが止まらなぇなぁ！！」

国枝は笑っていた。

王生と雨宮が部屋を出て行った後も国枝の笑いは止まらない。

その思考はすでに最終戦、王生との決着にあった。

王生と雨宮は国枝と新城の武装を解除したので現在の国枝は丸腰の状態にある。

しかし国枝は焦っていなかった。

最終戦に備えての時間はまだたっぷりと残っているのだから。

「くはは！豪華でド派手な殺し合いにしてやろうじゃねぇかよ！！」

残り時間を確認する為に国枝はＰＤＡを取り出した。

「……ぁ？」

数秒の時間が止まり、国枝は小さく、一言だけ言葉を漏らす。

そこに見える画面はいつもの【１０】のＰＤＡでは無かった。

笑う道化師が画面に映っている。

その表情は国枝を嘲笑うようだった。

「…くはは！そうかいそうかい！そういう事かい！！」

それは国枝にとって、そして王生にとっても想定外の出来事であった。

【２】のＰＤＡを雨宮から預かる形で所持していた王生が国枝との戦闘の最中、知らぬ間にその特殊効果を発動させていた。

すなわち…、それはｊｏｋｅｒの偽装効果の解除だ。

しかし、一番今の状況が想定外なのは王生でも国枝でもない。

「まっ…、はなっからやる事なんざ決まってんだよ」

国枝はチラリとすぐ近くに気絶し、倒れている新城を見る。

「いやあ、実際勉強になったぜ、あんたのやり方はよ、新城さん」

そう言いながら国枝はゆっくりと新城に近付いた。

気絶している新城は当然、動く気配が無い。

「こいつは授業料だ、有りがたく思いな」

国枝は気絶している新城にゆっくりとその手を伸ばした。

―――

「しっかし…見つからないな」

「こっちであってるのか？」

―――

だいぶ進んでは見たが夏喜も日向も藤木も見当たらない。

俺達は一度、夏喜達と離れ離れになった所に戻ってから夏喜達の後を追った。

道に間違いは無いはずだ。

「…チッ、もうだいぶ進んだはずなんだがな」

こんな事なら新城が持っていたであろう探知機能のインストールされたＰＤＡだけは持ってくるべきだったと王生は後悔していた。

結局…あの場で二人を殺さなかったな。

それは雨宮に向けたものでもあり、同時に自分にも向けられていた。
実際、殺そうと思えばあの場で二人を殺せたのだから。
そうなればＰＤＡも回収でき、日向の首輪だって外す事が出来た。

「…まぁ」

―もう遅いか…、俺はこっちを選んだんだから。
もう一方を選んだ俺がどうなっていたかはわからない。
いや…、考えないほうが良いのだろう

「妙に静かだな…」

「確かに…、なんだか嫌な空気だ」

藤木はあの場に姿を見せなかった。
奴の性格上、夏喜や日向を追って行った可能性が高い。
だがそれでもこの静けさはどうだ？
藤木があの二人を追い回しているのならこの静けさは明らかに妙だ。
確かに銃声が聞こえるよりかはずっとマシなのだろうが…。
まさか…もう？

「光一」

ふと、いきなり雨宮が立ち止まり、手で王生の動きを停止させた。

動くな、という事だろう。

「どうした？」

「足音が聞こえる」

言われて耳を澄ませてみると確かに足音が聞こえる。

「聞こえた…、耳が良いんだな」

「別に…ただ辺りに注意しながら動いてただけだから」

王生が素直に褒めると雨宮は照れ臭そうにそうな顔をした。

「辺りに注意しながらって…、俺と話してたのにか？」

「もう癖みたいなものだからな、それでどうする？こちらからも接触してみるか」

「…ちょっと待て、足音は聞こえるが、一人分しかないぞ」

夏喜と日向は二人で行動しているはずだ。

一人分の足音となると…。

「奴の可能性が高い、な」

一人で行動しているとなると藤木が考えられる。

王生はチラリと自分達の所有する武器を確認した。

王生達は国枝と新城の武器は回収したので現在の武装は豊富と言える。

国枝と新城の二人が持っていたサブマシンガンはそのまま王生と雨宮が一丁ずつ所持している。

ちなみに拳銃は持てない分は雨宮がバラバラに分解していた。

問題は日本刀だった。

国枝に持たせたままには出来ず、拳銃のように分解も出来ないので結局持っていくしかなかった。

とりあえず今は雨宮が持っている。

長身な雨宮が日本刀を腰につけるとどこぞの漫画のキャラクターのように絵になった。

藤木は確かライフルを持っていたが今の俺達に正面から挑もうとは思わないだろう。

しかしここは念には念を入れた方が良いか。

「待ち伏せして藤木の武装も解除しちまうか」

「…藤木？」

「ほら、早く隠れるぞ！！」

「ん？あ、あぁ？」

何故かイマイチ反応の薄い雨宮の腕を引っ張って通路の角に身を隠すと王生と雨宮は足音の主が近付いて来るのを待つ。

タッタッタッタッタッ

―来た！！

足音の主が近付くと同時に通路から飛び出し、サブマシンガンを突き付けてやった。

「動く…な、へ？」

「あぅっ！？」

…夏喜だった。

泣きそうな表情でカタカタとふるえている。

「足音で藤木では無いという事はわかっていたが…」

遅れて雨宮がやれやれといった表情で出てくる。

「じゃあ先に言ってくれよ！すまん！夏喜さん！！わざとじゃない

んだ！！」

慌ててサブマシンガンを下げて夏喜に謝る。

「…光一…君？雨宮…さん」

夏喜は俺と雨宮の顔を交互に確認すると。

「…うわぁぁぁぁあん！ごめん…ごめんなさい！！」

一気に泣き崩れ、その場にしゃがみ込んだ。

「お…おい、どうした？そうだ…日向はどこに？」

夏喜の様子がおかしい事と日向が今この場に居ない事に王生は嫌な予感を感じた。

「何が…あった？」

王生もしゃがみ込んで夏喜に目線を合わせた。

「日向ちゃんが…藤木に追いかけられて、私…守ろうとして…」

泣き崩れる夏喜はゆっくりと言葉を出していく。

「藤木が…銃を撃って来て、それで、はぐれ…ちゃって」

その肩には血が滲んでいた。

ライフルで撃たれた跡なのだろう、かすり傷なのが幸いだった。

「…雨宮、夏喜さんの手当てを頼む」

「…あぁ」

王生は立ち上がると雨宮に夏喜の応急処置を頼む。

「藤木は今どこに居る？」

小さく、しかしはっきりと聞こえる声で王生はそれだけ夏喜に聞いた。

「ごめん…、もし日向ちゃんに何かあったら、私の責任よね」

雨宮の応急処置を受けながら夏喜は泣きじゃくりながらそう呟いた。

「…何でだ？」

「だって私…、日向ちゃんとはぐれちゃって、守れなくて…」

「だったらそん時その場に居なかった俺はもっと酷いな」

「光一君…」

「場所はどこだ？日向と離れ離れになった場所で良い」

キュッ

「ならば私もお前と同じ責任をおう必要があるな」

夏喜の肩に包帯を結んだ雨宮が立ち上がる。

「雨宮…」

「まったく…、一人で突っ走るな、お前一人じゃ、その…危ない、だろ」

雨宮がそう言いながら俺の隣に並ぶ。

「雨宮さん…」

夏喜は涙をぐっと拭くと立ち上がった。

「私も行く、うん…、今ならまだ間に合うと思うかもしれない」

「急ごうぜ、藤木の奴が日向に手を出す前に俺達でフルボッコにしてやろう」

夏喜の目に力が戻った事を確認し、王生は頷くと動き出した。

―――

――

「日向ちゃんとはぐれちゃったのがここら辺だと思うけど…」

「…静かだな」

辺りを見渡しても王生達以外の物音は何も無い。

「……」

そんな中雨宮は目を細めて一つの通路の先を見ていた。

「…雨宮？」

「…血の臭いがするな」

王生の問い掛けに雨宮は一言、そう告げた。

「血って…、嘘…」

雨宮の言葉を聞くと同時に夏喜は雨宮の見つめる通路に向けて駆け出した。

「おい！待て、俺達も行く！！」

王生と雨宮も夏喜について通路を進む。

―この先は…行き止まりか？

地図で確認するとこの先には開けた少し大きな丸い通路と部屋があ

るだけの行き止まりの状態だった。

ここに追い込まれたとしたら…逃げ場なんて。

次々と沸き上がる最悪な考えを抑えながら通路を走っていく。

王生達は開けた少し大きな通路に出る。

「!?」

そこに死体があった。

第３４話：足音（後書き）

【おまけ小説】

《年齢》

雨宮「しかし…なぜ夏喜ではなく日向を追ったのだ？」

王生「なんで…って、出会ってから今までの藤木を見てわからないのか？」

雨宮「む…、馬鹿にするな、藤木が…その、じ、女性に対して異様な性欲を持っているのはわかっていた」

王生「ならわかるんじゃないか？」

雨宮「だが…性欲を持っているならば普通は夏喜を狙うはずだろう」

王生「あ～…、たぶん、アレじゃないのか？」

雨宮「アレ？」

王生「藤木にとっちゃ年齢範囲外だったんだろ」

夏喜「こ～い～ち～く～ん、ちょ～っとこっち来ようか？」

第３５話：箱を開けたら（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．０：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．８：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．８：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：９．６：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：５．９：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：１０．７：マッチさん

第３５話：箱を開けたら

「…うっ」

死体を見つけるなり、王生は顔を引き攣らせ、言葉を失った。

なぜ今までこの血の臭いに気付かなかったのだろうかと考えてしまう程、その死体は血に塗れていた。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁあああ！！」

夏喜が叫び声を上げて床にへなへなと膝をつく。

「……」

雨宮の死体を見る表情も鋭い。

それほどまで今三人の見ている死体の惨状は酷かった。

死体は床に”倒れていなかった”。

両腕、両足を大の字にされて巨大な杭で壁に貼付けられている。

そこから流れ出ている血は壁や床を赤く染める。

だがそれよりも酷いのがその胴体にあった。

腹が”えぐられている”。

それはドリルのようなものでえぐられたのか、中心から広がって大穴をつくっている。

「藤木…」

その死体…、藤木は明らかに人の手によってここまでの状態になったものでなかった。

首輪が作動し、ペナルティが発動したのだろう。

だがそれが自分が誤って作動させたのか、他人が作動させたのかはわからない。

「日向は…」

王生は急いで日向を探すが藤木の死体以外は見当たらない。

藤木が日向を追っていたのなら…。

王生の目線が一つの部屋のドアにとまる。

この通路は一方通行だった。

ならばこの部屋に日向が居ると考えるのが普通だ。

同時に藤木を殺した奴が居るとすればそこに居る可能性も高い。

「雨宮、夏喜さんを見ていてくれ」

王生はそう言うと部屋に向けて歩きだした。

「…一人で大丈夫なのか？まだ犯人が残っている可能性もある」

「だからこそあんたに夏喜を頼んでんだよ、大丈夫だ、ヤバそうだったらすぐに引き返す」

それに誰かが後ろを見ていた方が安全だ、と王生は考えていた。

三人で部屋の中に入って後ろから不意打ちを受けたんじゃ話しにならない。

「…わかった、後ろは任せてくれ」

雨宮にも王生の考えはわかっていたのか、頷くと夏喜と藤木の死体が見えない位置まで戻った。

「さて…」

王生はそれを確認すると部屋の前に移動した。

僅かにドアを開き、中を確認する。

部屋にはこれといって注目する程の物は無くこれまで見てきた部屋とそう変わらない。

いままでの部屋通り、大小様々な段ボール箱が置かれていた。

一目見た限りでは人の姿は見当たらない。

隠れられそうな所といえば…あの少し大きめな段ボール箱くらいだろうか？

数ある段ボール箱の中でも一番大きめな物に注目してみる。

だがそれでも大の大人が隠れるのは無理だろう。

段ボール箱のサイズを考えても子供が隠れれるくらいが限界だと王生は考えた。

となれば考えられるのは―。

「…日向？」

段ボール箱からの返事は無い。

誰も入って居ない可能性もあるので王生としてもそれ程期待していた訳ではないが。

「……」

王生はサブマシンガンの引き金と指の位置を確認すると段ボールに向けて歩き出す。

この時、不用意に段ボール箱を開けてしまった事は王生にとって失敗と言えただろう。

もう少し慎重に行動していれば回避できた出来事だったのだ。

ヒュンッ

段ボール箱を開けた瞬間、王生の目には自分に向けて飛んで来る物体が見えた。

だが結局は見えた直後、それは回避するのは不可能だった。

ベチョッ

王生の顔に柔らかい何かがぶち当たった。

それは単なる小さなビニール袋でそれだけならばなんら問題は無いだろう。

だが同時にビニール袋の中身が王生の顔に飛び散っていたのが問題だった。

ぷーんと鼻につく、臭いがしてくる。

それ程強烈な臭いでは無いがほのかに臭いを放つ分タチが悪かった。

「あ…、こーいちさんだ」

ビニール袋を投げた主である日向は王生の顔を見てピタリと動きを止めた。

「日向…お前なぁ」

王生はぷるぷるとふるえながら握りこぶしを作って力を入れた。

「こーいちさんだ…ひぐっ、えっぐ…、こーいちさんだ」

だが次の瞬間、泣く数秒前とも言えた日向の表情を見てふっと息を吐くと握りこぶしをといた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああん！ひぐっ…、こーいちさん！！」

日向は涙を我慢する事なく、泣きながら王生の身体に抱き着いた。

「…悪かったな、一人にさせちまって」

王生もそう言いながら日向の背中にそっと優しく手を置いた。

日向はコクッと小さく頷く。

「怖かったよな、変な奴に追いかけられて」

日向はコクコクと頷く。

「………」

腕の中で俯き、泣きじゃくる少女を見ながら王生は考えた。

しっかりしているように見えても日向はまだ小さい。

それがこの建物で序盤からずっと行動を共にしていたであろう柳がまず最初に消え。

王生と雨宮、そしてついに夏喜とも離れ離れになってしまい。

たった一人で、藤木に追い回されながらも一人で頑張って来た少女

がそこに居る。

「…日向、お前は俺が必ずゲームクリアさせてやる」

「…こーいちさん？」

王生の言葉に日向は上目遣いで王生の顔を見た。

「元々柳と約束してたんだ、自分に何かあったらお前を頼むってな」

「…柳のおじさんが？」

「あぁ、だからって訳じゃないぞ、それ抜きにしてもお前をクリアさせてやりたいって思ったんだ」

「……」

日向の沈黙。

―ちょっとくさかったか？

と王生がそう考えた時だった。

「こーいちさん、くさいです」

「…悪かったな、自分でも言ってて恥ずかしいと思ってんだよ」

「いえ、くさいのこーいちさんの顔です」

日向は目を細めて王生の顔を見た。

「…だろーな」

言われて王生も自分の顔に付着している臭いの元の事を思い出した。

「しっかし、なんちゅう物をぶん投げてくれたんだよ」

「日向特製爆弾かっこ改かっことじです、せっせと作ってました」

日向が誇らしげに胸をはる。

「おかげで不愉快な臭いが常に鼻から離れないんだが…」

「まぁ元々こーいちさんで試そうと思っていたので結果は一緒ですよ」

「こら待て小娘」

王生は日向の頭に手を置くとぐわんぐわんと大きく揺さぶった。

「あふぅ…目が」

くらくらと頭を回す日向。

「後で戦闘禁止エリアでシャワー浴びなきゃな…」

さすがにこの臭いを漂わせたまま行動する気は起きなかった。

敵に位置を知らせる可能性もあるし、それで見つかればマヌケすぎる。

「あと…こーいちさん」

「…ん？」

「…たぶん、きっと、絶対、柳おじさんは死にません」

「日向…？」

「私と二人で居た時から柳おじさん、よく私を置いてどこかに行きましたけど必ず戻って来てくれましたから、だから今度も戻って来てくれます」

「…そっか、そうだな」

王生は頷くとポンと日向の頭に優しく手を置いた。

下の階はすでに侵入禁止エリアとなっており、柳はそこに落ちた。

それが何を意味するかは王生も、そして恐らくは日向だってわかっている。

だがそれでも日向は信じ、王生はそれに優しく答えた。

二人はわかっていたのだ。

今はただ、それしか出来ない事を。

第３５話：箱を開けたら（後書き）

おまけ小説

【日向特製爆弾】

王生「臭いもあるが顔がベタベタで気持ち悪いな」

日向「いろいろな調味料を混ぜ合わせて作りました」

王生「こんなもの沢山作ってどうすんだよ…」

日向「こんなものとはなんですか、それに日向特製爆弾は一種類じゃありません」

王生「…なぬ？」

日向「これが日向特製爆弾α、こっちが同じくβ、これがγです、あと日向特製爆弾アトミックバズーカ仕様や日向特製最強無敵無し一撃必中必殺大喝采爆弾もあります」

王生「ほ～、見た目にゃ全部一緒に見えるがな」

日向「当たり前です、全部一緒ですから」

王生「おい…」

日向「気分的なものです」

王生「そうなのか？」

日向「そうなんです」

王生「そっか…」

日向「はい」

第３６話：おんぶ（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．０：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．８：ナイトホークさん、油桜さん
柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．８：桐島　成美さん
新城　渉　：８：９．６：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　真　：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．４：マッチさん

第３６話：おんぶ

「さて…と、雨宮や夏喜と合流しないとな」

「みんな一緒なんですか？」

「あぁ、さっき夏喜とも合流できた、喜べ、雨宮が復活したぞ」

「？」

王生の言葉に日向は首を傾げる。

「ま、見ればわかるさ、ほれ」

「あ、はい」

日向が王生についていこうとした時だった。

ぺたんっ

日向はへなへなと床に腰をおろした。

「お、おい！大丈夫か？どっか怪我してんのか？」

王生が慌てて日向に詰め寄る。

「あ…」

「！？、足か？足を怪我してんのか？」

「安心したら…力が抜けました」

日向の言葉に王生は身体の力を抜くとため息をついた。

「心配させんなよ、立てるか？」

「へーきです」

そう答えて日向は立ち上がるが一ニ歩歩くとふらふら～と再び床に腰をおろす。

「…しょーがねぇな、ほら、おんぶしてやっから」

王生は日向の前まで行くとおんぶの体制をとったが日向は動かない。

「セクハラですよ」

「悪いが俺はロリコンじゃ無い」

「う～…、その」

日向はもじもじとしながら顔を赤く染めると。

「恥ずかしい…です」

「恥ずかしいって…おんぶがか？」

王生が首を傾げながらそう聞くと日向は躊躇いながらコクんと頷いた。

「その…、この歳になっておんぶというのは」
「変なプライド持ってんだなぁ」
「こーいちさんがデリカシーに欠けるだけと思います」
「まぁ…否定はしないが」
「良い事を思い付きました」
そう言うと日向はごそごそと段ボール箱からある物を取り出した。
「包帯か？それで何する気だよ？」
「これを足に巻いて怪我をしているフリをすればおんぶも自然じゃありませんか？」
「んでその後もずっと怪我人のフリをし続けるつもりか？」
「…やめましょうか」
「当たり前だ、ただでさえ夏喜が心配してんだ、元気な姿を見せてやれ」
「そうですね、すいません」
謝ると日向は今度は素直に王生の背中に乗っかった。
「ところで日向、俺以外この部屋には誰も入って来てないのか？」

そこで王生は日向にそう聞いた。

「え？そうですね…、私が段ボール箱の中に隠れてこーいちさんが私を見つけるまでは誰も来てないと思います」

「そっか…、隠れている間に何か大きな音とかしなかったか？」

「えと…何かの機械の音と叫び声がしましたけど、段ボール箱の居心地が良かったので確認するのをやめました」

「ただ単に怖かっただけだろ、まぁ正解だけどな」

小さく笑うと王生は思案し始めるがすぐに止めた。

まずは日向を安全な場所に連れてってやらなければいけない。

そしてその為の最も良いやり方が今のおんぶにはあった。

「日向、これから良いって言うまで目を閉じててくれないか？」

この部屋を出ればそこにあるのは藤木の死体だ。

それも無惨でえげつのない殺され方をした死体だ。

そんなものを日向がわざわざ見る必要はない。

「目を…ですか？」

「あと鼻もな、できれば口も閉じててくれ」

「死んじゃいますよ」

「まぁ口は冗談だとしても目と鼻は閉じた方が良い」

ムスッとした表情をする日向に王生は苦笑しながら答えた。

「…この部屋を出たら何があるかわかりました、柳のおじさんと一緒ですね」

「柳と…？」

「一階で…その、見回りしてくれていたおじさんが戻って来て、その…死んじゃった人が居たって」

「…そうか、一階からしばらくずっと一緒に居たんだよな」

「はい、私が遠目で見た時は…、ちょうどこーいちさんのような年の女性が壁に寄り掛かっていたんですが、柳さんがすぐに目を閉じろって」

―あの死体か…。

王生にはそれが誰なのかすぐにピンと来た。

このゲームが始まってから王生達が最初に見た死体なのだ、当たり前と言える。

王生達は少女にペナルティを発動させた、つまり柳と日向は王生達より前に少女の死体を見つけたらしい

「それじゃあ目をつむります、変な事しないで下さいね」

「するか…」

おんぶのまま部屋から出ようと歩き出す。

「こーいちさん、私、重いですか？」

「いや、軽いな、もっと飯食った方が良い」

グィッ

言うなり強くは無いが王生は首をしめられた。

「ぐぇっ！？何すんだよ！！」

「こーいちさんはデリカシーに欠けます！気を付けてるんですよ」

「気を付ける年でも無いクセに」

チラリと日向の様子を見るとちゃんと口と鼻を閉じていた。

「よし…行くぞ」

それをきちんと確認し、王生は部屋を出た。

嫌でも目に入る藤木の死体を通り抜け夏喜と雨宮な居る所に向かう。

来た道を戻って行くと途中で雨宮と夏喜を見つけた。

「見つけた、無事だ」

王生はそう言いながら二人に近付いていく。

「っと…もう大丈夫だ、目を開けていいぞ」

そう言いながらゆっくりと日向を床に降ろした。

「う…うぅ、日向ちゃ～～～～～～ん！！」

ガシィッと日向は夏喜に猛スピードで抱きしめられた。

「夏喜さん…肩が」

「いいのよ…平気だから、それより日向ちゃんは？怪我は無いの？変な事されなかった？」

「うん…大丈夫」

日向は夏喜を安心させるように頷いた。

「無事か？」

王生の方は雨宮に声をかけられる。

「ん？得に誰かが襲って来たって訳じゃないし、平気だ」

「そうか…ならいいが」

「じ～…」

日向を見ると雨宮の方を文字通りにじ～っと見つめていた。

「……？」

雨宮はすぐにその視線に気付くと日向の方をチラリと向く。

「……」

「……」

お互いに声をかける様子が無く、やりずらそうにしていた。

「そっか…、さっき会った時は会話にならなかったもんな」

「日向ちゃん、この人は雨宮　鈴音さん、とっても頼りになるのよ」

「…どうも、よろしくです」

夏喜に促され、日向はそれだけ言うと頭を下げた。

「あ…、あぁ」

雨宮の方も日向から視線を外しながら答える。

「おい、どうしたんだ？」

王生は不思議そうに雨宮に聞いた。

「…苦手なんだ、その、あまり子供と話す機会なんてなかったから、どう接すれば良いかわからないというか」

雨宮は小声で答えずらそうにそう伝えた。

「ふむ…」

日向ぐらいの年の子供は相手の感情に敏感だと聞いた事がある。

日向は日向で本能的に雨宮が自分に対してあまり良い感情を持っていないと考えているのかと王生は考えた。

「大丈夫よ、日向ちゃん、雨宮さんは私達の仲間なんだから」

「なっ！仲間なんかじゃ…」

雨宮の言葉も聞かず、夏喜は日向を雨宮の前に押し出した。

「…どうも」

「あ、いや、その…」

日向は頭を下げるも雨宮はキョロキョロと目をあちこちに動かせながら。

「そ、そうだ！少し調べたい事がある、ちょっと待っていてくれ」

そう言って藤木の死体のある場所へと向かった。

「あ〜ぁ、行っちゃった」

「私、もしかして嫌われてますか？」

「ん？そんな事はないぞ、単に慣れてないだけだと思う」

王生は軽く笑いながら答えると雨宮の後ろ姿を目で追った。

「…行ってきたらどう？」

「…ん？」

夏喜が真剣な表情で王生に声をかける。

「私達ならもう大丈夫だから、調べたい事…あるんでしょ」

「…悪いな」

頷き、王生は雨宮の後を追う。

と…、王生は途中で立ち止まり、夏喜の方を振り返った。

そう…、藤木は死体こそ無惨な物ではあったが首輪は無事といえたのだ。

「なぁ、夏喜さん、あんたが望むなら藤木の首輪――」

「いいのよ、光一君」

王生の言葉に被せ、遮るように夏喜は真剣な瞳で王生を見つめた。

「甘いと思われても仕方ないけどね、私はあなたや雨宮さんが私の為に”それ”をするなんてとても耐え切れないと思う」

「あぁ…、わかってる、あんたはそういう人だ」

頷くと王生は再び走り始めた。

――――

「光一か？」

「…藤木のＰＤＡの事なんだが、あったか？」

雨宮を見るとすでに藤木の身体を調べていた。

「ＰＤＡは持っていないな、すでに誰かが持ち去ったか」

「まぁ、あんまり期待もしてなかったな」

雨宮はじっと藤木の死体を見つめていた。

よく目をそらせないものだと王生は微妙な気持ちになる。

「…王生、藤木は誰が殺したと思う？」

「…ん？まぁ一番考えられるのは国枝と新城の二人だと思うが」

国枝の解除条件は恐らくは【１０】首輪の作動だ。

藤木の首輪が作動している事を考えれば不思議は無い。

「だが我々は新城や国枝よりも先に日向や夏喜と合流しに出たはずだ」

「あいつらはプレイヤーを探知するＰＤＡの機能を持ってる、俺達より先についてても変じゃないだろ」

「ならばなぜ日向は見逃された？」

この時、王生には雨宮の言いたい事が理解できなかった。

「そりゃ国枝に俺の仲間を襲うなって言ったから…じゃないのか？」

藤木が奴らに殺されたのは説明がつく。

あの様子を見る限り、藤木はいち早く新城と国枝の二人の作戦を無視して単独行動に出たらしい。

その制裁ともいえる。

「…ならば夏喜も日向も一度は国枝達に会っていないと説明出来ないな」

「……」

夏喜も日向も藤木に追い回される最中、新城や国枝には会っていない。

ＰＤＡのプレイヤーの探知機能がどれ程のものかはわからないが…。

「たぶん…探知機能に名前とか、出るんじゃないか？それで藤木に狙いを定めた」

…自分で言っていて馬鹿らしい考えだと王生は思っていた。

そこまで特定した探知が出来るはずが無いのだから。

「いい加減、考えたらどうだ？」

「…何を言いたいんだよ」

王生は雨宮の言い方に少しイライラとした声を出した。

「…あの状況で一番藤木を殺しても違和感が無いのは誰か、お前ならわかるだろう？」

「…日向、って、そう言いたいのか？」

雨宮の冷静な口調に王生は噛み付くように言葉を返した。

第３６話：おんぶ（後書き）

夏喜「遅れちゃったけど、新年あけまして…」

日向「おめでとうございます、今年もシークレットゲームをよろしくです」

王生「…つーか、あんたら何やってんの？」

夏喜「え？お正月も過ぎちゃったじゃない？だから新年の挨拶でもって」

王生「ハァッ！？正月過ぎたって俺達どんだけ閉じ込められてんの？なんで正月過ごした感じになってんの？」

夏喜「何言ってんの？一緒におせち料理も食べたじゃない」

王生「おせち？んな豪勢なもんがこの建物の中にあるはずが…」

日向「普通に部屋に目立つように豪華な重箱で置いてありましたよ、中身もキラキラで日向的に宝石箱や～でした」

王生「気前良いんだな！運営もよぉッ！！」

夏喜「それで、光一君は日向ちゃんにちゃんと用意したのよね？」

王生「…何をだ？」

日向「お年玉です、私に下さい、マイプリーズオトシダマ」

王生「あのなぁ、そういう台詞は言わない方が可愛いげがあるんだぞ」

日向「今年は近所のお爺ちゃんやお婆ちゃん達から回しゅ…、貰えそうが無いので日向も必死です」

王生「今お前回収って言おうとしたよな！！」

日向「ちょっと間違えただけです、言い直します」

王生「そっか、言ってみろ」

日向「今年は近所のお爺ちゃんやお婆ちゃん達からは貰えそうも無いので王生さんから回収しようと思います」

王生「下心が口に出てるぞ」

日向「聞き間違いじゃないですか？」

王生「なぁ…雨宮、お前からも何か言ってやってくれ」

雨宮「…ガキ使の大みそか特番、見逃した」

王生「うるうるした目でこっち見るな！悪かった！！面白いもんな！アレ！！」

日向「こーいちさん、大年玉（おおとしだま）下さい！！」

王生「おが一つ多いだろ！どんだけ貰うつもりなんだよ！！」

夏喜「光一君〜、私も欲しいなぁ」

王生「あんたはもう人にあげる方だ！！つーか誰か助けてくれ！！」

雨宮「…ビデオ、ちゃんと録画になってるかな」

第３７話：茶番（前書き）

※後書きに重大発表あります※

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．０：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．８：ナイトホークさん、油桜さん
柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．８：桐島　成美さん
新城　渉：８：９．６：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　真：？：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．７：マッチさん

第37話：茶番

「…ッ！！」

気が付くと同時に身体を飛び起こす。

辺りを見渡せばもう誰も居なかった。

というより場所自体ががらりと変わっている。

そこは戦闘禁止エリアのベットの上だった。

「…生きてんのか」

だんだんと意識がはっきりとしていき、そしてだからこそ新城は自分の置かれている状態が信じられなかった。

「つっ…」

何故かはわからないが身体中が痛く、服を見ると引きずられた跡があった。

生気を失った雨宮に油断し、不意打ちをくらい気絶した。

あの場でそれがどれだけ危うい事かは新城が一番良くわかっていた。

王生や雨宮は当然とし、例えその二人が見逃したとしても国枝が居る。

【１０】のＰＤＡの為に首輪の作動が必要な国枝。
そんな国枝からすれば気絶した新城の首輪を作動させる事なんて簡単だろう。
逆の立場であったならば新城は迷わずそうしたのだから。
だが実際は今、新城はまだ生きている。
そして近くに国枝の気配も無かった。
「…ん？」
ふと新城はベットの上に置かれていた自分の携帯電話に目をやった。
画面が見慣れた待受画面のものではなく、メールを制作する画面に変わっていた。
だがこの建物は圏外だ、メールなんて送れるはずがない。
だから新城自身がメールを制作した覚えはない。
メールの画面には『ここからは別行動だ、あんたのやり方、嫌いじゃないぜ』という文章が打たれていた。
その文章を読み、新城はＰＤＡを確認する。
隠し持っていた自分のＰＤＡである【８】だけが手元に残っていた。
「…くくく、まったく」

どいつもこいつも甘い、新城はその文章を読んで含み笑う。

命を狙われながらも自分を生かした雨宮と王生は当然として。

騙されていたのがわかって、その上で手を出さなかった国枝は甘いというより馬鹿だ。

だが…。

「そういう馬鹿の方が扱いやすいかもな」

新城は共に行動する中、国枝の戦闘能力を認めていた。

頭が弱い所を自分が上手く扱えば国枝はその力を存分に発揮出来るだろう。

「あぁいう馬鹿と組むのも悪くない」

それはこの建物のゲームに限らず。

ゲーム終了後の新城の”仕事”のパートナーとして。

「仕方ねぇな、まずは国枝の奴を探すとするか」

身体の方に得に異常が無い事を確認すると新城は戦闘禁止エリアを出る。

「3階にはもう居ねぇかもな…、しかしこの先の階段は使えないと」

地図で近くの階段を確認するが通り道にある階段には×の印が付けられていた。

これが瓦礫に埋もれて使えないものだという事は新城もわかっていた。

だから新城は対して何も考えずにその階段を通る。

「なっ―」

そこで新城は”ある光景”を見た。

――

――

「へぇ…、こいつがｊｏｋｅｒね」

新城を（引きずりながらだが）戦闘禁止エリアまで運んだ（あちこちぶつけながらだが）国枝は歩きながらｊｏｋｅｒを適当にいじっていた。

現在のピエロの絵の画面から適当にいじった結果、ｊｏｋｅｒは【１０】に変わった。

現在の国枝の解除条件として所有するＰＤＡと同じものだ。

「まっ…ゲームを盛り上げる景品くらいにゃなったかな」

王生のＰＤＡを【２】と考えた国枝はｊｏｋｅｒをそのままポケットに突っ込むと上の階へと目指した。

「必要なのば武器か、あとは舞台だな」

この時国枝がｊｏｋｅｒを使用した事は国枝からしてみれば単なる気まぐれだった。

だが結果的にその行動によって一つ、ゲームに動きが出る。

――

――

そこはモニターの部屋。

取り付けられた多数のモニターに囲まれながら中村がＰＤＡを見た。
音は鳴っていない、振動によって中村はＰＤＡを取り出したのだ。

「…む」

『どうしました、ＰＤＡを取り出して？』

「どうやらｊｏｋｅｒの五回目が使われたらしいの」

中村の持つＰＤＡはゲームマスター専用の物だ。
その画面にはｊｏｋｅｒの使用回数がカウントされていた。
当然、他の一般参加者に配布したＰＤＡにそんな機能は無い。
ゲームマスター専用のＰＤＡには最初から数多くの機能が追加されていたがその中でもこのｊｏｋｅｒの使用回数をカウントする機能は異質な物だ。
この機能の存在は一般参加者は当然としてカジノの客側にも知らせていない。

『ふふっ…、茶番ですね』

通信の相手、ディーラーは軽く笑った。

「年寄りにゃハンデを貰わんとな、それより…今の状況じゃ」

中村はそう言いながら机の上にあるようかんを口に言える。

「さんざ引っ張っておいて…このザマじゃからの、やはり他力本願はいかんという事か」

言いながらお茶をすするその表情にはまだ余裕があった。

中村からすれば数ある策の内の一つが失敗した程度の問題なのだ。

『では…暗殺部隊を使いますか？』

そして中村の余裕である最もな根拠がこれであった。

組織の暗殺部隊を使えばエースのスパイ一人どうという事は無い。

「まぁこうなっては仕方ないの」

『ただ…今からですとそちらに暗殺部隊が行くのに時間がかかりますが』

「それに観客にもバレてはいかんしの…、彼等には純粋にゲームを楽しんで貰わねば」

『堂々とJokerの使用回数のカウント機能なんて使って良く言えますね』

ディーラーは中村のその悪びれの無い発言に呆れたような声を出した。

「うむ？勘違いしちゃいかんよ、勝負が公平である必要は無い、必

要なのは公平だと思わせる事なんじゃから」

『…なるほど』

このディーラーは中村との仕事は初めてではあったが中村の噂は聞いた事があった。

もう何年も、回数でいえばその更に何倍もゲームに参加している男だ。

昔はバリバリの戦闘派で積極的に殺し合いを誘発させていたらしい。

流石に年には勝てず、肉体的には衰えたが、中村はそれ以上に恐ろしい知恵を身につけていた。

自分が動けぬならば策を巡らせれば良いと。

ディーラーから言わせれば中村は言わば妖怪のような男だ。

このゲームに巣くう妖怪。

「はて…なんの話しをしていたかの？最近物忘れが激しくて」

中村が優しい、どこにでも居るようなお爺ちゃんの表情で笑う。

『えっ？あ…、暗殺部隊がそちらに到着するのに時間がかかるという話しです』

不覚にも一瞬、そう見えてしまったディーラーは返事に戸惑ってしまった。

「おぉ、そうじゃったそうじゃった、う～む…」

中村は少しだけ考える”フリ”をするとポンッと手を打った。

「そろそろ動いて貰おうかの、サブマスターにも」

『……』

やはりこのじいさんは妖怪だ、ディーラーはそう実感した。

――

――

「日向が犯人ね、人が考えないようにしていた事をあっさりと言うのな、お前は」

「考えないようにしていたと言う事はやはりお前もそう考えていたという事か？」

「…言ってる事が変だぞ？」

「あ、揚げ足をとるな！！」

雨宮は顔を赤くさせてキッと王生を睨みつけた。

「日向はまだガキだぞ…ってのは通用しないだろうな」

「…当然だ、その…、私が親を殺したのだって１４の時だ」

「そっか…、俺はもっとガキの時だぜ」

そう言いながら王生は論点がズレている事に気付いた。

「そんな話ししてたんじゃなかったな…」

「私が日向を疑うのは状況的に一番可能性が高いからだ」

「んな事はわかってるよ、だが悪いが俺は柳に頼まれちまったからな」

「…柳に？」

「自分に何かあったら日向を頼むってな、日向はな、あいつの娘にそっくりなんだ」

「本当か？」

「あぁ、俺も写真見たしな」

王生がそう答えると雨宮は何かを考える仕草をとった。

「そうか…これも奴らのやり方か」

「…雨宮？」

断片的に聞こえたその言葉に王生は雨宮に声をかける。

「いや…何でもない」

「……」

―そういえば雨宮はエースとかいう対テロリスト用組織の一員だと柳は言ってたな。

色々と聞きたい事は山のようにあったが王生はチラリと監視カメラを見た。

―ここじゃマズイか。

「これは俺の勝手な推測だがな、日向が人を殺す奴だとして、柳がそんな奴を側に置くなんて思えない、まぁ…そんな所かな」

「…まったく、楽観的だな、お前は」

雨宮は呆れたようにため息をつく。

「だが用心して損は無い、それだけは覚えててくれ」

「……」

雨宮の発言に王生は思わず目を丸くさせた。

「…なんだ？鳩が豆鉄砲くらったような顔をして」

「いや…なんかさっきから聞いてるとさ、妙に俺の事心配してくれてるなって…」

「当たり前だろう」

だがそんな王生の表情とは反対に雨宮はあっさりとそう答えた。

「お前は私の命の恩人だ、お前に生きて欲しいと思うのは当然だろう」

「んな大袈裟…でも無いか」

実際、王生が助けなければ雨宮は死んでいただろう。

「だから私はお前に生きてこの建物から出て欲しいんだ、お前の恩に報いる為に」

「そいつは頼もしい申し出だけどな、たぶん無理だ」

雨宮の言葉に王生は首を横に振る。

「…生き残りたくないのか？」

そんな王生の行動が理解出来ず、雨宮はそう問いただした。

「そりゃ生きたいけどな、…そういやまだ言ってなかったっけ、俺

のＰＤＡ」

王生は自分のＰＤＡを取り出すと雨宮にその画面を見せた。

「…これは」

「【Ａ】だ、結局ゲームクリアには【Ｑ】の持ち主を殺す必要がある」

そのＰＤＡは雨宮に動揺を与えた。

「…【Ｑ】の持ち主を見つけたらどうするつもりだ？」

「…殺す」

王生の返事は即答だった。

そこに迷いは無い。

「―って、この建物で目が覚めた俺なら答えてるぜ」

迷いの無い言葉で、そう答えた。

「今は…違うのか？」

「さぁ…、だけど俺はこの建物で慶吾や夏喜に出会っちまった、もちろん日向やお前、あぁ、それと一応観月もか、なんて言うか…毒気が抜けたって感じか」

「…そう、強いんだな、そして優しい」

それは雨宮の口から出た素直な感想だった。

「おいおい、変な事言うな、単に巡り合わせが良かっただけだ」

「…巡り合わせ？」

「たまたま俺が【Q】の持ち主とも出会わず、ｊｏｋｅｒも配られなかっただけさ」

そこで王生は一瞬言葉を閉ざしたが。

「得にｊｏｋｅｒはな…、ありゃ持ってりゃ絶対使ってただろうな、んで平気な顔でみんなを騙してた、それだけだ」

「…光一、お前は」

雨宮はこの時、思い出していた。

国枝の標的となる事で国枝の狙いを自分だけに仕向けた王生の姿を。

「だから俺のＰＤＡより日向や夏喜達のを手伝ってやってくれ、夏喜は【４】、日向は【Ｋ】だ」

王生がそう言うと雨宮はふるふると首を横に振った。

「嫌だ、私はお前の生存を諦めない」

「嫌だって…ガキじゃあるまいし」

雨宮のその拗ねた子供のような反応に王生が戸惑う。

「…まだ方法はある、裏技とは言えるが」

「…裏技？この首輪に関係無いのか」

「あぁ…安心しろ、じつは私はエ――――」

「よっし！そろそろ夏喜さん達の時に戻るぞ」

雨宮の言葉を遮ながら王生は大袈裟に声を上げた。

「お、おい話しはまだ…」

「ったく」

―せっかく人が監視カメラに気をつかってんのに。

王生はため息をつくと雨宮との距離を縮めた。

「なっ―」

突然の王生のその行動に雨宮は言葉につまる。

だが王生は構わずそのまま雨宮の耳元に顔を近付けた。

「へ？な！急にそんな…」

その王生の行動自体が雨宮の顔を赤くさせる。

「話しは柳からだいたい聞いてんだ、ある程度はわかってる」

「!?、…そうか」

だが王生の監視カメラにさとられないくらいの小さな声でその言葉を聞いた雨宮は冷静さを取り戻すとスッと目を細めた。

「俺だってあんたに聞きたい事は山のようにあるが今はまだとりあえずその時じゃない、だろ?」

「…私は別に構わないが」

「…何言ってんだよ、バレるとヤバいんだろ?」

エースが組織と敵対しているという事は柳から聞いていた。

雨宮がエースの一員だという事が組織に知られればどんな干渉をされるかわかったもんじゃない。

「…そうだな、その話しは今はやめておくか、それより王生」

急に雨宮が顔をしかめてきた。

「…ずっと思っていたんだが、臭いぞ」

「…悪かったな、とりあえず戦闘禁止エリアでシャワーでも浴びるから勘弁してくれ」

王生は機嫌が悪そうに頭をかいた。

べちょり。

「……」

手に日向が頭にぶつけた液体が付着した。

「最悪だ…」

「ぷっくく…」

雨宮は笑いをこらえながら王生に背中を見せると先を歩き出した。

というより笑いをこらえている姿を見せたくなかったといえるか。

「…しかし」

その背中を見ながら王生は改めて考えた。

雨宮は何があってエースとなり、何を求めて今この建物に居るのかを。

聞きたい事は山のようにある。

まぁ今はとりあえず頭に付着した臭いをどうにかするのが先決だが。

「この階は…マズイな、次の階の戦闘禁止エリアに行くか」

そういえば慶吾と観月はどうしただろうか?

後でシャワー浴びた後にでも連絡をとってみようと王生は考えながら雨宮の後ろを追った。

第37話：茶番（後書き）

※重大なお知らせ※

え～っと…皆さん。

まだ大丈夫、まだ大丈夫だとは思ってましたが…。

さすがにそろそろ知らせた方がいいかな…とか思いました。

現在、仕事の方がとてつもなく忙しいです。

基本的に仕事を終え家に帰宅するのが日付の変わる0時過ぎ。

そこから飯食って風呂入ってしまえばもう2時近く。

そっから寝て朝の7時に起き会社に出勤→0時過ぎまで仕事。

まぁそんな生活ループをやってます。

ちなみに土曜日とかも休日出勤とかやってます。

なので小説の執筆が大変困難な状況になってます。

今回の投稿は深夜の開いた時間にちょくちょくと執筆していたものなので時間もかかりクオリティも微妙かもしれません。

こんな生活の中での執筆作業では恐らく、書きたい事を存分に書けないと思います。

なので大変心苦しいですが執筆作業を一時中断しようかと思います。

再開は仕事がある程度落ち着いたら、予定としては3月頃に再開しようと思います。

もし自分の小説を楽しみにしている人が居るのなら本当に申し訳ないです。

勝手ですがよろしくお願いします。

２０１１年1月２３日、キセル。

第３８話：サブマスター（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．８：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　渉：８：４．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：６．４：ヤマネさん
中村　真：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第３８話：サブマスター

「…ふぅ、やれやれ、やっとおちたか」

王生はくんくんと軽く自分の腕の匂いをかいだ。

階を上り四階へ。

通路を進んで戦闘禁止エリアへ。

この間、敵襲も無く、王生達の行動は順調といえた。

ある一点を除いてだが。

『…光一君、なんか変な臭いがするんだけど』

『臭いな…、あまり近寄るな』

『こーいちさんの体臭は給食の残したやつを入れるバケツの臭いがします』

という女性陣三人の厳しい腐った物を見るような目に王生は戦闘禁止エリアにつくなりシャワー室に直行させられた。

ちなみに三人目の小娘が原因ではあるのだが。

「はぁ…」

…厄介な事にゃなったな、と王生はため息をついた。

状況は良いとは言えない。

柳が侵入禁止エリアに落ちたのだ。

自分達が見逃したとはいえ国枝と新城も残っている。

―慶吾とも連絡をとってみるか、向こうの状況も知りたい所だしな。

「ついでに観月に礼も言っといてやるか」

着替えの中に置いてあるＰＤＡを手に取ると機能の欄をタッチし、通信機能を作動させる。

「……」

少し待つ…が、慶吾達からの応答は無かった。

「…慶吾？」

新城や国枝の相手をしていたのは他ならぬ王生達である。

主要の好戦的な人物と敵対していた分、慶吾や観月が狙われる可能性も低いはずだ。

「…後でもう一回連絡してみるか」

結局王生はそう結論を出して着替えをおえると女性陣三人の待つ戦闘禁止エリアのロビーへと戻った。

「……」

ロビーに入るなり、王生はピタッとその動きを止めた。

「…何の冗談だ？こりゃ」

状況が理解出来ず、思わずそう口に出してしまう。

「あ！こーいちさん！！」

日向が王生の元に走り寄る。

その頭には猫の耳がついていた。

「…おう、どうした？」

…とりあえずスルーしておこう。

しかし今の日向の様子はいつもの様子とは違う印象を王生に与えた。

「あの…ですね、その…」

日向は顔を赤らめながらもじもじと上目遣いで王生を見つめるとやがて。

「こーいちさんの事…、おにーさんって、そう呼んでも良い…ですか？」

「ダメだ」

即答。

「…夏喜さん、なにやら失敗のようです」

日向はいつもの調子に戻ると夏喜の所へ戻って行った。

「ちょっと光一君！こんなちっちゃくて可愛い子のお兄ちゃん発言を即答で拒否るなんてあなたそれでも人間！？」

「やっぱりあんたが黒幕か、つーか何だその言われよう！！」

王生はため息をつくと日向につけてあった猫耳の飾りを外すと手に取った。

「こんな物よくこの建物で見つけたな」

呆れた声でそう言うと猫耳飾りをぷらぷらとさせる。

「何言ってるの？光一君、この建物にそんな物あるはずないじゃない」

「なら何でこんな物があるんだよ？」

「ほら…、私達って誘拐されたけどかばんとかの中身は盗られてなかったじゃない？」

誘拐され、この建物で目が覚めた時もかばんや携帯はそのまま残っていた。

「あぁ…、そうだな、……ん？」

その事に王生は頷くと同時に気付いた。

「だからそれ…私用、だったり」

ポトリと王生は猫耳飾りを床に落とす。

「日向、今すぐ夏喜から離れなさい」

自身もゆっくりと夏喜から距離をとった。

「ち、ちょっと、ちょっと待って、何でそんなに引いちゃう訳!?」

「引くわ!猫耳飾りを普段から持ち歩くな!!」

「ち、違うのよ、その…たまたま持っていたの!たまたまなの!!」

「…しかもサイズが子供用だが?なんでたまたま持ってるんだ?」

「ほ、ほら…、私保育士目指してるって言ったじゃない、よく研修に行く所の行事で使って余った分を貰ったの!!」

「へ―」

「あ、信じてない、ほら、ちゃんと大人用のもあるんだから」

頼んでもいないのに夏喜は一回り大きいサイズの猫耳飾りを取り出した。

「…何がちゃんとなのかはさっぱりだが、あんたにそのまま持たせとくのは危険な気がする」

王生はそう言うと夏喜の持つ大人サイズの猫耳飾りを回収しておく。

「…どういう意味よ」

夏喜は頬を膨らませて子供のように拗ねた。

「とりあえず…、雨宮、持っといてくれ、なんなら捨ててもいいから」

「…私がか？」

王生は先程から話題に入ろうとしない雨宮にポイッと猫耳飾りを放り投げた。

「……」

雨宮はたいして興味がなさそうに猫耳飾りを掴む。

どうやら雨宮は例の他人バリアを貼ったのか、だんまりモードだ。

夏喜や日向が居るからだろうか？と考えながらも王生は話しを戻した。

「つーか、何がしたかったんだ？」

結局一連の流れが理解出来ていない王生が首を傾げる。

「光一君にお礼がしたかったのよね、日向ちゃんは」

「ち、違います。ちょっとこーいちさんのロリコン具合を確かめよ

うかと思っただけです」

「んで…あのお兄ちゃん発言がどうしてお礼になるんだ？」

「え？最高のお礼じゃない？」

「いや…、日向、相談する相手を間違えたな」

不思議そうな顔をした王生だが夏喜に同じように不思議そうな顔で返されては答えが返せなかった。

「…もーいーです、私もシャワー浴びてきます」

日向は恥ずかしがりながらシャワー室に逃げようとした。

「あっ…じゃあ私も浴びようかな、雨宮さんも一緒に行かない？シャワー室、いくつかあるみたいだし」

日向の後を追おうとした夏喜だがふと立ち止まると雨宮を誘った。

「いや…今はいい」

「…そっか、残念」

だが雨宮はそれだけ言うと夏喜もあっさりと引き下がり、シャワー室に向かう。

夏喜と日向がシャワー室に入り、王生と雨宮が残された。

「…ったく、シャワーくらい一緒に行ったら良いじゃねーか」

「その…、恥ずかしい…からな」

わかっていた事だが雨宮は夏喜や日向にはまだ他人バリアを貼っているらしい。

「恥ずかしいって…何が？」

「……」

押し黙る雨宮に王生はその理由におおよその見当がついた。

―あぁ、胸ね。

「ところで…さっきの猫耳だが」

「ん？あれがどうかしたのか？邪魔なら捨ててもいいんじゃないか？」

「いや…その、お前は猫は好きか？」

「どっちかっていうとうさぎが好きかな」

「そ…そうか」

「…？まさか付けたい…とか？」

言葉が上手く出て来ないのか、もじもじとする雨宮に王生が声をかける。

「ち、違う、断じて違う」

ぶんぶんと首を横に振る。

「まっ…、そりゃそうか、とりあえず二人がシャワー浴びてる間に飯でも作るかな」

いそいそと荷物から食材を取り出していく王生。

「……」

雨宮はそんな王生を見た後、視線はその手の猫耳飾りへと移った。

――――

同時刻、シャワー室内。

「ところで日向ちゃん、おねーさんと一緒にシャワーする？」

「お断りしておきます」

夏喜が笑顔でそう言うが日向はあっさりと断っていた。

「あ～、それにしても日向ちゃんの猫耳姿、もう可愛くって可愛くって、おねーさん、持って帰りたいくらいだった」

猫耳姿の日向を思い出しながら夏喜は日向に抱き着く。

「でもこーいちさんはア然としてましたね」

日向は鬱陶しいという顔をしていたが特に拒絶する事もなく、夏喜に答える。

「ね、ね、後でもっかい付けてみない？」

「…なんの為にですか？」

「えっと…、う～ん、そうね、じつはね、あの猫耳を付けてると胸が大きくなるの」

――

――

シャワー室での二人の会話は戦闘禁止エリアのロビーにも少し聞こえていた。

だがそれは気にかければ聞こえるといった具合だ。

「…！！」↑周りを気にかける癖がついている。

壁に寄り掛かっていた雨宮がいきなりびくりと動いた。

「…ん？どうしたんだ？雨宮」。

食材を持ってキッチンに行こうとしていた王生がそんな雨宮を見て不思議そうに立ち止まる。

「い…いや、少し辺りを調べてみようと思って」

「…一人で大丈夫か？」

「あ、あぁ…、大丈夫だ、問題ない」

そそくさとカニ歩きで戦闘禁止エリアの出口へと雨宮が向かう。

「？」

そんな雨宮を首を傾げながらも見送ると王生はキッチン台に食材を置く。

「雨宮の奴も上手い事打ち解けりゃいいんだけどな」

そんな事を言いながら調味料を取り出し、ある事に気付いた。

「…ん？塩が無い」

ほとんど空となった塩のビンを軽く振る。

前に使った時はまだあったはずだが…。

というかすべての調味料が減っていた。

「…日向か、あんの小娘」

恐らくは自分がシャワーを浴びている間に調味料をくすねて例の爆弾を作ったのだろう。

「都合よくあるとは思えんが、一応雨宮に頼んどくか」

とりあえず塩があれば持って来て貰おう。

そんな軽い気持ちで王生は雨宮の後を追う為に戦闘禁止エリアの入り口のドアを開けた。

「きゃあッ！！」

雨宮はすぐに見つかった。

猫耳をつけていた。

「……」

「……」

お互いに続く気まずい沈黙。

「…きゃあ？」

「～～～～！！」

その瞬間、まるで湯気でも出るかの勢いで顔を真っ赤にさせた雨宮が廊下の奥へ向けて駆け出した。

というか逃げ出した。

「…塩」

―――

「その話し、嘘ですよね」

「あ、やっぱバレちゃった？」

一方、場所は戻ってシャワー室。

日向がじとりとした目で夏喜の嘘を一蹴した。

「当然です、小学生でもあっさりと見抜ける嘘をつかないで下さい」

「でも日向ちゃんだって胸大きくなりたいとか思わない？」

「私はいいんです、これから大きくなるんで」

けろりとした顔で日向はそう答えた。

「…あはは」

夏喜は渇いた声で笑うと世の中って無情だな～と考えた。

―――

―――

そんなこんなで四人は王生の作った料理の並べられた食卓につく。

ちなみに雨宮は王生と目を合わせないようにしていた。

「?、雨宮さんと何かあったのですか」

「ちょっと…な、つか日向、お前勝手に調味料使うなよ」

「ところでこの料理は王生さんが作ったのですか?」

「ところでの使い方がおかしいだろ!まぁ作ったのは俺だ」

「…大丈夫なんですか?」

くんくんと料理の匂いをかいでみる日向。

「ふふっ…、食べたらびっくりすると思うよ」

そんな日向に夏喜は笑顔でそう答える。

「…軽く落ち込むくらいにね」

その後に暗い表情を見せた。

ぱくりっと日向が料理を口に入れる。

「!!、こーいちさん!!」

その表情を輝かせると素早く王生の方を振り向いた。

「なんだ?」

「毎朝私にお味噌汁を作って下さい!!」

「やだ」

即答。

「…フラれちゃいました」

「ちょっと光一君!こんな可愛い子の告白を即答で拒否るなんで何考えてんの!!」

―疲れる…。

王生がポリポリと頭をかくと彼の前に空になった皿が突き出された。

「…おかわり」

「…はい」

雨宮の突き出した皿を受け取ると王生はいそいそとキッチンへとおかわりを取りに行った。

「こーいちさん」

「…ん？どうした」

ふと日向が王生を追いかけてキッチンに入って来る。

「そういえば、これ、プレゼントです」

日向が王生に渡したのは包帯だった。

日向を見つけた箱の中にあった物だ。

「こーいちさんも怪我しているんですから、使って下さい」

確かに、そろそろクロスボウの矢にやられた脇腹の包帯を変えないといけない。

「まっ、怪我人は多いからな、あって困るもんじゃないか」

王生は頭の中で怪我により、足に包帯を巻いていた観月を思い浮かべる。

「……！！」

そこで、王生の動きが止まった。

ふと一瞬、思い浮かんだのだ、ある会話が。

それは日向を見つけた時、おんぶを嫌がった日向の提案だった。

《包帯をまいて怪我人のフリをすればいい》

「ッ！雨宮！！」

王生はすぐに雨宮の所に戻るとぐぃっとその手を引いた。

「…なんだ？」

「…話しがある、ちょっと来てくれ」

――――

――

「まぁそういう訳でエースがこのゲームに紛れてて困っとる訳じゃ」

このゲームを主催する運営側の人間である中村は管理室でＰＤＡを使い、連絡をしていた。

この連絡機能も中村の持つゲームマスター専用のＰＤＡの機能だ。

ただし、今回の連絡相手はこの建物の内部に居た。

『…それで、どうしろと？』

相手は無感情な声でそう返す。

「では単刀直入に、ちょっとナンバー《2》、雨宮　鈴音ちゃんを殺して来てくれんかの？」

中村の言い方はまるでお使いを頼むかのような口ぶりだった。

『…上の失敗の後始末か、丸投げだな、だが観客はいいのか？』

「もちろんエースというのは隠しておる、ゲームを盛り上がる演出じゃよ」

中村は含み笑いをしながら手元の書類を見る。

「武器や装備はいつもの場所に置いてあるからの」

『……』

相手からの言葉は無い。

「ん～？おやおや、返事が聞こえないの？歳のおかげで耳が遠くなったかの？」

中村はわざとらしくＰＤＡに向けて耳を近付ける。

「ふむ…情が生まれたのかの？」

『…何を馬鹿な事を言っている？ついに、いや…やっとボケたか？』

「ふぉっほっほ！相変わらず毒舌なようで安心したわ」

中村はどこにでも居る老人のように笑うとスッと目を細めた。

「わかってるとは思うが…」

『安心しろ、仕事とプライベートは分けるタイプだ、それで…お前は見学か？』

「ごっほ！ごっほ！！この歳になると動くのが辛くての」

中村がわざとらしく咳こんだ。

『だったら早く隠居して安らかな老後生活でも送るんだな』

「…考えておくかの、まぁ君にとっても悪い話しじゃないじゃろ？」

『…借金が減るから、か』

「ご明察、人が減れば減る程に君の分け前も当然増える、だからのぉ―」

中村は言葉を溜める。

焦らす、ゆっくりと、意地悪く笑う。

「いっその事雨宮と関わる者皆を殺してしまってもいいかもしれんぞ？その方が遊戯も盛り上がるしの」

『……』

連絡相手は何も答えず、通話を切った。

「む？」

中村はつまらなそうにＰＤＡを巾着袋に収める。

そしてあらかじめお茶の中に入れてふやけさせておいたせんべいを口に入れた。

「ふん、女狐が…」

―――

――

「ふん、狸爺が…」

観月が居た。

一人だった。

観月はそう呟くとＰＤＡをポケットにしまう。

同時に携帯を取り出し、待受画面を見るとすぐに戻した。

それだけで十分だった。

観月の表情が暗く冷たいものへと変わる。

そしてすでにボロボロになっていた足の包帯をとった。

綺麗な足が見えた。

怪我なんて一つも無い足。

しゅるり、と彼女はそこに新しい包帯を巻き付ける。

「さて…と、仕事か」

床をつま先でトントンとすると観月は床に足を付け、平然と歩き出した。

ピッ

連絡用に切ってあった”カメラ”を起動させる。

「ゆ～け～、風のごとく～、サダメ～の戦士～よ」

観月は動き出す。

このゲームを管理する組織側の人間として。

サブマスターとして、雨宮を殺しに。

観月は行動を始めた。

彼女の持つ、彼女自身の目的の為に。

第３８話：サブマスター（後書き）

《おまけ小説》

【葛藤と沈黙の間で】

王生「……」

雨宮「……」

王生が雨宮を追い掛けると猫耳をつけた彼女が居た。

雨宮（ど、どうしよう…見られてしまった）

王生「……」

雨宮（猫耳なんかつけて、へ、変な奴って思われないだろうか…、いや、でもこの猫耳には素晴らしい力があるのだからそれを正直に打ち明けよう…）

王生「……」

雨宮（って！それじゃあ私が自分の胸にコンプレックスを持っていると思われるじゃないか、もっと自然に…猫耳をつけた理由を考えればいいんだ）

王生「……」

雨宮（そうだ！私も日向のようにお礼がしたかったんだ、えっと…

何と言うんだったか）

王生「……」

雨宮（『光一の事…、お兄ちゃんと呼んでもいいだろうか？』、よし！これでいこう！！）

王生「……」↑年下

雨宮（ダメだ…それじゃあまるで私が変態じゃないか）↑年上

王生「……」

雨宮（どうしよう…何か言わないと）

王生「…きゃあ？」

雨宮「～～～～！！」

ダダッ

湯気が出るかの勢いで顔を真っ赤にさせた雨宮はその場から逃げ出すように駆け出しましたとさ。

第３９話：急転直下（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．８：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：４．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：４．４：無し
神北　観月：７：２．４：ヤマネさん
中村　　真　：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第３９話：急転直下

「……」

重く暗い雰囲気が戦闘禁止エリアを包み込んでいた。

日向は体育座りをし、顔をうつむかせている。

夏喜は必死に涙のあとを拭おうとしていた。

そして…雨宮は、雨宮鈴音は目を閉じ、深く後悔していた。

彼女は本来、このゲームの参加者として選ばれるはずがなかった。

組織に潜入した彼女の仲間が情報を操作し、彼女をゲームに参加させたのだ。

ではそれはなぜか。

ゲームの参加者の中にはゲームを滞り無く展開させる為、また、ショーの客である者達により臨場感のある映像を見せるカメラマンの為。

参加者に紛れ、ゲームマスター、そしてサブマスターとして組織側の人間がゲームに参加している。

雨宮の目的はその二人だった。

エースが雨宮に下した指令は一つ。

【ゲームに参加し、ゲームマスターとサブマスターを殺害しろ】

通常、これはエースの人間がゲームに参加する理由としては有り得ない。

エースという組織がゲームに参加する理由は工作にある。

ゲームが行われる建物内に仕掛けを作っていき、長く時間をかけてゲームを潰す。

だがそれはエースとしての基本的な思想でエース全体の考えでは無かった。

一部にはタカ派と呼ばれる過激派がいる。

組織の人間は全て殺してしまえ、という派閥。

エースという組織は決して一枚岩では無いのだ。

雨宮　鈴音が所属しているのは…タカ派だった。

雨宮は今回の指令に躊躇無く頷いた。

彼女を突き動かしてしたものは憎悪、敵意。

何より彼女の過去。

だから雨宮はゲームマスターとサブマスターを殺しに来た。

ゲームマスターの方はまるで雲を掴まされたかのように情報が掴めなかった。

だが…サブマスターの方は違う。

神北　観月。

エースは彼女の情報を掴んだ。

そして観月を殺せばそれはそのままゲームマスターにも繋がる。

だから雨宮はゲーム開始からずっと観月を狙っていた。

組織側の人間以外は殺さないようにしながら。

「……」

だが行動が遅すぎた、雨宮は今の状況に深く後悔していた。

雨宮の話しを聞き、王生は駆け出した。

後を追う夏喜や日向、雨宮の言葉を無視し、四階から五階へ。

そして王生は見つけたのだ。

見つけて…しまったのだ。

床に横たわる…かつて親友だった者。

藤原慶吾の死体を。

頭を銃で撃ち抜かれ、ＰＤＡは奪われていた。

王生は今、三人とは少し離れた部屋に一人で居る。

一人にして欲しい…と、そう言っていた。

「…光一」

その王生の姿が、光を失った時の自分と重なる。

自分は王生によって救い出された。

ならば…自分は何をすれば良い？

雨宮はゆっくりと立ち上がり、夏喜の前まで歩く。

「雨宮…さん？」

雨宮が自分から来た事に夏喜は少なからず驚いていた。

「夏喜、頼みが…ある」

かつて王生が言っていた言葉を雨宮は思い出す。

『飯ってのは人を幸せにするらしいぜ、覚えてて損は無しだ』

「私に…料理を教えてくれ、光一を…元気にしてやりたいんだ」

「えぇ、そうね、もちろん協力するわ」

雨宮の言葉に夏喜はニコリと笑う。

慶吾と共に行動をしていた夏喜にとっても慶吾の死は強烈なものだった。

それでも…夏喜は雨宮の為に立ち上がる。

「私…、みんなに頼ってばっかだったから、ちょっとは役に立たないとね」

「私も手伝います、こーいちさんへの恩返しがまだですし」

日向も立ち上がり、三人で戦闘禁止エリア内のキッチンへと向かった。

―――

――

「…慶吾」

雨宮達から離れ一人、王生はぎりぎりと歯を食いしばっていた。

止めようとしたって涙は流れてくる。

「……」

もともと…、王生は慶吾の生還を一番に望んでいた。

その為ならば自分はどうなってもいいと思っていた。

だが慶吾は死亡した。

目的を失い、王生の心には大きな穴が空いていた。

身体に力が入らない。

ガチャッ

「……」

部屋の入り口のドアが開くが王生は何の反応も見せなかった。

そこに居た以外な人物を見るまでは。

「…少年」

「観月…か」

観月が…服がはだけ、ボロボロとなった観月が居た。

走りまわっていたのか汗が身体をつたい、呼吸が荒い。
観月はゆっくりと足を引きずりながらも王生に近付いた。
そのまま王生の身体を背中からギュッと抱きしめる。
胸が王生の背中に当たる。

「…慶吾少年は、足を怪我した私を守る為に、自分が囮となって…殺された」

王生の耳に囁くように、観月が語る。

「……」

「私は…どうすればお前に許して貰える?私はお前の為なら…何でもする」

「…何でも?」

背中から抱きしめられながらも王生は観月の方を振り向く。

「あぁ…何でも、だ」

王生の耳元で囁かれる、甘い誘い。

観月の唇が…、王生の唇に近付いていく。

スッ

「…何もしなくて良い、死んでくれ」

強く、冷たい声で王生は言葉を返した。

王生は観月の身体に拳銃を押し当てた。

隠し持っていたものだ。

「…ふっ」

しかし観月は一つの動揺を見せず、不敵に笑う。

「傷心した君に付け込む色仕掛けは失敗か、私としては傷ついたかな」

「黙ってろ…」

拳銃の引き金を王生は――――。

ズガァァァアアンッ

「!?」

轟音と共に部屋のドアが吹っ飛んだ。

ぐるりと王生の視界が変わる。

その身体は床へ、その視線は観月を見上げる形になった。

「では次は暴力に頼るとしようか」

王生を見下ろし、観月がそう呟いた。

「ぐっ…」

王生が拳銃を観月に向けようとする。

ドガッ

だが観月は拳銃を持つ王生の腕を容赦無く踏み付けた。

「ぐぅ…あっ！！」

ポロリと拳銃が王生の手から落ちる。

ガシャンッ

観月は拳銃を蹴り飛ばすと拳銃は王生の手の届かない所まで転がった。

「少年、君は確かにセンスはあるが、如何せん経験が不足している」

ドカッ

「ッ！！」

観月は王生の胸の辺りを踏み付けながら拳銃を向けた。

「だから簡単に隙を見せるのだ、さっきの爆発のようにな」

ドアの爆発は観月が仕掛けたものであったがその目的は単なる誘導に過ぎなかった。

「さて…、私はこれでいつでも君の身体をぶち抜ける事ができるようになった訳だ」

「てめ…ぇ」

王生の呪うような視線にも観月は反応を見せない。

「言い忘れてたな、質問はこっち、そしてお前は答えるだけだ」

「ふざけん…な、誰が…」

王生が暴れ出そうと身体を動かす。

ビキビキッ

「ぐっ…、あぁぁぁぁぁぁぁぁあ!!」

その瞬間、激痛が王生に襲い掛かった。

「それ以外の君の発言は一切許可しない、そのつもりで居ろ」

無表情な顔のまま、観月は王生の脇腹を踏み付けていた。

クロスボウによって受けた傷を更にえぐっていく。

「少しは大人しく話しを聞く気になったか?」

「誰…が」

グチャッ

「――――ッ！！」

観月は一切の容赦を見せず、王生の傷口をえぐる。

「いい加減にしないとマゾに目覚めてしまうぞ」

冗談のようにそう言う観月だったがぐったりとした王生は何の反応も見せなかった。

「…大人しくなったか、それじゃあ仕事の話しとしよう」

「し…ごと？」

「君に提案がある、もちろん、君にとっても有意義な話しだよ」

第３９話：急転直下（後書き）

《おまけ小説》

【バランス】

雨宮（栄養のバランスを考えなきゃいけないな）

塩を入れてみる、少し多く入れすぎた。

雨宮（このままじゃくどいな、砂糖を入れるか）

砂糖を入れてみる、少し多く入れすぎた。

雨宮（ちょっと甘くなりすぎか、辛さで中和しよう）

タバスコを入れてみる、少し多く入れすぎた。

雨宮（これじゃあタバスコが強いか…、他に強そうな物でタバスコを打ち消そう）

醤油を入れてみる、少し多く入れすぎた。

夏喜「雨宮さ～ん…」

第４０話：神北観月　其一（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：４．３：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：４．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：３．２：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：２．４：ヤマネさん
中村　　真　：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第４０話：神北観月　其一

「…提案だ？」

「簡単な話しだ、そしてなおかつ君にとって有意義な話しだ」

床に倒された王生の胸を踏み付けながら観月が語る。

「私の目的はな…少年、雨宮鈴音にある、彼女にちょっと用事があってな」

「雨宮を、殺す…つもりか」

「あぁ、殺す」

観月はあっさりとそう口に出してみせた。

「それでちょっと君に手伝って欲しい事はな、雨宮を油断させつつ、誘い出して欲しい」

「…はっ、寝ぼけてんのか？誰がてめぇらの言うことなんざ――――」

「報酬は君の生還を約束する事を誓おう」

「！？」

王生が目を見開いて驚いた。

「この階まで生きて来たんだ、ソフトウェアは知っているだろう？」

「…そんなもん、単に地図を拡張したり相手の位置を地図に映すくらいだろ」

「侵入禁止エリアへの侵入が可能になるソフトウェア」

「…あるのか？そんなもんが」

「君が知らないのも無理はない、しかし賢い君ならばこのソフトウェアが何を意味するかわかるだろう？」

侵入禁止エリアは一階から順に広がっていき、最終的にはこの建物全体が侵入禁止エリアとなる。

首輪を解除していない者が侵入禁止エリアに入ってしまえば建物内の防衛兵器に殺される。

ならば…侵入禁止エリアへの侵入が可能になればどうだ？

例え首輪をしていたとしても防衛兵器は作動せず、ゲーム終了まで待てばクリアだ。

首輪を外す、というのはゲームをクリアするまでの過程でゲームクリアの条件ではない。

王生はその事に気付いていた。

もし観月の言うソフトウェアが本当にあるのならば、首輪の解除という過程を省く事が出来る。

王生が生存する上で最も厄介だった首輪の解除が。

「私ならばお前にそれを与えてやれる、いや何、これもエクストラゲームだと思えばいいさ」

「…少し、考えさせてくれ」

王生は観月が顔を逸らすように首を横にした。

「ふむん、決断が遅いというのはな、それだけチャンスを見逃し続ける者だと私は思うぞ」

観月は拳銃の銃口をまっすぐに王生に向けている。

―決断が遅い？何馬鹿を言ってやがる。

――結論なんかとっくに出てんだよ!!

首を横に向けた王生の視線の先には先程、観月に蹴られて転がった拳銃があった。

――――慶吾が居ないんじゃ、戻ったってつまらねぇ。

――――そして…慶吾を殺したお前を見逃せるはずがねぇ。

王生は考える。

その思考の中に観月の先程の提案等は微塵もなかった。

その思考の全てを観月を殺害する事に込めて。

王生は考える。

拳銃は手の届く場所には無い。

ならば…ナイフか。

本来王生は拳銃のみを使う予定だった為、彼のポケットにナイフがあったのはただ用心の為に持ち歩いてただけだった言える。

だがこれなら観月もその存在を知らない分、不意をつけるかもしれない。

だが…当然ながらナイフの刃には布が被せてある。

現状では観月の足を斬りつけた所で対したダメージは与えられないだろう。

だったら…こいつの使い道は。

「さぁ、決断の時だ、頑張ってみろ、男の子」

王生の思考に被せるように観月が言葉を発する。

王生は観月の持つ拳銃をじっと眺めていた。

いや、王生の視線はその奥。

部屋への乱入者となる雨宮鈴音へと移り変わる。

「!?」

観月がそれに気付き、雨宮の姿を確認しようと部屋の入り口へ振り返る。

「ふっ!!」

王生はその隙をついてナイフを観月の顔めがけて投げつけた。

ガキィインッ

観月はナイフを拳銃を使って払い落とす。

が。

王生は観月から逃れると床に落ちた拳銃めがけて飛び出した。

「しっ!!」

王生は拳銃を掴むと素早くくるりと身体を回転させて銃口を観月へと向ける。

雨宮を見れば同じようにライフル銃の銃口を観月に向けていた。

挟み撃ちの形だ。

だが観月の手には王生の見た事の無い物体が握られていた。

形だけを見れば手榴弾に見える。

「いやいや、流石に一対ニは勘弁かな」

その物体を観月が投げ付けた。

自らの真上に。

「光一！目をつむれ！！」

続いて聞こえてくる雨宮の声。

しかし一瞬遅かった。

ピカッ

手榴弾はまばゆい閃光を放つ。

王生の視界が白く染められていく。

「くっ！」

ダァンッ、ダンッ、ダンッ

続いて王生の耳を刺激するように銃声が響いた。

―観月が…撃って来たのか？

瞬間的にそう考えたがそうなれば王生が今生きているはずが無い。

となれば…雨宮と観月が？

王生の視界が徐々に鮮明になっていく。

その目は部屋から通路へと駆け出していく雨宮の後ろ姿が見えた。

「雨宮！！」

「来るな！ここからは私の仕事だ！！」

雨宮にそう言われながらも王生はその後を追った。

「そいつは…俺が」

王生が通路に出るとライフル銃を構える雨宮が見えた。

その銃口の先には当然観月が居る。

観月は逃げようともせずにこちらを眺めている。

その表情には笑みにもとれるものが見えた。

「観月ぃぃぃいいッ！！」

王生は堪える事が出来ず叫びながら拳銃を観月に向けた。

ダン、ダァンッ。

雨宮と王生の銃がほぼ同時に観月に向けて発射された

「ふっ…」

ガシャァァアンッ

その瞬間観月の手前、防火シャッターが床へと降りた。

二つの銃弾は防火シャッターに憚れる。

「…クソッ！何でシャッターが！！」

「あの女が作動させたんだろう、忘れたのか？私が奴狙う理由を」

「…組織側、か」

雨宮はサブマスターである観月とそしてゲームマスターを殺しに来た。

「だったら、何でもやり放題…って事じゃないか、そんな奴らに一人で喧嘩売りに来たのかよ、あんたは」

「安心しろ、連中もあくまでショーの体裁くらいは守るはずだ、その気になればこの建物の防衛兵器を起動させればそれで済むはずだからな」

「だからって…」

ふと王生は雨宮と、そして柳と初めて出会った時を思い出す。

その時の会話を。

あれは雨宮が柳に向けて言った言葉では無かった。

「…お前、はなっから死ぬつもりで来たのか？」

「……」

雨宮は何も答えない。

その変わりに。

「さっきも言ったが…ここからは私の仕事だ、光一、戦闘禁止エリアに夏喜と日向が居る、お前も戻っていろ」

ライフル銃を手に雨宮は観月を追うように歩きだす。

「…悪いけど、それは聞けない」

「ここは簡単に言えば奴らの庭だ、どんな罠を仕掛けるかわかったものじゃない」

「だろうな、さっきのを見ればわかる」

王生は雨宮について行こうと歩きだした。

スチャッ

「！？」

その王生の額に雨宮はライフル銃を突き付けた。

「伝わらないなら正直に言う、足手まといだとそう言っている」

「……」

銃口を向けられた王生は表情を変えない。

ぐっとライフル銃を掴むと雨宮の目を見つめた。

「俺を守る事であんたが満足に動けないなら、俺を置いてけばいいさ」

「光一…？」

「ってのは単にあんたを納得させたい方便だ、実の所、ただ単に観月を殺したい、それだけだ」

王生は雨宮の銃口をどかすと前に進み出した。

「勝手にやらせてもらう」

「…まて」

だが雨宮が王生にそう呼び掛ける。

「…なんだよ？」

「ＰＤＡの地図を出せ、あの女の行動を予想し、追い込む」

「雨宮…」

「勝手にやるのはいい、だが…勝手に死ぬ事は許さない」

雨宮は王生に向けて優しく微笑みかけた。

「言っただろ、お前に生きていて欲しい…と」

―――

―――

「二人で動き出したか、厄介だな」

シャッターの壁によって二人から逃れた観月はシャッターに寄り掛かるとＰＤＡを操作していた。

ブルルッ…

その時、ＰＤＡ本体がぶるると震える。

「…奴か」

観月は渋々といった表情でＰＤＡの通話機能を作動させた。

「何の用だ?高見の見物の通り今忙しいんだ」

『ま~、そう言わんといてくれんか、観月君』

通話の相手はゲームマスターである中村だ。

『いや老婆心ながら心配になっての、ちょっとした忠告じゃ』

「……」

『何を血迷っておる?なぜすぐにナンバーAの少年を殺さなかった?』

「言ったろ、エースの女をおびき出す餌になって貰うと」

『ふむふむ、そうかそうか、ならば…』

スッと中村の言葉が一気に冷たくなった。

『なぜわざわざ爆弾を爆発させてまで鈴音ちゃんを呼び寄せたのかの?』

雨宮が観月と王生の部屋に駆け付けたのはその爆発音を聞いたからだ。

「それこそボケたか、戦闘禁止エリアからあぶり出したかっただけだ」

『相手が戦闘禁止エリアにおるのならそれこそ都合がよかろう?エリア外から攻め込めが鈴音ちゃんだって手が出せまい?』

「……」

通話をしながら観月は心の底から中村を嫌悪した。

このまま言い合いをしてもこの老人は引く事が無いだろう。

「それで…何が言いたい？」

『いやぁ、よもや、君の命が自分の物だけじゃないと、忘れてしまったのかと』

「…ッ！！」

その言葉に観月は表情を歪める。

「…わかっている、そう言えば満足か？」

『そう怖い顔するでない、いやいや、モニター越しでは見えんがの』

冗談っぽく笑うような声だが観月の表情は怒りで満ちていた。

「黙ってみていろ」

観月はＰＤＡの通話機能を切ると中村の通話を一方的に切る。

「…加奈美」

観月は悔しそうに一人の名前を呼ぶと行動を始める。

彼女は負ける訳にはいかなかった。

逃げる事も許されていなかった。

そして、もう一つ、観月には許されていない事があった。

それは一つの約束だった。

「私はどうすればいいのだろうな、なぁ…慶吾少年」

第４０話：神北観月　其一（後書き）

【おまけ小説】

《ぱんつくった事ある？》

日向「こーいちさん」

王生「ん？なんだよ？」

日向「こーいちさんって料理得意なんですよね」

王生「得意ってか…、自然の身についたって感じだけどな」

日向「だったらパンとかも作れるんですか？」

王生「おっ！パン作りなら最近ちょっとハマッてるぞ」

日向「それじゃあ今度日向においしいパンを焼いて下さい、実は給食のパンって結構苦手なんです」

王生「そーだな、無事にここを出たら作ってやるか」

日向「本当ですか、ありがとうございます！！」

―――

日向「ふんふふ～ん♪」

夏喜「あら日向ちゃん、ご機嫌ね」

日向「はい、今度こーいちさんが私の為にパン作ってくれるので」

夏喜「そう、よかったわね」

日向「はい♪」

―――

夏喜「……え？」

夏喜「光一君が…日向ちゃんの為にパンツ食ってあげるって、……
……事？」

第４１話：神北観月　其二（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：４．３：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：２．４：ヤマネさん
中村　　真　：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第４１話：神北観月　其二

「クソッ！ここもダメかよ！！」

王生と雨宮の目の前には防火シャッターが降ろされていた。

地図を見ればこの先にはまだ通路が続いているはずだ。

だが防火シャッターのおかげで前に進む事が出来ない。

これまで何度もこの防火シャッターのせいで王生と雨宮は回り道を余儀なくされていた。

しかし…それだけだ。

「…観月の奴、何考えてやがる」

「確かにな…、何かを仕掛けてくる気配がない」

今まで王生と雨宮が遭遇してきたものは防火シャッターのみである。

具体的に王生達に何かをしてくる様子が無い。

「ここまで俺達の進行ルートを制限しているんだ、道中に爆弾でも仕掛けるかと思ってたんだがな」

「そんなものを私が見落とすと思うか？」

雨宮と王生が最も警戒しているのはそれだった。

防火シャッターで進行ルートを制限し、その道筋に爆弾等の罠を仕掛ける。

だからこそ雨宮は常に警戒をしていた。

組織側という立場上、観月の武装は得体が知れない。

単純な話し、この建物で手に入る最も強力な武器を観月はいつでも持ち出せるだろう。

「単なる時間稼ぎか…、上の階へ逃げる為とかの」

「いや…、わざわざあの女が自分から行動を起こしたんだ、その可能性は薄いだろう」

「にしてはやり方が消極的な気がするんだよな…」

王生と雨宮は通路を進んでいく。

その奥には部屋があった。

「…あの部屋に入るしか無いか」

「油断はするな」

雨宮は王生にそう注意を促すと自らが進んで部屋の扉を開けた。

「…なんだこりゃ？」

王生が足を止めて言葉を漏らした。

部屋に観月は居ない。

そして何かを仕掛けられた様子も無い。

だがそれよりも王生が注目したのは部屋の構造だった。

だだっ広い部屋、そして王生達が入って来た扉以外に二つの出入り口。

だがそのどちらの出入り口も王生達が今までこの建物で見てきたものとは違う扉だった。

掴むようなものも無い、一目で簡単には開けられないとわかる鉄の扉。

それが部屋の左右にそれぞれ、設置されていた。

左右の出入り口の距離は遠い。

「…行き止まり？いや、違うか」

今までの防火シャッターとは違い、今回は扉だ。

この部屋には観月がわざわざここに誘導した理由があるはず。

王生は右側の鉄の扉に近付く。

「ふっ！」

手の平を当てて押してみるが鉄の扉はぴくりとも動かなかった。

「簡単にゃ動きそうにないな…」

その事を確認すると王生は扉の横へと目を向ける。

スイッチが一つ、そこにはあった。

「……」

本来ならばあまりこういった物は押さない方が良いだろう。

だがもう一度部屋を見渡しても他に手がかりと言える物は無い。

ただ左側の鉄の扉の横にも同じスイッチがあったのは見つけたが。

「二つのスイッチ…、二つの扉」

予想を立てた王生は意を決してスイッチをゆっくりと押し込んだ。

カチャリッ

左右の鉄の扉は何の反応も見せない。

「…ふぅ」

その事が王生を安堵させる。

予想が的中したのだ。

それがあまり良いもので無いとしても。

「雨宮」

王生は同じく部屋を探索していた雨宮に声をかけた。

「なんだ？何か見つけたか？」

「向こう側の鉄の扉があるだろ、ちょっとそっちに行ってくれないか？」

王生は左側の鉄の扉を指差して雨宮を移動させる。

「これでいいのか？」

「あぁ、その扉の横にスイッチがあるだろ、こっちにも同じやつがある、同時に押してみるぞ」

王生が合図を送り、雨宮と同時に左右のスイッチをそれぞれに押した。

ガガガガガッ…

「扉が…開いた」

二つの鉄の扉が同時に上がっていく。

「光一、どちらの扉に――――」

雨宮が王生の方へと振り向く。

王生はすでに右側の扉から通路に出ていた。。

「…え？な！光一！！」

ゴゴゴゴゴッ

「くっ！！」

その瞬間、鉄の扉は再びゆっくりと下へと降りていく。

「どうやら観月の狙いは俺達の分断だったみてーだな…」

雨宮は王生の所まで行こうと進み出すが数歩で立ち止まった。

間に合わないという事を理解したのだろう。

「じゃあな、生きていたらまた会おうぜ」

王生は軽く手を振った。

「この…馬鹿が！！」

雨宮は珍しく声を荒げながら左側の出入り口から通路へと抜ける。

ガシャァアンッ

「悪いな、まぁ他に方法も無かった訳だが」

閉まりきった鉄の扉に一度寄り掛かり、王生は一息ついた。
そして前へと通路を進んでいく。
―観月の狙いが俺達の分断にあるのなら。
――あの左右どちらかの扉が…奴へと続いているはずだ。
ガチャリッ
通路を進み、扉を開ける。
「悪いな雨宮、どうやら当たりは俺みたいだ」
「こちらとしてはハズレ…と言えるかな」
観月が居た。
一度一緒に居た頃に見せた、人を小馬鹿にした笑顔を見せながら。
「どうやら君はどうあっても私を殺したいみたいだな」
「…お前だけは、俺が…命に変えてでも、殺してやる!!」
「私が慶吾少年を殺したと?」
「お前は慶吾と一緒に居たはずだ…、何で…慶吾が死なきゃならねぇんだよ」

「…そうだな、間違っては無いよ少年、私は慶吾少年を殺したと言えるだろう」

「…ふざけるな」

王生は睨み付けながら拳銃を観月に向けて構えた。

「自作自演の怪我でずっと俺達を騙し続けて、状況が変わればあっさりと殺す、それがてめぇのやり方なのかよ！！」

「あぁ、私はずっとそうやってこのゲームを生き抜いて来た、時には男に身体だって売ってな、真っ裸であそこを硬直させながら私に殺されていった奴も居る」

観月の手には手榴弾のような物が握られている。

「何が…あんたをそこまでさせるんだよ」

王生はその事に最大限の注意を払いながらも会話を続けた。

「何が…？誰でも欲しがる物の為だよ、つまり…金さ」

「金の為に…、慶吾を殺したってのかよ」

「あぁ、私は金と慶吾少年を天秤にかけて…、慶吾少年を捨てた」

「てめ―」

「もうおしゃべりはいいだろう、少年」

ピシャリと、観月は王生の言葉を遮る。

「私を殺したいならやってみるといいさ、だが私とて死んでやる訳にはいかん」

ヒュッ

観月はその手の手榴弾に似た物を真上へ投げ付ける。

「こいつは…あの時の」

「だからとりあえず君を拘束させてもらうとするよ」

ピカッ

爆弾は光りを放ち、部屋を白く染めた。

スタングレネードと言えば音と光りで相手を気絶させる事に用いるがこの特殊爆弾に関しては光を放つだけだ。

この建物の武器の中にはまだ開発中の武器の試作品として回らされたものも数多くある。

ダァンッ

「ふっ、さすがに二度も閃光弾は通じないか」

観月の頬を弾丸がかすり抜けた。

「クソッ！外したか！！」

王生は観月に向けて駆け出す。

「おっと…」

観月は後ろへと跳びながら手榴弾に似た特殊爆弾を王生へと投げ付けた。

「チッ…」

ガッ

王生は特殊爆弾を掴むと観月に向けて投げ返した。

プシュッ

特殊爆弾は煙幕を放った。

「…煙幕ッ！！」

特殊爆弾、煙幕弾が王生の視界を奪っていく。

―観月は…どこだ。

ピクッ

王生は自らの背後に気配を感じた。

「くそ…！！」

ブォンッ

しゃがみ込んだ王生の真上を何が通っていく。

―蹴り？

やみくもに拳銃を撃っても意味が無い。

「そこかぁぁぁぁぁぁあ！！」

だからこそ…王生は駆け出した。

戦術も何も無い、体当たり。

ドガッ

だがそれは観月に命中した。

「ツッ！！」

観月を床に倒した王生は馬乗りになって拳銃を観月へと向けた。

「これなら…外さない！！」

「甘いッ」

だが観月は王生の手の拳銃を掴むとその銃口を自分からずらした。

ダァンッ

銃弾は観月に押さえられて部屋に弾痕を残す。

「観月いいいいいいい！！」

「やはり…君は恐ろしいな、少年」

必死に銃口を観月へと向けようとする王生とそれに抗おうと拳銃を押し込む観月。

ダァンッ、ダンダンッ

照準も定まらないまま発射された銃弾が次々と跳弾となって部屋を駆け回った。

カチッ…、ドガァァァァアンッ！！

「…なっ」

突然の爆発。

ドアの入り口付近で爆発が起きた。

―爆発、何で…今頃になって。

王生はその光景に動きを止めて見つめていた。

観月が手榴弾を持っていたとしても入り口付近に投げた様子は無い。

となれば爆弾は前もって仕掛けられていたと考えるのが普通だ。

部屋の入り口に。

王生が入って来た部屋の入り口に。

ならば…なぜ自分が入って来た時にその爆弾を作動させなかった?

いや…それ以前に。

王生は気付いてしまった。

【観月は一度だって王生に対して殺害の意思を見せていない】

銃も向けるだけで直接撃って来てはいない。

攻撃といえば特殊爆弾と肉弾戦のみ。

―なぜ?何でそんな真似をわざわざ?

ドガッ

思考に行動を止めてしまった王生の脇腹に観月は膝蹴りを入れた。

「ぐっ…、う!!」

「ハァ…ハァッ、甘いな、少年」

シュッ

脇腹を抑える王生に観月は更に追撃を入れる。

ゴッ

観月の放つ蹴りは王生を真横へと蹴り飛ばした。

「ぐ…ぅ」

床を転がった王生はそれでもすぐに拳銃を観月に向けようと立ち上がる。

煙幕はすでに失せ、視界ははっきりと見えるようになっていた。

だからこそ見えるのだ。

自分に向けて拳銃を向ける観月の姿が。

一瞬遅れて王生が観月に拳銃を向ける。

だが…遅い。

すでに拳銃を構えている観月とこれから拳銃を構える王生では遅すぎる。

ダァンッ

部屋に…一発の銃声が響いた。

第４１話：神北観月　其二（後書き）

【おまけ小説】

《ぱんつくった事ある？２》

夏喜「ちょっとちょっと、光一君！聞いちゃったわよ！！」

王生「なんだよ…夏喜さん、血相変えて」

夏喜「日向ちゃんの事よ！！」

王生「あぁ、パン作ってやる話しか？」

夏喜「そんな羨ましい…、じゃなくてそんな事ダメよ！！」

王生「何でだよ、俺はただ日向の為にパン作ってやるだけだぞ？」

夏喜「それって日向ちゃんの…よね？」

王生「？、当たり前だろ、しかし日向の奴くらいの歳だったらクマ（の形したパン）とか動物っぽいのを考えた方がいいだろうか？」

夏喜「クマさん（柄のパンツ）とか動物（柄のパンツ）…、さ…さすがにそれはちょっと日向ちゃんを子供扱いしすぎじゃない？」

王生「そりゃあそうか、日向みたいな子供のパン作ってやるのは初めてだし勝手がわからないんだよな」

夏喜「え？じゃあ他の人のパンツ食った事もあるの！？」

王生「あぁ、慶吾のだ」

夏喜「！！」

第４２話：神北観月　其三（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：４．３：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：５．６：ヤマネさん
中村　　真　：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第４２話：神北観月　其三

「なっ…」

戸惑いの声を上げたのは王生だった。

「ぐ…」

目の前の敵、観月は血に赤く染まった右肩を抑えている。

ガシャンッ

構えていた拳銃を床に落とすとよろよろと後ろに下がり、力無くその身体を床に預けた。

「なんだよ…、何で、だよ！！」

王生は歯を食いしばりながら観月へと駆け寄り、背中に手を置いて身体を起こした。

「俺を…、俺を殺せてたじゃねぇかよ、おい…答えろよ！おい！！」

「光一！！」

崩壊した部屋の入り口からの声に王生が振り向くと雨宮がそこに居た。

「雨宮…」

「だいぶ回り道をさせられたが…、結局はここにたどり着く訳か」

そう言う雨宮の息は荒く、汗が頬を伝っていた。

「だが…決着がついていたとはな」

「違う、こんなもの…決着何て言わない、始まってさえ」

雨宮の言葉に王生は首を横に振った。

「観月は…徹底して俺を殺さない様に、俺達と戦ってたんだ」

拳銃を向けても撃たない。

巻き添えを予測して雨宮との行動中でも爆弾は使わない。

そして手間をかけての分断。

「意味が…わからねぇよ、俺は…、あんたを殺して、もう…いいやって思ってたのに」

――――

――
―
「……」
観月はぼぅっと霞んでいく視界の中、天井を見つめていた。
少し視線をずらせば泣いている王生の顔が見える。
―慶吾少年の…言った通り、だな。
観月は少しずつ思考能力を失っていく頭の中で別れ際の慶吾の言葉を思い出した。
一つの事を思い出すと、次々と昔の出来事が流れてくる。
最古の記憶は――――。

家族と居た。

父と私と妹の三人だった。

母親は知らない。

家は世間で言う大富豪と呼べるべき家”だった”。

父は年に数回、私と妹を連れて船のパーティーに参加していた。

ただの船では無く、カジノ船というやつだったが当時の幼かった私や妹はその意味が理解出来ず、ちょっとした遊園地に来ているような感覚だった。

父が向かうのは必ず一つのゲームだった。

ある日、父は初めて私と妹をそのゲームのある部屋へ招いた。

そこには巨大なモニターがあった。

父だけで無く、その場の皆が喜怒哀楽の表情をさせ、食い入るようにモニターを見つめていた。

―何か映画をやってるんだろうか？

私と妹もモニターを覗き込む。

銃を持った男と別の銃を持った男と女の二人組が撃ち合いをしていた。

撃ち合いの最中、その中央に手榴弾が投げ込まれる。

ズガァァァァアンッ

モニターとはいえ、爆発のインパクトは強い。

まるで本物のような衝撃。

まるで本物のような…三つの死体。

そして手榴弾を投げたであろう笑いながら死体に近づいていく男が居た。

その手にはチェインソー。

―こういう映画は苦手だなぁ…。

そんな事をぼーと呑気に考えていると隣に居る父の機嫌が悪いのがわかった。

「…おとーさん?」

私が心配すると父は優しく微笑みながら私と妹へ向けて手の平を広げた。

その手の平にはＢＥＴに使うコインが二枚あった。

確かこれは一枚２００万のコインだったはずだ。

「さ、お前達、一人一枚取りなさい」

父は優しく微笑む。

私達は父の手の平から一枚ずつコインを取った。

父は私と妹の肩に手を置くと。

「さぁ…好きなプレイヤーに賭けてみなさい」

優しく微笑み、優しい言葉でそう声に出した。

ブチャッ

巨大モニターではちょうど男が三体目の死体の首をチェインソーで切り落とし、ぶちぶちと首輪を引き抜いていた。

それから何年たっただろうか。

最近は父もカジノ船に行く事が無くなった。

というより出入りの資格を失ったと言える。

家の中のあらゆる物が全て売られ、私達は住家から追い払われた。

父はあのゲームに心を奪われすぎたのだ。

ギャンブル依存症者の末路なんてそんなものだ。

だが…父はそれでも抜け出さなかった。

カジノ船での出入りの資格は失えば、今度はインターネットで賭けに参加した。

「ふざけるな！何が元傭兵だ！！ボロ雑巾め…何の役にも立たん！！！」

父の怒声が響く。

その顔は以前と違い、何かに取り付かれたようで私は恐怖感を覚えた。

「違う…違う、違う、違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！！」

ぶつぶつと父は首を横に振りながら呟いた。

「……」

私はそんな父を感情も無い瞳のまま見ていたんだと思う。

妹は今日たまたま家に居なかった。

それが幸運だった。

新居となったボロボロの家には似合わない高級車が停まった。

車の中から黒いスーツを着た男達が乱暴に家に上がって来る。

あぁ…また借金を取りに来たのか。

私はそれをぼーっと見ていた。

もう取る物なんてほとんど残ってないのに。

連中は父のパソコンには手を出さないのはわかっていた。

パソコンがある限り、父は賭けに参加し、借金を増やすのだから。

だったらいったい何を取りに来たのだろう?

「観月ちゃん…だね?」

落ち着いた雰囲気の初老の男が私に話しかけてくる。

―あぁ…そうか。

「君のお父さんと君、それと妹さんの事で大事な話しがあるんだが」

――私…か。

「君も知っていると思うが…君のお父さんは私達の船に借金があってね」

初老の男は話しを続ける。

「最初に言っておくがこれはギャンブルによって起きた借金だ、自己破産が適応されると思わない方がいい」

初老の男は冗談っぽく笑うと「まぁ、どのみちそんな事はさせんがの」と続けた。

「借金の総額は２２３億と２８１９万、あと細かいのがいくつかだ、お父さんはあの調子だし…妹さんはまだ中学生になったばかり、君一人で返すとなると無理があると思わんかね？」

私はこの男が何を目的にここに来たのか、私は既に理解していた。

「そこで我々は君にとびっきり良い仕事を用意したよ、上手く凌げば一回で２０億以上は稼げる仕事だ」

観客として、あのゲームに参加していた私はこの男の言う仕事の中

身を理解していた。

「まぁ君が嫌なら仕方ない、君の妹さんに頼むとしようか」

「……」

私は初老の男の申し出に頷いた。

仕事の内容を理解し、頷いた。

父がどうなろうと知った事では無かった…が。

妹だけは…守りたかった。

たがら妹には何も言わないまま、家を出て行った。

父は最早私の顔も覚えていないのか、適当に相槌をうっているようだった。

ゲームマスターになった後はただ落ちていくだけだった。

時には男に身体を売り。

時には相手の情に訴えて。

その度に裏切り。

あのゲームに参加していた。

家には一度も帰っていない。

一度だけ高校にあがった妹の入学式の日には遠目から高校生となった妹を見たが。

そんな日々だ。

それは今回も変わらないだろう。

最早日常となったゲームに私は何の感情も浮かばない。

だから私はいつも通りに今回のゲームに望んだ。

第４３話：神北観月　其四（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．５：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：７．８：ヤマネさん
中村　　真　：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第４３話：神北観月　其四

ガチャリッ

マンションの鍵をかけた所でレンタル屋から借りたＤＶＤがそのままだった事に気付いた。

それでも今更取りに行くのも面倒だし別にいいか。

ＤＶＤの中身は適当に見繕ったアニメだ。

ご都合展開にお誂え向きなハッピーエンド。

私は冷やかすようにそれを見ていた。

個人的にはバットエンドが大好きである。

悲劇万歳。

まぁ、今日からまたそういうのが見放題なんだが。

もちろんまるっと無修正。

というか私自身がその悲劇の舞台に立つ一人なんだが。

ただし―。

「会場まで…ご案内します」

マンションを出た所で黒塗りの車が私の前に停車した。

「別に逃げはしないさ、せいぜい安全運転でもしてろ」

―悲劇を起こす側だけど。

「ゲーム開始からの基本的な流れは資料通りにお願いします」

―だ、そうだ。

ゲームの基本的な参加者は１３人だがただ単純に１３人の見ず知らずの人々を集めている訳じゃない。

それではショーとしては成り立たず、カジノ側がそれを容認するはずが無い。

だからゲームにはカジノ側の人物もその身分を隠して参加する。

ゲームマスターとサブマスターだ。

ゲームマスターの仕事はゲームが順当に進むように仕向けたり、一方的に戦力が片寄ったりした時に武器を与えたり分断したりするの

が任務だ。

そして…今回私がやるのはサブマスターだ。

この仕事はゲームマスターが死んだ時の変わりをやったりもするが。

基本的な仕事は建物内の天井のあちこちにある監視カメラより近い所からゲームを撮影する。

いわゆる戦場カメラマン的なあれだ。

最近のカメラは凄いものでとても小さく、隠すのは簡単だ。

バッテリーの方は小型の物を建物内のあちこちに隠してあり、度々交換するのだ。

中には大きくて重いバッテリーを服の中に隠す者も居るが私はこの方法でいっている。

私に配布されたＰＤＡが【7】なのはゲームの最中により多くのプレイヤーに会って一人一人に活躍の場を見せる為。

そして私がまず初めに接触する事になっているのはナンバー【J】の藤原　慶吾という高校生だった。

理由は二つある。

まず一つ目は彼がイベントの対象者だという事だ。

ゲームの参加者は運営側が意図して集めた者達だ。

今回、運営側は慶吾という少年には【Ｊ】を、そしてもう一人の王生という少年には【Ａ】のＰＤＡを配布していた。

二人は親友同士だ。

運営側が単にこの二人を殺し合わせたいのなら慶吾のＰＤＡを【Ｊ】ではなく【Ｑ】にすれば話しは早くなる。

が、運営側の狙いはそれではなかった。

単なる親友同士の殺し合いは最早飽きたという事か。

同年齢の唯という名の少女に【Ｑ】のＰＤＡを与え、慶吾と接触させる。

そして二人が【Ｊ】の条件の一つである２４時間の行動を共にした上で王生を接触させる。

王生が首輪を解除するには慶吾と行動を共にしている【Ｑ】の唯を殺さなければいけない。

そういう展開を組織は仕掛けていた。

もう一つ組織が用意したイベントがあるがそれは私の管轄ではないか…。

だが結局、唯は慶吾と接触前に殺されたのでこのイベントは廃止、私は動きが出るまで待機常態となった。

もう一つ、私が慶吾と行動を共にするのに選んだ理由は資料を見れば彼はかなりお人よしな人格らしい。

私のようなプレイヤー全員との遭遇なんてリスクの高い条件でもお人よしなら付き合うかもしれない。

事実、最初に中村のクソ妖怪ジジイが接触した時は年寄り（実際には妖怪だが）だという事を承知で一緒に行動しようとしたくらいだ。

だから私も怪我人を装って慶吾に接触した。

サブマスターという立場上、あまり表立って行動出来ない。

怪我人だから戦えませんといったアピールみたいなものだ。

だから怪我人の演技は慣れている。

そして予想通り、慶吾はあっさりと私の言う事を信用した、心配する。

そのまま指示通りに【A】の王生達との合流、一日を過ごした。

イベントの要である【Q】の少女が死亡したのでとりあえずの顔合わせといった具合だ。

だから二日目早々、私は分断の可能な罠まで皆を誘導した。

途中ナンバー【2】、雨宮の襲撃があったが分断に成功し、私は慶吾少年と二人になった。

それ以外に指示は無い、現状は待機となり、慶吾少年と二人で行動をした。

慶吾少年は相変わらず私の怪我の心配をしてくる。

ここまでは良い、ただのお人よしには良くある事だ。

そんなお人よしを私は多く見てきたのだから。

だから私は知っている。

いよいよとなればそんなお人よし達も最後は自分を優先する。

いや、悪い事じゃない、というか当たり前だ。

私自身、騙してる訳だし文句を言うつもりは無い。

だから慶吾少年もそうなのだろう。

そう思っていた。

―――

――

―さん。

「観月さん!!」

慶吾少年に呼ばれ、私は気付いた。

慶吾少年の肩は銃弾を受けた跡があり、身体中が傷だらけだった。

私の方にはたいした傷は無い。

慶吾少年が私を身を犠牲にして守っているというのは明らかだった。

怪我人のフリを続ける私を。

―思い出す。

「あいつ…まだ俺達を追って来てる、多分…、ここじゃあすぐ見つかると思います」

―この場面か…。

「観月さん…、俺が…時間を稼ぎますから、その隙に逃げて下さい」

―そうだ…この時、私は。

「なぜ…そこまでして私を守る？」

「え？」

私の突然の言葉に慶吾少年の動きが止まる。

「そりゃ…、俺のＰＤＡの解除条件が【Ｊ】の」

２４時間行動を共にした私の生存…か、だが、それは嘘だ。

解除条件にこだわるのならそれ以上に自分を一番に守るはずだ。

死んでしまえば首輪の解除も無いのだから。

「…観月さんは足を怪我してる、いいから早く逃げてくれ」

そう告げる慶吾少年に私は同情していた。

このままこの少年は私の怪我に騙されたまま、死ぬだろう。

足を怪我している人を逃がす為に囮となって死ぬ。

だが実際は違う。

足を怪我しているフリをする人に騙され、良いように使われて死ぬ。

惨めだ、悲劇と言える。

改心はしないが…同情はした。

だから…私は。

「悪いな…少年」

慶吾少年の前で堂々と松葉杖を捨ててスタスタと歩いた。

「私は怪我なんてしていないんだ、ずっと君らを騙していた」

まぁ死ぬ間際に今まで散々守っていた奴が実はピンピンしていますとなっちゃどっちみち同情するが。

「…え？観月さん…、冗談…だよな？」

「いんや、冗談ですまんよ、大マジだ」

アピールするように包帯の巻いた方の足を軸にクルクルと回って見せた。

さすがにこれは怒るだろう。

まぁ問題無い。

少年が私に攻撃する意思を見せれば私はすぐに少年を殺すつもりだったから。

そもそも本当に厄介なのは今私達を追って来ている者なのだから。

「本当…なんだな」

さて…少年はどうする気なのだろう。

私に立ち向かうか。

絶望するか。

私は頭の中で次の慶吾少年の行動を予測する。

「だったら…その元気な両足を使ってとっとと逃げろ!!」

「!!」

だが…少年のその行動は私が予測したどの答えとも掛け離れていた。

「君は…まだそんな事を言っているのか?普通なら怒る場面だが?」

「…怒って無いと思ってんのか?」

慶吾少年が拳をギュッと強く握りしめた。

「でも…、あんたを殴る役目はコウに任せる、俺、そういうの苦手だし」

慶吾少年の構えるはライフル銃、通路に少し顔を出すと奴の様子を伺う。

「だからあんたはコウに会って殴られて来い、絶対だ」

―あぁ…馬鹿だ。

――馬鹿が居る。

そんな事した所で私の心には何も響かないというのに。

「殴られたあとは…コウを助けてやってくれ、あいつさ…、キレると何しだすかわからねーから」

私の考えている事を無視するように慶吾少年は言葉を続ける。

「…コウを、生き残らせてくれ、強がってるけど、あいつ…本当はそんなに強くないんだ」

その言葉を最後に。

慶吾少年は通路へと駆け出した。

プシュッ

同時に煙幕が辺りを包んでいく。

慶吾少年が投げたのだろう。

無駄な事を。

そんなものが通用する相手でも無いのに。

「……」

私はその場から離れる。

慶吾少年を見殺しにして。

改心なんぞはしない。

というか今更改心した所で何の意味も無い。

だから私はこの仕事を続ける。

ただ…

同情は…していた。

―――

―

「…慣れない事はするもんじゃないな」

観月がゆっくりと目を開ける、と同時に雨宮が銃を観月に向けて構えた。

「仕事熱心だな…、安心していい、もう私に抵抗する力は無い」

「……」

観月の言葉に雨宮は鋭い目をさせながらも銃を下ろした。

「観月…、あんたは」

「殴られて来いとは言われたが…、まぁ、これで良しとしよう」

観月はおぼつかない手で服を探るとＰＤＡを取り出した。

「雨宮…君、だったかな?君が欲しがってたのはそれだろう?」

「……」

雨宮は慎重に観月に近付くとその手からＰＤＡを受けとる。

「少年から君の事を頼まれたが…、難しいものだな、立場上」

「慶吾を殺したのは…、あんたじゃ…ないのか」

「違う…とは言えんな、少なくとも見殺しにはした」

観月は起き上がると王生に向き合う。

「だが…本当に慶吾少年を殺したのは――――」

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「！！」

アラームの音が響く。

『あなたは契約に違反しました、規則により処罰されます』

パカッ

その瞬間、天井の一部が開く。

ボフンッ

そこから真っ白な粉末が放たれた。

粉末は部屋中に散布され浮遊すると。

やがてその場に大爆発を引き起こした。

―――

「粉塵爆発」

モニタールームではきな粉餅を箸で掴みながら中村が愉悦の表情を見せた。

「気体中にある一定の濃度の可燃性の粉塵が浮遊した状態で、火花などにより引火して酸素を激しく燃焼させ大爆発を起こす」

中村はきな粉もちについたきな粉をぼふんと落とす。

「いかんよ～観月ちゃん、サブマスターの身でありながらゲームのネタバレをしようなんて」

もちについたきな粉を完全に落とすと中村はもちを口に入れる。

「だから悲しいがお仕置きが必要じゃ、まぁ残念ながら…」

そして落としたきな粉をお茶に入れて混ぜた。

「そんなお仕置きに”たまたま”巻き込まれた可哀相なプレイヤーが二人ばかり居るがの」

ズズッ…

日常事のように中村はお茶をすすると。

「まぁ…恨むならば観月ちゃんを恨むんじゃよ、ククク…クゥ、クゥ…ククククッ！！」

高らかに…笑い声を上げた。

第４３話：神北観月　其四（後書き）

【おまけ小説】

《ぱんつくったことある？３》

夏喜「…え？その、慶吾君と…一緒に、パンツ食ったりしてたの？」

王生「あぁ、俺が慶吾のパン作ったり慶吾が俺のパン作ったりしたぞ」

夏喜「ぶふぉっ！！」

王生「どうした？」

夏喜「い…いや、っていうかどうやって食べるの！！」

王生「そりゃ…ジャムかマーガリン塗るとか」

夏喜「！！」

第４４話：神北観月　其終（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．５：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．５：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．３：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：７．８：ヤマネさん
中村　　真　：６：１．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第４４話：神北観月　其終

粉塵爆発。

建物等で密閉された空間にて大気などの気体中にある一定の濃度の可燃性の粉塵が浮遊した状態で、火花などにより引火して爆発を起こす現象である。

ゲームの行われる建物内は当然、密室空間となっている。

粉塵による爆発が起これば当然として逃げ場等ある訳が無い。

当然――――。

ピロリンピロリンピロリン。

「おっと…きよったか」

中村のＰＤＡが鳴る。

中村のゲームマスター専用のＰＤＡには生存者数をカウントする機能がある。

当たり前だが人が死ねばその分、生存者数が減るのだ。

「さて…これで三人、！？」

ＰＤＡを確認した中村の動きが止まった。

「な…何が、何が…、起きた!!」

―――

―――

粉末が部屋中に散布していく。

「なんだ…これ?毒…?いや、違うか?」

辺りを見渡す王生は状況の把握に頭を働かせていた。

ドンッ

「つっ!!」

それが原因か王生は観月に突き飛ばされ、後ろに倒れそうになる。

「!?」

そんな王生を雨宮はすぐに受け止めた。

「ずいぶんと準備が良いじゃないか…、ふむん、はなっから私なんぞ信用していないか」

観月は血を流しながらもゆっくりと立ち上がる。

「当然だ、だがそれ以上に…、例えお前が手を出さずとも、これを高見から見物している奴が居る中で油断する理由は無い」

「いい判断だよ」

観月はゆっくりと目を閉じる。

「…そうか、こいつは」

王生はこのペナルティの性質に気づくと観月に手を差し出す。

「観月!!」

「光一、走るぞ!!」

「ッ!!」

だが雨宮が王生の腕を掴んで出口へと駆け出していく。

「ふむん、それでいい、光一少年の事は任せたよ、雨宮君」

「…頼まれるまでもない」

雨宮は観月から受けとったＰＤＡを操作する。

ガクンッ

防火シャッターが雨宮と王生の進む先で作動した。

「光一！あれをくぐれ！！」

「ッ！！」

滑り込むように王生と雨宮は防火シャッターを通り抜けた。

「観月いいいいいいいい！！」

王生はシャッターの隙間から観月へと向けて叫ぶ。

観月は口元に僅かに笑みを浮かべながら。

ガシャンッ

防火シャッターは完全に閉じる。

ズゥウウウウウンッ

同時に建物内に激しい振動が起こった。

「ハァ…ハァッ！！」

「何だよ…何が起こったんだよ！！」

王生はシャッターを強く叩くと雨宮に問い詰める。

「…ゲームマスターが動いたのだろう」

「ゲームマスターって…、観月はサブマスターだったよな！だったら仲間じゃないのか！！」

「…観月は囮にされたら、奴は彼女事我々を始末するつもりだったのだろう」

「ッ！！」

王生は膝を床に落とす。

「観月も…利用されてたってか？」

「あの女も…このゲームを利用していたのだ、こうなる事は予測していたのだろう」

「だからって…、！？」

ふと王生は自分の服の右ポケットに何かが入っているのを見つけた。

「これ…って」

いつの間にか観月が入れたであろうソレは。

王生に一つの道標を与えた。

「…なぁ、観月はこうなる事を予測していたって言ったな？」

―このままじゃ終われない。

「…おそらくな」

―終わらせて良いはずがない。

「…さっきの防火シャッター、あんたがやったんだろ？」

―このままじゃ慶吾が観月が何の為に死んでいったかわからない。

「あぁ、観月の持つサブマスター用のＰＤＡには私達のＰＤＡには無い様々な機能がある」

―だったら俺は何をする？

「他の機能も…使えるか？」

―決まってる…潰すんだ。

「使えるが…何をするつもりだ」

―この一連の惨劇を仕掛けた悪魔を。

「サブマスター用のＰＤＡだ…、ゲームマスターとの連絡だってするだろ」

―俺のやるべき事。

「光一…お前、まさか」

「そのゲームマスターとやらに連絡を入れてくれ」

―ゲームマスターを…潰す。

「これがゲームだとしたら…ラスボスはそいつだ」

―まずはてめぇを俺達と同じ舞台まで引きずり落としてやる。

―――

――

「死んだのは観月ちゃん一人…か」

減った生存者数は一人のみ。

中村はサブマスターのカメラの画面が映らなくなった事を確認する。

「ッ…、まったくやってくれるの」

苦々しく唇を噛み締めるとカジノ船へと連絡をとった。

「わしじゃ、暗殺部隊の方は…」

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「…観月ちゃんから連絡？」

中村は眉を細めるとＰＤＡの画面を慎重にタッチする。

「ふん…、死んだ者からの通信、客共に見せれんのがちと残念じゃの」

だがその表情には余裕があった。

『…あんたがゲームマスターか』

通信相手の声を聞いて中村は死亡したのが観月だけだった事の真意を知る。

「いかにも…わしがゲームマスターだ、なるほど、観月ちゃんのＰＤＡを奪ったのかの？」

『…俺の事は知ってんだろ？自己紹介はいらないな』

王生は中村の問いには耳を貸さずに言葉を続ける。

「それで…わざわざ何の用じゃ？」

中村はため息を一つつくと問いを変える。

『単刀直入に聞くぜ、このゲームじゃてめぇらに都合が悪くなりゃプレイヤーは好き勝手に殺していいのか？』

「……」

中村はちらりと数多くのモニターから王生と雨宮の映るモニターを探し出す。

モニターにその姿が映っているとなればカジノ船の客達もこの会話を聞いている事になる。

下手な事は言えなくなるのだ。

「いやいや…さっきの事を言っておるならあれは観月ちゃんが悪いよ、君は知らんだろうがゲームの進行を妨害する事は我々にとってルール違反じゃからな」

もちろんこれは詭弁だ。

サブマスターやゲームマスターといえどゲームを盛り上げるならばプレイヤーの味方になる事さえ許されている。

本来ならあの程度の事でペナルティが発動するはずがないのだ。

『そうか…じゃああんたらが裏で動いて俺達をどうこうするって事は無いんだな？』

「もちろんじゃとも、ゲームマスターとして正々堂々と勝負に挑む

つもりじゃわ」

そう言いながら中村はカジノ船に向けてメールを送った。

【暗殺部隊の状況はどうなっておる?】

中村にとって王生との約束は何の意味も無い。

カジノ船の客にばれないようにするのならカメラに映らないように指示して王生達を殺せばいいのだから。

その為の暗殺部隊なのだから。

『俺達はあんたらの使ってるＰＤＡを手に入れた、その意味、わかんだろ?』

「ふむ…、わしとの直接対決がお望み、じゃろ?」

『…そこまでわかってて、本当に何も仕掛けて来ないんだな?今このゲームを見物している客が証人になるぜ?』

「最近の若いもんは疑り深くていかんのぉ…、正々堂々と勝負すると言っておるじゃろ?」

『…その言葉を聞いて安心したぜ』

ブゥンッ…

その瞬間、”サブマスターのカメラのモニター”が作動した。

「…なっ！！」

観月が粉塵爆発に巻き込まれて死んだ。

ならば観月の持っていたカメラだって爆発に巻き込まれて破壊されたはずだ。

だから中村はサブマスターのカメラのモニターが映らなくなったのは当然だと思っていた。

だが…違った。

『映ってるか？俺達の姿が？』

サブマスターのカメラに映し出された王生と雨宮の姿がモニター越しからも確認出来る。

『てめぇらが何かしようってんなら、このカメラがてめぇらの不正や介入を映すぜ？もちろん、そのままカジノの客達がそれを見る』

「ぐっ…」

中村は苦々しく眉をしかめる。

これでは暗殺部隊が使えなくなる。

カメラの死角から狙うのならば充分に可能だが、そこにサブマスター持つのカメラがプラスされれば実質、死角は無くなったといえる。

『もちろん、勝手にカメラの電源を切る…なんて事やらないんだろ？』

「…当然じゃ、元々そのカメラはゲームにより臨場感を出す為にあるのだから」

『安心しろよ、俺達だって勝手にカメラを切ったりしないさ』

ＰＤＡの通話の向こう側、王生は力強く微笑んだ。

「小僧が…」

『これが観月が俺達に渡してくれた最後の希望だ…、はしゃぎ過ぎたな、ゲームマスター、これであんたの逃げ場は無くなった』

第４４話：神北観月　其終（後書き）

【おまけ小説】

《最後の希望》

「…なぁ、観月はこうなる事を予測していたって言ったな？」

―このままじゃ終われない。

「…おそらくな」

―終わらせて良いはずがない。

「…さっきの防火シャッター、あんたがやったんだろ？」

―このままじゃ慶吾が観月が何の為に死んでいったかわからない。

「あぁ、観月の持つサブマスター用のＰＤＡには私達のＰＤＡには無い様々な機能がある」

―だったら俺は何をする？

「他の機能も…使えるか？」

―決まってる…潰すんだ。

「いや…、無理だ」

―…さいですか。

第４５話：二人の決意（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．４：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：２．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：８．０：マッチさん

第４５話：二人の決意

「…わしはあの小僧を見くびっていたのか」

通話を終えた中村が両手を机につくとうなだれる。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「ッ、カジノ船から連絡…」

大方若輩者のディラーが文句を言いに連絡して来たのだろうと中村は考えた。

今の王生との問答によって観月への強引なペナルティが客共の間で騒ぎになったか。

サブマスターのカメラが奪われた事も中村にとって失態といえた。

「やれやれ…わしの苦労もしらんと」

中村は面白くなさそうにカジノ船からの通話を受ける。

『…君が中村か』

「…誰じゃ？」

だが通話相手の声が先程まで話していたディラーのものと違う事に中村の声が慎重になる。

『…片山だ、名前くらいは知っているだろう』

「!?、片山様?」

その名前が出た瞬間に中村はどっと冷や汗を流した。

片山は今回のゲームの元締めであり、組織の大幹部の一人である。

『…下手くそが』

「!?」

『カジノの客達がざわついている、得に【A】【2】【J】に賭けた者達がな』

観月を使って意図的に王生と雨宮を殺害する中村の計画は王生の言葉でカジノ船の客達に明るみになってしまった。

それではその三人に賭けた者が納得するはずがない。

『君が露骨にやった事はカジノの信用を低下させた』

「じ、じゃが…エースの娘を殺害する為には――」

『そう…、それだ』

中村の言い分にかぶせるように片山は言葉を続けた。

『だから我々は君に最後のチャンスを与える』

「最後の…チャンス？」

『簡単だよ、正々堂々とエースの娘を殺せばいい』

「！？」

『暗殺部隊は私が呼び戻しておいた、ゲームの体裁を保つ為にはプレイヤー同士での殺し合いでなければな』

「い、いや…じゃが」

中村にとってこれはカジノ船からの協力が一切無くなった事を意味する。

つまり…完全に孤立させられた。

『…君のこれまでの過去のゲームの資料を調べさせて貰ったよ』

「な…、なんじゃと」

利用できる者はなんでも利用して中村は生きてきた。

自らの身が危なくなれば組織の暗殺部隊を動かしていた。

『たまには…自分の手足を動かしてみたらどうだ？ご老人』

安全を中村は失った。

ピッ

通話が切れる。

「……」

中村はその場に立ち尽くしていた。

唖然と。

呆然と。

数秒間、その場に立ち尽くすと。

「ククッ！クカカッ！クカキキキクカキキキキキキッ！！」

壊れたように笑い出した。

「…つまらん」

中村の目が冷酷に変わっていく。

「最早わしも手段は選ばんぞ、ナンバー【A】…、いや、王生　光一よ」

―――

バチンッ

「…ッ！！」

―――

中村との通話を終え、バッテリーの事を考えてサブマスターのカメラを一度切った王生は…雨宮に頬を叩かれた。

「…雨宮？」

突然の事に面食った王生ではあったがそれ以上に面食った事があった。

「…ばか！！」

雨宮は泣いていた。

その瞳一杯に涙を溜めて。

ダァンッ

雨宮はその場にあった監視カメラに銃を撃ち込んで破壊すると。

「ばかばかばかばかばかばかばかばかばか！！」
そのまま王生に抱き着くとポカポカと胸を叩く。
「ち、ちょっと…雨宮、落ち着いてくれ！！」
「これが落ち着いていられるか！今のでお前もすっかり連中のターゲットになってしまった！！」
そのまま王生の服を掴むと涙声で言葉を続ける。
「私が何の為にお前に生きて欲しいと思っているか――」
「…雨宮」
王生は胸の中の雨宮をギュッと抱きしめた。
「死なねーよ、俺は」
「こう…いち？」
「俺のこの命は慶吾と観月が繋げてくれてんだ、だったら…死ぬ訳にはいかない」
王生は力強く雨宮に視線を向ける。
「連中だって、これでむやみやたらに俺達を狙えなくなったはずだ」
「…それでも、お前は素人だ、連中が本気になれば」
「雨宮が守ってくれんだろ？」

「鈴音」

ギュッと…雨宮の方からも王生を抱きしめる。

「…ん？」

「私の本当の名前、雨宮は私がエースになった時についた偽名みたいなもの」

「…そうなのか？」

「お前には…鈴音と呼んで欲しい、というか呼んでくれなきゃヤダ」

「ヤダって…駄々っ子か！？」

王生は言葉を返すが雨宮は王生をジトーっと見つめていた。

「呼んでくれなきゃヤダ」

「…わかったよ、ちなみに本当の名字はなんなんだ？」

「それは…えとー」

雨宮はキョロキョロと目を泳がすと。

「ひ…ひみつ」

「…なんだよ、そりゃ」

「…一応はエース入隊と同時に捨てた名字だし、ちょっと恥ずかし

いし」

雨宮はもじもじとしながら顔を赤らめる。

「じゃあエースを抜ける時は元の名字に戻すのか？」

「それは…無理だ、私は復讐の為にエースに入った」

「じゃあ…復讐の理由が無くなりゃいいんだろ」

暗い表情を見せた雨宮に王生は優しく微笑みかけた。

「…え？」

「エースって求人の募集とかやってる？」

「光一…何を？」

「…ゲームに親友を殺された奴が居るんだ、そいつは同じくゲームに囚われた少女を救い出したいって考えてる」

「…本当、ばか」

「あんたを一人で戦わせはしない…、俺も同じだから」

王生と雨宮はお互いにしばらく抱きしめあった。

「まっ…、まずは当面の問題を片付けてからだな、もう首輪がどうでもいいとかいえんし」

しばらくして王生は苦笑しながら雨宮を離す。

「…その事だが、私に考えがある」

「…前に言ってた、裏技ってやつか？」

「あぁ、ツールボックスについては知っているだろう？」

「もしかして、進入禁止エリアに入れるソフトウェア…か」

観月の言っていた言葉を思い出した王生はすぐにピンと来た。

「知っているなら話しは早いな…、まずはそれを取りに行く」

「…って、どこにあるか何てわからないだろ」

「…行くぞ夏喜や日向と一度合流する必要がある」

王生の言葉も聞かずに雨宮は前へと進み出した。

「お～い…、だからどこに行こうってんだよ」

「エースの隠し部屋…、前に私の仲間が進入禁止エリアに進入可能なソフトウェアを見つけてそこに運んだと聞いた」

「…エースは前々から何度もゲームに参加しているのは聞いていたが、そんな場所を用意してたなんてな」

王生も納得すると雨宮の後ろ姿について行く。

「さぁ…、反撃開始といこうぜ、鈴音」

「無論だ、光一」

第４５話：二人の決意（後書き）

【おまけ小説】

《雨宮の名字》

王生（恥ずかしがって隠す程の雨宮の名字ってなんだろう？）

毒島　鈴音？

郷田　鈴音？

長沢　鈴音？

漆山　鈴音？

馬鹿野郎　鈴音？

王生「もしかしてハーフとかでアレクサンドリア・鈴音・スポポビッチとか！！」

鈴音「違う！！」

第４６話：エースの隠し部屋（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．４：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：２．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．８：マッチさん

第４６話：エースの隠し部屋

「ここか？」

「ここだ」

雨宮に連れて来られた部屋。

見た目にはそこら辺の部屋と同じ作りに思えた。

「ここって戦闘禁止エリアなの？」

「似たようなもん…かな？」

夏喜の疑問は当然であった。

王生と雨宮は夏喜達を巻き込まないようにゲームマスターやエースの事を伏せていた。

それでも観月の最後を見た王生はこう二人に伝えた。

観月も殺されていた、この階も危険だと。

そのまま雨宮の案内によりエースの組織の者だけが知る隠し部屋へと案内された。

「ほら、日向、そろそろ起きたらどーだ？」

「すぅ…すぅ」

ちなみに日向は王生達が戻って来た時にはぐっすりと眠っていた。
なので王生がおんぶしてここまで連れて来た訳だが。

「むにゃ…こーいちさん…」

「…ん？寝言か？」

王生が日向の方を振り向こうとした時だった。

「こーいちさん…あぶない」

グキッ

寝ぼけた日向のヘッドロックが王生に炸裂した。

「むぐっ！！日向、離―」

「むにゃ、こーいちさん…、ここは私に任せて先に行って下さい、むにゃむにゃ…私、この戦争が終わったら結婚するんです」

「てめぇ確実に起きてるだろ！！」

「おや、こーいちさんじゃないですか」

「おや、こーいちさんじゃないですか、じゃねーよ」

あからさまに白々しい態度をとる日向を王生は床に降ろした。

「いいんですか？おんぶ止めちゃっても」

日向は意地悪っぽく微笑むと上目遣いで王生を見つめた。

「…何がだ？」

「せっかくのおんぶという大義名分を失っては私の胸とお尻を堪能出来なくなりますよ」

「てめぇのぬり壁みたいな胸に興味なんかわかねーって」

「む～、これから成長するんです」

「はいはい…、頑張れよ」

はぁっ、とめんどくさそうに王生はため息をついた。

「…ぬり壁みたいな胸」

―しまった！！

と王生は自分のすぐ力で胸をおさえている涙目な雨宮を見つける。

「す、鈴音、これは日向がな…」

「光一、私だって―」

「…えっ？」

「私だってこれから成長する…」

「うん、そうだな」

王生はいい笑顔を作って答えたが棒読みは隠しきれなかった。

「あれ～、何だか私の知らないうちに二人共すごく仲良くなってない？」

そんな俺達の様子に夏喜が冷やかすように言葉を挟む。

「あぁ、そうだな」

意外にもあっさりとそう答えたのは雨宮の方だった。

「私は光一と一緒に居たい、そう思っている」

そう言い、雨宮はすぐに頬を赤く染めた。

（ありゃりゃ、これってもしかして…）

夏喜は暖かく微笑む。

（ちょっと…ちゃかしてみようかな～なんて）

というか、悪い顔だった。

「それじゃ雨宮さん、もう一度料理作ってみない？前は結局うやむ

やになっちゃったし」

「？、何の話しだ？」

「お世話になっているお礼にこーいちさんにお料理をしようって企画です」

王生の疑問に日向が答える。

「んな気を使わんでも飯くらい俺が―」

「駄目だ光一、お前は手を出すな」

王生の言葉を雨宮はぴしゃりと切った。

「私達がお前に食べて欲しいんだ、その…美味しいご飯は人を幸せにするんだろ？」

「…あぁ」

「ところで光一君は料理の上手な娘ってどう？」

夏喜がニコニコと笑いながら光一にそう聞いた。

「どう…って、何が？」

「ポイントとしては高いかなって」

「どうだろ、人に作って貰うってあんま無かったからな、まぁ楽しみではあるけど」

「それじゃあ私達がもう許して下さいって思う程美味しい料理を作りますね」

「その感想はおかしいと思う」

王生は日向にツッコミをいれる。

「あ…、でもここだと台所が無いか」

「あぁ、ちょっと待っててくれ、簡単な調理機具ならあるから持って来よう」

「んじゃ俺も手伝うか」

部屋の奥に調理機具を取りに向かう雨宮に王生がついていく。

「しっかし…エースの者だけが知る隠し部屋って言うからどんなもんかと思ったけど」

王生はチラッと天井に備えられた監視カメラに目をやった。

「普通に監視カメラがあるじゃねーか、大丈夫なのか？」

「あのカメラには細工がしてある、私達の姿も声も映らんさ」

「…へ～、ん？このビンに入った薬はなんだ？」

王生は何気なく棚に置いてあったビンを手にとる。

「それか…、決して口には入れるなよ」

「入れる訳ないだろ、こんな訳のわからないもの」

「それは…文字通りの薬物だ、覚醒剤や麻薬の一種と言えばわかりやすいか、前にゲームに参加したエースの誰かが見つけてここまで運んだのだろう」

「…こんなもんまであるのか？」

「恐らくはゲームが上手く進まない時の火種なのだろう、かなり強力な薬だ」

「…他にもいろいろビン詰めの薬があるみたいだな」

ビンを棚に戻した王生は他にもいくつかあるビンを見る。

「まともな風邪薬もあれば睡眠薬なんてものもある、どちらにしろ今は必要ないがな」

「日向や夏喜にもここの棚には手を出さないように言っといた方がいいな」

「そうだな…、さて…私は侵入禁止エリアに侵入可能になるソフトウェアが入ったツールボックスを探す、光一は料理に使うガスコンロを頼む」

「了解」

王生はしゃがみ込んで道具を漁る。

流石にいままでエースが集めて来ただけあって使えそうな物が多い。

「手錠…なんてのもあんのか、なぁ、なんでエースはこの部屋に物を集めてんだ？」

「…いつか来るだろう戦いに備える為だ」

雨宮はツールボックスをまとめて置いてある棚を探しながらそう答えた。

となればここにあるツールボックスは全て以前にエースの誰かが集めていたものという訳か。

「このゲームを企画した組織との直接対決って訳か、なるほど」

ガサゴソッ

「おっ…見つけた」

料理に使えそうなガスコンロと鍋を見つける。

「鈴音、鍋とコンロがあるぞ」

「…無い」

「…ん？」

王生の呼び掛けも聞こえていないのか、雨宮はぽつりとそう呟いた。

「侵入禁止エリアに侵入可能になるツールボックスが…無くなってる」

「…最初から無かった、とかじゃないのか？」

「いや、確かに報告はあったはずだ」

「…となりゃ、誰かが持ってったか、組織の奴とか」

「この場所は組織の連中には知られていない」

「…どちらにしろ首輪の事は遠退いたな、まぁ元々一つしか無いんだ、俺は後回しにして貰う予定だったし」

「何度も言わせるな、私はお前が生きていないと嫌だぞ」

「っても…夏喜と日向だって居んだ」

「日向の方は心配しなくていい、私達は今ＰＤＡを日向以外の物で四つ持っている」

雨宮のいう日向の【Ｋ】以外のＰＤＡは【Ａ】【２】【４】【７】の四つだ。

「…私は明日、ゲームマスターの所に行くつもりだ、ＰＤＡは必ず持ち帰る、出来れば首輪もな」

「ゲームマスターの首輪が手に入ってそれで日向の首輪が外れりゃ

夏喜も後一つか」

「後は私か光一、どちらかの首輪が外れればいいが…」

【Q】のＰＤＡの所有者、ＪＯＫＥＲの所有者、共にまだはっきりとはしていない。

「だが安心してくれ、ゲームマスターの部屋にはメインコンピュータがある、そこから建物全体のペナルティ機能を切る事が出来れば…」

「首輪をしていても…生き残れるか」

ペナルティ機能が作動しないのなら首輪をしていても問題は無くなる。

「明日は文字通りの最終戦だ、ゲームマスターを殺し、ペナルティ機能を止める」

雨宮は覚悟したようにゆっくりと目を閉じる。

それは儚げで今にも消えてしまうような姿だった。

「鈴音、お前…一人で行くつもりじゃないだろうな」

王生の心がざわついた。

「…一人で行く、と言って納得しないだろ、お前は」

「わかってるじゃないか、んじゃ今日はゆっくり休むとしようぜ、

夏喜と日向も待ってるだろうし」

そう言いながら王生は一足先にガスコンロと鍋を持って夏喜と日向の所に向かった。

「…光一」

雨宮はそんな王生の背中を見つめながらゆっくりと後に続いた。

第４６話：エースの隠し部屋（後書き）

【おまけ小説】

夏喜「出番が…出番が無いのよぉ～～！！」

王生「なんだよ…いきなり大声出して」

日向「ちょっと雨宮さんとこーいちさんが尺を取りすぎです、私達にも、というか私にも出番を下さい」

夏喜「日向ちゃ～ん、おのーさん、泣いちゃうよ」

日向「感想ではあまつさえ空気キャラとして扱われる始末ですよ」

王生「出番っつってもなぁ…、戦闘させる訳にもいかんし」

夏喜「それじゃあ私と日向ちゃんのいちゃいちゃをメイン回に持っていけばどう？」

王生「それはシークレットゲーム小説とはいわないから」

日向「仕方がありませんね、やはりここはサービスシーンでしょう、夏喜さんの」

夏喜「ひゃ！！わ、私？」

王生「なぜそうなる」

日向「こーいちさんは見たくないんですか?夏喜さんのサービスシーン」

王生「……」

夏喜「ちょっと!なんで黙っちゃうの!!」

王生「いや、うん、ほら、あれだ、まぁ、そうだな、つまり、ほれ、あぁ」

日向「それではこのシークレットゲームの小説を読んで頂いている皆様の為にサービスシーンをお見せしましょう」

夏喜「ちょ、ちょっと!日向ちゃん、勝手に!!」

日向「←へどうぞ!!」

【≪〜サービスシーン〜≫】

日向「いやぁ、夏喜さん、大胆ですね、文字だけなのが残念です」

夏喜「…何もしてないからね」

日向「あぁ！黙ってればわからないのに」

王生「そりゃ詐欺だ」

第４７話：レッツクッキング！！（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．４：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．１：ナイトホークさん、油桜さん
柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　真　：６：２．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．８：マッチさん

第47話：レッツクッキング！！

雨宮は王生が持ってきたガスコンロと鍋、そして今まで手に入れた食材（この部屋にあった物を含む）を床に並べて唸っていた。

「あら？どーしたの、雨宮さん」

「あぁ、何を作ろうか迷っていてな、この食材で出来る物…」

ジャガ芋

人参。

玉ねぎ。

飲料水。

飯盒セット。

カレールー。

「…さて、どうするか」

「むしろ選択肢は一つしか無いかと…」

腕を組みうーんと思考する雨宮に日向が呆れた顔をした。

「カレー…ね」

「でもご飯が…、このままじゃ食べられない」

日向は飯盒セットについているお米袋をシャカシャカと振った。

「炊飯器はないし…、どうやってたくんです？」

「…これだ」

雨宮が日向に見せたのは飯盒だった。

「あ！テレビとかで見た事ある、どう使うんですか？」

「見てろ」

日向に見られながらテキパキとセットしていく雨宮。

その顔は照れて赤くなりながらもどこか誇らしげだった。

「それじゃあ今のうちに野菜を切っちゃいましょうか」

「はい、了解です」

日向は包丁を手にすると腕まくりをした。

「っと…、日向ちゃんじゃちょっと危ないかな」

「問題無いです、家庭の授業とかうちの手伝いとかやってるので」

「そう？じゃあコレお願い」

「了解です、料理の出来る女の子は得点が高いようですし」

日向は横目でチラッと雨宮を見た。

「私も手伝う」

雨宮もナイフを手にすると腕まくりをした。

「待って、ナイフは違うからね」

「使い慣れているのに…」

渋々と雨宮はナイフを置くと包丁を手に取った。

トントンッと三人で野菜を切っていく。

とはいえ料理の経験の乏しい雨宮が夏喜と日向の手を止めていたが。

「雨宮さん、ジャガ芋の芽とった？」

「…目？ちょっと待ってくれ」

雨宮は芽の残ったジャガ芋をぐるりと回転させる。

「目は見当たらないな、大丈夫だ」

「…なんと言えばいいか」

そう呆れたように呟くと日向は自分の切った野菜にタバスコをかけていた。

「…日向ちゃ～ん、何してるの？」

「何って仕上げです、カレーは辛いからカレーですよ？」

「あはは…」

「お～い、どうだ？上手くいきそうか？」

「！？、光一君」

調理の状況が気になった王生は三人の様子を順々に見ていき、ピタッと動きを止めた。

「…鈴音、ジャガ芋の芽はこれだ、わからないならちゃんと聞け、日向、タバスコはいらない」

「光一君、その…、二人も一生懸命にね――」

「それと夏喜さん、もうちょっと皮を薄く切れなかったのか？具も一つ一つが大きい」

「…（ピキッ」

「あぁ、それとカレーの隠し味に入れると良いもんはな――――」

ガシャンッ

「…は？」

適当な柱と手錠で繋がれました。

「…ちょっと待て、何でこうなった？」

「手出し無用って事よ、鍵は持っておくから」

夏喜は柔らかく微笑むと鍵をポケットにしまう。

「隣、良い？」

そのまま王生の隣に座り込んだ。

雨宮と日向は一緒に野菜を切る続きをやっている。

「なんだか知らない間に仲良くなってんな…」

王生はその様子を眺めながら嬉しそうに呟いた。

「光一君が落ち込んでた時、みんなでどうやって元気付けようかって考えてたからね～」

「そっか…悪い事したな」

「でもおかげで雨宮さんとも仲良くなれそう」

「そりゃ良かった」

そう答えながら王生は考える。

それは明日の事だった。

これまで夏喜や日向にはこのゲームの大元、つまり組織についての話しは伏せている。

王生自身、その方が良いと思っているので二人には組織の事を話すつもりはない。

だがそれでは明日の問題が解決しない。

明日、雨宮と王生はゲームマスターの元へと最終戦に向かう。

そこに夏喜と日向を連れて行く訳にはいかない。

単純に巻き込みたくないという気持ちだった。

―どう誤魔化そうかな…。

王生はポリポリと頭をかきながら思案する。

「ところで光一君、明日雨宮さんとどこに行くの？」

「……」

ポリポリと頭をかくスピードが上昇した。

「誰から聞いた…って、鈴音に決まってんな」

「なんか明日光一君と出かけるから日向ちゃんを頼むって言われたんだけど…」

「…ったく、もうちょい上手くやれよ」

不器用な奴…と王生はため息をついた。

「私と日向ちゃんに隠れて何するつもりなの？もしかして逢い引きとか？」

「んな訳あるか…」

それでも二人に全てを説明していない事に王生は安心した。

「首輪とＰＤＡを取りに行くんだよ、二人の解除に必要だろ？」

これなら嘘はついていない。

中村の持つＰＤＡ、そして可能ならばその首輪を取る事も目的の一つだ。

「何だか私達の事ばかりで悪いかな…」

「気にしなくていいだろ、そんくらい」

「わりと真剣なんだけどね」

そう呟くと夏喜は体育座りをして膝に自分の顔を当てた。

「ちょっと引っ掛かってんの、私、役に立ってないなぁ…って、なんかずっと光一君や雨宮さんに頼ってばっかだし」

「珍しく落ち込んでるな」

「光一君ってやっぱりデリカシーが無いんだ」

「…悪かった、でもさ、役に立ってないってのは違う」

「…え？」

王生の言葉に夏喜は顔を上げる。

「だって夏喜さんが日向を見てくれるから俺達は安心して動けるんだ」

「光一君…」

「…そういや、夏喜さん、まだ俺のＰＤＡが何か知らなかったな」

王生はポケットから自分のＰＤＡを取り出す。

王生の持つ【Ａ】のＰＤＡの条件は【Ｑ】のＰＤＡの持ち主の殺害。

結局今の今まで夏喜と共に行動しながらも王生は自分のＰＤＡが何かを教えられなかった。

「…見る？」

だが、もう良いだろう、王生はそう考えた。

今となっては【Ｑ】のＰＤＡの持ち主を殺害するつもりも無い。

「う～ん…」

だが夏喜は難しい顔をすると。

「そのＰＤＡの解除条件、私や日向ちゃんが手伝えそう？」

「それは…、多分、無理だと思う」

王生の正直な感想、夏喜や日向には殺害が要となるこの解除条件で出来る事は無いし、して貰うつもりも無い。

「そう、なら…別にいいかな」

「…良いのか？」

王生は夏喜のその言葉に驚いた。

「だって私達に手伝える事、無いみたいだし」

「…不安にはならないのか？一緒に居る相手の解除条件が得体の知

れないものなんだぜ？」

「不安？あっはっはっは！今更何言ってるの？」

王生の投げかける疑問を夏喜は笑って一蹴した。

「…え？」

「私はもう信じちゃってるからね、光一君は光一君のやりたいようにやれば良いって事」

状況がわからない王生に夏喜は苦笑しながらそう答えた。

「でもね…、一人で無茶やって何でもかんでもやっちゃダメ、光一君に何かあったら私も日向ちゃんも雨宮さんも悲しむから」

びっと人差し指を王生に向け、指を差す。

「何かあれば遠慮無く私や日向ちゃん、雨宮さんを頼る事、いいわね？」

「あ、あぁ…」

夏喜のその迫力におされ、王生は曖昧な返事を返すと。

「よろしい、それじゃ約束って事で」

夏喜は満面の笑みで微笑んだ。

「…すごいな、夏喜さんは、俺じゃ絶対真似出来ない」

王生は改めて夏喜についてそう考える。

「ん？何が？」

当の本人は頭にハテナマークを浮かべているがそれが王生を苦笑させた。

「夏喜さんとこの建物で会えて良かったって事」

王生の心からの感想と礼。

もし夏喜と出会わなければ、下手をすれば新城達と一緒に殺人に回っていた可能性だってあった。

「え？その…、あの…」

王生の言葉に夏喜は顔を赤くさせると。

「そ、そうだ！料理の様子見なきゃ、もうちょっと待っててね！！」

ぴゅ～という音が再生されるくらいに一目散に王生から離れて行った。

「光一と何の話しをしていたんだ？」

戻って来た夏喜に雨宮が問い掛ける。

「え？う～ん…、ちょっとした世間話、かな」

「そうなのか？」

「ふふ、光一君が気になるの？」

夏喜は雨宮を少しからかうつもりでそう答える。

「え？あぁ…、まぁ」

「もしかして…惚れちゃった？」

「ふわぁッ！？」

「好きになっちゃったって事」

夏喜は雨宮は慌てて否定するタイプと睨んでいた。

世にいうツンデレタイプ、間違いない、と目をキュピーンッとさせる。

「や、その…、どうなんだろ…、自分でも…わからない…かな」

だから雨宮のその反応は夏喜の予想を裏切り、しかし期待は裏切らなかった。

顔を真っ赤にさせてブンブンと手を振る。

「か…」

雨宮の見せた思春期の中学生のような反応に。

「なんと言えばわからないけど…胸がドキドキする、好きって気持ちはわからないけど…」

「可愛い～！雨宮さん、今の最高～！！」

夏喜は至福の表情で突然雨宮に抱き着いた。

「へ？うわぁっ！な、夏喜、急に抱き着かないでくれ！！」

あまりにも突然の事に雨宮も戸惑い、どう対象していいかわからないようだ。

「何かもう…、ギュッと抱きしめたくなっちゃって、ギュ～ッ♪」

「は、離してくれ…、ひゃッ！ちょっと、頼む！！」

「ギュ～ッ♪」

なので雨宮は夏喜に抱きしめられるまま、されるがまま。

○夏喜―雨宮●の瞬間であった。

小さいもの、可愛いもの好きのパワー、恐るべし。

「…む～」

「あ～…、日向」

王生の元を訪れた日向。

頬を膨らませた日向はご機嫌ななめを主張しているようだ。

―なに？俺が相手する流れなのか？つか俺が機嫌直させるのか？

「仕方ないな…」

王生はため息をつきながらも満更でもなさそうに呟いた。

第４８話：食事会（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．４：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：２．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．８：マッチさん

第４８話：食事会

「む～…」

口を膨らませる日向。

「何むくれてんだよ…」

「別に…何でもありませんよ」

王生の言葉に日向はプィッとそっぽを向きながら答える。

「夏喜に抱き着かれなくて寂しいのか？」

その後に日向もなんだかんだ言って子供だなぁと王生は続けようとする。

「こーいちさん…」

「ん？」

「アホですか？」

だが日向が睨むようにそう言ったので王生は止めた。

「あ～、へいへい…、見当違いって事ね」

そう言いながら王生は素直じゃないんだなぁ…と考えていた。

「…、まぁいいです、それよりもこれをどうぞ」

呆れた表情を見せた日向は王生にカレールーの入った小さな皿とスプーンを見せる。

「なんだ、コレ？」

「見てわかりませんか？カレーとお皿、あとスプーンです」

「いや、見りゃわかるけどさ、どういう意図があんだ？」

「こーいちさんに毒…、味見して貰おうと思いまして」

「今確実に毒味って言おうとしたよな、まぁいいけど」

日向から皿を受け取ろうと王生は腕を伸ばす。

ジャランッ

柱に繋がれた手錠がそんな王生の腕を止める。

「夏喜…、つーか忘れてた俺はアホか」

これでは食べられない事は無いが食べにくい事は確実だ。

「…仕方ありませんね、こーいちさん、両方の手を出して下さい」

「ん？」

王生は言われた通りに両手を出す。

「はい、それで水を手で飲む時みたいにおわんの形を作って下さい」
「こーか？」
手にくぼみをつけておわんの形に。
「では行きますよー」
日向はカレールーをスプーンですくうとその上へ持っていった。
「行くなよ！止まれ！！」
王生は慌てて両手を引っ込める。
「…冗談ですよ」
「だったらその『チッ』みたいな顔はなんだ？」
「気のせいです、では改めまして…」
日向は一度スプーンを皿の上に戻すと。
「では、あ～ん」
王生にスプーンを近付けつつ、そう言った。
「…何のつもりだ？」
「こーいちさんに食べさせてあげようかと」

「いや、一人で食えるから、スプーンを貸せ」

「あ～ん」

「日向…」

「あ～ん」

「……」

有無を言わせない日向のアピールではあるが王生は口を開けるつもりは無かった。

「口から入れれないなら仕方ないですね…、では耳か目を出して下さい」

「どっから体内にいれるつもりだ！！――むぐっ！！」

ツッコミで必然的に開いた口にスプーンが入れられる。

「…どーですか？」

「まぁまぁ…かな」

口をもぐもぐとさせながらも王生はどこか新鮮な気持ちだった。

誰かが自分の為に料理を作ってくれているという事がだ。

「良かったです、ではあ～ん」

「あ、あぁ…」

自分の中に生まれたそんな気持ちに戸惑いながらも王生はカレーのルーを口に入れる。

「どんな気分ですか?私みたいな小さな子に弄ばれるのは」

「……てい」

ペシンッ

王生は自由の効く手で日向の額にチョップを入れる。

「あぅ…、ちょっと言ってみただけだったんですが」

「ったく…、どっからそんな言葉覚えたんだよ」

「丁度王生さんみたいなシチュエーションが出てくる小説です」

「んな小説読むな!!」

王生はツッコミと同時に日向の持つカレールーを奪った。

「後は俺が食うからな」

手錠によって制限こそあるが王生はカレールーを食べる。

「…こーいちさん」

そんな王生に日向は顔をうつむかせながらも呟くように呼び掛けた。

「ん？」

「私、頑張ってますか？」

「は？何だ？いきなり…」

「いーから答えて下さい」

「…頑張ってると思うぞ、普通に考えりゃ日向くらいの歳の子供がこんな目にあってりゃ泣き叫んでる」

特に藤木のアレは間違いなくトラウマものだ。

「…そうですか」

「あぁ、日向はそういった怖いの全部我慢してんだ、頑張ってる」

「まだ足りません、もっとほめて下さい」

「ん～、日向は偉い、よく頑張ってる」

王生は日向の頭に手を置くとそう優しく答えた。

「ん～」

日向は猫のように目を細めて王生の手を受け入れる。

「ひ～な～た～ちゃ～ん、おねーさんの時と反応違うなんて寂しい

ぞぉ」

「あぅ！！」

不意をつくように夏喜が日向に抱き着き、頬を擦り寄せる。

「あ～、柔らかい！もち肌！！可愛い～！！！」

「…夏喜さん、何やってんだ？」

本格的にこの人、ロリコンだ、保育士なんかやらせたら子供が次々と持ち帰れるぞ。

と考えながらも表面上は王生も呆れ顔だけで済ます。

「あ、カレーが完成したからね、光一君の手錠の鍵を外そうと思って」

「そりゃありがたい」

ガチャンッと鍵を外れ王生は解放される。

「その手錠なんだけど、貰ってもいーか？」

「え？元々この部屋にあったものだし…、良いと思うけど」

夏夏から手錠を受け取ると王生はカバンに入れた。

「けどこんな物何に使うの？」

「手錠の使い道なんてわかってるだろ？」

「私達を監禁する、ですね」

「いや、違うけど」

そう良いながら雨宮の所に行くとすでに四枚の皿に盛りつけられたカレーライスが出来上がっていた。

「あ～、良い匂い、美味しそう」

「私ももうお腹ペコペコです」

テーブルも無いので行儀は悪いが床に座り込む。

「光一、お前の分だ」

「ん？あぁ、ありがとう」

雨宮からカレーを受け取る王生だったが雨宮の様子がおかしいのに気付いた。

「？、なんか顔が赤いぞ」

「あ…いや、その、――――早く食べてくれ」

「？、まぁいただきま――――」

スプーンがを口に入れようとして王生の動きが止まる。

「「「……」」」

夏喜、日向、雨宮の三人が王生の動きをジッと見つめていたからだ。

「…なんだ？」

「「「いいからさっさと食べ（ろ）（なさい）（て下さい）」」」

三人娘の声が重なる。

「食べずらいんだがなぁ…、まぁわかったよ」

やりずらそうにしながらもカレーを口に入れ、もぐもぐと味わう。

「…美味い」

一人暮らしの長い王生にとってそれはとても新鮮な気持ちだった。

―そっか、飯って誰かが作ってくれるんだな。

「どうしたの？こーいちさん」

「感動してるのよ」

「違…わないか、うん、美味い」

「「「やったぁッ！！」」」

三人娘でのハイタッチ。

「…はは、嬉しそうだな」

「女のプライドってやつよ」

「私達も食べましょーか」

「あぁ」

四人でカレーライスを食べる。

「楽しそう…か、俺も楽しいんだろうな」

飯は人を幸せにする。

王生は楽しそうに談笑する三人娘を見て嬉しそうに微笑んだ。

――

――

「ほい、コーヒー」

「…ありがとう」

夕食も終え、深夜。

王生は二つのコーヒーのうちの一つを雨宮に渡すと隣に座る。

日向と夏喜はすでに寝ている。

この部屋はエースの隠し部屋である。

雨宮の話しではこの部屋は組織の監視カメラはもちろん特殊なジャマー機能によって探知系のソフトウェアにも写らない。

入り口もロックする事である意味外敵の侵入を許さない要塞となっている。

なので見張りの必要は無いとも言えたがそれでも雨宮と王生は起きていた。

「眠れないのか？」

「お前もな」

「明日がラスボス戦…って考えるとな、緊張してんのかな」

「ラスボス…？ライスボールの略か？」

「真面目な顔で考えないでくれ、俺が困る、最終戦って事」

「…最終戦、ゲームマスターとの決着か」

ようやく意味がわかった事にスッキリしたのか雨宮はコーヒーを飲んで一息入れる。

「奴は私がこの手で殺す…、必ず」

鋭く冷たい目。

悲しみ、怒り、憎しみ、殺意、全ての負の感情をごちゃまぜにしたその瞳に王生は吸い寄せられそうになる。

雨宮は組織の事になるとこうなる。

王生としても親友である慶吾の命を奪ったこのゲームの主催側である組織を許す訳にはいかない。

エースというのはそういった者達の集まりなのだ。

―だったら、鈴音も？

雨宮にも…何かあったのだ。

エースに入る理由が、組織を恨む理由が。

「…鈴音」

―聞いてみたい。

王生にとってこれは好奇心ではなく、雨宮の事を知りたいという気持ちだった。

傲慢と言われても良い、それでも出来るのならば雨宮の持つ、負の気持ちを少しでも和らげたい。

「…なぁ、鈴音、聞きたい事があるんだ」

「ん？どうした？光一」

「…聞かせてくれないか、鈴音が、エースに入った理由」

「……」

コトッ

雨宮はコーヒーを床に置くと体育座りをしてそこに顔をうずめ、ゆらゆらと身体を揺らす。

「嫌なら別にいい、ただ…鈴音の事を知りたいって思ったんだ」

「…そうだな、お前になら、話しても、――いや、お前には知っていて欲しい」

雨宮は体育座りに顔をうずめたまま、顔を王生に向ける。

「手…」

「手？」

「手を…握っててくれないか、その…、私が、勇気が出るように」

「…あぁ」

王生は雨宮の手に優しく触れ、握る。

雨宮の手が震えているのがわかった。

「ずっとそばに居て聞いててくれ…、私が…、自分の親を殺した…、私の全てを壊したあの物語りを」

挿入話Ｄ：一人の少女の物語り

どこにでもあるような家庭。

どこにでもいるような、１０歳の少女がそこに居た。

「ね～ね～、お父さん、今度のお誕生日、どこに連れてってくれるの？」

「おいおい、行く事が前提なのか？」

少女は父親に問い、父親は答える。

「だってせっかくのお誕生日でお休みなんだよ、遊びに行きたい！！」

少女は父親の答えに納得いかず、駄々をこねた。

「まったくお前は…、どこに行きたいんだ？家の近くの公園か？それとも隣町の公園か？」

「ゆ～えんち！！」

「…お父さんの安くすます作戦は」

「つ～ようしません！！」

ビシッと少女は両手で大きくバツのマークを形作った。

「はっはっは！まったく…敵わないなぁ」
「お父さん、意地悪はそれくらいにしたら？」

「？、どうしたのお母さん、さっきからにやけてる」

「ふふっ、じつはね、お父さん、ちゃ～んと準備してたのよ」

「え！？本当？」

「ふっふっふ、父を甘く見るなよ、見るがいい！！」

父親は少女に見えるように一枚にチケットを少女の目の前へと持っていった。

「東京ジェリーランドフリーパス…、ファミリーご招待？」

東京ジェリーランドとは東京と名うってはいるが実は千葉県にある大型テーマパークである。

「すごーい！お父さん、どうやって手に入れたの？」

「父に不可能は無い」

「たまたま雑誌の懸賞があたっただけなんだけどね」

「…母さん」

父親の方は手品のタネを明かされた気分だった。

「私、ジェリーランドって初めて！！」

「ふふっ、楽しみ？」

「うん！！」

「ジェリーランドの後は誕生日プレゼントだ、楽しみだろう？」

「お父さん、なに買ったの？」

「それは後のお楽しみだ」

人差し指を立てて顔の前にもっていき、父親はウィンクをするとニヤリと笑った。

「ねーねー、お母さん、お父さんなに買ったの？」

「ふふっ、じつはね――――」

「わー！わー！き、今日はもう遅いから寝なさい！！」

「ぶー…、おやすみなさい、お父さん、お母さん」

「「おやすみ、鈴音」」

少女と両親がニコリと笑い合う。

どこにでもありふれているような家庭があった。

純真無垢な少女はまだ知らない。

それが罠だとしても。

――――

――

「えっ…？」

少女は目が覚める。

そこは記憶に無い場所。

近くには父親も母親も居ない。

「あ…れ、私、ジェリーランドに行くバスに乗ったのに」

バスに乗って…そこからの記憶が少女には無かった。

ぷっつりと途切れ、気付けば見知らぬ場所にただ一人。

「ぁ…」

そう、ただ一人だった。

一緒にバスに乗ったはずの両親の姿が見当たらない。

「お父～さん！！お母さ～ん！！」

叫んでみるも返事は無い。

「うわぁ～んッ！！」

耐え切れなくなって少女は泣いた。

「おと～さん！！おか～さん！！どこ行ったの！！」

少女は大声で泣きわめく。

ガチャッ

「！？」

外からドアノブを回される音。

１０歳の少女でも自分の泣き声を聞いて誰かが来たのだと理解した。

「…ひっぐ、だれ？」

見知らぬ場所、そしてドアの向こうには見知らぬ人。

だがそれは少女の杞憂だった。

「鈴音！！」

「お母さん！！」

ドアを開けた自分の母親に少女は抱き着いた。

「お母さん！お母さ～ん！！」

「鈴音…良かった、本当に」

母親は少女の肩を優しく抱きしめる。

「お母さん…、お父さんは？」

「…ごめんね、お母さんもはぐれちゃって」

「お父さん…」

母親の言葉を聞いて少女の表情が曇る。

「…、よし、それじゃあお母さんと一緒に迷子のお父さんを一緒に捜そう」

「…うん」

母親は少女の涙をぬぐうと頭を優しく撫でてあげた。

二人で父親を捜そうと部屋を出ようとする。

「…ところで、こういうの、鈴音は見た事ある？」

と、その前に、母親は立ち止まると真剣な表情でバックに手を入れる。

取り出したのは一台のＰＤＡだった。

「それ何？ゲーム機みたい」

ＰＤＡを見た事の無い少女はその機械を新しいゲーム機だと考えた。

「うーん…、お母さんもよくわからないけど」

母親は曖昧な表情を見せるも部屋を見渡す。

「…これ、かなぁ？」

少女はテーブルの上に置いてあるＰＤＡを手に取る。

「あっ！それ、ちょっとお母さんに渡してくれる？」

「うん！！」

少女は画面も見ずにそのままＰＤＡを母親に手渡した。

「ありがとう」

母親は少女のＰＤＡを操作する。

「……」

すると母親は一度目を大きく見開くとフラリと身体を大きく震わせた。

「お母さん？どうしたの？」

「…大丈夫、ちょっと疲れちゃっただけ」

心配する少女に母親は笑顔を作るとその手を握った。

「さ…、お父さんを探しに行きましょうか」

「うん、お母さんも居たんだし、お父さんも絶対居るよ」

少女と少女の母親は部屋を出る。

父親と再開するのにそう時間はかからなかった。

当然である。

それが今回のゲームのイベントに必要な絶対の条件なのだから。

「お父さん！！」

「鈴音…、鈴音！！」

「無事だったんですね…良かった」

家族三人の再開。

仕組まれた再開。

「おや…こちらのお嬢さんが先程話しに聞いた」

父親の隣には少女の見た事の無い人が居た。

「私の妻と娘です」

「いやいや、可愛らしい奥さんと娘さんをお持ちで羨ましい」

「お父さん、この人、誰？」

少女は不思議そうな眼差しで男の顔を眺める。

５０代くらいの落ち着いた様子の男性だが、父親の知り合いなのだろうか？

「知り合いの…方ですか？

家族三人が一斉に誘拐されたと思っていた母親も見知らぬ男の登場に戸惑っていた。

「あぁ、私もついさっき知り合ったばかりなんだがな、私が家族が居ないと言ったら探すのを手伝ってくれると言って」

父親は感謝の言葉を述べるように丁寧な口調でそう答えた。

「…夫がお世話になりました」

母親も男に向けて頭を下げる。

「いやいや、たいした事はしていないよ」

「……」

少女はじーっと両親と男とのやり取りを見つめていた。

「…可愛らしいお嬢ちゃんだ、名前はなんというんだい？」

「…私？鈴音」

「そっか、鈴音ちゃんか、鈴音ちゃんは飴は好きか？」

「飴…？」

「荷物は盗られてないようで安心した、好きな飴を取るが良いよ」

男は手の平にいくつかの飴玉をのせ、少女に見せた。

「ん～、じゃあこれ！！」

少女はパイン飴を手に取ると口に入れる。

「ありがとう！おじちゃん！！」

「なんのなんの、それと、私の名前は中村　真だ、よろしく、鈴音ちゃん」

「うん！中村のおじちゃん！！」

少女は飴玉をコロコロと口の中で転がした。

「すいません、中村さん」

「いやいや、こうして家族が三人、無事に再会出来たんだ、私としても嬉しいさ」

中村は少女の両親に向けて嬉しそうに微笑んだ。

「心の底から、本心として…」

嘘ではない。

中村はこの時、本当に心の底から喜んでいた。

家族三人の再会を。

中村の口元が薄く、小さく、誰にも気付かれないように。

それでいてとても冷たい笑みを作った。

挿入話E：一人の少女の物語り其のニ

「お父さん！お父さん！！おとぉさぁぁぁぁぁあん！！！」

「鈴音！走るの！！」

「でも！お父さんが！！」

「ッ…、早く！！」

母親が少女の腕を掴み、駆け出していく。

その場に取り残されたのは少女の父親と中村と名乗った男。

ゲーム開始から少女達家族と共に行動していた中村。

その中村がいきなり少女達に銃を向けた。

「ぐ…ぅ、なぜ、あなたが…」

父親は肩を撃たれ、決死の思いで娘と妻を逃がした。

「いやいや…、私だってできればこんな事はやりたくなかったんだが」

中村は父親に向けて銃を構える。

「これも仕事…でね」

「ぐっ…はぁ、ふざ…けるな、何が…仕事だ」

「一緒に行動してつくづく思っていたよ、とても仲の良い家族…と」

「!?、私はどうしようと構わない！だが…妻と娘に手を出すな！」

「家族思いだねぇ、なら選ばせてあげようか、妻と娘、どちらを助けたい？」

中村はクックッと小さく笑うと冗談のようにそう言った。

「……」

「そう睨まないでくれ、どのみち君に選択権は無い、私にもね、だがどちらかは生き残るだろう」

「な…、どういう事だ」

「娘さんの条件は奥さんの首輪が作動する事、そして奥さんの解除条件は【8】のＰＤＡの初期配布者の殺害、つまりこの場合はあんたの娘さんだね」

「……」

「つまりどっちかは必ず死ぬ」

中村は他人事のように笑いながらそう告げた。

「人は皆極限状態においてこそ人間がわかる、私の言いたい事がわかるかな？」

「…悪魔め」

「ククククク…、では私もショーを盛り上げるとしようか」

中村はカメラに顔を向けるとアピールするように両手を広げた。

「さぁ！カメラの向こうの皆様！大変お待たせ致しました！！」

大袈裟にお辞儀をしてみせる。

「今回のメインイベントにして究極の賭けのテーマは《親子愛》、母親は娘を殺して生き延びるか？それとも娘の為に自ら犠牲になろうとするか？さぁ…ただ今よりＢＥＴのスタートです！！」

両手を広げてのパフォーマンスを加え、中村が笑みを浮かべる。

「何を…、何を言っているんだ…あなたは？」

「何って…言葉のままさ」

中村は薄く笑うと父親に再び銃を向ける。

「…娘は今日が誕生日だった」

「知っているよ、昨日鈴音ちゃんが嬉しそうに話していたからね」

もっとも…中村にとってその事は事前の調査でわかっていた事だが。

「家族三人、泊まりがけでの誕生日、いい話しじゃないか」

本来ならばそうなっていた。

家族三人、一泊を入れての誕生日。

「それを…お前が奪ったんだ」

父親は中村を恨むように睨みつける。

「お喋りはここら辺にしておこうか」

だが中村はそんな事気にもしていないように言葉を続けた。

「あなたには最後にやってもらう事がある、そうする事で今回のイベントが始まる」

「やってもらう事…」

「あぁ…、簡単な事だ」

ダァンッ

その瞬間、中村が銃の引き金を引いた。

弾丸は父親の額に直撃し、その命を一瞬で奪い取った。

「頼るべき父親の死、起爆材にはこれが必要だ」

母親のＰＤＡには生存者をカウントする機能がインストールしてある。

それは当然として昨日、一緒に居る中で中村が母親のＰＤＡにインストールするように誘導したのだが。

今頃、そのＰＤＡがアラームを鳴らしているだろう。

生存者が減った事を。

そしてそれを見た母親はすぐに気付くはずだ。

夫が殺された事を。

となれば選択するしかなくなる。

娘を殺して生き延びるか。

自分が犠牲となって娘を助けるか。

「極限状態の中での親子愛の選択、くくく…これはどちらに転ぼうとも面白い」

中村は薄く笑うとその場を後にした。

―――

母親と娘が逃げ、一つの部屋にたどり着いた。

無我夢中で走ったので自分が今どこに居るかもわからない状況だったが疲労も重なり、満足に動く事も出来ない。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「!?」

そんな時に母親のＰＤＡがアラームを告げる。

それは頼るべき夫の死を告げたも同然のものだ。

「お父さん…、どうして…、何で中村のおじちゃんが」

母親は自分の娘を見る。

無我夢中で走った為に息をきらし、身体はボロボロ。

そしてそれ以上に父親を目の前で撃たれた事による精神的な苦痛。

肉体的にも精神的にも最早逃げ回るのは不可能だった。

もちろん母親自身だってそうだ。

こんな二人がまた襲われるものなら今度こそ逃げられない。

「……」

でも…と母親は考える。

二人なら無理でも一人ならば。

それも下、侵入禁止エリアへと逃げれたならば。

”一人は助かる”のだ。

つまり首輪を外せばいい。

娘のＰＤＡは母親がずっと持っていた。

娘はこのゲームの事を理解していないのか解除条件についてはわかっていない。

「ねぇ…鈴音」

「…お母さん?」

母親が意を決して娘に声をかける。

「お母さんの事…好き?」

「うん…大好き、お父さんもお母さんも大好き」

ギュッ…。

「私も…、私も大好き」

抱きしめる。

ギュッと…強く。

その感触を確かめるように。

そして…同時に娘の手にＰＤＡを握らせた。

「良い…？これから鈴音は首についてるそれを外すの、絶対ね」

「え？でもこれ…引っ張っても外れないよ」

「…その首輪を外すにはね、お母さんのここに鈴音の持ってるこの機械をはめ込めばいいの」

そう言って母親は自分の首輪についているコネクターを指差した。

「ここ？」

「そう、はい…持って」

母親は娘の手を持ち、ＰＤＡを自分の首輪へと誘導した。

「…覚えていて、鈴音」

「え？」

「お母さんの首輪にその機械を接続したら…、一度部屋を出て、しばらくしたら今度は自分の首輪にそれを接続するの、そしたら…階段を降りて一階に向かって」

「え？でも…お母さんは？」

「…お母さんとの約束、良い？」

「でも…」

カチャッ

「…あ」

母親が娘の手を取り、ＰＤＡを自分の首輪のコネクターへと接続した。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

『あなたはルールに違反しました、ペナルティが発動します』

「ペナルティって…ペナルティって何が起きるの」

「鈴音…早く、部屋を出るの」

「お母さん…」

ゴォンッ

「…え？」

その瞬間…天井の床が開き、一本の鉄の柱が落下した。

同時に部屋を熱気が包んでいく。

高熱により真っ赤になった鉄の柱。

「お母さん…あれ」

「鈴音、これから何があっても…、絶対、お母さんに近寄っちゃダメよ」

ガチャンッ

ワイヤーが母親の両手に巻き付かれ、身体を拘束した。

「生きて一階に戻るの、約束よ」

ギュンッ

ワイヤーは母親の身体の拘束を終えるとその身体を鉄の柱へと強制的に向かわせる。

ジュウウウウウウウウウウッ。

「あ…ぁぁ…、あああああああああああああ！！」

頭から、母親の身体が鉄の柱に押し付けられた。

高熱を纏い、真っ赤になった鉄の柱へ。

ギリ…ギリギリッ

ワイヤーは母親の身体を決して離さない。

人の肉の焦げる強臭。

「お母さん！お母さん！！おかぁさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあん！！」

娘は何も出来ず、ただ泣き叫ぶしかなかった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああん！！」

目の前で、自分の母親が焼かれている。

娘はずっと泣き叫んでいた。

どれくらい…たっただろう。

気が付けば鉄の柱もワイヤーも無くなっていた。

そしてどろどろになった母親の死体。

「ぁ…ぁあ…」

娘はよろよろと後ろへと下がっていく。

トンッ

後ろに下がり、誰かにぶつかった。

「う…ぁ、あぁ…」

「おめでとう、鈴音ちゃん」

振り返れば、こちらに向けてニコリと微笑む中村の姿があった。

第４９話：決戦前夜（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．４：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：５．４：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：４．６：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：２．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．８：マッチさん

第４９話：決戦前夜

床に転がる母親の死体、涙を流してその場に立ち尽くす少女。

パチパチパチッ

そんな状況での場違いな拍手の音が酷く部屋に響いた。

「おめでとう、鈴音ちゃん」

部屋の入り口で立っていた中村は満面の笑みを浮かべる。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

『おめでとうございます、あなたは見事に最初に遭遇したプレイヤーの首輪を作動させました』

そして無機質な機械音声の祝福が流れる。

「……」

「ふむ、何がどうなったかわからないという顔だな」

無反応に立ち尽くす少女に中村が答える。

「君は首輪を外せる、お母さんを犠牲にした事によってね」

「お母さんを…」

「そう、君がお母さんを殺したからこそ、その首輪を外せるんだ」

中村はＰＤＡを持つ少女の手のを掴むとそれを無理矢理少女の首輪に接続した。

少女に抵抗する力はすでに無かった。

ガチャンッ

首輪は呆気なく外れ、床へと落ちる。

「お父さん…は？」

「死んだよ」

簡単で短すぎる一言。

「おじちゃんが…殺したの？」

「そうさ、私が殺した」

中村は何でも無いように答える。

「……」

少女は中村を睨みつける。

それが今の彼女にとって最大限の抵抗であった。

「勝者には敬意を払うのがルールだが…、降り懸かる火の粉を払う

くらいは認められている」

「みんなみんな…、おじちゃんのせいで」「物分かりの悪いガキは嫌いだ」

中村が少女に銃を向けた。

「ひっ…」

「勝者としてゲームをクリアさせてやると言っているんだ、それともこの場で死ぬか？」

「う…ぁ、うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

少女は涙を流しながらその場から駆け出した。

「ふむふむ、これでよし」

その場に残った中村は特に追おうともせずに銃を収める。

「せっかく素晴らしい親子愛のイベントが盛り上がりの中完成したというのに、肝心の主役が死んでは興ざめも良い所だ」

―――

「うぅ…うわぁ、うぁぁぁぁぁぁぁあん！！」

―――

どこをどう走って来たのだろうか。

気付けば少女は一階のホールへとたどり着いていた。

「そうだ…外に出て」

外へと出られそうな場所には初日に見た時と同じくシャッターが降ろされていた。

だが一カ所だけシャッターの降ろされていない場所がある。

コンクリートで固められた所だ。

「外に出れば…」

今更外に出たとしてもすでに少女の両親は死んでいる。

だが…それでも。

ガキッ

少女はコンクリートに向けて持っていたナイフを突き付けた。

ガキッ、ガキンッ

ただひたすらに、ナイフをコンクリートに突き刺す。

光が見たかった。

どれだけナイフを突き刺そうがコンクリートに何の変化も無い。

それでも少女はゲームの残り時間の全てをそれに注ぎ、やがて気を失った。

――――

――

ゲームは終了した。

中村が組織の男達を引き連れて後片付けを始める。

「では鈴音ちゃんを病院に運ぼうか、手配はどうなっている？」

「遊園地に行く途中に起きたバスの事故によるただ一人の生存者…、というのはどうでしょう？」

「ゲームの賞金は両親の保険金として扱える、では…それでいこうか」

中村は頷くと鈴音を組織の人員に任せてその場を去ろうとした。

「あっ！待って下さい、中村さん、ここのコンクリート掘られた後が残ってます」

「ん…、鈴音ちゃんが掘ったのかな？」

「さぁ…どうでしょう？それで、補修しますか？」

「いや、この程度なら問題は無かろう、むしろ良い火種だ」

「火種…ですか？」

「見る者が見ればすぐに気付くさ、これが補修されていないという事はこのコンクリートがよほど分厚いのだろうという事に」

不思議そうな顔をする男に中村が笑って答える。

「そして絶望するんだ、このゲームに逃げ場が無いという事実に」

―――

「気付けば私は病院に居た、全ての出来事は闇に消され、ゲームの賞金だけが残った」

頭を膝の上に乗せていた雨宮が顔を上げる。

「親戚連中はその金を奪おうと必死だったが私にとっては血で染まった金だ、
一年位は一人でずっと家に篭っていた」

その瞳に涙を溜めていた。

「私は１１歳の誕生日になる日、全てを失ったのだ、それも”極限状態に陥った時、親子はどうするか？”そんなふざけたテーマの為だけに」

たまたま鈴音の家族が選ばれ、ゲームに参加させられた。

「一年位がたち、エースの者が家に来た、ゲームで親を失った子供の保護も彼等の仕事の一つらしい、私は迷わずついていき」

そして…雨宮はエースになった。

「１６歳までは雑用、そして１６歳からは戦闘訓練を五年間、こう

して今の私が出来上がったのだ」

「鈴音…」

王生は雨宮の話しを聞き、彼女を知る。

雨宮の時折見せる小さな子供のような言動の意味を知った。

雨宮は…11歳から上への成長を失ったのだ。

平穏な…家族と共に笑って流れるはずだった生活。

それを失い、雨宮の精神的な成長は止まった。

ひたすらに組織への復讐を考えて生きて来たのだ。

「…つまらない話し、だったろ?」

「…馬鹿」

王生は雨宮の肩に手を回すと力強く抱きしめた。

「…ありがとな、話してくれて、辛かったか?」

「…平気、だって光一が居るから」

雨宮は王生を受け入れるように目を閉じる。

「全部…、全部終わったらさ、どっか行こうぜ」

「…どこに？」

「そうだな…、鈴音の行きたい場所、行けなかった場所、そんな所に」

「…ジェリーランド」

「…ん？」

「ジェリーランドに…行きたい」

それは行けなかったかつての自分に向けるように。

「…そうだな、決まりだ」

王生もそれに気付くように力強く頷いた。

「…明日、決着をつけよう、俺達が…この先に行く為に」

「…あぁ」

「それじゃあ…、今日はもう寝ようぜ、疲れは明日に残せないからな」

「…あぁ、私ももう寝るさ」

王生は雨宮の言葉に頷くと横になると目を閉じた。

「…この先か」

雨宮は一人、小さく…誰にも聞こえない小声で呟く。

「すまない…光一、それでも、私は…」

―――

―――

「…チッ、どうなってやがんだ」

忌ま忌ましくＰＤＡの画面を睨みつけると新城は舌を打った。

ＰＤＡの画面は地図になっており、六階の地図が映し出されている。

地図上にある光点は二つ。

そう、ただ二つなのだ。

「せっかく首輪探知のソフトウェアをインストールしたってのによ」

首輪の反応を地図に映す事が出来るソフトウェア。

それを機能させて現れた反応が二つだけなのである。

一つは同然として新城自身の者だ。

新城は知らないがこの時地図には存在しないモニタールームにはすでに外してある中村の首輪が。

そしてエースの隠し部屋には王生と雨宮と夏喜と日向が居た。

「光点と残りの生存者の数が全然一致しねぇ、首輪外した奴がもう何人も出てやがるのか？」

それにしたっておかしな話しではある。

「確実に何かが起こってんのは間違いねぇが…、どうも解せねぇな」

新城がここに来るまでに拾った物の中で一つ、明らかに奇妙な物があった。

新城は稀に商売道具としてそれを見る機会がある。

知っているからこそ、その特異差に気付くのだ。

新城は移動しながら首輪探知の機能を作動させる。

本来ならばバッテリーの消費が激しい首輪探知の機能を何度も使うのは新城からしても苦々しくはあったがそれ以上に新城にとって慎重にならなければいけない理由があった。

「…こっちに来てんな」

地図に映る自分以外の唯一の光点。

その反応の主であろう者が自分に向けて進んで来る事を確認する。

「…奴か？」

新城は持っているサブマシンガンをすぐに撃てるように構えた。

「くっひゃっはははははははははははははははは！！」

「…あん？」

だがそこで聞こえて来たのは壊れたような笑い声。

新城にとって聞いた事のある声ではあったが、どうにもおかしい。

いや…、このゲームで通路を笑いながら歩いている時点でおかしくはあるが。

喉を痛めているのか、声が妙に甲高い。

カラカラカラッ

笑い声の主はカラカラとある物を床に当てながら進む。

極めて殺戮性能の高いそれはショットガンだった。

「…あいつ」

新城はその人物が誰か、一目でわかった。

半日前とは明らかに様子が違うが見間違い無く国枝である。

ただその目は焦点が定まっておらず、歩いていても右へ左へとふらふらしている。

「いくるみぃ…、出てこいよ、俺は最ッッッこうにいいもんを手に入れたんぜ」

カラカラと主張するかのようにショットガンを床に当てながら国枝は歩く。

「なぁ、やろうぜ?もう待てねぇよ、コイツをてめぇにぶち込んでやりたくてこっちはうずうずしてんだ」

「…はぁ、馬鹿が」

手を出しやがったな、コイツに。

新城は先程自分が拾ったそれを見てため息をついた。

「国枝」

「…なんだ、あんたか」

新城が声をかけるが国枝は一度新城を見ると興味なさそうに視線をそらす。

「なぁ？王生を知らねぇか？」

変わりに返って来た返答はただそれだけだった。

「さぁな、俺も見かけてねぇな、あいつを見つけてどうすんだよ」

「どうする？くははははっ！決まってんだろ、グチャグチャに殺すんだよ」

「……」

何の為に？と言いかけたが新城は何も言わなかった。

今の国枝からまともな答えが聞けないのはわかりきっていたのだから。

「国枝、お前確か御子柴のおっさんの【５】のＰＤＡを持ってたよな」

【５】のＰＤＡは現在、新城が気絶していた時、国枝がＪｏｋｅｒと一緒に回収している。

「あーん？それがなんだよ？」

「そいつを俺にくれねぇか？もちろんただで何て言わねぇよ」

そう言って新城は薬の入れられたビンを国枝に見せる。

「！！、そいつは…」

「こいつが欲しいだろ？なら【５】のＰＤＡと交換だ」

「こんな物くれてやる！だから早くその薬をよこせ！！」

国枝は乱暴に新城にＰＤＡを渡すと薬の入ったビンを奪う。

「くっはは…、ははは！くっひゃはははははは！！」

そしてすぐにフタを開けると中の薬を飲みはじめた。

「いいねぇいいねぇ！この身体中がみなぎる感覚…、最ッ高に気持ちが良い！！」

「…そりゃ良かった、じゃあ俺は行くぜ」

国枝と別れ、その姿が見えなくなった時。

「やれやれ…、さすがに頭のいかれちまった奴とは組めねぇわな」

ため息をついて新城が立ち止まる。

「早いとこ首輪外して下に逃げなきゃなんねーのによ…」

―となりゃやっぱ狙うのは…。

「まぁ…決まりだわな」

新城はそう呟くとその場を後にした。

「しっかし王生にゃ同情すんぜ、あんな薬中に狙われちゃ命がいくつあっても足んねぇ」

第４９話：決戦前夜（後書き）

【おまけ小説】

《もし観月のペナルティで王生が死亡していたら》

国枝「なっ！？嘘だ…、嘘だろ？王生ぃ…」

国枝「ふざけるんじゃねぇよ…お前を殺すのは俺なんだよ…、勝手に死んでんじゃねぇよ！！」

雨宮「光一は…ゲームマスターに殺された」

国枝「なら俺がそのゲームマスターを殺してやる！！」

雨宮「国枝…、お前」

国枝「か、勘違いするなよ…、王生を殺した奴を殺せば俺が王生より上だと証明される、ただそれだけだ、それだけだからな」

第５０話：王生　光一（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：２．４：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：２．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：４．２：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：９．３：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：２．８：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．８：マッチさん

第５０話：王生　光一

夜が明ける。

《三日目》

このゲームにおいてそれは最終日、最終戦を意味する。

一度失った者を手に入れたい者。

狂気に身を任した者。

自分の身を守りたい者。

最早後の無い者。

戦う力の無き者。

守る力の無い者。

過去に捕われた者。

そして…過去を知り、救いたい者。

その全ての者に訪れる最終日。

その早朝。

「…いいのか？日向と夏喜に何も言わなくても」

「あぁ、昨日のうちに全て話してある、ここから出ないようにと」

眠っている夏喜と日向の横で雨宮と王生は最終戦への準備を進めていた。

防弾チョッキを着込み、銃を手にする。

「サブマスター…、観月のＰＤＡを使えばゲームマスターの部屋へ行ける」

「観月のカメラのおかげでゲームマスターの奴も無理は出来ない、だろ？」

「例え不意打ちはしてこなくても道中に機械は仕掛けてあるはずだ」

それくらいならばゲーム側の不正にはとられない事を雨宮は知っていた。

「そんなもんまとめてぶっ壊してやるさ」

王生は荷物をまとめると立ち上がる。

「…行くか？」

「光一…、少し待ってくれ」

そう言うと雨宮は顔をうつむかせる。

「…どうした？」

「その…、これが最終戦になるんだ、もしかしたら…二度と出来なくなるかもしれない」

顔を赤らめてもじもじと身体を揺らす。

「だから…、私は、お前と…したいんだ」

「…え？」

今度は王生が顔を赤くした。

雨宮の言いたい事をなんとなく想像してだが。

「い、いや…、ほら、今は寝てるとはいえ夏喜も日向も居るし、最終戦前に派手に動くのも――」

だからこそあたふたと妙な動きをしてしまう。

「私は…光一！お前とキスがしたい！！」

「……」

王生の動きがピタリと止まった。

対する雨宮は言いきった事で満足げな表情をした。

「…ん？どうした？」

そして一時停止中の王生を見てキョトンと首を傾げる。

「…いや、俺が悪かった」

王生はバツが悪そうにボリボリと頭をかいた。

「それで…ダメ、か？」

「…何言ってんだよ」

寂しそうな表情の雨宮を王生は優しい抱きしめる。

「ただ…最後じゃない、最後になんかにさせない」

そして…雨宮の唇に自分の唇を押し当てた。

「光一…」

雨宮はゆっくりと目を閉じると。

―すまない。

心の中で…小さく呟いた。

「！？」

王生は口の中に何かが入ったのを感じた。

異物。

何かの薬のような物が喉を通っていく。

同時にぐるぐると周りの景色が回転していくような感覚を感じた。

「す…ず、ね、何…を？」

王生はまともにたっている事も出来ず、床に座り込む。

「睡眠薬だ、即効性は高いが効果はそれ程無い、１時間もたてば目が覚める」

「なん…でだ、俺は…おまえ、と」

バタリと、耐え切れなくなり、王生は床へと倒れた。

「…私はお前を死なせたくない、決着は私が一人でつける」

そう言って雨宮は倒れる王生の隣に自分のＰＤＡを置いた。

「日向の首輪の解除に必要だろう、私はこれだけあれば良い」

観月のサブマスター用のＰＤＡを手にし、雨宮は王生から遠ざかっていく。

「待て…よ、すず…ね」

掠れていく意識の中、王生は雨宮の背中に向けて手を伸ばした。

「俺だって…、お前を、一人で戦わせたり…したく…ねぇ、よ」

意識が段々と消え去っていく。

睡魔に押し潰される。

「く…そ…」

伸ばした手は何も掴めぬまま、床に落ち。

王生の意識はそこで途切れた。

――

――

「あんた何て産まなきゃ良かった」

王生光一は実の母親にそう言われた。

「おい！さっさと金よこしやがれ！！」

今日も父親が怒鳴り散らしながら母親を殴る。

昨日も一昨日もそうだった。

王生　光一の幼少期にとってそれは日常だった。

もともと父親と母親は仲が良くなかった。

別れる寸前、そこで王生は産まれてしまった。

何一つ二人の仲が片付かないままに産まれてしまった。

そんな夫婦が上手くいくはずも無く、父は母に暴力を振るい、それが終われば母は王生に恨み言を吐いた。

―お前さえ産まなければあんな男と一緒にならなかったのに。

王生は父親も母親も大嫌いだった。

それでも王生はそんな大嫌いな両親の為に頑張った。

もっと自分の頭が良ければ―。

もっと自分の運動神経が良ければ―。

勉強をし、運動をし、他の親が見て羨ましがるような子供になれば。

そう…天才と呼ばれるような子供になれば。

両親は自分を認めるはずだ。

そして自分達の子供が天才と呼ばれるのならば、父親も母親も仲良くするはずだ。

自分達の結婚は間違っていない、子供を産んだ事は間違っていない、そう考えるはずだ。

王生が子供ながらに必死に考え抜いた答え。

だから王生は【天才】を目指した。

テストで１００点を取った。

両親は見向きもしなかった。

運動会で一位をとった。

両親は応援に来なかった。

何一つ変わらない。

気付けば王生は得に何かをしなくてもある程度の事は出来るようになっていた。

勉強も運動も他の誰よりも抜き出た力を持っていた。

両親はそれを知らなかった。

そして王生は両親が自分に興味が無い事に気付いた。

どれだけ自分の才能をアピールしても見向きもされない。

結局、子供の王生がどれだけ必死に足掻いても、もがいても。

何一つ王生の日常に変化はなかった。

その日までは。

ボォッ…

燃える。

バチッ、バチンッ

炎が部屋を包み込み、木材が弾ける音がした。

ある日、王生の家は火事になった。

原因は父親のタバコだった。

火の手があがる部屋の中、王生はジッと下を見つめていた。

「おい…ガキ、俺を助けろ！この箪笥をどけろ！！」

「うぅ…、痛い、痛い痛い痛い」

父と母は箪笥の下敷きになっていた。

床には箪笥の中に入っていた物があちこちに散らばっている。

「……」

王生はそんな両親を感情の無い瞳で見つめていた。

「おい！ぼーっと突っ立ってないでさっさと箪笥をどかせ！愚図が！！」

父親が声を荒げて怒鳴る。

「……」

「なっ…なんだ、その目は？親にはむかうのか？」

だが感情の無い王生の瞳に押される。

「光一…お願い、お母さん、凄く痛いの」

母親が哀願するように王生に言葉をかける。

「お父さんとお母さんは…俺の事、好き？」

感情の無い瞳、感情の込められていない言葉で王生は両親に言葉をかける。

両親は一度お互いに顔を合わせると。

「えぇ、大好き、大好きに決まってるじゃない」

「そうだ、いろいろ誤解はあったかもしれんが親子三人、ここまでやって来ただろう？」

口々に二人はそう王生に言葉をかける。

「そっか…」

王生は下に向けて手を伸ばした。

―あんたなんか産まなければ良かった。

―お前は望まれて産まれて来たんじゃねーんだよ。

そして王生は…床に落ちていた、元々箪笥の中に入っていた。

通帳を手にした。

「俺はあんたらが嫌いだ、大嫌いだ、嘘つき共が」

あの火事のあった日。

王生　光一はただ一人生き残った。

同時に王生は全ての事がどうでも良くなった。

皮肉な話しではあるが今まで両親に認めて貰う為にして来た事を全て失い、宙ぶらりんの心だった。

頭も良い、運動も出来る、喧嘩も強い。

だが…結局それが何になったのだろう。

転校した小学生での昼休み、王生は一人でぼーっと窓の外を見てい

た。

今日の給食のメニューは揚げパンにホワイトミニというデザートがついていてクラスの連中が我先にと欠席者の分を奪い合っていた。

「…くだらね」

王生はそんなクラスメイトを冷ややかな視線で見る。

「…？」

そんなクラスメイトの一人が自分に向けてやって来た事に王生は眉を細めた。

自分に対して流れている噂は知っているし否定は出来ない。

おまけに王生はこの小学生に転校し、すぐに上級生と揉め事を起こしている。

普通だったら自分に近付いて来ないはずだ。

だがそんな考えとは裏腹にクラスメイトの一人は王生の前に立った。

「よっ！」

「……」

話しかけるクラスメイトに王生は無視をして窓の外を見る。

「なぁ、揚げパン、食わねーなら俺にくれねーか」

「あん？」

王生はクラスメイトを睨んでくる。

「タダでとは言わねーよ、俺と勝負しようぜ、王生」

「…藤原、だったっけ？なんだよ勝負って」

「俺が勝ったらお前の揚げパンを貰うって事」

クラスメイト…藤原　慶吾はニヤリと笑った。

「俺が勝ったら？」

王生は面倒臭そうに言葉を返した。

「俺の揚げパン…はもう食べたしなぁ」

「いいさ、俺が勝ったらもう二度と俺に話しかけるな」

一回くらいは付き合ってやるか、そんな気持ちだった。

元々王生に負けるつもりはなかった、勉強でも運動でも自分がクラスの誰よりも抜き出ている事を知っていたのだから。

「決まりだな」

ニヤリと笑い、藤原慶吾が王生の机にドスッとある物を置く。

「…なんだよ、これ」

「見りゃわかるだろ、牛乳だよ、牛乳」

「…は？」

「牛乳早飲み対決！、レディ～」

「なっ！お前、ちょっと待てって…」

「ゴーッ！！」

そして王生の日常が変わった。

救われた。

藤原慶吾という、お人柄な親友に会えた。

自分を引っ張り上げてくれた親友。

自分もそうなれればと王生は考えた。

過去に捕われた雨宮を引っ張り上げてやりたいと。

王生は手を伸ばす。

その手は何も掴めぬまま、床に落ち。

パシッ

掴まれ、もう一度浮きあがった。

「光一君！！」

「こーいちさん、いつまで寝ているつもりですか、さっさと起きやがって下さい」

「夏喜…？日向…？」

夏喜と日向が王生の手を握り、声をかけていた。

「良かった、目が覚めたのね」

「！？、そうだ…鈴音は！！」

慌てて立ち上がろうとするがぐにゃりと視界が歪んでいく。

「くそ…まだ効いてんのか」

耐え切れずふらふらと身体を揺らすと壁に寄り掛かった。

「雨宮さんは…居ないの、私達が起きた時にはもう」

「あの女…やってくれるな」

そう言いながらも王生の瞳が閉じていく。

「ダメだ…こんままじゃ」

「こーいちさん、眠いんですか？」

「情けないが…眠い」

「だったらこれをどうぞ」

日向は一本のビンを手に持つと王生の前に持ってきた。

液体ではあるが怪しげな色に浮遊物が浮かんでいる。

「なんだよ…これ？」

「雨宮さんが気絶した時に言っていた日向特製お目ざめドリンク、名付けて【日向スペシャル、カイザーZ】です」

「…効くのか？」

「刺激のある調味料はふんだんに入れてありますが」

「…上等ッ！！」

王生は日向からビンを受け取ると下に沈んでいる沈澱物を混ぜる為に軽く振った。

「夏喜さん、後を任してもいいか？」

「必ず帰って来るのならね」

ウィングする夏喜に王生はニッと笑うと。

「当たり前だろ」

ビンの液体を一気に飲み込んだ。

「ぐふっ！」

むせた。

「――――ッ！！」

それでも王生は飲み続け、ビンを空にした。

「がぁあぁぁあああぁあ！！」

飲み切ると王生は顔を下に伏せてうなだれた。

「ちなみに日向ちゃん、何が入ってたの、あのビン？」

「タバスコや唐辛子やわさび、まぁいろいろです、ごっちゃ混ぜにしてみました」

夏喜と日向がそんな会話をしている中、王生は立ち上がる。

「…ふぁかなふぉんなをひゅれもとしにひってひゅる（馬鹿な女を連れ戻しに行ってくる）」

唇が晴れ上がり、舌が上手く回っていなかったが王生はそれだけ言うと部屋を出た。

「…しまらなくて格好悪いですね」

「ふふっ…、そうね」

残された二人はそれを見送る。

「でも格好良いです」

「えぇ、そうね」

二人は顔を見合わせるとお互いにニッコリと微笑み合った。

第５０話：王生　光一（後書き）

《おまけ小説》

【年齢差】

日向「…こーいちさん」

夏喜「日向ちゃん、光一君の事好きなのね」

日向「そうですね」

夏喜「でも光一君と日向ちゃんじゃ年齢が」

日向「でも世の中には夏喜さんのような特殊な性癖を持った人がいるじゃないですか」

夏喜「わ、私のは単なる子供好きだから、それに光一君は多分違うかなぁ」

日向「甘いですね、夏喜さん」

夏喜「…え？」

日向「ロリコンじゃないのならロリコンにしてしまえばいいんですよ、理性なんて吹っ飛ばさして」

夏喜「日向…恐ろしい子、こりゃ雨宮さんもうかうかしてらんないかな～」

夏喜「でも日向ちゃんもいずれ成長するじゃない、その時光一君がロリコンのままだったら？」

日向「あぅ…考えてありませんでした」

夏喜「あ～もー可愛い！いっそおねーさんと付き合っちゃおう！！」

第５１話：各々の最終戦（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：４．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：５．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：４．９：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：４．２：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：１１．５：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：７．８：マッチさん

第５１話：各々の最終戦

雨宮はサブマスター用のＰＤＡのマップ機能を起動させる。

そこには他の参加者に配られているＰＤＡには映らない特殊な通路まで網羅されていた。

「……」

「…馬鹿げた話しだな」

組織側のＰＤＡについている機能は一般プレイヤーの物と性能が大違いだ。

そもそも最初からゲームの中身を理解し、一通りの戦闘技術を学んだのが組織側の人間達なのだ。

奴らはその圧倒的優位な位置から一般プレイヤーを操り、ゲームが盛り上がるように仕組んでいく。

「……」

ふと過去、自分の参加したゲームを思い出して雨宮の足が止まった。

あの時の自分は連中の書いたシナリオ通りに動いていた。

なぜなら力が無かったから。

だったら…今なら潰せる。

「あの日から十年…か」

全てを捨て、組織への復讐だけに生きてきた十年間。

「私が…終わらせてやる」

雨宮は先へと進む。

次の角を曲がればいよいよゲームマスターの居るメインルームへと続く通路に行ける隠し扉がある。

サブマスター用のＰＤＡならば造作も無く開けるだろう。

「…！？」

だがそこで雨宮は意外な人物と遭遇した。

「お前…覚えてるぞ、前に王生と俺の勝負を邪魔した女だ」

国枝がそこに居た。

隠し扉の目の前に、ショットガンを持って座り込んでいる。

「…何故貴様がここに居る？」

「決まってんだろぉがぁ、王生とやり合うんだよぉ、極限までなぁ！！」

国枝の目は血走り、身体は小刻みに奮えている。

「くはっ、くかきくは…、楽しみだ…、あぁ楽しみだぁ」

そう言いながら国枝はビンに入った薬を飲みだす。

「くっはははははははぁ～！楽しみ過ぎて今からでもイカれちまいそうだ！！」

恍惚な表情と共に真上を向いて歓喜の笑い声を高らかと上げた。

ピロリン、ピロリンッ、ピロリンッ

「あ～ん？」

国枝の歓喜の笑いを邪魔するようにアラームがなった。

『国枝…さっきから何をしておる？早くその女を殺せ』

ＰＤＡからは中村の声が聞こえて来る。

「…ゲームマスターか」

「あぁそうだ…、その通りだ、俺は奴と手を組んだ、とびっきりの力を手に入れる為になぁ」

そう言い、国枝はショットガンと薬の入ったビンを高らかに掲げる。

「見なぁ！これさえあれば俺は最強だ！王生の野郎をぶっ殺せる！

！」

「……」

―哀れだ。

完全に自我を失った国枝を雨宮は哀れみの目で見た。

今の国枝にはなぜ王生にそこまで執着しているかすら覚えていないだろう。

「で、王生はどこに居る？」

「…今は一緒には居ない」

「そぅか…だったらあんたには用は無いなぁ」

国枝は興味なさそうに顔を下げるとクイッと親指で壁を指差した。

「だが王生との勝負の邪魔はさせねぇ…、さっさと通りな」

『！？、貴様…何を？』

「あ～ん？」

『誰も通すな、そう言ったはずだ！！』

「くはっ！くっひゃはははは！知るかよ、ば～か」

ＰＤＡから聞こえてくる中村の焦りの声を国枝は笑い飛ばす。

「俺は誰の指図も受けねぇ…、てめぇらはてめぇらで勝手にやってな」

『貴様…、その銃も薬も誰が与えてやったと思っておる』

「ゲームマスター、この期に及んでまだ他人頼りか？」

『…あまり図に乗るなよ、小娘が、出迎えの準備は済んでおる』

「貴様の準備なぞ私には関係ない」

ガシャンッ

雨宮はサブマスターのＰＤＡを操作し、扉を開いた。

『無謀な前進、己の愚行を後悔しながら進むが良い』

「言いたい事はそれだけか？」

雨宮は前へと歩み出す。

扉の先へ。

「くっははは！あんたはあんたで決着をつけにいくんだなぁ！！」

「国枝…光一を待つつもりか？」

「てめぇとおんなじだ、俺は俺で決着をつけるんだよ」

ショットガンを抱きしめると国枝はニヤリと笑った。

「光一はここには来ない」

「来るさ、感じるんだよ…、奴を」

「……」

雨宮はもう何も言葉を返さず、扉をくぐる。

「さぁ…早く来いよいくるみぃ、俺はここだぜ?」

背後から聞こえてくる国枝の言葉。

戦場において最も危険なのは狂気に身を任せた者だと雨宮は考えている。

奴らは自分の死を恐れない。

そして目的の為ならどんな手段も使ってくる。

「光一…来るなよ」

雨宮は祈るように呟いて先へと進む。

「感じる…感じるぜぇ、くっはははははは!!」

―――

「ハァッ！ハァッ！くそ…」

王生は記憶を頼りに走っていた。

昨日見たサブマスターのＰＤＡの地図。

それを頭の中に浮かび上がらせ、それを頼りに先へと進む。

そこに一つ、誤算があった。

「!?、まだ反応が突然出てきやがった」

新城が地図に現れた雨宮、そして王生と続けて突然現れた反応に眉をひそめた。

「…ギリギリまでバッテリーは使っちまったが、どうやら価値はあったみてぇだな」

新城はここで二つの選択を考える。

現れた反応を追うべきか。

反応が現れた付近を調べるべきか。

「反応が消えたってのが気になるな…、まずはそのからくりを暴いてみるか」

そして新城の選択は王生、そして夏喜や日向にとって最悪のものとなった。

「…どうやら、ビンゴだったみてぇだな」

「!?」

それは夏喜にとって突然の招かれざる客の到来だった。

「ずいぶんと久しぶりだな、夏喜さんよ」

新城は部屋を見渡し、夏喜達を見てわざとらしく手を振った。

「…あ、この人、あの極悪三人組の」

「最悪…」

「ククク…、どうやらまだツキは残ってるみてぇだ」

―――

「感じる…、そうだ、もっと近付いて来なぁ」

ぶつぶつと呟きながら国枝は薬物を口に入れる。

「くっははは！感覚が優れてく！研ぎ澄まされる！！」

そして国枝はまだ誰も来ていない通路を見る。

「…くっくく、くはッ！くはくはくはァッ！！来た来た来たぁ！来やがったぁ！会いたかったぜぇぇぇぇえ！いいいいくぅるみいいいいいいいい！！」

「！？、国枝…なんでお前が」

そこに、王生が現れ、国枝が歓喜の声を上げた。

「どけ…俺はこの先に」

「殺したいくらい憎々しい奴が目の前にいるってのは最ッッッ高にハイな気分だぜぇ、なぁ…そうだろいくるみぃ！！」

―――
――
―
「ふっ！」
ズガガガガガッ
雨宮のサブマシンガンが天井に備え付けられたスマートガンを破壊する。
これで天井に備えられたスマートガンは全て撃ち落とした。
雨宮の前方には機関銃を装備したロボットがニ台。
雨宮はそれを迎え撃つ為にサブマシンガンを構える。
ガシャンッ
「！？」

その瞬間、雨宮の後方の壁から機関銃が出現した。

前方のロボットと合わせれば挟み撃ちにされる。

「チッ…」

立ち止まっていれば的になると判断した雨宮は駆け出した。

その場の機関銃が雨宮に標準を合わせる。

ドガガガガガガガッ

「しっ！！」

雨宮は前方の一台のロボットに回り込むと盾にして機関銃の一斉射撃を回避した。

その変わりにロボットの一台が一斉射撃を受けて破壊される。

ピンッ

同時に手榴弾のピンを口で引き抜くと後方の機関銃に向けてぶん投げた。

ズガァァアンッ

壁の機関銃を破壊した雨宮はそのままもう一台のロボットに向けてサブマシンガンを構える。

ズガガガガガッ

「…ふぅ」

二台のロボット、そして壁の機関銃を破壊した雨宮が一息ついた。

その瞬間。

バチッ…バチバチッ

「！？」

二台のロボットの胴体が電気を帯びた。

―自爆する気か！！

雨宮がその意味に気付いた瞬間――――。

ドガァァァァァアンッ

二台のロボットが雨宮を巻き込む為に自爆した。

「痛っ…」

壁に寄り掛かりながらも雨宮は前へと進む。

ポトポトと…その歩みの足跡をつくるように血が通路を伝っていく。

ビリッ

服を破き、足に流れる血を止めた。

「はぁ…はぁ、ここか…」

通路の終着点、一つの扉。

ゲームマスター、中村のいるメインルーム。

そこまでたどり着くまでに雨宮は道中の数多くの防衛機械を一人で破壊して来た。

満身創痍ながらもここまで辿りついた。

「…十年から今日まで、私を縛り付けていた柵」

雨宮はその扉に手の平を当てると目を閉じた。

「…その全てにケリをつける」

「来たかの…」

雨宮が扉を挟んだ向こう側に来ている事はすでに中村も知っていた。

「…あの時、殺しておくべきじゃったか、後悔してももう遅いが」

中村は自分のゲームマスター用のＰＤＡを操作し、メインルームに備えられた銃兵器を出現させる。

「過去の亡霊が…、わしが両親の居る所に送ってやる」

第５１話：各々の最終戦（後書き）

【おまけ小説】

《目が覚めると》

王生「朝…、あれ？俺の部屋？」

日向「おにーさん、おはようございます」

王生「日向…、なんで俺の部屋に？」

日向「私はこーいちさんの妹、って設定です」

王生「設定言うな、つーかこれ夢か？」

日向「いえ、おまけ小説です」

王生「お前がそれ言っちゃダメだろ！！」

日向「細かい事はいいんです、それでおにーさん、起きましたか？」

王生「起きた…、つかお前早起きだな」

日向「もちろんです、駄目なおにーさんを起こさなければいけないのが妹の宿命なので」

王生「早く俺に朝飯を作れって事か？」

日向「はい」

王生「駄目な妹だ…」

第５２話：狂人凶人恐人強人（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：４．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：５．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：７．４：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：１１．５：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：９．２：マッチさん

第５２話：狂人凶人恐人強人

「どこに行くんだぁ？いくるみぃよぉ、せっかく俺と再会したんだぜ？もっと喜べよ？」

「…鈴音はどこだ？」

「あの女ならここを通ってったぜ、邪魔をされたくはなかったんでなぁ」

国枝はまだ開いている隠し通路への扉にショットガンでさした。

「悪いが…今はてめぇの相手してる暇は無いんだよ」

王生がその扉に向かおうとした瞬間だった。

ガシャアンッ

国枝がＰＤＡを操作すると上から壁が落下し、扉を閉じた。

「ッ！！」

「くっははは…、ふざけるなよ、いくるみぃ」

ＰＤＡをポケットに入れた国枝がショットガンの銃口を王生へと向ける。

「この俺との決着以上に重要な事なんててめぇにはねぇだろうが！！」

「…てめぇ」

王生は憎悪を持った視線で国枝を冷たく睨み付けた。

「おいおい…そんな眼でみんなよ、ゾクゾクしてくるじゃねぇか」

だがそれに対し国枝は恍惚の表情を見せる。

「そうだ…、もっとだ、もっと怒れ！高ぶれ！狂え！そして…俺と殺し合え！！」

「…約束しただろ、てめぇと殺し合うのは――――」

ダァアンッ

王生の言葉を遮るように国枝のショットガンが天井へ向けて発射された。

「いいから、さっさと、俺と、殺し合え」

「ッ！！」

王生は苦々しく唇を噛み締めた。

確かに今までの国枝はおかしかったが今回は完全に狂気じみている。

「…！、その薬」

そして王生には国枝の持っている薬に見覚えがあった。

「くっははは！これが羨ましいか？くっかかかか…、お前のせいだ、お前の為だ！！」

そう言いながら国枝は残っていた薬を飲み始める。

「…ここまでイカれた野郎だったとはな」

「後悔しているだろう？俺をあの時殺さなかった事を…、だが、もう遅い」

国枝はビンの中の薬を全て飲み干すと空のビンを床へ投げ捨てた。

「さぁ…いくぜぇ！殺してやるよ、いくるみぃ！！」

ダァアンッ

「ぐっ…」

狂弾とも呼べる国枝のショットガンの発砲を王生は転がり込んでかろうじで避けた。

「そうだ！よく避けた！簡単に死んでくれるなよ！いくるみぃ！！」

「チッ…なんだってショットガンなんざ」

ショットガン、通称散弾銃。

広範囲に散弾する弾は遠距離からの狙撃には向いていないが、その

真価は近〜中距離で発揮される。

加えてこの狭い通路での戦いとなれば王生の勝ち目が薄い事は明らかだった。

「まともに相手なんざしてられるか…」

王生は国枝が次のショットガンの発砲をする前に後ろへ駆け出す。

「くっひゃっはははははははぁ！！逃がすかよぉ！！」

その王生の背中に向けて国枝は手榴弾のピンを引き抜くと投げつけた。

「！？」

自分のすぐ近くに転がって来た手榴弾をそのままにする訳にもいかず、王生は手榴弾を掴むと国枝へ向けて投げ返す。

ズガァァァァアンッ

手榴弾は空中で爆発を引き起こし、巻き上げられた埃が王生の視界を覆った。

「…どうなった？」

カランコロンッ

視界がはっきりとしない中での物音。

カランコロンッ。

それは一度では終わらず、更にもう一度王生の耳に聞こえた。

「…嘘だろ」

王生は瞬間的にその音の意味を理解すると駆け出した。

舞い上げられた埃や煙りによってどこに転がったかはわからないがそれは間違いなく手榴弾の転がる音だ。

「くかッ！くかかかかかかかかかッ！！派手に行こうぜ！いくるみぃよぉ！！」

ズガァァァァァアンッ

二つの手榴弾による大爆発が国枝の目の前で起きた。

視界は巻き上げられた埃と煙りでおおられる。

「さぁて…死んだか？」

その中を国枝は躊躇する事なく歩き出した。

視界のはっきりとしない国枝を包む靄の中。

「…―ッ！！」

その中から、王生が国枝目掛けて拳銃を突き付けた。

これがショットガンを装備した国枝に対する王生のとった戦い方だった。

確かに散弾を持つショットガンは中～近距離戦においてその真価を発揮する。

通常、攻めるならば遠距離からだろう。

だが今の国枝は王生を遠距離まで遠ざける事はしないだろう。

ならば…逆だ。

近距離だ駄目ならば…至近距離から攻める。

ショットガンを満足に扱えない距離。

その距離まで王生は近付いていた。

舞い上がる埃と煙りが良い隠れみのになった。

国枝には王生の姿は見えない。

「けっはははははは！来たなぁ、いくるみぃ！！」

だが、国枝は正確に王生の方を振り向くとショットガンを構えた。

「無駄ムダ無駄ムダ無駄ムダ無駄ムダ無駄ムダァ！今の俺に小細工が通用するかよぉ！！」

「!?」

ダァァンッ

放たれるショットガン、だが王生の姿はその先には無かった。

散弾とはいえショットガンの発砲直後からすぐに弾が広がる訳ではない。

その僅かな一瞬をついて王生は国枝の真横に飛び込んだ。

「ひぃ～っひゃっははッ！わかるぜぇいくるみぃ、てめぇの動きがよぉ！！」

国枝もすぐに反応し、ショットガンを王生に向けようと旋回する。

「やらせねぇ！！」

ガシッ

王生は国枝のショットガンを掴むとその銃口を壁へと向けさせた。

「こいつはあの薬のおかげかなぁ？てめぇがどんだけ姿を隠してもどこに居んのか感じるぜぇ」

「この変態野郎が…」

王生と国枝は密着したままショットガンを掴み、膠着した。

「あぁあ…、良いね良いねぇこの感覚、最ッッッ高だぜ！！こういうガチの殺し合いを俺はずっと待っていた！待ち望んでいた」

「そうかよ、なら…」

王生は一度頭を下にさげると。

「ふっ！！」

ゴッ

国枝の顎に向けて頭突きをした。

「ぐぇッ！！」

「一人でやってな！！」

国枝の怯んだ隙を見逃さず、王生は国枝の右肩に拳銃を押し当てた。

前回の国枝は防弾チョッキを装備していた。

だからこそ、王生は防弾チョッキでは守れない肩に向け。

ダァンッ

拳銃の引き金を引いた。

「ぐぁっ！！」

国枝の肩が大きく後ろにのけ反り、血が吹き出す。

「これで…」

王生の一瞬の油断。

「くくき、きゃっはははははははははは！！」

だが国枝は平然と王生の首を掴むとショットガンを身体に押し当てた。

「なっ…」

「すげぇ…、マジすげぇ、痛みがねぇ、全然感じねぇ、逆に気持ち良いくらいだ」

「こいつ…痛みを感じないのか」

王生は国枝の腕を解こうとその腕を掴むがその握力はとても肩を撃ち抜かれた後とは思えなかった。

「なぁ…知ってるか？いくるみぃ、人間死ぬ寸前ってのはセックスの何倍も気持ち良いんだってよ」

「がっ…は」

首を掴まれた事によって呼吸を止められた王生は段々と抵抗の力を失っていく。

「お前もそいつをあじわいたいだろ?くっひゃはははははは!俺があじわらせてやるよ!!」

スルリ…と王生の両腕は国枝の手から離れ、だらんと下を向いた。

「……―」

「じゃあな、いくるみぃ」

国枝がショットガンの引き金を。

ダァンッ

――引いた。

――

――

―

「がはっ…、ごほっ!!」

王生は床に前屈みになってしゃがみ込むと必死に空気を吸った。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああぁぁぁぁぁぁああああ!!」

その隣では国枝が頭を抱えながらのたうちまわっている。

「痛ぇ、痛ぇ痛え痛ぇ痛え!!薬だ…誰か薬をよこせぇぇぇぇぇぇええええ!!」

「助かっ…た」

ショットガンの散弾は壬生の僅か横を通り、壁に弾痕を残していた。

寸での所で国枝の薬が切れたのだ。

「薬！薬薬！薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬薬りぃぃぃぃいあああああああ！！」

「…イカレてやがる」

ふらふらとしながらも壬生は立ち上がると国枝にゆっくりと近付いた。

「俺を殺しに来たかぁ？いくるみぃ！！」

「…もうてめぇの相手は御免だ」

「くぅ〜ひゃっはははぁ〜！！なら殺せ！そして最ッッッ高の快楽を俺にあじわらせろ！！」

国枝は恐怖に怯える事も命を懇願する事も無く。

「クカキキキキキカキキキキキキキキキキキキキカキカカカカカカカカカカカカカカカキキキキキクケケケケケケケケケケケケカカカカッ！！」

―狂ったように、言葉にもならないような声で笑い出した。

「黙ってな、舌噛むぜ…」

ドゴッ

そんな国枝の頭を王生は拳銃の柄で思い切りぶん殴った。

「…言っただろ、一人でやってなって」

―――

――

―

ガチャンッ

「念のため…ってだけだったが持って来て良かったな」

王生は気を失っている国枝の右腕と手頃な柱を手錠で繋いだ。

そこは先ほどの通路から少し離れた部屋。

王生は国枝をそこまで引っ張って来た。

「これでもうお前は終わりだ、少し…大人しくしてな」

王生は国枝のショットガンと弾を奪い取るとポケットを探る。

国枝は先程、自分のＰＤＡを操作して隠し通路への扉を閉めた。

閉める事が出来るのならば開く事も出来るはずだ。

「さて…、こいつのＰＤＡで扉を開けれれば良いが」

そう言いながら王生が取り出したＰＤＡには仮面を付けた道化師の絵柄が映し出されていた。

王生は雨宮の置いていった【２】のＰＤＡを所持し、その効力が発揮されたのだ。

「これは…Ｊｏｋｅｒ、か？お前が持ってたのか」

王生はＪｏｋｅｒのＰＤＡを大切にポケットに入れた。

「…これで鈴音の首輪を外してやれる」

そして国枝本来の【１０】のＰＤＡを起動させる。

「ゲームマスター用のドアのリモートコントロールが追加されてやがる…、ゲームマスターの奴と組んだのか？」

ピッ

ズズズズズッ

先程国枝によって閉じられた隠し部屋への扉が再び開いた。

「…待ってろよ、鈴音」

【１０】のＰＤＡを国枝のポケットに戻すとショットガンを力強く掴むと王生は扉をくぐり、隠し通路へと出た。

通路の至る所に破壊されたロボットの残骸が転がっている。

「…これ、全部あいつがやったのか」

それはまるで戦争の跡のようだった。

これを一人でやって無事でいれるはずがない。

「…生きててくれ」

王生は祈りながら先へと進む。

過去に捕われた者を救う為。

―――

――

「くっひゃぁ〜！！」

国枝は笑いながら柱と手錠で繋がれた自分の右手に向けてある物を設置した。

それは以前、新城や藤木と共に行動していた時に見つけた物。

ゲームマスター、中村が与えた武器の一つ。

”威力はせいぜい腕一本落とせるくらいしかない”小型の爆弾だった。

「きししッ！！」

国枝は一切の躊躇も躊躇いも無く。

バァンッ

笑いながら爆弾を爆発させ、自らの右腕を吹っ飛ばした。

焦げた右のひじから先がゴロンと床を転がる。

「王生ぃ！いくるみぃ！いくるみぃいいいいいいいいい！！」

手錠で拘束されていた右手が無くなり。ズルズルと引きずるようにしながら国枝は歩く。

爆発の影響は右腕だけでは収まらず、国枝の半身を焼いていた。

だが…それでも目を血走らせた国枝の行進は止まらない。

「ひぃっひゃっはは…、まだだぜぇ、もっとだぁ…まだ足りねぇ、いくるみぃ、てめぇの腕も落としてやる」

国枝は通路に出ようと扉を開けようとして。

「うがッ…」

その場に崩れるように倒れ込んだ。

「動かねぇ…、くっはははは…何てやわな身体だ」

失った右腕を眺めながら国枝は笑った。

「そうだ…いくるみの腕をぶった斬ってここに付けちまおう、くっはははははははぁ…、――――――――」

ひとしきり笑い終えると国枝の意識は暗黒の闇の底へと落ち、消えていった。

第５２話：狂人凶人恐人強人（後書き）

【おまけ小説】

《幼なじみ》

日向「さてこーいちさん、そろそろ学校に行かなくてはなりませんね」

王生「行かなきゃなんねーのか？」

日向「なんねーのです、それにほら、そろそろ幼なじみの方がお迎えに来てくれますよ」

王生「幼なじみぃ？俺にそんなの居ないぞ」

日向「そーいう設定です」

王生「だから設定いうな、で…誰が幼なじみなんだ？慶吾か？」

日向「そりゃ幼なじみなんですから本編で一番こーいちさんの事を思っている人でしょう」

王生（誰だろうな…、もしかして鈴音か？）

ピンポーンッ！！

日向「あ！来ましたよ」

王生「お、おう、今行く」

国枝「いぃぃくるみぃぃぃぃぃ！起きてっかぁぁぁぁあ！学校行くぜぇ！！」

王生「…日向」

日向「はい？なんでしょう？」

王生「なんでしょう？じゃねぇよ！キョトンとすんな！なんでここで国枝が出てくんだ」

日向「本編で一番こーいちさんの事を思っている人ですから、疑問に思うのならけーたいの【戻る】でもう一度本編を読んで下さい」

王生「もういい、俺が悪かった…、でもな！なんで国枝の来てる制服が女用なんだよ！！」

日向「幼なじみですからやっぱり女の子…、いえ、男の娘かと」

国枝「よ～し王生！どっちが先に学校に着くか勝負だぁ！！」

第５３話：ゲームに巣くい続けた者（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：３．６：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：５．１：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：７．４：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：Ｄｅａｔｈ：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：３．６：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：９．２：マッチさん

第53話：ゲームに巣くい続けた者

「……」

ドアが開く。

一瞬中に入るのに躊躇した雨宮であったがすぐに迷いを払った。

サブマスターのカメラの映像をこちらが握っている以上。入った直後での攻撃は無いだろう。

それはカジノ側が不条理にプレイヤーを殺した事になる。

これも王生のおかげといえるが。

雨宮は心の中で感謝の言葉を呟くと扉をくぐる。

そこには一人の老人が立っていた。

首輪はすでに外してあるのかしていない。

「…お前が今回のゲームのゲームマスターか？」

「いかにも、わしがゲームマスターじゃよ、鈴音ちゃん」

老人の言葉に雨宮は僅かに眉を吊り上げた。

自分の名前を知っているのは当然だろう。

参加プレイヤーの資料くらいは目を通しているのだから。
だが老人のその妙に馴れ馴れしい口調に雨宮は奇妙な違和感を感じた。

「いやいやしかし、あの時の少女が随分と美人になったのぉ」

「…お前は、何を言っている？」

「わからんのも無理は無いか、あれから１０年くらいだからの」

中村はククと笑う。

「わしは…中村　真じゃ」

「中村…真？」

雨宮はその名前を聞いてもすぐには意味を理解出来なかった。

「おやおや、いまいちピンと来てない所を見ると意外と私怨は無いのかの？いや…ただ単に思い出したくなくて記憶を封印しているだけか」

中村はそう言いながら小さな箱を取り出した。

リボンが巻かれた可愛らしい、まるでプレゼントに使うような箱。

「…なんだ、それは」

「君のお父さんに頼まれての、いつか渡そうと思っていたものじゃ」

「私の…お父さん？」

「１０年越しの誕生日プレゼント、じゃよ、鈴音ちゃん」

中村は表情に笑みを作った。

「ぁ…」

―そうだ、コイツは。

あの日、私達家族と最も身近にこのゲームを過ごし。

そして私達を騙し続けていた男。

「中村…真」

「ふむふむ、ようやく思い出せて貰えたようで嬉しいの」

「きさまッ…」

敵意に満ちた瞳で雨宮は中村を睨みつけた。

「育ったのは身体付きだけじゃなく、憎悪の方もか」

中村はそういいながらもリボンの付いた小箱を振った。

「気持ちはわからんでもないが、まずはこれを渡したい、君に渡せなかった父親からのプレゼントじゃ」

「…お父さん」

中村は雨宮にむけて小箱を円を描くようにして放り投げた。

「君のお父さんは最後にこう言っておったよ」

雨宮が小箱を受け取った瞬間。

バァンッ

小箱は小規模な爆発を起こした。

「一人は寂しいから、二人も来てくれ、とな！！」

中村が雨宮の父親からプレゼントを受け取ったなどという事実はある訳がない。

そもそも中村が雨宮の存在を知ったのはこのゲームが始まってからなのだから。

だが、中村はそこに目をつけ、プレゼントにあるような小箱を適当に見繕って爆弾にした。

その結果は――――。

「…殺してやる」

雨宮は生きていた、そして今の爆発による怪我はほぼ無いといえた。

「プレゼントを見せた最初から嘘だと警戒していたか、そりゃあ父親も浮かばれない」

「黙れッ！お前が…お父さんを語るな！！」

雨宮が受けたダメージは肉体的よりも精神的にだった。

溢れ出る怒りを抑える事が出来ない。

一人の少女が全てを失うきっかけになったあのゲーム。

その元凶が目の前にいる。

更には父親の事を使った。

父親のプレゼントを本当に中村が受け取ったかどうかは確かめやうがないが。

「お前は殺す」

雨宮は中村に向けてサブマシンガンを構えた。

「その前に…その子らの相手をして貰おう」

ウィィインッ

「！？」

雨宮の背後、壁が開き静かに音を立てて機関銃が出現する。

「これぐらいならば…まぁ、ルール違反ではあるまい？」

ズガガガガガッ

「くっ…」

同時に放たれる乱射に雨宮は逃げ回るのが精一杯だった。

「すまんのぉ…、直接相手をしたいのは山々なんじゃが」

そういいながら中村はライフルを雨宮に向けた。

乱射を避ける為に動き回る雨宮に狙いをつける。

「わしももう戦闘って歳でも無いし」

バァンッ

放たれた銃声。

「ッ！？」

弾丸は雨宮の背中に直撃し、雨宮は身体を大きくずらした。

バタタタタタタタッ

だがその状態の中でも雨宮はサブマシンガンで機関銃を破壊し、その勢いのまま転がるように床を駆けた。

「ふん…防弾チョッキか」

中村自身には防弾チョッキを与えた事も雨宮達が防弾チョッキを拾った覚えも無かったがそれくらいの想像は出来た。

「やれやれ…本当に歳はとりたくないもんじゃ、威力のある大きな銃は持てなくなるし狙った場所には当てられなくなる」

ピッ

中村がＰＤＡを操作すると雨宮の頭上、天井からスマートガンが二つ出現した。

二つのスマートガンは左右それぞれに展開され、雨宮に狙いをつけている

「さぁて、次はスマートガン二つじゃ、いや…わしのライフルを入れて三つか、サブマシンガン一つでどうするかの？」

中村はそう言うとライフルで狙撃する為に雨宮を狙う。

「よく喋る口だ…黙れ」

タンッ

雨宮は床を蹴って右側のスマートガンの死角。真下へと滑り込む。

バタタタッ

そして左側のスマートガンを破壊するとすぐにサブマシンガンの銃口を真上に向けた。

バタタタタタッ

そして真上のスマートガンを破壊する。

「それで二つ、では…もう一つはどうするかの」

ダンッ

中村がライフル銃の引き金を引く。

「!?」

雨宮は床を蹴り、跳んだ。

ライフルの銃弾は雨宮の居た床に着弾する。

それとは逆に跳んだ雨宮は着地すると素早く駆け出し、中村に近付いた。

チャッ

雨宮がサブマシンガンを、中村がライフルを同時に相手に向けて構えた。

「素晴らしい…」

中村が素直にそう呟いた。

「身体能力、そして判断力、君は素晴らしい戦士に育ってくれたよ

うじゃ」

「貴様、この頃に及んでまだ…」

「じゃがまだまだじゃの、わしが何故この場から動かないのか気付かんか？」

ガシャンッ

出現するスマートガンや機関銃。

それらは雨宮を取り囲むようにぐるりと雨宮の周りに展開された。

「……」

「この場所が君を包囲するのに最も適していて…の」

中村はＰＤＡを取り出し、邪悪に微笑んだ。

「これなら防弾チョッキも意味を無さまい、例えわしを殺しても君は死ぬ」

「…それがどうした」

死ぬ覚悟なんてエースとして任務を受けた時から決まっていた。

穏健派とは違い、過激派の行動思想は組織側の人間の殺害。

つまり特攻弾ともいえた。

雨宮はそれを覚悟していた。

―していた…のだ。

「…元より覚悟の上か、あの小僧が悲しむぞ」

中村は…雨宮の心情を理解した上でそう言葉にした。

「ッ！！」

雨宮の表情が揺らぐ。

覚悟が鈍る。

そうならない為に一人で来たのに。

―本当は生きたい。

また生きて、光一と会いたい。

「ククク…」

雨宮の心のほんの僅かな揺らぎを中村は見逃さなかった。

―伊達に…今まで生き延びて来た訳では無いわ。

基本的な戦闘能力が衰えてしまった変わりに中村は相手の心を掴む統べに長けた。

中村がＰＤＡのスイッチに手をかけた。

押せば雨宮に向けての集中放火が始まる。
その一瞬先だった。
「すずねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
王生　光一が扉の向こうから現れる、中村と雨宮に向けて駆け出していた。
「小僧が…またわしの邪魔をするつもりか！！」
中村がＰＤＡを操作し、王生に近い銃兵器のいくつかのターゲットが雨宮から王生へと切り替わった。
「光一…」
雨宮の瞳から迷いが消えていく。
だがこれは決して”死ぬ覚悟”なんかでは無かった。
―光一…お前は私が辛い時いつも側に居て支えてくれた。
―復讐以外はどうでも良いと思っていた私にお前は別の思いを与えてくれた。
―私は…光一と一緒に居たい、生きていたい。
”生きる覚悟”を決め、雨宮はサブマシンガンを床へと落とし。
バッ

服の中から二丁の拳銃を取り出した。

「なっ…」

「逃げ場が無いのなら…全てぶち壊す」

ダン、ダンッ

雨宮は腕をクロスさせ、二丁の拳銃で機関銃を破壊した。

「鈴音ッ！無事か！！」

バァンッ

王生がショットガンで機関銃を破壊し、雨宮へと近付く。

「…ようやく気付いた、私の本当の気持ち」

ダン、ダダンッ

雨宮は二丁の拳銃を縦横無尽に展開させ中村の用意した銃兵器を次から次へと破壊していく。

素早く、的確に、寸分の狂いも無く、それは展開された。

「光一！！」

「…なんだよ」

「必ず…二人で生きてここを出るぞ！必ずだ！！」

「…ったりめーだ！！」

バァンッ

王生は嬉しそうに微笑むとショットガンで残る最後の機関銃を破壊した。

「貴様で…最後だ！！」

雨宮が二丁の拳銃、その銃口を中村に向けたその瞬間。

「調子に乗るなよ！小娘がぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

バァンッ

中村のライフルが雨宮の頭に目掛けて発射された。

「ッ！！」

弾丸は…雨宮の頬をかすり、天井に直撃した。

「このわしが…この距離で、外すか」

カラン、カランコロンッ

直後、中村は自分の真下に向けて筒状の何かを落とした。

「なっ…！！」

雨宮は一瞬、それを爆弾だと考えたが。

プシュ～ッ

筒状のそれは辺りに煙りを噴出した。

「煙幕弾…か」

「鈴音！これは…」

「気をつけろ…、何かしかけて来るはずだ」

雨宮と王生は自然とお互いに背中を合わせる状態になった。

「ふっ…まさかお前に背中を預ける事になるとはな」

「そりゃこっちの台詞だ、あんたの背中を預かるなんてな」

軽く冗談を言い合いながらも警戒はとかない。

やがて煙りが消えていった時。

中村の姿はそこには無かった。

「なっ…、どこに」

入口に誰かが通っていった気配は無かった。

「光一」

雨宮は前を歩くと部屋の奥にある、下へと続く急な階段まで王生を呼んだ。

「…追い詰めた、って所か」

階段の一番下には一つの扉があった。

そして…その扉は開いていた。

――

――

ゲームの行われる要塞とも呼べる建物。

その中心部とも言えるのがこの部屋だった。

そこに置いてあるコンピューターは建物内に無数に設置された防衛

兵器の管理出来る。

そのコンピューターの前で中村は立ち尽くしていた。

「…潮時か、本当はもっと前からわかっていた事じゃが」

先程、雨宮に向けて撃ったライフルの一撃。

それは雨宮の頬をかすっただけで終わったがそれが今の中村に限界を教えていた。

「ついにはあの距離を外すか…、歳は…とりたく無いものじゃ」

限界を知った中村は…全ての準備を終えて立ち尽くしていた。

自分が勝利する為の準備を終えていた。

「追い詰めたぞ…、ゲームマスター」

「これで…お前も終わりだ」

階段を降りて王生と雨宮が部屋に入ってくる。

二人の持つ銃はどちらも中村を狙っていた。

「一足、遅かったの…」

その状況で…中村は笑った。

「わしの…勝ち、じゃ」

笑いながら…、中村の口から血がその皮膚をつたっていく。

「なっ…、お前」

王生と雨宮が中村に向かうよりも早く。

「ぐふッ…」

ドサッ

中村は口から多量の血を吐き出すと崩れるように床に倒れた。

「何が…どうなってんだ」

「…毒薬を飲んだな」

状況の理解が出来ない王生に雨宮がそう答えた。

「クッククク…わしの…勝ち、じゃ、見るが…いい」

中村は苦しそうに血を流しながら震える指先でコンピューターを指差した。

「その…こんぴゅーたーは、この建物全体の…防衛兵器が…コントロール、できる」

「これが…」

つまり、このコンピューターを操作して防衛兵器が作動しないようにすれば首輪をして侵入禁止エリアに入っても問題はなくなる。

首輪を外す術が見つかっていない王生の頼みの綱でもあった。

「こんぴゅーたーを…ロックした、これで…防衛兵器を…止める事は出来…ない」

「な…なんだと」

雨宮が急いでコンピューターに駆け寄り、操作を始めた。

「クッカッカ…無駄じゃ、確かにわしの命運は尽きたかも知れぬが」

中村はそんな雨宮の行動を嘲笑うと。

「お前達の命運も…尽きた」

ピー、ピー、ピー。

【現在、その操作にはロックがかかっています、パスワードを入力し、ロックを解除して下さい】

コンピューターの画面に映し出された画面。

「…中村、パスワードを…パスワードを言え！！」

雨宮は乱暴に中村の服の襟を掴むと睨みつけた。

だが…その表情は焦りと恐怖に満ちている。

「クッククク…いい表情じゃ、最後にそんな表情を見れて満足じゃよ…、ぐふぅッ！！」

中村は血を吹き出しながらも笑い。

「では…先に行くとするか、どうせお前達もすぐに来る事になる…が、な」

最後にそう言い、目を閉じると、その目が開く事は無かった。

「死ん…だ」

第５３話：ゲームに巣くい続けた者（後書き）

【おまけ小説】

《あつい》

三時間目。

―終了後の休み時間。

国枝「王生ぃ、この私と勝負しろぉ！」

王生（またかよ…これで今日三度目じゃねぇか）

もちろん全勝だが。

国枝「今日は暑いからなぁ、きゃっはははは！先に暑いって言った方が負けだ」

王生「ただでさえ今日は熱いのにてめぇのせいで余計熱くなるじゃねぇか…」

国枝「きゃっはははは！貰ったぁ！王生ぃ！今暑いって言ったろぉ！私の耳は誤魔化せないぜぇ！！」

王生「熱いって言ったんだよ、ディスプレイの画面見ろ、漢字が違うだろうが」

国枝「なっ…」

王生「ちなみにお前はしっかりと暑いって言ったけどな、俺に指摘した時」

国枝「ぐぬぬ…、これで勝ったと思うなよ！！」

走り去る国枝、正直訳がわからん。

日向「仲が良いですね」

王生「なぜお前がここに居る？」

日向「こまけぇ事は良いんです、どうやら国枝さんからの好感度が高いようですね、ずば抜けて」

王生「え？マジ？つーかさっきからあいつやられてばっかだぞ」

日向「それでグングン急上昇中のようです」

王生「単なるドMじゃねーか！！」

日向「このままじゃ国枝ルート決定ですね」

王生「！？」

第５４話：隠しボス（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：９．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：３．２：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：Ｅｒｒｏｒ：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．７：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：Ｄｅａｔｈ：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：Ｄｅａｔｈ：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：９．２：マッチさん

第５４話：隠しボス

「くそ…、やはりパスワードが無いと駄目か」

雨宮はコンピューターを操作し、なんとかロックを解除しようとするが肝心のモニターに映し出された映像には変化が無い。

「パスワード…、中村の歳を考えれば…電話番号か？」

ぶつぶつとそう呟きながらコンピューターを操作する。

ちなみにパスワードの画面には３２文字打ち込める欄があった。

それでも最大に打ち込める欄が３２文字なのであってパスワードが３２文字の構成かはわからない。

１８文字や２４文字なのかもしれないのだ。

おまけに数字だけでなくアルファベットも使うっぽい。

「もしくは…誕生日、有り得る」

「…ねーよ、暗証番号じゃないんだから」

―だいぶ余裕が無くなっているな。

焦って正確な判断力の無い雨宮を見て王生は少し嬉しくもあった。

自分の為に必死になってくれているその姿に。

「…そろそろ親殺しの天罰でも下ったか」

自嘲気味にそう呟くと王生はコンピューターの操作を雨宮に任せ、一度部屋を出た。

急な階段を上がり、最初に中村と対峙したメインルームに出る。

そこには自分達が破壊したロボットの残骸が転がっていた。

「…確か、ここら辺に」

王生が目をつけたのは部屋の済みに置かれた小さな倉庫だった。

中を開けると中村が使用していた機械兵器のメンテナンスに使うような道具が置いてあった。

その他にもペナルティに使うであろう道具も置かれている。

妙な丸い機械のボールや投げ槍、砲丸。

更には観月を殺したペナルティ、粉塵爆発に仕様されたであろう白い粉も固まって置かれている。

ツールボックスもいくつか見つけた。

王生は願うようにツールボックスに書かれた表記を確認していく。

だが…侵入禁止エリアに侵入可能になるツールボックスは…破壊されていた。

恐らくは中村が破壊したのだろう。

「まぁ…これくらい…やってくれると思った」

けれど現実にそれを見れば落胆はデカいものだ。

そこに王生の求めていた物は無い。

王生は倉庫の扉を閉めると辺りを見渡した。

「あ…」

そしてひどくあっさりとそれを見つける。

テーブルの上に置いてある中村が外したであろう首輪だった。

灯台元暗しとはよく言ったものだ。

ＰＤＡは中村が持っているはず。

王生は首輪を取ると雨宮の所へと戻る。

「いっそ壊して…、阿保か、それじゃあ防衛兵器は止まらない」

雨宮はまだコンピューターを操作していたが進展はなさそうだった。

「…中村のＰＤＡは」

王生は既に動かなくなった中村の身体からＰＤＡを入手する。

ピロリン、ピロリン、ピロリン。

「…なに？」

ＰＤＡには通信が入っていた。

おまけに相手はカジノの主催者側と来ている。

「鈴音…、組織から連絡が来た」

「…なんだと」

雨宮もコンピューターの操作を止め、王生の元に駆け付けた。

『中村は死んだか…』

ＰＤＡの通信相手も観月のカメラで状況を見ていたのだろう、何があったか知っていた。

「…あんたは誰だ？」

『はっはっは、そこにエースのエージェントが居るのにわざわざ名を名乗る馬鹿も居まい』

相手は冗談めかしく笑う。

落ち着き払った声。

組織としてもかなり上の立場、もしかしたら今回のゲームの元締めなのかもしれないと王生は感じた。

だが恐らく相手はこの建物内には居ないだろう、手のだしようが無い。

「…俺達の自己紹介はいらないな、ちょうど良い、俺もあんたには聞きたい事があった」

『…なにかね？』

「あんたらは不当にプレイヤーを殺したりしない、そう言っただろ」

『あぁ、そうだ』

その確認をとって王生は少し安心した。

「ゲームに勝利しても、あんたら後から殺したら意味が無い、そんな不条理な事は当然やらないんだろ」

連中にはもう雨宮がエースの一員だというのは知られているだろうが、それでも王生はあえて雨宮の名を伝えなかった。

エースの雨宮がゲームの勝利者となっても無事に帰れるかどうか。

王生の一番の心配はそこにあった。

『…ゲームにはゲームのルールがある』

「…何？」

『ゲームの勝利者となったならば君達の安全を約束しよう』

その言葉に王生は一息ついた。

「証人は例によってこのゲームを見物してる客達だぜ、不正がバレりゃあんたらのカジノの信用もがた落ちだろ」

『あぁ、だが…これはあくまでも”なったならば”だ、見た所…君達はまだ首輪をしているようだし』

状況を全てわかっているうえでの白々しい口ぶり。

「防衛兵器を止めるパスワードを言え」

たまらず雨宮が横から声をかけた。

その目は鋭く、ＰＤＡを睨みつけている。

『それは出来ない』

ＰＤＡの相手からのその言葉は王生にとって予想通りだった。

『残念だが、このゲームの勝利条件にはゲームマスターを殺す…は無い』

ゲームマスターやサブマスターを殺したってゲームをクリアした事

にはならない。

本来ならばその後に建物内の防衛兵器を停止させる事が可能という話しだったが中村によってそれも不可能となった。

『それに…ここで防衛兵器が停止させられ、建物が沈黙…なんて展開、我々が許さないさ』

「ゲームマスターに変わって今度はあんたらが俺らの相手になる…ってか？」

『まさか、それでは我々の不正な介入となってしまう』

相手はまた冗談めかしく笑う。

『ナンバー【A】、君が勝利者となりたいなら、解除条件通りに動けばいい』

「…解除条件通りにねぇ」

つまり【Q】の所有者を”殺害”する。

この殺害というのがどうしようもないネックだった。

だが…上手く物事を運ぶ方法ならばある。

王生は国枝を生かして、おまけに手錠で拘束している。

ならば【Q】のＰＤＡを見つたならば国枝に持たせ…、殺す。

そんなやり方もある。

「結局今まで【Q】のＰＤＡの持ち主には会えていない、すでに死んでＰＤＡだけ置き去りって事もあるだろ」

だが…そんなやり方はしたくない。

『【Q】のＰＤＡの所有者は…今、この階に居るよ』

「なにッ！！」

今まで現れなかった【Q】のＰＤＡの所有者。

そういえばゲームマスターやらに意識を集中していたせいで他の一般プレイヤーの事はあまり考えていなかった。

『ゲームはまだ終わっていない…、君達にも付き合って貰おうか』

「…裏があるな」

雨宮が腕を組んで静かにそう言葉を出した。

『そうだな…、ラスボスであるゲームマスター倒した君達にはヒントを与えようか』

「ゲームマスターがラスボスなら倒しゃエンディング…、ハッピーエンドが普通だろ」

王生が通信相手がゲームマスターをラスボスに例えた事に違和感を感じてそう返す。

『くっくっく、最近のゲームには隠されたイベントや隠しボスがつきものだよ、君ぐらいの歳ならわかるだろう』

「なるほどね」

王生は素直に納得した。

ある条件を満たせば、例えばラスボスを倒せば出て来る隠しダンジョンや隠しイベント。

ただ…それに出てくる隠しボスの強さはラスボスとは一線を成しているのが普通だが。

「？？？」

話しについていけず頭の上にハテナマークを沢山並べている雨宮であったが王生はスルーした。

「それで…ヒントって？」

『隠しイベント、そのテーマは…歪んだ親子愛、とでもいっておこうか』

「ッ！！貴様ら…まだ！！」

雨宮が激昂するのも無理は無い。

親子愛。

かつて雨宮達家族がゲームに参加させられた理由は組織によるそのイベントの為だった。

組織は参加プレイヤーを選考する際にそれぞれのプレイヤーの役割を考えるはずだ。

例えば藤木のようなゲームが真実だとわからせる為に人柱にする為に選んだり。

あるいは国枝や新城のように好戦的でゲームを引っ掻き回す為に選んだり。

ゲームを盛り上げるイベントの対象者として選んだり。

「だが…」

王生の知る限り、このゲームに参加している親子…なんて居なかった。

『では…ゲーム終了後に君達が生き延びている事を祈ってるよ』

「「嘘つけ」」

王生と雨宮が同時にそうハモると通信相手は笑いながら通信を切った。

「【Q】のＰＤＡ…か」

その所有者がこの階に居る事は一先ず置いておくとして。

「まずは一つずつ潰していこうぜ」

「だが…お前の首輪は」

雨宮が何か言う前に王生は雨宮の目の前に向けてある物を出した。

「それは…」

「とりあえずまず一つだ、一辺に全部やろうとしてもごちゃごちゃになるだけだしな」

ＪＯＫＥＲのＰＤＡ。

【２】のＰＤＡの雨宮の解除に必要となる。

「国枝が持っていた、これで鈴音の首輪が外せる」

「だが、お前の首輪はまだ…」

「言っただろ、一つずつ潰して行くって、それに鈴音が首輪を外さないと次に進めない」

ＰＤＡは中村の物を入れて五台揃っている。

これで日向の【Ｋ】の解除条件も満たしたのだ。

日向と雨宮が首輪を外せば今王生が持つ中村の首輪と合わせて三つ。

これで夏喜の首輪も外せる。

中村が【6】のＰＤＡ、つまりＪＯＫＥＲが五回以上使用されている、だったのでＪＯＫＥＲを破壊する事に気兼ねもなくなった。

これで…王生以外の仲間の首輪は全て外せる。

「しかし…」

「鈴音の首輪を外した姿を見たい」

まだ何か言いたげだった雨宮に王生はそう答えた。

「…なっ！！」

顔を真っ赤にした雨宮を見て王生は苦笑した。

―あと一押しだな。

「俺の事は後からでいいんだよ、幸い時間はまだあるんだし」

「わかった…」

雨宮はＪＯＫＥＲのＰＤＡに拳銃を向けると。

ダァンッ

引き金を引いて破壊した。

「これで…解除条件はクリア、か」

後はＰＤＡを首輪に接続して外すだけ。

雨宮がＰＤＡを首輪に接続すると豪華なファンファーレが鳴った。

『おめでとうございます、あなたは見事にＪＯＫＥＲのＰＤＡの破壊に成功し、首輪の解除条件を満たしました』

カランッ

ひどくあっさりと首輪は外れ、床に落ちた。

「ど…どうだろうか？」

首輪を外した雨宮は顔を赤らめながら恥ずかしそうに王生に問い掛ける。

「え？何が…」

一方の王生は雨宮が首輪を外した事に安心しきっており、その首輪を拾う為にしゃがみ込んで下を向いていて雨宮を見ていなかった。

「光一の…馬鹿ぁッ！！」

「うぉっ！！」

―――

「いい加減機嫌直してくれよ…」

「知らないッ！！」

「…子供かよ」

そういえば雨宮の精神的な成長は止まっているんだった、と王生は頭をかいた。

「そもそも光一は乙女心がわかっていない」

「乙女って歳じゃないだろ、乙女って」

「うっ…」

グサリときたのか雨宮はうぐぐとうなった。

「あ、いや、悪い！鈴音は乙女だ、うん」

「…どの辺が？」

―何?どの辺が乙女らしいって?日本語?

だが期待するように自分をジーッと見つめる雨宮に王生は必死に答えようとした。

「…胸?」

見つけた答えを言った瞬間に王生は気付いた。

これは地雷だ。

胸が乙女らしいって…遠回しに貧乳と言ってるようなものだし。

「胸…?そ、そうか、心って事…か」

雨宮は自分の胸に手を当てて目を閉じる。

「はっははは!」

その仕草はとても可愛らしく思えたので王生は笑った。

「…どうして笑う?」

「いや、乙女だな~って」

「なっ…何を馬鹿な事を、!?」

ふと雨宮が立ち止まり、鋭い目で辺りを見渡した。

「…どうした？」

「誰か…居る」

「誰か？」

通路の先、曲がり角に王生と雨宮は視線を向ける。

そこに居た人物は。

「…待っていたぞ」

「柳！？なぜお前が…」

新城によって侵入禁止エリアへと落とされたはずの柳がそこに居た。

「鈴音、エースの任務は完了したのか？」

「あ…あぁ、ゲームマスターもサブマスターももう死んだ」

「…そうか、ではペナルティとなる防衛兵器の停止にも成功したのか？」

「いや…、ゲームマスターがコンピューターをロックしたせいで防衛兵器の停止は出来なかった」

「…そうか」

雨宮と柳が話している間、王生はぐるぐると頭の中で様々なキーワードが回っていた。

それは今ここで柳の姿を見た瞬間に脳が異常を知らせるようだった。

一階で殺されていた少女。

日向には手をださなかった藤木殺しの犯人。

エースの隠し部屋から無くなった侵入禁止エリアに侵入可能となるＰＤＡ。

侵入禁止エリアへと落ちた柳。

観月が最後に言おうとした…慶吾を殺した犯人。

通信相手が言っていた歪んだ親子愛のイベント。

柳の死んだ娘とそっくりな日向。

日向の持つ【Ｋ】と柳の持つ【９】のＰＤＡ。

【９】の解除条件、自分以外の全プレイヤーの死亡。

これらのキーワードは一つ一つは些細な事でりまるでパズルのピースのようだった。

「…馬鹿だ、俺は」

だがそこから王生が導き出した”解”は酷く絶望的で最悪のものだ。

第５４話：隠しボス（後書き）

【おまけ小説】

《そんな選択肢で大丈夫か？》

王生「チェンジで」

日向「いえ、そんなの無いです」

王生「つーか国枝ルートってなんだよ！是非とも回避したい！！」

日向「では国枝ルートを回避する為にギャルゲーっぽい選択肢システムを導入しましょうか」

――

――

王生「ってな事を日向は言ってたが、大丈夫か？」

国枝「Ｗｉｋｉるみぃいいいいいい！勝負だぁ！！」

王生「Ｗｉｋｉるみ！？と、とりあえず日向の言葉が本当ならここで選択肢が…」

【国枝が勝負したそうにこちらを見ています、勝負しますか？】

［はい↑］
［いいえ］

王生「え？え？ぇぇぇぇぇぇぇ！！」

ギャルゲーっぽい選択肢ってか…これ、ドラクエっぽい選択肢じゃねぇか！！

王生「と、とりあえず…」

［はい］
［いいえ↑］

国枝「ふざけるな！私との決着以上に大切な事等お前には無いはずだ！！」

【国枝が勝負したそうにこちらを見ています、勝負しますか？】

［はい↑］
［いいえ］

王生「……」

［はい］
［いいえ↑］

国枝「ふざけるな！私との決着以上に大切な事等お前には無いはずだ！！」

【国枝が勝負したそうにこちらを見ています、勝負しますか？】

［はい↑］
［いいえ］

王生「完全にドラクエだ！これ！！」

第５５話：実力者（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：９．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：３．２：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：１０．８：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．７：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：Ｄｅａｔｈ：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：Ｄｅａｔｈ：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：３．４：マッチさん

第５５話：実力者

『少年、覚えておくといい、夜明け前が最も暗いのだという事を』

王生の頭の中にかつて柳がいった言葉がよぎる。

ゲームマスターはもう居ない。

だが――――。

「……」

王生は静かに…ゆっくりと柳に向けてショットガンを構える。

「鈴音…、そいつから離れろ」

「光一…？」

雨宮は日向が柳の娘とそっくりなのを知らない。

「そいつは…敵だ！！」

王生が雨宮に向けてそう叫んだ瞬間。

「ふっ…」

王生の視界から…柳の姿が消えた。

「なっ！？えっ―」

王生が次に柳の姿を確認した時、その姿は自分のすぐ目の前だった。

バァンッ

王生は反射的に思わずショットガンの引き金を引くが柳の腕はショットガンの銃口をいなしていた。

軽く、最小限の動作。

「光一！！」

「ぐっ…」

王生が次の行動に取ろうとするよりも先に。

「遅いな」

ゴッ

王生の身体は柳に掴まれると壁へと叩き付けられ。

「がっ…」

一瞬、王生の意識が遮断されると同時に。

チャッ

柳の拳銃が王生に向けられる。

「柳ッ！！」

同時に雨宮が柳に向けて拳銃を構える。

ブォンッ

柳は王生の身体を壁から雨宮へ向けてぶん投げた。

王生の身体は酷くあっさりと柳の力によって飛ばされ、雨宮を巻き込むようにして倒れた。

「痛つ…」

「！？、光一！横に飛べ！！」

雨宮は王生の後ろにこちらに向けて拳銃を構える柳を見て王生を真横へと突き飛ばした。

「ふっ！」

そして自身は柳へと向けて二丁の拳銃を構える。

「柳…、これは何のつもりだ？」

「残念だが…、ここで死んで貰うよ」

雨宮の言葉に柳は酷く淡泊にそう答えた。

「日向の為か？」

ようやく意識を取り戻した王生が柳へとショットガンを向ける。

「……」

柳は答えない。

ただ静かに、落ち着いた様子でそこに居る。

「光一、下がってくれ！！」

雨宮が一度その場から後ろへ飛んで体制を立て直すと改めて二丁の拳銃を柳へと向ける。

ダンッ

だが一発目の銃声がなった時には柳はすでにその場に居なかった。

柳は斜めに飛んで雨宮に近付くと同時に銃弾をかわしていた。

「ッ！」

雨宮はすさかずもう一丁の拳銃を柳に向ける。

ダンッ

放たれた銃弾、柳はわずかに身体をひねるとそれをかわす。

柳と雨宮との距離はすでに近い。

雨宮はさらに柳に拳銃を向けるが、柳は雨宮の背後へと回った。

「くっ…」

雨宮は瞬時の判断で柳の背中に自分の背中をつけた。

雨宮のとっさの判断、その理由は。

「背中は人にとって最大の死角となる」

「！！」

「こうして背中合わせになればお互いに攻め手を失う」

柳が雨宮の行動を見透かしたようにそう答えた。

「…！」

雨宮と柳はお互いに先手を取ろうとその場で背中合わせのまま右へ左へと回った。

「忘れたか鈴音、お前に戦い方を教えたのは私だ」

ヒュッ

柳は素早く、そして鋭く、雨宮の背中へ肘打ちを放つ。

ドゴッ

「ッ！！」

鈍い衝撃。

同時に背中への痛みに雨宮が顔を歪ませた。

「クソッ！！」

王生がその二人へと向けて駆け出した。

ショットガンでは雨宮を巻き添えにする可能性がある為、その手にはナイフを持っている。

ブンッ

だが王生のナイフによる突きは空を切った。

柳は瞬時にナイフをしゃがみ込んでかわしていた。

「まだだ！！」

王生はしゃがみ込んだ柳に対してナイフで切り付けた。

ブォンッ

だがそれもかわされる。

それでも王生は止まらず、次々とナイフを柳に向けて振るがことごとく避けられていく。

「随分と修羅場をくぐったか…、実戦経験が増したな」

王生の追撃を避けながら柳は余裕のある声でそう声に出した。

「だが…、まだまだ足りんな」

「ふっ！」

そこに雨宮も二丁の拳銃を手に柳へと駆け出した。

ダァンッ

放たれた銃弾を柳が身体をひねって避ける。

それを機と見た王生がナイフで切り付けようとするが柳は軽くあしらうように王生の手をいなした。

雨宮と王生の二人による猛打。

ナイフと二丁の拳銃による猛打。

だが、柳には当たらない。

「くっ…なら」

王生はナイフからショットガンへと切り換えた。

広範囲に弾丸を放つショットガンならば柳だって簡単には避けられない。

最初にショットガンを王生が撃っ時に柳が強引に銃口を変えさせた

のもその為だろう。

「鈴音！避けろ！！」

雨宮に向けてそう叫ぶと王生はショットガンの引き金を引――。

「待っていたぞ」

その瞬間、狙いすませたように柳の拳が王生の顎をかすめた。

ぐにゃり…と王生の脳が揺さぶられる。

「あ…ぎっ！」

何が起きたか…それすらも理解が出来ない。

まともに立っていられなかった。

手にあったショットガンの感覚がなくなった。

それはいつの間にか柳の手へと移り変わっている。

「くっ！！」

ダァンッ

王生が膝をついたと同時に雨宮が柳へと拳銃を発射した。

柳はしゃがみ込んで拳銃をかわすと同時にくるりと一回転して雨宮の足を払った。

「、、。」

バランスを崩され、雨宮の身体が床へと倒れる。

そこから柳がショットガンを向けるのに一秒もかからなかった。

「……」

脳が揺さぶられ、まだ動く事の出来ない王生であったが実感していた。

―次元が違う。

王生と雨宮の二人掛かりでさえ、柳にはまだ余裕があった。

強いとかそんなレベルではない。

これが出会った時からずっと未知数だった柳の実力。

「そちらの負けだ」

柳がショットガンの引き金に指をかける。

―死ぬ。

王生がそう考えていた時。

ダァンッ

通路に反響する銃声。

発生元は王生でも雨宮でも、そして柳でもなかった。

三人とは離れた距離からの銃声。

狙撃。

柳は身体を反ってそれをかわしていた。

―誰だ…？

狙撃者が誰だかはわからない。

だがこの千載一遇の好機を見逃す訳には行かなかった。

王生は腰に刺していた拳銃を引き抜いて柳の方へと振り返る。

ふと見れば雨宮も同じように二丁の拳銃を柳へと向けて構えていた。

ダン、ダァンッ

ほぼ同時に発射された銃弾はわずかに柳の頬の横を通っていく。

まるで弾道を見透かしたようにかすりもしない。

ダァンッ

二発目の狙撃に柳はその場から後ろへと下がった。

「仕掛けるぞ！光一！！」

「あぁ！！」

雨宮と王生が尚も食い下がって照準を柳へと合わせる。

ダンッ、ダンダンッ

王生と雨宮による銃撃、そして突如乱入してきた狙撃。

三人がそれぞれに、次々と、時には同時に、時には移り変わりに柳に向けて攻撃を仕掛ける。

それでも柳は順々に冷静に一つ一つに的確に対応していく。

三つの銃弾は柳に触れる事無く交差した。

「くっ…」

王生が続けて拳銃を撃とうとした瞬間だった。

ダァンッ

狙撃主から発射された銃弾は王生の真横をすり抜けた。

「！！」

―俺は何を勘違いしている。

その事が王生に一つ、新たな危機感を与えた。

正体のわからない狙撃者が乱入した事で一見すると状況は三対一になったように見えた。

だが実質は違う。

この狙撃主が敵か味方かがわからない。

ただ日向や夏喜では無い事は確かだった。

ふと考えればすぐにわかる解だった。

狙撃主は王生や雨宮にも何の遠慮もなく柳を狙っているのだから。

流れ弾が当たる事も考えていない狙撃。

状況は二対一対一なのだ。

「鈴音！一旦引くぞ！！」

王生がそう叫んで後ろへと跳ぶ。

「させんよ」

だがそれと同時に柳も王生の方へと跳んだ。

ヒュッ

空を切るかのような素早い蹴りが放たれる。

王生はそれを腕を使って防御し。

「受けるな！避けろ！！」

雨宮が叫んだ時には遅かった。

ドゴッ

「ッ！！」

ハンマーで思い切りぶん殴られたような衝撃に王生の表情が歪む。

王生の身体はそのまま後ろへと吹っ飛ばされた。

「光一！！」

雨宮はすぐに王生の所へて駆け出した。

「ずいぶんと甘くなったものだ…」

その雨宮に向け、柳がショットガンを構えた。

「う…ぐ、ぁ」

王生は痛みにこらえながらも柳のその姿を睨むように見つめた。

―このままじゃ鈴音がやらろる。

瞬時に王生はＰＤＡを取り出した。

それは王生自身の物では無く、中村の持つゲームマスターのＰＤＡであった。

王生は痛みに震える身体を必死に押さえ込み、ＰＤＡを操作した。

王生の操作した機能はただ一つ。

ガシャンッ

シャッターが王生と雨宮、そして柳との間に落下した。

「ハァ…はぁッ」

―助かった。

王生がその事を確認し、ようやく一息ついた。

これで僅かながら時間が稼げる。

そう…僅かながら、だ。

「…どうなっているんだ」

雨宮は状況が理解出来ず、混乱していた。

「柳は侵入禁止エリアに落ちたはずだ…、それは私達の誰もが見ていたはずだ」

「…確かにそうだ、柳は落とし穴によって下の、侵入禁止エリアに

落ちた」

王生自身、その瞬間をはっきりと覚えている。

「だが…その全てが奴の計算だった」

王生は雨宮にそう答えると狙撃者の居る方を見つめた。

そこから、誰かがこちらに向けて歩いてくる。

その手には狙撃用のライフル銃が握られている。

「俺もそこら辺を詳しく聞きたいねぇ、ルール通りなら、奴はあの時、死んだはずだから」

屈託の無い笑みを浮かべ。

新城　渉がそう呟いた。

第５５話：実力者（後書き）

【おまけ小説】

王生「…駄目だ、俺は国枝を回避出来ない」

結局勝負するハメになってしまった。

…勝ったけどさ。

王生「このままじゃ国枝ルートにいっちまう…」

日向「だったら国枝さん意外の人の好感度を上げれば良いじゃないですか」

王生「他のって…他の奴も居るのか！！」

日向「何を言ってるんですか、ほら、あそこで机に顔を埋めて一生懸命寝た”フリ”しているのは藤木ですよ」

王生「あぁ…人がせっかくつっこまないでいたのに！だがこれで何とか…」

国枝「いくるみぃ！どっちが先に弁当を食べ終えるか勝負だぁ」

そう言いながら国枝が弁当を持ってこっちに来た。

王生「こっちくんな」

国枝「べ、別にお前と一緒に弁当を食べたいとか、そんなんじゃないんだからな！勘違いすんなよ！！」

王生「何だその無駄なツンデレ！！」

慶吾「お前ら仲良いな～」

王生「慶吾！？お前…何でここに」

慶吾「何でって…おまけ小説だから？」

王生「身も蓋も無いって！！」

慶吾「お前らそんだけ仲良いんだし…、もう付き合っちゃえよ」

王生「……」

ドゴッ

慶吾「何故殴る！！」

王生「うるせぇ！そんだけ言うならお前が付き合えよ！！」

慶吾「何言ってんだよ～、だって俺には…さ」

唯「慶吾さん～、お弁当作って来ましたよ」

慶吾「…なっ☆（ドヤッ）」

王生「ふんっ！！」

ドゴッ

慶吾「何故蹴る…」

王生「何この差!!」

挿入話Ｆ：彼女の戦い

「なんかこうしてっとさ、思い出さねぇか？夏喜さんよ」

新城は入口を封鎖するように立っていた。

「…何をよ？」

新城に言葉を返す夏喜の声は奮えていた。

当然と言える。

ここには雨宮も王生も居ないんだから。

「俺らが最初に会った時の事だよ、こんな感じで俺が部屋に入って来たろ」

「…そういえばそうね」

この建物で夏喜が最初に出会ったのは新城であり、新城が最初に出会ったのは夏喜であった。

「あの時はあんたの事をよくわかってなかったわ」

「ククク…嫌われてんなぁ」

新城は肩を竦めて笑う。

「さぁて…俺がここに来た訳を言う必要は無いだろうなぁ」

新城は入口から動かない。

その行動は夏喜と日向の逃げ場を潰している。

「……」

それがわかっていた夏喜は逃げようとせずに新城を睨み付けていた。

「へぇ…、逃げても無駄って事がわかってんのか？ちったぁ成長してんな」

「…おかげさまでね」

逃げ道は封鎖されている。

だとすれば夏喜の取るべき手段は一つだった。

新城と戦い、倒す事。

この階まで来たのだ、夏喜だって拳銃は持っている。

「夏喜さん…」

後ろで日向が不安気な声をあげる。

「大丈夫…大丈夫だから」

日向に、そして自分自身に言い聞かせるように夏喜は呟いた。

雨宮も王生も居ない今、

日向を守らなければならないのは自分なのだ。

そして守る為には新城を倒さなければならない。

以前王生が手強く、頭の良いと言っていた新城を。

「……！」

―手強く…頭が良い？

夏喜がハッと思い出したように顔を上げる。

そう…新城は頭が良い。

それはゲームが開始されてから何度か煮え湯を飲まされていた夏喜自身が一番良くわかっていた。

国枝のように狂った訳では無い、ある意味最も純粋にゲームに参加しているのが新城である。

だったら新城の最も優先している行動は”殺人”では無く”首輪の解除”にあるはずだ。

「ねぇ…新城さん」

夏喜は決意した。

戦う事を。

―私は私なりに…出来る事をやるんだ。

「あん…？もしかして命乞いか」

「…一つだけ聞かせてくれる？」

夏喜は後ろに居る日向を安心させるようにしゃんと胸を張った。

「夏喜さん？」

―光一君、雨宮さん。

「日向ちゃん…見ててね」

夏喜は日向に向けてニコッと笑いかけた。

―これが私の戦い方！！

「あなたは私達を殺したら…首輪を外れるの？」

「あん？」

新城にとってそれは予想外の問いであった。

新城のＰＤＡの解除条件は【８】、つまりＰＤＡ五台の破壊。

自分のＰＤＡは当然使えないとしてそうなると現在、新城は御子柴の【５】のＰＤＡしか持っていない。

ここで夏喜と日向を殺してＰＤＡを奪っても後二台足りない。
新城は一刻も早く首輪を外して下の階へと”逃げたかった”。
「それを聞いてどうするつもりだ？」
「いいから答えて」
夏喜の表情は真剣だった。
当然だ、ここが夏喜と日向にとっての生命線といえた。
「…外れねぇよ、残念ながらな」
対する新城は夏喜の真意を知る為に素直にそう答えた。
「だったら…ねぇ、私達と取り引き、しない？」
夏喜は新城に悟られないように表情を崩さぬまま、心の中でホッと一息ついた。
「取り引きだぁ？ここまで来て協力しようって何を言ってんだか」
新城は夏喜の言葉に呆れたようにそう返した。
結局、形は違いども命乞いと同じだ…と新城は考えた。
ようするに自分達は何か…、新城にとってはＰＤＡとなるが、を差し出すので見逃して下さい。

そういうふうに捉える事が出来る。

「悪いが…てめぇらの夢物語りに付き合ってる程俺も暇じゃねぇんだよ」

「…私達二人を殺したあなたを雨宮さんと光一君がほっておくと思う？」

「！？」

新城の言葉の直後、夏喜は一秒の間も空けず、そう返した。

―ごめんね、二人共、こんな形で頼っちゃって。

夏喜は心の中で二人に謝ると言葉を続ける。

「確かにあなたは私達二人を殺す事で首輪の解除には近付けるかもしれない…、でもその後、果たしてそう簡単にいくかしらね」

新城が二人のＰＤＡを手に入れても首輪の解除には届かない。

そして夏喜と日向が殺されたと知れば雨宮と王生が黙っているはずが無かった。

「くくく…」

夏喜の話しを聞いた新城は小さな笑みを浮かべる。

「くっはははははははははは！！」

それはやがて大きくなり、新城は高笑いを始めた。

「な…何？」

「いや、いつまで平和主義者やってんかって思っが、この俺を脅そうなんてな、大したもんだ」

新城は笑いをこらえるようにして壁によしかかる。

「だが肝心の二人はどこだ？ここに居ない所を見るとあの二人もあんたらに嫌気がさしたんじゃないのか？」

そして挑発するようにニヤリと笑ってみせた。

「二人はそんな人じゃないです！！」

日向はそんな新城の態度に我慢出来ず、思わず叫んでいた。

「二人共無愛想で非情ぶってますが…、本当は私達さえ切る事の出来ないヘタレです！！」

「日向ちゃん…」

「今だって私達二人の為に首輪とＰＤＡを取りに行ってくれてるんです」

「首輪と…ＰＤＡだと」

ＰＤＡは新城にとって、解除条件に必要不可欠なものだ。

だからこそ、その言葉が出たほんの一瞬、新城の様子が変わった。

「…！」

夏喜はそれをしっかりと確認する。

「はっ！失敗しました…、これでは私達の解除条件がバレちゃいます、えっと…その、首輪とＰＤＡは私の個人的なコレクションで解除条件とは関係無く――」

「いいえ…お手柄よ、日向ちゃん」

慌てる日向の頭を夏喜は優しく撫でた。

新城の解除条件は首輪がＰＤＡに関係がある事。

【Ａ】【４】【８】【１０】【Ｋ】のどれかの可能性が高い。

その内、【４】と【Ｋ】は日向と夏喜の物なので除外出来る。

そして【１０】は恐らく国枝のものだ、それは最初の少女の死体の首輪を作動させた時の流れで想像出来る。

だったら…【Ａ】か【８】

【Ｑ】のＰＤＡの持ち主を探しているら、破壊の為にＰＤＡを集めているか。

そう考えたからこそ、夏喜は一つの賭けに出た。

「話しを聞いてくれたら…私達のＰＤＡを見せてもいいけど」

「それがあんたらと協力する条件ってか？」

「勘違いしないで、ＰＤＡを見せるのはあんたが話しを聞いてくれたら、協力するしないはＰＤＡを見て話しを聞いてくれたらあなたで判断すればいい」

「……」

新城は物事において損得について考えれる男だ。

デメリットの無いこの条件ならば…乗ってくるはずだ。

「いいぜ…、ＰＤＡを見せてみな」

夏喜と日向は頷くと自身のＰＤＡを見せる。

夏喜は【４】のＰＤＡ。

日向は【Ｋ】のＰＤＡ。

二人のＰＤＡを確認した新城は――――。

「くくく…、あっはははははは！こりゃあ大した拾い物だ！！」

声を高らかに上げ、笑った。

「…どういう意味？」

突然の事に日向はビクッと身体を奮わせ、夏喜は警戒する。

「おっと…そんな深読みすんな、あんたらに協力するって事だ、ただし――」

新城は自分の初期配布ＰＤＡである【８】のＰＤＡを二人に見せた。

「そちらのお嬢ちゃんが解除に使ったＰＤＡと同じ物を俺のＰＤＡの解除に使わせて貰う、それが条件だ」

日向の持つ【Ｋ】のＰＤＡ。

その解除条件は他のＰＤＡ５台の収集。

そして新城の初期配布された【８】のＰＤＡは他のＰＤＡを正確に５台破壊する事。

もしも５台の中にＰＤＡのカウントに含まれないｊｏｋｅｒが混ざっていても先に日向が試してくれる。

そして日向の首輪が外れるのならば解除に使った５台は間違いなく本物という事になる。

つまり…新城は日向を使って自身の安全を確保出来るのだ。

「やっぱりあんた…最低ね」

「くっくく、そいつは褒めてんのか？」

夏喜の軽蔑の視線にも新城は動じない。

「私は構わないですよ…、こーいちさん達を信じてますしｊｏｋｅｒなんて混ざりません、むしろ先にＰＤＡを壊されちゃった方が困ります」

「飲み込みの良いお嬢ちゃんだ、将来が楽しみだぜ」

新城は銃を床に落とすと入口から部屋の中央へと移動し、座った。

「さて、せっかく協力する事になったんだ、とりあえずコーヒーでも飲もうぜ」

「あんたって…どこまでも自分勝手なのね」

夏喜はため息をつくとポットに火をつける。

「でも…これでもう誰とも戦わなくて良さそうですね」

日向が少し嬉しそうにしながら手に七味唐辛子を持っていた。

新城もうわべとはいえ協力関係に出来たのだ。

「後はこーいちさん達が帰って来るのを待つだけですね」

そう言いながらコーヒーに七味唐辛子を入れ、新城の前に置いた。

「さぁて…そいつはどうかね」

新城はコーヒーをさりげなく夏喜の前に置いた。

夏喜の表情が少しひきつる。

「そうだな、せっかく協力するんだ、俺の知ってる事も教えてやるぜ」

第５６話：魔法（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：９．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：３．２：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：９：１０．８：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．７：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：Ｄｅａｔｈ：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：Ｄｅａｔｈ：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：Ｋ：３．４：マッチさん

第５６話：魔法

「あのオッサン…、やっぱ生きてたか」

新城が苦々しくしながらタバコに火をつける。

「やっぱって事は…なんか知ってんのか」

「…あのオッサンを落とした位置のすぐ近くな、瓦礫がぶっ壊されてたのよ、階段のな」

一度気絶した新城が目を覚まして目撃したものがそれだった。

積まれた瓦礫で通れなかった階段。

その瓦礫が爆破されたように撤去されていた。

誰かが通った跡。

そしてその誰かは明白であった。

一度下に落ちた柳が…この階に戻って来たのだ

「だが…そこが解せねぇ、奴はただ単に下に落ちた訳じゃねぇ、侵入禁止エリアに落ちたんだ」

ルール通りなら侵入禁止エリアに落ちた柳は防衛兵器に殺されるはずだ。

だが苦々しい新城に対し王生と雨宮はその理由がわかっていた。

「ＰＤＡをカスタマイズできるソフトウェアは知ってるよな、侵入禁止エリアに侵入が可能になるソフトウェアがある」

「…なんだと!?」

「雨宮…、あの部屋から消えた例のソフトウェア」

「…柳の奴が持って行った、か」

これなら柳の生きている説明がつく。

「つまり…だ、柳はわざわざ自分から罠にかかって侵入禁止エリアに行き、そのまま俺達とは別れて行動をしていた、って事だ」

「何の為にんな面倒な事してんだかねぇ…」

「…柳のＰＤＡは【９】」

王生は心の中ですでに本当の答えをわかっている。

だがそれを口に出してしまえば新城が最悪の”切り札”を使う可能性が出てくる。

「【９】、解除条件は自分以外の全員の死亡…、よくんな奴と一緒に行動してたな」

「……」

そこに対してはあまり深くつっこんで欲しく無い所だった。
だから王生は話題を変える事にする。
「柳について詳しく知りたい所だが…、鈴音、何か知っているか？」
「まっ…見た感じ普通のサラリーマンには見えねぇわな」
王生はあんたがそれを言うかと新城に向けて言いたい所だったがスルーしておく。
「本人は何でも屋…って言ってたな」
「言葉通りさ…何でもやるから何でも屋、犯罪請負人…とでもいえばわかりやすいか」
「……」
ため息が出る。
だが同時に尋常じゃない柳の強さについて理解も出来た。
「依頼がありゃ殺人も朝飯前ってか…」
「…そうだな、裏ではかなり有名だ」
柳の強さは先程の戦いで嫌という程わかった。

だったらどうするか？

三人で囲めば簡単じゃないのか？

雨宮も王生も新城も今回のゲームの中ではかなり上位の強さになっている。

だからこそ、雨宮も王生も新城もその案は出さない。

まず三人がそれぞれに銃で攻めるというのが無謀すぎた。

先程が良い例だが、流れ弾に当たる危険性がある。

盾にされたら最悪の展開だ。

だからといって一対一で順番に挑んでも正直いって勝てないだろう。

「……」

王生は柳の真意について探ってみる。

王生の出した結論は酷く単純な物だ。

柳と日向はＰＤＡを交換している。

いや、柳がすり替えたと言った方が正しいのか。

日向の初期配布されたＰＤＡは【9】

柳の初期配布されたＰＤＡは【Ｋ】

それをすり替え、柳は【９】のＰＤＡの所有者として日向を連れ、俺達の前に現れた。

そして一度死んでみせる為に侵入禁止エリアへと落ちる。

もしかしたら柳は王生と戦意を失った雨宮が２階で戸惑っているうちに全ての準備を終えていたのかも知れない。

…或はもっと前からか。

日向は言っていた、一緒に行動している中でも柳は度々姿を消していたと。

その間に…床の仕掛けを調べ、階段の瓦礫を撤去し。

…エースの隠し部屋から、例のソフトウェアを手に入れる。

エレベーターを使えば６階の往復も難しくは無い。

そして…最も重要なのは、何の為にこんな事をしているか。

『だが俺は日向に会った、娘そっくりの少女に、彼女は必ず俺が生きて生還させる』

柳の言っていた事が王生の脳裏に浮かぶ。

日向を生きて生還させるなら…。

日向の首輪を外すならば…。

日向以外のプレイヤーが生きていてはいけない。

だから…柳はわざわざ一度日向を俺達に預け。

…殺して回っていた。

慶吾や藤木。

恐らくは最初に殺されていた少女も。

「そして次は俺達…か」

日向以外の全員を殺したら次はどうするのだろうか…。

考えるまでも無い、自殺するだろう。

そして解除条件を満たした日向のみを生き残らせる。

「…狂ってる」

常人の考えとは思えなかった。

物腰こそ冷静なものであるが柳は間違いなく、この建物の誰よりも精神を病んでいる。

たぶん、妻を娘を失った時からとっくにそうだったのだろう。

そこに娘とそっくりな日向、そして日向のＰＤＡが【９】というのが決定的だった。

柳は日向の為に他の全員を殺し、自殺する。

―歪んだ親子愛。

…そんな事、許されていいものなのか。

「…いいはずがない」

このまま何もしなければ日向の首輪が外れないのは事実だ。

だがそこで納得する事は不可能だった。

第一に王生　光一は怒っていた。

「…なんで強い奴に限ってこうも効率悪い事ばっか考えんだよ」

「光一？」

王生の言葉に雨宮と新城の視線が集まる。

侵入禁止エリアに侵入可能になるソフトウェア…。

それを柳が日向に使ってやれば…、それで済んだはずだ。

「柳と話しをしてみる」

「おいおい、まさか説得する…とか言い出すつもりかぁ？」

「半分はそうだがもう半分は違う、柳の注意を引き付ける」

「無理じゃねぇのか？第一、話す云々より先に撃たれて死ぬぜ」

新城は冗談っぽく指を銃の形にして撃つ仕種を見せた。

「雨宮、仮に俺達三人が銃で柳に勝負を挑んだとして、勝てるか？」

「……」

雨宮は答えない。

先程の仮説通り、銃で戦うには不確定要素が多過ぎた。

一番恐ろしいのは流れ弾による同士討ち。

一発でも柳に当たればいいのだが、それは逆に一発でもこちらが喰らえば一緒なのだ。

「わからない」

だから雨宮はそう応えるしかなかった。

「…そうか、だったら」

王生は不敵に微笑むと拳銃を床に置いた。

「銃は捨て、接近戦ならどうだ?」

「アホか…、ショットガンもったあのオッサンに銃抜きって、単なる特攻じゃねぇか」

銃を捨てた王生達三人がショットガンを持った柳へと勝負を挑む…。

勝ち目があるはずがない。

「だったら柳にも銃抜きで戦って貰えばいい」

「あん?どうやってだよ?まさか私達は銃使わないんでそっちもお願いします、とか言うんじゃないだろうな」

「…ようするに、銃を使えない状況にすればいいんだろ、その方法はある」

王生は一度、柳と話しをしてみたかった。

その為には柳のショットガンを封じ、その上で戦いとなってもきちんと勝てる状況を作らなければならない。

その状況を作り出す策を、王生は既に考えていた。

「準備には時間がかかりそうだ、すぐに取り掛かろう」

その状況を作り出すには”ある物”が必要不可欠だ。

「…どうするつもりだ？」

「新城はともかく…鈴音は知ってるはずだぜ」

首を傾げる雨宮に王生は笑って応える。

「奇跡か魔法でも願うってか？」

「魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやるから」

第５６話：魔法（後書き）

【おまけ小説】

《保健室》

王生「…はぁ」

国枝ラッシュに俺は精神的にかなり疲れていた。

慶吾「どうした？顔色悪いぞ？」

王生「気分が悪いんだよ…」

唯「大変ですね…、保健室に行ってみたらどうですか？」

王生「そうすっかな…」

慶吾「お～い、委員長、コウの奴気分が悪いみたいだから保健室行くって」

夏喜「えっ…、光一君、大丈夫なの？」

王生「予想通りの配役だな」

夏喜「え？何が？」

王生「こっちの話しだよ、しかしまぁ…」

夏喜は大学生ももう卒業するかという歳だ。

そして今来ているのは俺や慶吾の通う高校の制服。

―年齢考えろよ…、まるでいかがわしい店みたいだぞ。

「年齢考えろよ…、まるでいかがわしい店みたいだぞ」

しまった！声に出してしまった！！

恐る恐る夏喜を見る。

「ふふふっ♪」

夏喜は笑顔だった。

口だけ。

ヒュッ

その瞬間、俺の目の前に拳が迫る。

脳では必死に避けようとするが、身体は凍り付いたように動かない。

まるで蛇に睨まれたカエル。

俺の身体を支配する恐怖という感情。

ズガァッ

そして…俺の身体はきりもみ回転しながら宙を巻い。

意識を失った。

―――

――

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

―ん？

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

―え？このこっ恥ずかしい台詞は？

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

王生「う…うわぁぁぁぁぁぁぁあああ！！」

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

王生「何してやがんだ…てめぇ」

観月「ふむん？起きたか？」

今にもカセットテープの再生ボタンのスイッチを押そうとする観月が居た。

ポチッ

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

というか構わず押された。

第57話：真意（前書き）

【シークレットゲームEpisode2、現在のBET状況】

player：card：odds：BET者

王生　光一：A：9．2：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：2：3．2：ナイトホークさん、油桜さん
柳　辰巳：K：10．8：上杉龍哉さん
春野　夏喜：4：5．7：桐島　成美さん
新城　渉：8：3．8：ヴァイスさん
国枝　克美：10：Death：ナージャさん
藤木　洋介：3：Death：無し
？？？：？：Death：無し
藤原　慶吾：J：Death：無し
神北　観月：7：Death：ヤマネさん
中村　真：6：Death：nidaさん
御子柴　徳司：？：Death：無し
速水　日向：9：3．4：マッチさん

第57話：真意

静かだった。

建物の中は驚く程静かでそれでいて不気味だった。

建物の中、一つの部屋。

柳を迎え撃つ準備を終えた王生と雨宮はただじっとその時が来るのを待っていた。

二人の手には銃は無い。

これからの戦いにそれは不要な物だ。

「…今からでも、役割を交代するべきだ」

「ま～だ言ってんのか」

納得のいかない雨宮に王生がため息をついて応える。

雨宮の手にはクロスボウ、王生の手には日本刀。

王生が日本刀での接近戦、雨宮がそれをクロスボウで援護という形になる。

必然、王生の危険が大きい。

「はっきり言うが…、お前が柳に接近戦を挑んでも勝ち目は無い」

「だろうなぁ…」

相手はその道のプロだ。

王生自身、運動神経は高く、そこら辺の同年代の相手に負ける気はしないがそれはあくまでも一般人としてのレベルだ。

世の中には本物の怪物が存在し、それを相手にするとなれば結局、一般人レベル等相手にならない。

本来の適材適所を考えるならばエースで戦闘訓練を得た雨宮が危険の高い接近戦をするべきだろう。

「だが、自慢じゃないが俺はクロスボウを使えない」

だが王生はきっぱりとそう答えた。

クロスボウの技術は王生には無い。

多少訓練すれば扱えるだろうがそんな時間も無かった。

「…頼りになるんだかならないんだかわからんな」

「…悪かったな、頼りなくて」

「頼りにしてるさ…、今回の策、私には思いつかなかったからな」

ふて腐れる王生に雨宮はそう答える。

「…本当は」

王生は一度、目を閉じた。

「本当は、柳に絶対勝てる方法がある」

それは今、この建物内で柳を除けば王生だけが知っている情報だった。

「…何？」

「柳のＰＤＡは…【９】じゃない、【９】は…日向のＰＤＡだ」

それを王生は今雨宮に伝える事にした。

「なん…だと？」

「柳は家族を失っている、その娘は…日向とそっくりなんだ」

王生達が二人に出会う前、恐らくは柳と日向が初めて会った時だろう。

その時、柳は自分のＰＤＡを日向の物とすり替えていた。

「柳の真の狙いは俺達全員を殺し、自殺し、日向を助ける事」

そう、それに間違いは無い。

だからこそ――――。

「つまり…日向を人質にすれば確実に勝てる」

王生は恐る恐る、震える口でそう呟いた。

自分で言って頭がおかしくなりそうだった。

まだ…、今だにまだそんな考えが生まれてくる。

これでは新城と何も変わらない。

王生が何故、新城が居たあの時にその話しをしなかったか。

それは新城がその話しを聞けば必ず日向を人質にするからだ。

「そんな…切り札が、ある」

「光一」

ギュッと、雨宮が後ろから王生を抱きしめた。

「今、お前はその方法を選んでいない…、だから、大丈夫だ」

「…ありがとう」

―救われた。

王生は閉じていた目を開く。

コツ…コツ…コツッ。

足跡が…聞こえてくる。

「…来た」

足が震える。

恐怖はもちろんだが、王生も雨宮も疲労はピークといえた。

王生は国枝を相手にし、雨宮は大量の戦闘兵器を相手にし。

そして中村と戦い、柳と一度戦いではかすり傷一つ負わせられなかったが動き続けた。

満身創痍…、その言葉に間違いは無い。

「…もってくれよ」

言い聞かせるようにそう呟く。

コツ…コツ…コツ。

「柳…」

見た所柳の武装は王生から奪ったショットガン一つ、当然弾の補充はしてあるだろうが他に目立った物は無かった。

だが、どっちにしろ後には引けない。

「柳…話しがある」

まずは柳と話す。

説得し、一緒に日向を助ける事の出来る方法を考える。

その為に…柳と話す。

「……」

柳は何も言わず、ショットガンを王生に向けた。

―会話の意思は0…か。

「あんたに銃は使わせない」

ガタンッ

雨宮がＰＤＡを操作し、天井の仕掛けを作動させた。

そこから一気に部屋に散布される。

「…これは」

観月を殺したペナルティ、粉塵爆発。

それを巻き起こした粉塵が部屋に一気に散布される。

「…ふっ、なるほどな」

その意味を理解した柳はショットガンを床に捨てた。

「流石に察しが良いな」

この状況で銃を発砲すればそれが火種となり、大爆発を引き起こす可能性が生まれる。

柳は確かに自殺するつもりだが、それは今じゃない。

何故なら今【9】のＰＤＡは柳が持っていて、日向はその事実を知らないのだから。

だから柳が自殺するのは日向以外の全員を殺し、日向に真実を告げ。【9】のＰＤＡを渡す。

それを成し遂げるまで柳は死ねないのだ。

「柳、話しがある」

銃を封じる状況は作り出した上で王生はもう一度、柳に語りかける。

後は柳の説得だ。

「…言ってみろ」

今度は柳も攻撃の意思を見せない。

「…最初に確認する、あんたは日向と自分のＰＤＡを入れ替えた、そうだな？」

「あぁ」

「エースの隠し部屋から侵入禁止エリアに侵入可能になるソフトウェアを持ち出し、新城の罠にかかったフリをした、そうだな？」

「あぁ」

王生の問いに柳はただ頷くだけだった。

「そうやって一度日向を俺達に預け、自分は殺人をしにまわっていた…」

「そうだ…、最初、少女を殺した時に彼女と一緒に居ては限界があると感じた」

日向に悟られぬように殺人を犯していくのならば一度日向と離れる必要があった。

「…全て、日向の為、か」

「そうだ、娘の生き写しと言える彼女を生存させる事が…、妻と娘を守る事の出来なかった私のせめてもの罪滅ぼしとなる」

「馬鹿野郎が…」

王生には納得出来なかった。

「侵入禁止エリアに侵入可能になるソフトウェアがあるなら…それを日向に使ってやれよ！！」

その方法を選んでいたなら…、例え時間となって建物全体が侵入禁止エリアとなったとしても日向は生きていられたはずだ。

「ゲーム終了まで…ＰＤＡのバッテリーがもつ可能性は？」

「…何？」

「あのソフトウェアはバッテリーの消費が著しく激しい、ゲーム終了までそのバッテリーが必ずもつとはいえない、そんな不確実な選択は出来ない」

「それで選んだ確実な選択は日向以外を殺す事…か」

王生がそう返すと柳は王生に向き合う。

「お前達をここまで生かしておいたのはゲームマスターを殺し、ペナルティを止める可能性があったからだ…、だがお前達は失敗した」

「だから殺す…か」

「感謝はしてる…恩もある、だが日向と比べてどちらが大事か等、考えるまでも無い」

「…ッ」

―駄目だ、この強硬な精神を崩せない。

「…ふざけた事をぬかすな」

「…鈴音」

王生の横で今まで黙っていた雨宮が口を開く。

「柳、お前がやろうとしている事は…、決して日向を救えはしない」

「…わかったような口をきくな」

「お前にもわかっているはずだ、だって」

かつて雨宮の両親は自分を犠牲にして雨宮の首輪を解除させた。

そして柳もまた、日向以外の全員を殺し、自分も死ぬ。

その全てを日向の首輪の解除に注ぐ為に。

「お前が日向にやろうとしている事は…、あの時、私の両親が私にした事と同じなのだから」

その結果、雨宮は確かに生き残った。

だが同時にその全てを失っていた。

両親を失い、ただただ組織への復讐の為に過ごしていた決して巻き戻す事の出来ない時間。

「柳…、お前は日向に私と同じ日々を過ごさせるつもりか？」

「…あの時とは状況が違う、ここに日向の両親は居ない」

「同じだ！なぜなら…日向が首輪を外す瞬間、嫌でも自分のＰＤＡが【９】だと知り、首輪が外れた瞬間、嫌でも自分以外、全ての人間が死んだ事を知る事になる！！」

それは雨宮の心の底から溢れる、訴えだった。

「そんな少女が…、この先まともな日々が送れると、お前は本当に…、本当にそう思っているのか？」

「……」

雨宮の訴えに柳は少し、ほんの僅かだが、苦しそうな表情を見せた。

「結局…、お前は日向の事なんて微塵も考えていない…、ゲームが終わった後、日向の心が病んでようが壊れてようが…、お前はどうでもいいんだ」

そして…雨宮は確信に触れる。

王生が気付けなかった真実。

柳の真意。

「お前は日向をあの時守れなかった娘に見立て、利用し、ただただ夢の続きを見ようとしているだけだ」

柳は日向を利用して、家族を守れなかった自分を満足させようとしている。

「違うか？」

「……」

柳は何も答えない。

ただゆっくりと天井を見上げた。

「…時間だ」

そしてその一言は雨宮の問い掛けの答えとはまったく違う物で、だが…はっきりとした答えだった。

――

――

「俺と雨宮で柳を引き付ける、柳が部屋に来た瞬間、粉塵をばらまきゃ銃は使えなくなる」

そう言いながら王生は新城にツールボックスを渡す。

中身は探知系のソフトウェアに探知されなくなるジャマー機能だ。
前に新城が首輪の探知をした時、柳の反応が見られなかったのは恐らくは柳も使っていたからだろう。
「なるほどねぇ、粉塵爆発…か、だがあれは密度が薄すぎても濃すぎても発生しないぜ？」
「問題無いさ、俺達の目的は銃を使わせない事であって粉塵爆発を起こす事じゃない、起きる可能性のある状況を作る事に意味がある」
「ふぅん…、んで、俺にどうしろと？」
王生と雨宮が囮となって柳を引き付ける。
そして新城は。
「新城さん、あんたにはライフルがある、柳との戦闘になったら粉塵の範囲外からそれで狙撃してくれ」
粉塵の散布された部屋の範囲外からの狙撃。
発砲の瞬間に起こりえる爆発もこれで回避出来るはずだ。
「まっ…構わねぇけどよ、ちなみに間違ってどっちかに弾が当たったらそれは事故で良いんだろ？」
ニヤリと邪悪に微笑む。
「やってみろよ…、そん時は」

「「私か光一（俺か鈴音）、どちらか生き残った方が何処までも追いかけて貴様を殺す」」

王生と雨宮が同時にそう答えた。

「お～…怖っ、俺って信用ねぇなぁ」

新城は冗談のようにそう答えると肩をすくめた。

――――

――

そして…今。

新城は慎重にライフルのスコープから三人の様子を伺う。

「ったく…何をちんたらやってんのかねぇ」

そうは言いつつも新城は柳の説得に成功する事を願っていた。

リスクは最小限に済ませるのが理想だ。

ここで戦いを回避して首輪を外せば後は他の誰が死のうとどうにでもなるのだから。

だが説得が失敗したなら即射殺するのが無難だ。

向こうは粉塵の中、別に柳に当てなくても火種になりそうな物に当てれば三人まとめて吹っ飛ばせる。

だからこそ、新城は全ての意識をこの狙撃に集中していた。

「…なんてな」

そう呟いた瞬間、瞬間は後ろを振り向くと拳銃を構え。

ダァンッ

一発、弾丸を発射した。

「やれやれ…人間の勘ってのは素晴らしいな」

そこにロボットがあった。

機関銃を搭載したドラム缶のようなロボット。

移動砲台と呼べる代物だが、先程新城の撃った弾丸が当たっており、その機能は停止していた。

「やっぱ目に見えるもんばっか信じてちゃ駄目ってか」

新城は完全に壊れた事を確認する為にロボットに近付く。

コロンッ…コロコロッ

「…あん？」

何かにぶつかり、新城は自分の足元を見る。

手榴弾だった。

カランッ、カラコロンッ

続けるようにロボットの中から数個の手榴弾が転がった。

新城は見誤っていた。

機関銃の印象から決め付けていたがこのロボットは移動砲台なんて物ではなく。

ただ単純に、数個の手榴弾を搭載した、移動爆弾だった。

「…マジ、かよッ！！」

逃げる動作が追い付くはずも無く。

ズガァァァァァァァアンッ

新城の身体は爆発の中心地にて、直撃を受けた。

第57話：真意（後書き）

《おまけ小説》

【恥ずかしい台詞禁止】

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

王生「まだそのネタ引っ張るか！！」

俺は観月からカセットテープを奪い取るとテープを引き抜いた。

観月「いやん、何をする」

王生「こっちの台詞だ！！」

観月は胸元の目立つ白衣を着ている。

王生「あんたは保健医か…」

観月「いや…、違うな、私はセクシーでエロい保健医だ」

王生「ノートパソコンを見ると真面目に仕事はやってるみてぇだな」

華麗にスルーし、ノートパソコンの画面を覗く。

動画投稿サイトのにっころがし動画だった。

王生「真面目にやってねー」

観月「必要なファイルはちゃんと整理している、ほれ、カチッとな」

観月がファイルを開く。

『魔法を使って奇跡を起こすんだよ、見てな…一泡吹かしてやる』

王生「すでにパソコンに取り込んでやがった！！」

観月「いやぁ～、若いっていいね、こんな厨二な台詞を躊躇いもなく言えるのだから」

王生「消せ！今すぐ消せ！！」

『魔法を使ってＹＯ♪ＹＯ♪奇跡を起こすＺＥ♪ＹＯ♪見てな今から始まる俺らの泡吹き一泡ＹＯ♪』

観月「編集してラップ調にしてみたが…どうだろうかＹＯ♪」

王生「消せ！今すぐ消せ！削除だ削除！！」

観月「あぁ！？何するんだＺＥ！！」

王生「うぜーよ！流行んねーよそれは！！」

―――

王生「あ～ぁ…」

精神的にむちゃくちゃ疲れた。

何しに保健室まで行ったんだ…俺。

「…ん？」

ふと俺は中庭に見知った顔が居たのを見かけた。

柳だった。

王生「…マジか」

おまけ小説と本編のラスボスの柳。

嫌な予感しかしない。

本編のイメージがあるのでスルーが良好だろうが。

王生「…次回までに行くかどうか決めるか」

って事で次回は見ない方がいいかもしれん。

第５８話：真の最終決戦（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：９．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：３．２：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：Ｋ：１０．８：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．７：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：Ｄｅａｔｈ：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：Ｄｅａｔｈ：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：９：３．４：マッチさん

第５８話：真の最終決戦

「なっ―」

想定外の出来事に王生は言葉を失った。

爆発音は新城が狙撃の為に陣取った場所からだ。

「まず…一人」

柳の仕掛けた罠は単純だった。

機関銃を搭載したロボットはもともとソフトウェアの一つとして、この建物にある。

そのロボットに柳は手榴弾を仕込んでオート操作に設定したのだ。

これで即席の移動爆弾が完成する。

「…くそ」

新城がやられた事は明白だった。

これで狙撃という優位性が無くなる。

だが…、それでも柳は粉塵爆発の可能性がある今、銃を使えないはずだ。

ナイフくらいは持っているだろうが、日本刀を持つ分、リーチも破

壊力もこちらが上である。

だが相手は戦闘のプロ中のプロ。

犯罪請負人というくらいならば殺しや誘拐、破壊工作等で金を稼いでいた男だ。

その程度の優位性は話しにならないのかもしれない。

「―って」

―今更後に退ける訳でも無し。

王生は頭を振り、考えを切り替え、柳を見る。

「良い眼だ…」

柳はそれを受け止めるように微笑んだ。

「では…始めようか？」

タンッ

瞬間、柳が床を踏む。

素早い、最小限の動作。

それでいて距離は一瞬にして縮まった。

「くっ！！」

リーチが長い分、余り接近されると日本刀では戦いづらくなる。

ブンッ

それが分かっていたからこそ、雨宮は王生よりも早く柳の瞬発力に反応しクロスボウの矢を発射していた。

柳は矢を避ける為に一度身体をのけ反らせる。

「しっ！」

そこに王生が日本刀を縦に振るった。

柳を相手に油断等は一つも出来ない。

柳の見せる僅かな隙を見逃さない、攻め時といえばそれくらいだ。

王生が日本刀を振り降ろす。

パシッ

だが刃は柳に届く事なく、止められた。

「なっ…」

柳は両手で日本刀の刃を挟み込むでいる。

真剣白刃取りの形。

「遅いな」

直後、柳の膝蹴りが王生の腹に直撃した。

「、。！」

その一撃は速く、そして重い。

嘔吐物が込み上げてきそうになった。

―知るものか！！

日本刀だけは手放す訳には行かなかった。

手放せば柳の手に渡る可能性があるしそして何より。

今柳の両手を使えなくしているこの状況を崩す訳にはいかなかった。

―さぁ…頼むぜ、鈴音！！

王生は柳の真後ろ、雨宮を見つめる。

ドスッ

雨宮の放ったクロスボウの矢が柳の背中へと突き刺さった。

「！！」

「ッ！おっと…、まだ…だぜ、今…その手ぇ離したらどうなるか、わかん…だろ」

柳が真剣白刃取りの状態を解けば王生はそのまま振り降ろす。
だから柳だってこの状態からヘタに動けないはずだ。
だから王生は日本刀に込める力を緩めない。
だがそうなればまた膝蹴りがくるだろう。
―そんなもん何発貰おうと耐えてやる。
王生は必死に柳を睨み付ける。
柳は…無表情だった。
「ッ！！」
信じられない、違和感…なんてものじゃない。
確かにクロスボウの矢ではそこまで致命傷といえる物は出来ない。
だが…、それでも柳は背中に矢を受けたはずだ。
なぜ…平然としてられる？
「…ふっ！」
バキンッ

そしてさらに信じられない事が起きる。

柳は真剣白刃取りのまま力を入れ、日本刀の刃を折った。

「んなっ――――」

突然の事に大きく体勢が崩れてしまう。

「光一!!」

雨宮がフォローに入ろうとクロスボウの先端を柳に向けた。

ブンッ

同時に柳が雨宮に向けて砕いた刃の先を投げ付ける。

ガキンッ

雨宮はクロスボウで上手くそれを弾いた。

だが――――。

柳の方が行動が速かった。

「ん…あ?」

王生の視界。

全てがスローモーションに見えた。

日本刀を折られ、力を込めていた分、大きく体勢を崩しているのがわかる。

だが…身体は言う事を聞かなかった。

体勢は直せない。

柳を見る。

ある物を手に持っていた。

それは折った日本刀の刃でも無ければナイフでも無かった。

ピアノ線より少し太いくらいのワイヤーのような物。

「！！」

ゾクリとした。

これはヤバい…と本能が知らせてくる。

だが身体は動かない。

体勢が崩れたといってもほんの数秒だ。

その数秒が…柳には与えてはいけない時間だった。

ヒュルッ

ピアノ線に似たワイヤーが王生の首の周りで一回転した。
その両端を持つのは柳。
「や…やめろ」
雨宮がその光景を見て…、放心状態になる。
「やめろぉぉぉぉぉおおお！！」
だがそれも一瞬、すぐにクロスボウを投げ捨て、雨宮はナイフを手に柳に駆け出した。
ブチュッ
音でもつけるのならばそんな音がなるだろう。
本来なら音も無く。
鋭利な刃物とも言えるそのワイヤーは。
「あ…ぁ、あ…」
王生の首に深々と食い込んだ。
ギリギリッ…
「ぁ…ぐっ！ぎっ…」

単純に首への圧力に加え、ワイヤーの鋭利さに王生の首から血が流れる。

このまま首を飛ばす事も出来る…、雨宮はそう想像した。

「あぁぁあああああぁぁぁあああああぁぁあああ！！」

雨宮は声にもならない叫びをあげながら柳へと向かう。

その眼は憎しみで満ちていた。

柳はすぐに王生を解放し、雨宮へ向き直る。

柳が殺すべき優先順位は戦闘経験の差からいって王生より雨宮の方が高い。

殺せたのならばそれで良かったがそれよりも雨宮を誘い出す事に意味があった。

それに王生には最早戦う力は残っていないはずだった。

首に深く食い込んだワイヤーの跡を印象付けるようにドクドクと血が流れている。

ほって置いても出血で死ぬだろう。

「駄目…だ、す…ず、ね」

霞みかかってくる王生の視界に映る雨宮の姿。

冷静さを失い、ただまっすぐに柳へとナイフを向けて駆けている。

―このままじゃ…俺達二人共殺される。

そう思っても王生の身体は動かせない。

当たり前だ。

身体のあちこちがボロボロ過ぎて先程の首絞めがトドメだった。

―つーか…、ちょっとでも動いたら首の傷が開くな。

今自分の首はどうなっているのだろうか？

血が肌を伝う生暖かさを感じるという事は血が溢れ出ているのは確実だ。

首には大切な血管が沢山ある。

薄皮一枚で済んだ…なんて軽率な事態じゃないだろう。

だが――――。

―動け…！！

王生はガス欠となった力を振り絞る。

今動かなければ確実に雨宮は柳に殺されるのだから。

―頼む…、まだ、まだ終われないんだよ！！

ピクリッと微かに両手が反応してくれた。

「動けよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

そして…王生は。

柳の片足に向け。

ブスリッ

ナイフを…突き刺した。

「！？」

柳がその事態に一度視線を雨宮から王生へと映した。

「窮鼠猫を噛む…ってか？」

王生はそれだけ言うと力無くナイフから手を離した。

もう指一本動かす事が出来ない自覚があった。

―繋げてくれよ…鈴音。

「光一ッ！！」

柳が視線を一度王生に向けた数秒。

その数秒が確定的だった。

柳が視線を雨宮へと戻す。

雨宮の振るうナイフを…柳は避ける事が出来ない。

雨宮はナイフを振るう。

ザクッ

それは柳に突き刺さり、血を噴出させた。

「!?」

ナイフの突き刺さった場所は柳の手の平だった。

手の平を貫き、手の甲からナイフの先が突き出している。

これは雨宮の狙いではない。

柳は自らの片手を盾にナイフを受けていた。

その表情は痛み等感じていないかのように冷静だった。

いや…痛みを感じない訳が無い。

普通、人が足と手にナイフが突き刺さろうものなら苦痛にまともに立ってもいられないはずだ。

恐ろしいまでの精神力。

だがそこから更に柳は動く。

ナイフが刺さって無い方の手を雨宮へと伸ばし。

「ぐっ…」

その首を鷲掴みにした。

グググッ…

力は何一つ衰えていない。

「…あぁっ！！」

このままじゃ雨宮の首が…へし折れる。

「く…そ」

王生はそれを見ている事しか出来なかった。

動かしたくても身体は脳からの指令を受け付けない。

それどころか…逆だ。

視界が霞め、ぼやけてくる。

まぶたが重い、意識が闇の底へと落ちていく。

「ぁ…、ぐっ…」

薄れていく意識。

王生が最後に見たのは力無くダラリと腕を降ろす雨宮。

そして――――。

「おじちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああん！！」

こちらに向けて飛び出して来る、日向と夏喜の姿だった。

第５８話：真の最終決戦（後書き）

【おまけ小説】

《不審者》

柳が居た。

王生「……」

俺は声をかけようと思ったが柳の姿を見て回れ右した。

柳はうちの学校の学生服を見に付けていた。

王生「マジか？」

夏喜が生徒だったのは…まぁまだいい。

なんで柳も生徒役？

王生「明らかにキャスティングミスじゃねぇかよ」

多分正面から見たら笑ってしまう。

御子柴「君、ちょっと良いかい？」

王生「…ん？」

教師が声をかけて来た。

知らない顔だが…いや、なんつーか懐かしい感じはする。

王生「どっかで会ったような…、会ってないような」

御子柴「私も妙な感覚だが、それよりちょっと聞きたい事があるんだ」

王生「はい？」

御子柴「校内に不審者が侵入したと報告があってね」

王生「不審者？」

真っ先に柳を思い浮かべる。

いやいや…まさかね。

御子柴「警備員を全員気絶させ監視カメラを全て破壊した辺りかなりの危険人物と言える」

王生「まさかオッサンなのに学生服着てたり？」

御子柴「み、見たのか？」

王生「…ちょっと心当たりが」

ってな訳で柳の元に戻ってみる。

柳「王生か？」

王生「柳、あんたこんな所まで来て何やってんだ?」

柳「何を…だと?決まっている…」

柳は一度眼を閉じると。

柳「日向を可愛がる為だ!溺愛する為と言っても良い!!」

王生「……」

うわー…。

駄目だこの人、狂ったままだ。

第５９話：最後の希望（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：９．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：３．２：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：Ｋ：１０．８：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．７：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：３．８：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：Ｄｅａｔｈ：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：Ｄｅａｔｈ：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：９：３．４：マッチさん

第５９話：最後の希望

「…ん、あ？」

―生きて…る？

何が起こったか理解出来ず、王生は眼を覚ました。

ズキッ

「ッ！！」

起き上がろとして凄まじい激痛に顔をしかめた。

というか首に包帯が巻かれている。

「首…」

一瞬、柳のワイヤーに首を絞められた瞬間を思い出して身体をゾクリと身震いさせた。

「…俺も案外しぶとかったんだな」

とっさに自分の首元に手を触れようとしたが痛そうだったので止めた。

「それより…どうなって」

王生が状況を確認しようとした時。

「こーいちさん！！」

今まさに自分に突っ込んで来るかの勢いの日向を見つけた。

今のボロ衣のような身体で日向タックルをまともに受けたら…。

―うん、死ぬ、間違いなく死ぬ。

しかし身体が動かないのではどうしようも無いので王生は向かって来る日向を眺める事しか出来なかった。

全身に冷や汗をかきながら。

ガシッ

「駄目よ日向ちゃん、光一君、まだ回復してないんだから」

「あ、はい、そーですね」

間一髪（本人に自覚はなさそうだが）の所で日向を夏喜が止めてくれた。

「…こーいちさん？なんでそんな怯えてるんですか？」

「なんでも…ねぇよ」

顔の冷や汗を拭いながらも無理矢理平常心を保とうとする。

「二人共…なんでここに？」

「ゴメンね、危険なのはわかってたんだけど心配になって…、大きな爆発音も聞こえたし」

爆発音とは恐らく新城の居る場所で起きた事だろう。

「…新城はどうなったんだ」

「今雨宮さんが見に行ってくれてる、流石に私や日向ちゃんだと」

爆発の規模から想像すれば現場はきっと酷い有様だろう。

「そっか…鈴音も無事か」

良かった…と王生は心から安堵した。

自分の最後に見た光景が首をへし折れそうになった雨宮の姿だったので尚更だ。

「光一！気が付いたのか！！」

扉が開き、第一に王生を目にした雨宮が声をかけた。

「自分でも生きてんのが不思議なくらいだけどな」

「あまり動かない方が良い、特に首はいつまた傷が開いてもおかしくないからな」

「…新城はどうだった？」

王生の問いに雨宮は黙って首を横に振った。

夏喜や日向の手前、詳細な事は言えないのだろうがその様子から新城が死んだのは明確だった。

「そうか…」

僅かだが…あの新城とも共闘していた事に王生も声を落とした。

「それで…だ」

そして最後に。

一番確認しなければならない事がある。

「柳は…どうなった?」

三人の顔を見回しながら王生が尋ねる。

「柳さんは…」

―――

―――

王生達の居た部屋の隣。

「……」

そこに柳が居た。

眼を閉じ、何かを考えるように。

「…終わった」

王生達とはまた別の所で。

誰にも知られず、柳は戦っていた。

計画を立て、
その為にわざと罠にかかってまでしてみせた。

全ては日向の為に。

だが…それも終わり。

「俺の…負けか」

「…んなピンピンしてる敗者が居るかよ」

扉が開き、雨宮と夏喜に支えられた王生が顔を出した。

「気が付いたか…」

「あんたの応急処置のおかげだよ」

ふとナイフが刺さっていた柳の片手と片足を見ると包帯が巻かれていた。

だがそれは王生のしている物と違い不格好に巻かれている。

「それ…」

「あぁ…、日向が巻いてくれた物だ」

「そっか…」

もし日向が来なければ王生と雨宮は生きていなかっただろう。

日向という存在は王生達にとって切り札だった。

本来ならば使う事の許されない切り札。

その切り札は一発で実質的にゲームを終了させた。

だが…それは同時に。

「日向は自分のＰＤＡが【９】だって事に…」

「…日向ちゃんは全部知ってる」

夏喜が辛そうに王生に答える。

「そう…か」

それなのに日向は王生が眼を覚ました時、笑顔でいた。

自らの絶望的な状況を理解した上で、王生の生存を心から喜んでいた。

「日向…」

落としそうになる肩をぐっと堪える。

―このまま終わっていいはずがない。

「まだだ…」

「光一…？」

「鈴音、このゲームを見てる客共ってのはバットエンドが大好きなんだろうな…」

わざわざこんな殺し合いのあるゲームを見に来る連中だ、それは間違いない。

「そんな悪魔共によ、ハッピーエンドってやつ、見せてやろうぜ」

「…何をするつもりだ？」

「日向が死ななければ…ハッピーエンドだ、だから柳、そのために力を貸してくれ、もちろん人殺し以外だ」

「…方法があるのか？」

「侵入禁止エリアに侵入可能になるＰＤＡ」

「…不可能だ、恐らくはＰＤＡのバッテリーが持たない」

「だからそのバッテリーの事だ、まだ試して無い事がある」

これは一種の賭けのようなものだった。

もしアテが外れたのなら…残り時間を考えるとそこからの行動は難しい。

「…ゲームマスターのメインルームに急ごう」

「今更何故あそこに…？」

「ゲームマスターのＰＤＡってのは俺達の持ってるのと違って建物の仕掛けを作動させたり組織と連絡したりするのにも使うだろう？」

その事については中村のＰＤＡを手に入れた王生自身がよくわかっている。

「つまり…俺達のＰＤＡと比べても格段にバッテリーの消耗が激しいのが普通のはずだ」

「…確かにな、搭載させたり機能を使いこなすにしてもバッテリー

を使うのは不可欠だろう」

「だが本部との連絡をとらなければならない立場上、バッテリー切れでＰＤＡが動かなくなる…なんてミスは出来ない」

これは中村や観月側からすれば必要な待遇であり。

「だから…さ、多分、あるはずだ、連中だけの知ってる抜け道」

王生達一般プレイヤーからすれば職権乱用もいい所だと言える。

「ＰＤＡのバッテリーの回復、充電みたいなのが」

――――

――

「こんな所があったんですね」

メインルームへと続く通路を王生達は先へと進む。

キョロキョロと辺りを見回しながら歩く日向にそれに付き添うよう

にして歩く柳。

そして雨宮と夏喜に支えられながらなんとかついて行く王生。

「日向、足元に注意しろ、よそ見をすると危ないぞ」

「あ、はい、柳さん」

通路には先程雨宮が破壊した機械兵器の残骸が散乱している。

その事で心配になった柳が日向に注意をした訳だが…。

「柳の奴、本当に日向の保護者だよなぁ」

そう言いつつ、自分も雨宮と夏喜に支えられている辺り、人の事は言えないと王生は苦笑した。

「ふ～ん…、私達をほって置いて光一君と雨宮さんはこんな所でデートしてたのね」

「どぇ、デート!?」

突然冗談混じりにそう言う夏喜に雨宮は素っ頓狂な声を上げた。

「そうだな…ただ約束をすっぽかされてどんどん先に行かれたが」

言うまでもなく睡眠薬で眠らされ、先に行かれた事である。

「うぅ…それは、その…、光一の意地悪」

雨宮は言葉に詰まって拗ねてそっぽを向いた。

「拗ねるなよ…、本当に心配したんだから」

「…拗ねてないもん」

ぶーっと口を膨らませる。

「子供か！！」

やはり組織への復讐以外の事になると精神的に幼い雨宮だった。

「ふふっ…」

柳もそれを見て柔らかく微笑む。

「なっ…、柳、お前まで笑うな！！」

「雨宮さん、顔が赤いです」

「うぅ～…、さっさと行くぞ」

日向にまで言われてますます顔を真っ赤にさせる。

「…っと、見えたな」

通路の先、メインルームへと続く扉。

王生達はそこの前へたどり着く。

「後はＰＤＡの充電が出来そうな物を探すだけだな」

「あぁ」

柳が扉を開く。

そこに…首輪を外した国枝が居た。

「！？」

「へっへぇ…、生きてたなぁ！そうだぁ！それで良いんだぜぇ！！」

片腕を失い、床を這うようにしながらも獣のような眼を見せる。

その眼には最早王生しか見えていなかった。

「くはは…くっはははははぁ！！てめぇは…俺の手によって殺されなければならない！！」

国枝は残った腕にサブマシンガンを手にし、王生に向ける。

「俺に…殺されるべきなんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

バタタタタタタタタタッ

放たれた凶弾は片腕で撃った物とは信じられない程にまっすぐに飛び。

「ッ！！」

王生の身体を貫いていく。

バタタタタッ…カチッ、カチッ。

弾切れ。

「――ッ！！」

だが…それと同時に王生は床へと倒れ。

死亡した――。

「くっひゃっはっはっはっはっは！！ざまぁねぇなぁ！王生よぉ！！」

後に残ったのはメインルームに響く国枝の狂笑だけだった。

第５９話：最後の希望（後書き）

【おまけ小説】

《お父さんに任せろ》

王生「という訳で日向、なんとかしてくれ」

日向「はぁ…、なんとか…ですか」

柳「日向よ、飴玉をあげよう」

柳が日向に飴玉を手渡す。

王生「それは親父というより近所のおばあちゃんだ」

柳「あと最近は何かと物騒だからこれも持ってなさい」

柳が日向に拳銃を手渡す。

王生「あんたの存在そのものが物騒だ！！」

日向「そういえば柳さんは本編でマトリックスレベルに弾を避けてましたね」

柳「なに、銃口の位置と引き金を引いたタイミングを見ればそう難しいものでない」

王生「いやいや、一般人には無理だから」

日向「それじゃあ一つゲームをしましょう」

柳「あぁ、もちろんだ、娘の要求には全力で答えるのが父親だからな、何をする？ロシアンルーレットか？」

王生「そんな親子の遊びがあってたまるか！！」

日向「では私が拳銃を撃ちますんで」

王生「撃っちゃうの！？」

柳「では俺が日向の弾を避ける、という訳か？」

日向「いえ、受け止めて下さい、素手で、パシッと」

王生「鬼だ！鬼が居るよ！！」

柳「娘の要求には何を犠牲にしても受けるのが父親だ」

王生「あんたもやるな！自分の身体を犠牲にすんな！！」

王生「あれ?俺なんでここに?」

第６０話：そして最後に（前書き）

【シークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ２、現在のＢＥＴ状況】

ｐｌａｙｅｒ：ｃａｒｄ：ｏｄｄｓ：ＢＥＴ者

王生　光一：Ａ：９．２：結崎　ハヤさん
雨宮　鈴音：２：３．２：ナイトホークさん、油桜さん
　柳　辰巳：Ｋ：１０．８：上杉龍哉さん
春野　夏喜：４：５．７：桐島　成美さん
新城　　渉　：８：Ｄｅａｔｈ：ヴァイスさん
国枝　克美：１０：２．８：ナージャさん
藤木　洋介：３：Ｄｅａｔｈ：無し
？？？？：？：Ｄｅａｔｈ：無し
藤原　慶吾：Ｊ：Ｄｅａｔｈ：無し
神北　観月：７：Ｄｅａｔｈ：ヤマネさん
中村　　真　：６：Ｄｅａｔｈ：ｎｉｄａさん
御子柴　徳司：？：Ｄｅａｔｈ：無し
速水　日向：９：３．４：マッチさん

第６０話：そして最後に

「くっははははははは…、やった、殺した！！」

王生の死亡。

それを目にした国枝は笑う。

「ざまぁみやがれ…、俺を甘く見た報いだ！！」

国枝は笑う。

笑う。笑う。笑う。

そして…眼を見開いた。

「な…、馬鹿な…そんな馬鹿な！！」

キョロキョロとせわしなく辺りを見渡していく。

国枝の眼に映ったのは王生だった。

それも一人では無く、四人。

先程サブマシンガンを撃ち込んだ王生を合わせて五人。

「つっ！消えろ！消えろ消えろ消えろ消えろ消えろ消え失せろぉぉぉぉぉぉぉお！！」

国枝が必死にサブマシンガンの引き金を引く。

弾切れのサブマシンガン。

バタタタタタタタタッ

だがそこから発射される銃声と振動を国枝は確かに感じていた。

「くっはははははははは！てめぇが何人居よが関係ねぇ！なら全員ぶっ殺してやる！！」

国枝は”両手”を高らかに上げ、笑いながら。

その意識を完全に失った。

先程国枝がサブマシンガンを撃ち込み、殺した王生は幻のようにその場から消えていった。

―――

―

「――――」

何が起きたか…、王生達はその状況の把握に必死だった。

王生を殺したと主張し、気絶した国枝。

恐らくは狂った精神に身を任せた国枝が生み出した幻想…、もっと酷く言うならば妄想といって言いだろう。

国枝の眼には王生しか映っていないのだから。

だが…国枝の生み出した幻想にも事実はあった。

サブマシンガンは確かに発射され、王生達の命を奪うはずだった。

「ぐ…ぅッ！！」

「…おじさん！！」

王生達の前に柳が立っていた。

全身にサブマシンガンの銃弾を浴びながらも…、それでも柳は倒れなかった。

弾丸一つでも後ろには通さず、盾となり続けた。

「…終わったか」

国枝の意識が無くなった事を確認し、柳が床に座り込む。

「柳ッ！！」

雨宮はそれに駆け寄ろうとするが王生を支えているので思い止まった。

「…大丈夫、光一君は私が支えてるから、早く手当てを」

柳が動けないとなればこの中で一番応急処置に長けているのは雨宮である。

それがわかっているからこそ、夏喜は雨宮にそう伝える。

「…無駄さ、これはもう…助からない」

出血。

サブマシンガンを受け、身体中から流れる血。

「そんな事言わないで下さい！！」

日向が眼に沢山の涙を溜める。

「一緒に…、おじさんも一緒に帰りましょう！！」

すぐにそれは大粒の雫になって日向の頬をつたった。

「日向…」

柳はその涙を人差し指で拭い取る。

「良いんだよ…、これで俺も…ようやく、死ねる」

そして優しく日向の頭を撫でる。

死ぬ間際のものとは思えない程に、その笑顔は幸せそうなものだった。

「…おじさ――――」

トンッ

柳が手刀を日向の首に当て、気絶させた。

「…すまない」

柳は倒れて来る日向の身体を一度抱きしめるとそっと床へ降ろす。

「俺に残された時間は僅かだが…その使い道について答えはでた」

「柳…、お前」

王生が答えるよりも先に柳はＰＤＡを取り出した。

【Ｑ】のＰＤＡ。

柳が最初に殺した少女が持っていたＰＤＡ。

「君の…最後の仕事だ、これで君の首輪も外れる」

「……」

【Q】のＰＤＡの所有者の殺害。

それは王生が生き残るには避けては通れない道だった。

「…そんな顔をするな、元々、日向の首輪の問題が解決すればこうするつもりだった」

柳は口からも血を流しながらもその眼はしっかりと王生を見据える。

「俺に…あんたを、殺せ…ってか」

「…そうだ」

「あんたは…本当に自分勝手だな！！」

王生は柳に向け拳銃を構える。

ズキズキと万力でじわじわと締め上げられたような痛みを首に感じたが今はそんな事言ってられなかった。

「俺達に日向を預けて人を殺して回り、俺の親友まで殺して、最後は殺せ…かよ」

「…そうだな、もし死んだ後にも世界があるのなら、私は妻と娘には会えないだろう」

柳は続けて人を殺しすぎたと自笑する。

「そこは…残念、だ」

眼を閉じる。

「そう長くはもたない…、王生、早くしろ」

「……」

王生は拳銃を構えたまま動かない。

いや…動けなかった。

今まで柳に向けて拳銃こそ撃っていたものも弾丸は一度も柳に当たる事は無かった。

狙いとしても殺害よりも出血によって柳が行動不能になるのを狙った。

だがこれは違う、これから起こる事は確実に柳を殺す作業だ。

「光一君…」

夏喜は王生に声をかけようとする。

「夏喜…これは私達が口を挟む事じゃない」

だが雨宮はそれを止めるように静かに首を振った。

「……」

「…早くしろ、俺を…犬死にさせる…つもりか？」

柳が王生の発砲を促す。

自分の命の終わりを自覚しているような口調。

「こんな事が…罪滅ぼしになる、なんて…思うなよ、俺は…あんたを…許さない」

全プレイヤーを巻き込み、死んだ娘の夢の続きを見ようとした柳。

「あぁ…そうだな、もし…〝次〟があるなら…」

そんな物があるはずが無いのに柳は答える。

「今度は…、本当の意味で日向を守りたいな」

柳は小さく微笑むと眼を閉じる。

「さぁ…もう良いだろう、私はもう疲れたんだ」

「…撃つぞ」

「あぁ…」

「…ッ！！」

王生は苦々しく唇を噛み締めながら。

拳銃の引き金を。

ダァンッ

ただ一つの銃声。

床に倒れ、ピクリとも動かなくなる柳。

『おめでとうございます、あなたは見事に【Q】のＰＤＡの持ち主を殺害し、首輪の解除に成功しました』

豪華なファンファーレと共に聞こえてくる機械音声。

「最低だ…、俺」

日向が気絶していて良かった…と王生は心から思っていた。

「引き金が…思ってたよりすんなり、引けた、躊躇いが無かった」

―何故？

柳が慶吾を殺したから復讐の為？

それとも柳にトドメをさせば自分が助かるから？

「馬鹿…」

暗く顔を沈める王生に雨宮が声をかける。

「本当に最低な奴が…そんな顔するか」

「…え？」

そこで王生は気付く。

視界がぼやけ、はっきりとしない。

何かが頬をつたっている。

「本当にね…」

夏喜がそれだけ言うと王生にハンカチを渡した。

後は何も言わない。

その気遣いが王生には嬉しかった。

「そっか…泣いてんのか、俺」

それは柳へ向けての哀れみか同情か。

それとも柳を殺した自分自身に向けたものか。

多分、どっちもだろう。

王生は夏喜から貰ったハンカチで涙を拭う。

「…さぁ、本当の意味で柳からの遺言だ、日向をちゃんと生き残らせる」

それが柳への向けての手向けともなるだろう。

王生はふと見上げる。

そこには監視カメラが設置されている。

「俺は…少しは抗えただろうか」

―あんたらの用意した下らねぇシナリオに。

「…またな」

―――

――

――

《ゲームが終了しました》

《ＢＥＴの受け付けを終了致します》

【王生　光一】

【雨宮　鈴音】

【春野　夏喜】

【速水　日向】

【国枝　克美】

【以上の者達をゲームの勝者として確定しました】

第６０話：そして最後に（後書き）

【おまけ小説】

《超絶大傑作（個人的に）》
制作時間３０分。

国枝「いくぅるみぃ！私と勝負しろぉ！！」

王生「よ～し！良いぜ国枝！かけっこで勝負だ！！」

国枝「ハッハァッ！！ノリノリじゃねぇか！それでこそ私のライブァル！！」

王生「よ～し！良いぜ国枝！どっちが先に世界一周するか競争だぜぇ！！」

国枝「てめぇには負けねぇ！！みな！このスピード！！（猛スピードで駆け出す）」

王生「あっははははは～！待て～！！……ふぅ（途中で立ち止まる）」

決死の思いで国枝を退けた王生、だがそれは新たな物語りの序章でしかなかった。

新城Ａ「くっくくく…、そうか国枝がやられたか」

新城Ｂ「だが奴ら等、俺達四天王の中で一番弱い」

新城C「俺達はそうはいかねぇぜ」

王生「くっ…、このままじゃ」

日向「ここは私に任せて先に進んで下さい」

王生「日向ッ！！」

日向「雨宮さんを…助けて上げて下さいね」

王生「だがッ…頼む！！」

最早言葉も不要、王生は駆け出す。

新城A「お嬢ちゃんが一体どうするつもりだ？」

新城B「悪いが俺らにゃ勝てねぇよ、大人しくお家に帰んな」

日向「おじさ～ん、ちょっとお願いします」

指パッチンッ

柳「娘と頼みとあれば」

ばきっ、どこっ、バキュンッ

新城A・B・C「ぐふっ！！」

日向「厳しい戦いでした…」

――

中村「ふぉっふぉっふぉっ！きよったか！小僧！！」

王生「校長…、いや、中村！雨宮を返して貰う！！」

中村「ならばわしを倒して見せよ！いでよ！我がしもべ！！」

ポチッ

王生「くそ…機械兵器か、ワンパターンな奴め、友達居ないだろ！！」

中村「ぐふっ！！」

《中村は精神的ダメージを受けた》

中村「小僧こそ…友達なぞ――」

王生「ん？電話だ」

慶吾『コウか？今から唯さんとカラオケ行くんだけどどうする？』

王生「んじゃこれ終わったら行くわ」

中村「なん…だと？」

王生「んでー、なんの話しだっけぇ？（ニヤリ）」

中村「ぐはぁっ！！」

《中村を倒した（ちゃららっちゃっちゃっちゃ～♪）》

雨宮「光一！来てくれたのか！！」

王生「当たり前だ！！」

そして交わす、幸せなキス。

王生「この先なにがあるかわからない…、だが」

雨宮「あぁ…、私達の戦いはこれからだ！！」

――――

日向「良いラストでした」

王生「よくまとめたな…」

第二部：雨宮追想編

「やっぱシャバの空気は良いなぁ」

住家へと向かう帰路を俺は進む。

別に出所したとかそんなんじゃないがこうして外を自由に歩くのは久しぶりでついそんな言葉が出てしまった。

「懐かしい道だ…」

歩きながら進む町並みは変わらない。

まぁ一ヶ月近くでそんな変わる物でも無いが懐かしいという言葉は事実だった。

編集して圧縮しても二時間ドラマの枠に収まらないような激動の三日間を終えて気が付けば病院のベッドの上。

おまけに眼が覚めたのはゲーム終了から丸一日が過ぎていた。

イコール丸一日寝ていたという事だ。

ゲームの終了間際はまだまだいけると思っていたけどそれは思っていただけだったらしい。

確かに最後ら辺は一人でまともに歩けなかったが。

そこから入院生活を得て一ヶ月近く、ようやく今日退院する事が出

来た。

同室の鬼瓦　厳三郎（おにがわら　ごんざぶろう：職業：お花屋さん）さんにも別れの挨拶をし、住み慣れた（らあかん）病室からさよならした。

鬼瓦　厳三郎さんは顔と体格はやーさんだったが心はとてもピュアだった。

好きな色も純白の白。

だからナースが好きだと興奮しながら語っていた。

ナースを見ながら。

俺は興味なさそうに答えていたっけなぁ…。

ナースを見ながら。

んで鬼瓦　厳三郎さんから退院祝いとして貰った花束を右手に。

左手には大量のナースを持って俺は住家のアパートへ向かう。

違った、ナースじゃなくてナスね、ナスビ。

スーパー袋にこれでもかと叩き込むようにナスビが入っている。

入院中に日向と夏喜がお見舞いに来たのだ。

得に大きな怪我も無い二人は病院ではなくホテルに運ばれていたらしい。

『こーいちさんの好きなナースを沢山持って来ました、どうぞ煮るなり焼くなり好きにして食べちゃって下さい』

とは日向の言葉、しかも病院内でナースさんの目の前での発言。

社会的に殺された。

夏喜が必死に笑うのを我慢していたので例によって首謀者はそっちだ。

ちなみに俺はナスはそこまで好きじゃないがせっかくなのでナスを使った料理にいろいろ挑戦してみよう。

ぐへへ…さぁ、どう料理してやろうかとテンションもあがるものだ、変な意味じゃなく。

何より二人の無事の確認が出来たのが嬉しかった。

他に…学校の担任が来たか。

慶吾の事を聞かれた時はうやむやにして答えておいた。

そのうやむやにする為にとった方法は一つ、「学校、中退します」だ。

担任が帰った後ちょっと泣いてしまい（声は殺していたはず）、鬼瓦　厳三郎さんに心配された。

国枝は…うん、お見舞いに来なくて良かった。

というかあの様子じゃ俺より重傷だろう、お見舞いには絶対いかねーけど。

そして…。

「鈴音…」

あのゲームで出会った一人の女性。

自分よりも年上で冷静沈着、冷たい氷のような印象を見せる。

だがその実は傷付きやすく、子供っぽい。

胸も子供っぽいとは口が裂けても言えないけど。

俺を救ってくれた人。

俺が救いたい人

俺が一緒に居たいと思う人。

そんな彼女…雨宮　鈴音は。

お見舞いには来なかった。

つまりゲーム終了から行方知れず。

「なんだかな…」

不安はある。

雨宮　鈴音はゲームを主催する組織と対立する【エース】という組織のメンバーだ。

ゲームの勝者といえ組織が対立する相手をわざわざ無事に帰すのは考えにくかった。

だから俺は一度、ゲーム中に組織の幹部クラスと思える奴とその事について交渉した。

ゲームの勝者に手出しをするのはルール違反だと釘を刺した。

だから組織側も勝利者となった鈴音に手は出さないはず…だ。

だがそれはあくまでもあの時、あの瞬間での口約束。

連中にとっちゃそんな事無関係に雨宮だけ俺達から離して殺してる可能性だってある。

「そんな事あったら…潰す」

だからまずは確認が必要不可欠だ。

鈴音の事についての確認。

その為に必要な事はやはりエースという組織とのきちんとした接触だ。

鈴音の話しを聞いた分を整理するならエースとは警察じゃどうしようもない組織に対する対抗組織らしい。

テロリストと戦うテロリスト…といった例えか。

そういえば鈴音もそんな事を言っていた気がする。

「テロリストか…」

自分達をテロリストと称する事に感心した。

正義や何だと綺麗事並べながら人を殺す連中よりずっとマシだ。

今日はとりあえず休んで明日から本格的にエースについて嗅ぎ回ってみようと計画する。

学校も辞めたので（マジ）時間もある。

ゲームで得た賞金も使ってやる。

心情的に新展開って感じだ。

漫画なら第一部完、第二部のスタート。

アニメでいうと二期のスタートだ。

【鈴音追走編】

最終回が雨宮との再開だと嬉しいが。

うん、がぜんやる気が湧いて来た。

今日は決起集会と退院祝いで豪勢にいくか。

と、途中適当なコンビニに寄ってコーラとケーキを適当に購入。

右手に花束、左手にコーラとケーキ、右腕にナス入りの袋を引っ提げ、家に着く。

ペットボトルのコーラとケーキを一緒の袋に詰められたおかげでケーキは傾いていたがとりあえず袋を床に降ろして鍵を取り出す。

明日からは忙しくなる。

いろいろとヤバい橋も通るはずだ、準備はしっかりとしなければならない。

だとすれば…やはり銃か？

持っているだけで圧力にはなる、便利だ。

ガチャンッ

等といろいろ悪巧みも見えながら始まったこの第二部は――――。

「おかえり」

玄関の扉を開けた瞬間、完結した。

「すず…ね？」

無事だったのか！？とかなんで俺の家に！？とか言いたい事は山ほどにあったが。

「…それはこっちの台詞だ」

病院で眼が覚めた時、俺は一人だった。

この一ヶ月近く、俺がどれだけ心配で不安だったか教えてやりたい。

…俺、こんなにも寂しがりやだったっけ？

「？、ここはお前の家だろ？帰って来たならおかえりと言うべきだろう」

俺の言葉の意味がわからず、鈴音はキョトンと首を傾げた。

あぁ、うん、わかった、絶対コイツのせいだ。

俺はそれを理解する。

自然と顔がにやけてしまった。

「な…、何をニヤニヤしている？どこか変なのか？」

「いや何も、んじゃ同時に言おうぜ」

「「ただいま」」

ゲーム終了後の報告回：良い知らせと悪い知らせ

「ところで…なんでナチュラルに俺の家に居るんだ？」

というか鍵は？かけ忘れなんて事は無いはずだし。

「それについてだが…良い知らせと悪い知らせがある、どちらから聞きたい？」

その選択肢じたいが悪い予感をビンビンと感じさせる訳だが。

「んじゃ…良い知らせからで」

なのでとりあえず良い方から聞いてみた。

「そ、そうか、実はな…これは、その…、私にとってだけ良い知らせかもしれんが」

鈴音ははにかみながら顔を赤くする。

「この一ヶ月、私はエースの組織に戻ってゲームの報告と今後についてを上の者と話し合っていた」

あぁ、それで一ヶ月近くの間雲隠れしていた訳か。

「私は組織側にエースのメンバーだという事を知られながらにゲームをクリアした、このケースは非常に珍しい」

「だろうな、ゲームの間連中が躍起になって干渉してたし」

観月の残したサブマスター用のカメラという監視役がなければどんな手を使っても鈴音を殺そうとしたに違いない。

「私はゲームをクリアし、今こうしてここに居る、だが…それで全て解決とはいかない」

むしろ危ないのは日常に戻り、ほとぼりが冷めた頃に組織が動き出す事。

「事故にでもなんでも見せかけて鈴音を消そうって狙う可能性が高い…か」

一ヶ月の雲隠れのもう一つの理由とも言えよう。

「人事では無い、私だけならまだ良いが…、組織が私に関わった者全てを抹消しようと考えたらどうする？」

「！！」

もしもの時、鈴音は戦える。

俺の事はとりあえず置いておく。

だが…、夏喜と日向の二人が狙われようものなら。

「…くっ」

思わず携帯で二人に連絡しようとするのを鈴音が手を出して止めるジェスチャーをした。

「心配しなくていい、二人は無事だ」

「…なんでわかるんだよ」

「二人にはエースの監視がついた、二人もそれに承諾済みだ」

鈴音の言葉にふぅ…と息を吐いた。

「しかし四六時中監視されるってのもマズイよなぁ…、二人共女だし」

何がマズイって?そりゃ…いろいろあるだろ。

いろいろって?そりゃもちろん…。

「む…、監視と言ってもプライバシーはきちんと守っている、異常事態の時にすぐ動けるようになっている、保護…という言い方が正しいな」

危うく妄想の向こう側に行きそうになる俺を鈴音はジトーッとした眼で見つめていた。

「そっか、なら二人については安心していいんだな?」

「あぁ、組織による被害者を出さないのもエースの方針だ」

「しっかし二人には護衛がついたってのに俺は入院生活中放置されてたって訳か」

ちょっと拗ねたように言ってみる。

実際、組織の連中が襲って来れば怪我で動けない俺はアウトだった。

「何を言っている？鬼瓦　厳三郎さんが居ただろう？」

「ん？なんで鈴音が鬼瓦　厳三郎さんの事を――」

気付いた瞬間、フリーズ。

「…マジ？エースの人？」

「あぁ」

と頷く鈴音、マジだった。

あの人、伏線キャラだったのか。

フラグ回収も高速だったが。

「え？てーゆーとアレか、俺を保護してくれるのって鬼瓦　厳三郎さん？」

「それは――」

ピンポーンと呼び鈴が鳴る。

「ん？誰だ？」

組織の奴か…？いや…まさかな。

とか不安になりながら扉を開ける。

「おぉ！王生！！退院良かったじゃねぇか」

鬼瓦　厳三郎さんが立っていた。

両手で段ボール箱を持って。

「え？あ、どうも」

鬼瓦　厳三郎さんは玄関に段ボール箱を置く。

「何が入ってんですか？」

「着替え等の生活品だ、これからの生活に必要だろう？」

あぁなるほど、長期戦になりゃしばらく家に帰れないもんな。

そーかそーか、それで俺の家に着替えとかを。

…何で俺の家？

「これからしばらくの間よろしく頼む」

混乱する俺の前でサラっと言われる。

えー、あぁ、なるほど。

うちに住むつもりね。

つまりこれから鬼瓦　厳三郎さんと一つ屋根の下の生活という新生活のスタートか。

食事の時も寝る時もこの見た目やーさんの人と。

絵的にねーよ。

「嬢ちゃんを」

続けて鬼瓦　厳三郎さんの言葉。

「…はい？」

状況がわからずにフリーズする俺の横を鬼瓦　厳三郎さんが通りすぎて鈴音に近付く。

「これだけで良かったのか？」

「済まない、助かる」

段ボール箱を受け取る鈴音。

鬼瓦　厳三郎さんは俺の肩にポンと手を置く。

「んじゃそういうこった、全く若いってのは良いなぁ！！」

俺はフリーズしたままゼンマイの切れかけたロボットのような動きで首だけを鬼瓦　厳三郎さんに向けた。

「ドユコト？」

出てきた言葉はそんな一言だった。

「なんだ？嬢ちゃんから何も聞いてねぇのか？」

「一人置いてけぼりにされた気分だ…」

「こほん、こほんこほんっ」

いかにもなわざとらしい咳ばらい。

見ると顔を真っ赤にさせた鈴音が口元にこれまたわざとらしく手を当てていた。

「光一、人を守るゆえで一番有効な事は何が起きても対処できるよう、側に居る事だ」

「ふむふむ…」

説明口調もこれまたわざとらしいがもういちいち指摘してたらキリがなさそうなので止めた。

「だから私をお前の側に居させてくれ」

――――フリーズ。

「えっ？あっ？へっ！？」

再起動した俺の口から自然と出てきた情けない声。

いやいや…、いやいやいや…。

着替え等の生活洋品の入った段ボールに今の言葉。

これって…つまり、アレ、だよな。

「うちに…住むってか」

住む…？

鈴音と一緒に？

イコール…同棲。

＝一緒に生活。

一緒に生活するって事は…アレか、飯とか風呂とか…、寝る時とか。

「ぶはっ！！」

謎に吹き出してしまった。

鼻血じゃねぇぞ…念のため。

若いので仕方ないんです。

ってそうじゃねーよ。

「どうした…大丈夫か？」

頭に？マークをいくつも浮かべた鈴音。

ってそうじゃねーよ、自分の言ってる意味わかってないな。

「…いや、ほら、マズイんじゃないかなーって」

「…ダメか？」

瞳うるうるさせるんじゃねーよ！キュンと来るだろ！！

「っとまぁ、嬢ちゃんは少々常識外れな所がある、そこん所よろしく頼むわ」

ポンと肩を叩かれ、振り返ると鬼瓦　厳三郎さんが居た。

「よく知ってる…」

そこら辺はゲームの三日間で重々承知の上だった。

「がっはっはっはっはっは！流石は柳とやり合って生き残った事はありやがる！！」

「俺の事知ってんですか？」

「鈴音の報告書は読ませて貰った、全く、敵プレイヤーに組織に柳相手に大立ち回りとは大したガキだぜ！！」

いやいや…、俺、言うほど何かやったって訳じゃない気が。

殺す気の無い観月に国枝の自爆、柳もぶっちゃけガチでサシにやったら瞬殺される自信があるし。

「…報告書にはなんて？」

「んなもん教えれる訳無いだろう、機密ってやつだ」

まぁ当然か。

「光一が凄かったとかかっこよかったとかそんなもん知らねぇぜ」

「ぶはっ！！」

今後は鈴音が吹き出した、顔を真っ赤にしながら。

「報告書って…そんなの書いたら駄目じゃないのか？」

つーか俺も恥ずかしいわ！！

「安心しな、そりゃ下書きだ、上にはキチンとしたやつを送ったさ」

「うぅう…」

ガクッとうなだれる鈴音。

「なぁ鈴音…下書きの報告書って、何書いたんだ?」

「なな、何も!何も書いてない!!」

何か話しが大きくなってる気がする…。

「んじゃそういう訳で俺は行く、後は若いもん同士に任せる!!」

「へっ?は?ちょ…」

鬼瓦　厳三郎さんは笑い声を後に部屋を出て行った。

「「……」」

二人残された俺と鈴音。

ヤバい…急に緊張して言葉が出なくなって来た。

「…すまない、光一」

「…ん?」

突然鈴音がもじもじとさせながら謝って来る。

「迷惑だったか?突然…押しかけて来てしまって?」

「迷惑…?」

なんだ、そんな事気にしてたのか？

「馬鹿だな…迷惑なんてある訳無いだろ」

俺はニヤリと笑うと冷蔵庫を開ける。

一ヶ月近く放置されていた冷蔵庫は酸っぱい臭いがしたので開けた瞬間に扉を閉めた。

「ま、まぁ気を取り直して…」

そうだと思い出して俺はコンビニ袋を開ける。

中身はケーキとコーラだ。

「これからの生活、絶対楽しくなるぜ、とりあえず乾杯だ」

「あ…あぁ、それは良いが光一」

「あ、コーラよかビールとかの方が良かったか？流石に置いてないけど」

「あ…、アルコールはちょっと…飲めない」

「んじゃコーラで良いよな？炭酸は大丈夫だろ」

トクトクとコーラをコップに注ぐ。

鈴音の分と俺の分をコップに注ぎ終えると机の上に置いた。

「って、いや…、その、もう一つの知らせが」

「あぁ、悪い知らせの方か？ん～…」

なんつーか良い方の知らせが強烈過ぎて、今更悪い知らせとか言われてもピンと来ない。

「良いよ、適当に聞いてるから」

「そんなので良いのか？」

「良い良い、どんな悪い知らせでもこの良い知らせにゃ勝てないって」

「光一…、わかった」

鈴音は嬉しそうに頷く。

俺は本当に適当にコーラでも飲みながら聞くとしよう。

ゴクゴクッ…

「国枝　克美が消息を絶った、行方不明だ」

「ぶーーーーーッ！！」

コーラ吹いた。

鼻から…。

後日談：男の決意と女達のガールズトーク、昨日の夜は…

「ふぁ…」

欠伸を一つ。

昨日はあれこれいろいろあって結局ほとんど眠れなかった。

名誉の為に言っておくが鈴音とその、アレだったとかそんなのは無かったからな。

アレは無かった、うん、ソレはあったが。

寝不足は寝不足だが俺は今外出中だった。

ある人物に出会う為に、鈴音にも内緒でコンタクトをとっていた。

さて、待ち合わせにはまだ時間があるが…。

ふと街を歩く人々を見回す。

平日だと言うのに意外と人が多いが俺も人の事は言えない。

学校に行く必要の無い俺は晴れてニート生活だ。

いや…ニートってのは違うか？どっちかっていうとプー太郎って感じか。

鈴音からの着信は数分間置きにかかっている。

電話に出るといろいろとうるさそうなのでメールで心配無いとだけ伝えておいた。

それと同時に夏喜に鈴音を頼んでおいた。

鈴音もたまにはリラックスが必要だ、夏喜と居れば良い毒抜けになる。

俺がそうだったからだ。

なので鈴音の居ない分、警戒は怠らない。

昨日のあの話しが強烈過ぎたからだ。

昨日――――

「あぶぶッ！！」

鼻からコーラを吹いたのが地味に、そしてマジに辛い。

「うぁ…あぁあ…」

そして俺はマジに震えた。

情けないとか言って笑う奴、笑い事じゃ無い！！

国枝とはゲームで何度も衝突したが会う度に頭のネジが一本どころかダース単位で緩んでいた。

そんな奴が執念に取り付かれたかのように俺を殺す為だけに動いていた。

断言する。国枝　辰美というキーワードは俺の中でトラウマと化していると言っても良い。

「…良い知らせさえあれば悪い知らせなんてどうでも良いって言ってたのに」

そんな俺の姿を見てジトーッと鈴音は睨んでくるがこればっかりは仕方ない。

「…マジなのかよ、あいつ、少なくとも相当な重傷だったぜ」

薬物に頭はやられ、俺との戦いで身体をボロボロにし、手錠から逃れる為に自らの腕まで落としていた。

そっから全快もせずに病院を抜け出した所で生きて行けるかも怪しい所だ。

「それでも奴は病院から抜け出した、エースも行方を調査したが有益な情報は無い、生きた姿はもちろん、死体も見つかっていない、

本当に生きていればまさに執念の固まりだが…」

「文字通りの消息不明…かよ」

気味が悪い…、悪すぎる。

もしも国枝がゲームを引きずりながらこの日常に潜んでいるなら――。

簡潔に言ってしまえば俺はいつ奴に殺されてもおかしく無い。

最悪、街中でも他人を巻き込んで襲って来る…ってのも有り得る。

「まっ…、もし生きてても、片腕じゃ、何も出来んよな」

そんな想像に恐怖し、途切れ途切れな希望にすがる喋りになってしまう。

「最近じゃ義手の技術も発達した、金さえあればかなり精密な物が作れると聞く」

「空気を読んでくれぇぇぇぇぇぇぇ!!」

奴にもゲームの賞金がある。

マジでどこかのカズヤさんのように義手に銃くっつけてくるかもしれない。

むしろ剥き出しにして心で撃つあの銃のように改造してくるかもしれない。

馬鹿な妄想と言われればそれまでだが…気味の悪い恐怖は消えない。

「…安心しろ、光一」

鈴音がそんな俺を見て一度苦笑すると強い眼をした。

「私が何故ここに来たか、そして何故お前の側に居るようになったか、わかるだろ」

「…好きだから？」

「…ばか」

否定しない辺り、本当に可愛い。

「最初、お前の護衛を私が勤めるのは許可されなかった、知り合いの護衛という物は私情が生まれるからだ」

それは納得だ。

護衛なんてものは本来ならば事務的に、感情に流されないようにしなければならない。

もしもの時に冷静な判断も出来なくなる可能性もある。

「だが…国枝の事で事情が変わった、奴の狂い具合は充分すぎる程報告してある」

国枝もまたゲームによる被害者と言えるが奴の場合、ゲームの狂気

をそのまま日常に持ち帰っている。
どうしようもなく、危険なのだ。

「なるほど、だから国枝と直に会った事のある鈴音が適任…って事になったんだな」

「その通りだ、光一、お前は何があっても私が絶対に守る」
鈴音の眼がまっすぐに、力強く俺を見つめる。

「だから光一…、お前はエースになるな」
見透かされてましたか…。

俺はエースになるつもりだった。
鈴音の横で戦いたい、鈴音をトラウマから救い出したい。
まだ終わってはいない。

本当の意味で鈴音を救い出すにはゲームを、そして組織を潰す。
そのためにはエースのメンバーになるのが一番良い。

―――

――

「……」

だから俺は鬼瓦　厳三郎さんとコンタクトをとっていた。

今はその待ち合わせだ。

時間はまだある。

どうしようかとふと見ればゲーセンが見える。

そういえば学校帰りに良く慶吾と寄ってったっけ…。

外から見えるのはガンシューティングのゲームだった。

「暇つぶしにゃ丁度良いか…」

このてのゲームをやるのは久しぶりだったがなんかそんな感じはしなかった。

つーかちょっと前にリアルガンシューティングを体験してるし。

てな訳で。

「…うし、勝った」

もっか連勝中。

銃を撃った衝撃による照準のブレが無いので当てやすい。

しかしオンラインで相手プレイヤーを募集して戦うＦＰＳタイプのゲームだが最近のゲームはどうしてすごいものだと感じた。

「さぁて…次は誰だ？」

対戦相手募集中の画面が切り替わりプレイヤー名が表示される。

「木冬…？あぁ、柊をもじってんのか」

見知らぬ相手に向けて備えられた銃（おもちゃだが）を向ける。

少し…あのゲームに似てるな、と感じた。

―

―

―

駅。

私は注意深くキョロキョロと辺りを見渡します。

行き交う人々を観察し、常に警戒を緩めません。

何故なら…。

「ひ～な～ちゃーんッ！！」

「ひゃあッ！！」

…こうなっちゃうからでした。

「突然後ろから抱き着かないで下さい、夏喜さん」

「ひなちゃんの若いエキスを貰おうかな～って」

吸血鬼ですか。

「だいたいひなちゃんってなんですか？」

「その方が可愛いかなって、嫌？」

別に嫌じゃないですけど…。

「嫌です」

「もう…素直じゃないんだから、すりすりっと」

夏喜さんが抱き着いたまますりすりと頬を擦り寄せて来た。

「あうう…」

この人は変わらないなぁ…と思いました。

「後は…雨宮さんだけですね」

夏喜さんとはこーいちさんのお見舞いで何度か会ってましたが雨宮さんと会うのは結構久しぶりです。

何だかずっと連絡が取れなかったようでしたが…、もしかしたら今日は何か大事な話しがあるのかも知れません。

私は良くわからないですがえーす?に関する事かも…なんて想像します。

「…すまない、こんな所に呼び出して」

雨宮さんが申し訳なさそうにしながら現れました。

「良いの良いの、私から連絡するつもりだったし」

夏喜さんはこーいちさんに雨宮さんを遊びに誘ってくれと言われたみたいですが先に雨宮さんから今日会わないかと言われたらしいです。

「それで…話しって?」

「あぁ…」

雨宮さんの声にはどこか緊張した感じがしました。

それに答えるように私もゴクリと唾を飲み込みます。

「私の…その、服を買うのに付き合ってくれ！！」

雨宮さんの決心した宣言。

私と夏喜さんはずっこけ（古い表現ですが）ました。

「…どうした、二人共？」

そんな私達を見て雨宮さんは戸惑ったように声をかけます。

「や、やっぱり…変…か？私が、オシャレなんて…」

自分で言って恥ずかしいのか雨宮さんは顔を真っ赤にしてました。

「何言ってるの、変なんて事無い無い、得に雨宮さんはもともと綺麗だしスタイルも良いんだし」

「そうですね、羨ましいです」

胸以外は…と言葉を加えようと思いましたが私はそう答えました。

空気を読める女を目指してますので腹黒ではありません。

「そ、そんな事…」

雨宮さんは更にもじもじとしています。

「ふふっ、でもそういう事なら任せなさい！」

夏喜さんは自信満々に胸を張ります。

「それで…予算はどれくらい？」

「あぁ、それなら問題無い、五千円も持って来たからな」

「「……」」

私と夏喜さんはお互いに顔を見合わせて無言になっちゃいました。

「ちょっと多いかと思ったが…せっかくだからな」

「雨宮さん、服って…上下よね」

「うむ、あと…アクセサリー、とやらもちょっと見たい、かな」

急にオシャレに目覚めた中学生みたいだと思いました。

でも五千円じゃ…。

「いよしッ！私に任せなさい！！」

夏喜さんが頷いて歩き出した。

どこかにあてがあるようなので私と雨宮さんはそれについて行きます。

せっかくの機会なので私も服を見ようかと思いました。

しばらく歩いて着いた店は古着屋でした。

なるほど…、ここなら安いですが。

「服は高けりゃ良いってものでも無いからね～、本人に似合うのが一番って事」

そう良いながら夏喜さんは手にいっぱいの服を持って来ました。

「…夏喜？」

「それじゃあ…始めましょっか、ふふふ…腕が鳴るわ」

「なっ、ちょっと…」

ズルズルと引きずられていく雨宮さん。

…と、私。

「何で私も…」

「せっかくだし、ひなちゃんの服も買っちゃう～」

着せ替え人形にさせるつもりだ…この人。

夏喜さんが雨宮さんと一緒に試着室に入り私は外で待ちます。
流石に三人が入るには狭いですから。
「…なっ、なんだ?これは」
「ふふっ…これはね、こう使うの」
「おぉ…こんなものがあったのか」
そんな会話が聞こえてきて少しして試着室が開きました。
「遅かったで…、え?」
中から出てきたお二人を見て私はあんぐりと言葉を失いました。
それは雨宮さんがとても可愛かった事…ではなく。
雨宮さんの胸が…見違える程膨らんでいた事に。
「どう?見違えたでしょ?」
「え…えぇ、別人かと思いました」
胸がですが。
「これで光一君もイチコロね」
「あ…いや、私に…そんなつもりは」

ぶんぶんと手を振る雨宮さん。

「…やっぱり、こういうのは駄目だ、自分を偽るのは良く無い」

そう言って一度試着室に戻っていく雨宮さん。

出てくると胸が無くな…、いえ、しぼんで…、あ…いえ。

胸が元に戻ってました。

「…ふん、こんな小細工必要無い」

その手には胸を大きく見せるマル秘アイテムが。

雨宮さんはそれを商品棚に戻…さずにレジへと。

「…これ下さい」

…買うんですか。

そんなこんなで服も購入して店を出ました。

「歩き回って疲れちゃったし…どこか寄ってかない？」

「どこにだ？」

「そうね…あっ！」

夏喜さんが見つけたのはカラオケ屋さんでした。

「カラオケでもしない？」

「いや…私は、そういうのは、ちょっと」

雨宮さんが露骨に拒否反応を見せます。

「というか私もカラオケなんて全然行かないですよ」

両親共あんまり行かないし小学生の友達同士が遊びに行く場所でも無いですし。

行く派は夏喜さん一人、行かない派は私と雨宮さん。

「それじゃあレッツゴ～！！」

それでも強引に連れて行くのが夏喜さんでした。

部屋に案内された私達。

ドリンクも注文し、まず最初に誰が歌うかという話しですが多分夏喜さんの独壇でしょう。

「それじゃあ…まずは雨宮さん、どうぞ！！」

とと…、夏喜さんが雨宮さんにマイクを渡します。

「いや…その、私は…最近の曲なんて、知らないし」

マイクを受け取ろうとしない雨宮さん。

「大丈夫よ…」

チャラッチャ～チャチャチャチャラッチャ～ッ！！

その時、いつの間に入れたのか一曲目がスタートしました。

聞いた事の無いイントロだなぁ…と思っていると。

「この曲…」

「最近じゃ無いからね」

でもお二人の反応を見ると二人は知っているようでした。

「なんですか…これ、アニメの曲…みたいですけど」

「美少女戦士・セーラー・ソーラー、太陽に変わってお仕置きよ！が決め台詞の大人気アニメよ」

「あぁ…、毎回敵が丸焦げの消し炭になるのが爽快だった」

あぁ…お二人の世代のアニメなんですね。

「これなら…わかるでしょ？」

「あぁ…二番までバッチリだ」

雨宮さんはマイクを受け取ると嬉しそうに微笑みました。

「二人で歌う？」

「あぁ…そうだな」

二人してこの美少女戦士セーラー・ソーラーのオープニングの曲を歌います。

私はよく知らないので画面に映るアニメの映像を眺めてました。

本当に消し炭にしてますよ…、今だったら規制されませんか、これ？

曲の途中に入る台詞も二人は完璧に言い合って歌い終えました。

「どう？ひなちゃん」

「あ、はい、私にはよくわかりません」

「…歳をとったな」

「考えちゃ駄目よ…考えちゃ」

私は素直に答えたつもりでしたがお二人は悲しげな声を出しました。

「と言う訳で今日は懐メロ縛りで行くわよ！！」

マイクを高く突き上げての高らかな宣言。

しょうがないので今日は聞く側に徹底しようかと思いました。

何より雨宮さんがあまりにもイキイキとしていたので。

―――

「ふぅ…」

―――

面接…と言えば変な感じになるが鬼瓦　厳三郎さんとの再会を終えた。

鬼瓦　厳三郎さんの他に二人、見知らぬ男が居たが彼等もエースだろう。

見た目にはどこにでも居そうな普通の男達。

エースは潜入捜査が主な仕事になるだろうからそれも納得だ。

ここまでは上手く行った…問題はこの次。

鈴音のやつに言わなければならない…な。

プルルルルルルルッ

「む…」

しばらく来なかった鈴音からの着信。

用事も済んだ事だしと出る。

『光一！お前…今までどこに』

「あ…あぁ、ちょっと用事があってな」

『一人で勝手に出歩くな！お前の命に関わるんだぞ！！』

「いや…だってさ、鈴音、気絶してただろ」

『え？ふぁ…、ふぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

昨日の夜の事を思い出してか鈴音は激しくキョドった。

いや、だから俺の名誉の為に言うけどアレはやってないからな！！

『ち、ちょっと…どうしちゃったの、雨宮さん？』

『な、なな、何でも無い…、昨日の夜は何も無かった』

「キョドり過ぎだ！馬鹿！！」

『お電話変わりました、ナース料理が得意なこーいちさん』

電話の相手が変わる、この声は日向か、一緒だったのか。

「ナースのツッコミはしない、それで…何の用だ？」

『いえ、今から晩ご飯を食べようかなと思うのでこーいちさんもどうかと』

「別にいいけど…」

『それじゃあ決まりです、後でお店の場所を送りますね』

「あぁ、わかった」

『昨日の夜何があったか…楽しみにしてます』

プツッ…ツー、ツー

「…怖ッ！！」

何だよ！今の捨て台詞は？

送られて来たメールを開く。

【シークレット】という名前の喫茶店のようだ、ここからそう遠くない。

裁判所に赴くかのような気持ちで向かう事にした。

―――

――

「いらっしゃいませー、お一人ですか？」

「あ…、いや、先に三人来てるはずだけど」

喫茶店の入り口。

俺を出迎えてくれたのはメイド…では無く軽く労働基準法方に違反するであろう幼女だった。

「あ、はい！こっちですよー！！」

幼女は元気良く俺を引き連れて先へ進んでくれる。

「あっ、こーいちさんです！！」

「やっと来たわね」

「ふしゅ～…」

約一名はゆでだこのように真っ赤な顔ですでにダウンしていた。

「おいおい…夏喜さん、大丈夫なのか、この店」

「ふふっ…良いでしょう」

あ、この人が何でこの店にしたかわかった。

「美姫はお父さんのお手伝いをしてるんです、この店、お父さんの店ですから」

「へぇ…偉いな」

「可愛いでしょう～美姫ちゃん」

「それでご注文は何にしますか？」

「美姫ちゃん、お持ち帰りで」

「あんた今に捕まるからな、マジで」

あまりにも迷いの感じられない素晴らしい即答であった。

「え？あのぅ…、ちょっと今はお店から出られなくて…」

真面目な幼女だ。

どこか捻くれたうちの幼女も見習って欲しいくらいだ。

「…何か？」

「何も、私達はもう注文したのでこーいちさんもちゃっちゃと選んで下さい」

ジト目で睨んでくる日向から目を逸らす。

「この人（夏喜）は相手にしなくていいぞ…、えぇっと」

メニューを開いて見る。

喫茶店とあるが中々食事物か豊富だったので安心した。

「んじゃ焼きうどんで」

「はーい、お父さん、焼きうどん追加だよ～」

「了解した」

厨房の中で幼女…美姫に答える父親らしい男。

「……」

そんな二人の光景を日向はぼーっと見つめていた。

「…日向？」

…柳の事を思い出しているのか。

柳は俺が殺した。

だから日向には俺を恨む権利があると言っても良かったが日向は以前と変わらずに俺に接してくれる。

あぁ、いや…社会的に殺されそうにはなったが。

「それでこーいちさん」

「んあ？」

ふと日向は美姫親子から視界を俺に戻していた。

「昨日の夜、雨宮さんと何があったんですか？」

「おい小娘、せっかく人が良い感じにしようかと思ってたのによ」

「私も聞きたいかな、雨宮さんのこの様子の訳も聞きたいし」

「うぐ…」

やっぱ話すしか無いのか…、ソレを。

「もしかして…こーいちさん、鈴音さんと、その、昨日はお楽しみでした…ってやつですか？」

「違うわ！つーかどっからそんな知識を仕入れやがる！！」

「違うの？私はてっきり…」

「だから違うって…、昨日はただ鈴音と…」

ごめんなさい、キスしました。

そしたら鈴音、ばたんきゅ～と気絶、だから期待させて悪いがその後は何も無い。

鈴音、純情過ぎるぞ…。

しかしそんな事実言える訳が無い。

「まぁいろいろあったんだよ、それより夏喜さんに相談があったんだった」

「あら…何？昨日の夜の事？もしかして上手く行かなかった」

「いい加減その話題から離れようぜ、日向も居るんだから」

「私ならへーきですが」

平気になっちゃ駄目だろ、この小娘が。

「ちょっと鈴音と出掛ける用事があるんだが、服を見立ててくれ」

残念ながら俺はそういうのには疎かった。

「あ…デジャブ」

「…え？何が？」

見ると夏喜はブルブルと震えていた。

「とんだピエロよ！私は！！」

「おわっ！！」

と思ったら前触れもなく爆発した。

「美姫ちゃん！ビール持って来て！！」

「うちには置いてありませんが…」

「喫茶店なんだからさ、当たり前だろ」

なんとも迷惑な客である。

「いいもん！私には日向ちゃんと美姫ちゃんが居るから」

間違えた…なんとも迷惑なキャラである。

「でも…」

あのゲームが終わり、皆でまたこうして集まって笑い合う事が出来た。

それが何よりも嬉しい。

俺は店員である美姫にチョイチョイと来るようにサインを送る。

「はい？どうしました」

「飯食べ終わったらさ、皆の分のパフェを頼むわ」

それは叶えれなかった慶吾との約束。

それでも…皆と食べたいと思った。

――

――

「ふぅ…」

すっかり遅くなった帰り道。

日向の事は夏喜に任せてしまう形になってしまった。

それもこれも…。

「きぅ～…」

今だに放心状態中な鈴音をおぶらねばならなかったからだ。

この放心状態でもしっかりと飯とパフェを食べたのは凄いが。

「…む？」

おっ…、やっと戻って来たか。

「こ、光一？お前は何をやっている！？」

「何って…おぶってんだよ、鈴音を」

こうやって鈴音をおぶるのも久しぶりだ。

前回は鈴音はトラウマ全開で俺は脇腹負傷という正に死にそうな場面だったが。

「だいぶ楽になったか？」

「…夜風が気持ち良いな」

鈴音の言葉に答えるようなタイミングでふわりと夜の風が彼女の長い髪をなびかせた。

「そりゃ結構だ」

鈴音をおぶりながら前へと進む。

「降ろさないのか？」

「降ろしたくない」

拒否。

「いや…その、恥ずかしいし」

「胸が当たるから――ぐぇっ！？」

言い終わらぬうちにおんぶの体勢で首をしめられた。

必然ながら密着する、胸の感触は…、ノーコメントで。

「悪かった、冗談だよ」

「まったく…お前は」

顔は見えないが呆れた声は聞こえる。

「ただこうしてたいんだよ、なんていうかな…支えたい、ってやつ」

今はこんな物理的な支え方だけど。

いずれ…、必ず。

だから俺は伝えるんだ。

「俺は…エースになる」

後日談：男の決意と女達のガールズトーク、昨日の夜は…（後書き）

次回でＥｐｉｓｏｄｅ2、ストーリーの最終回となります。
ここまで付き合って貰った皆さんに感謝しつつ後書きでまたお会いしましょう。

最終話：一人の少女の物語り【終】

「よう、久しぶりだな」

「…そうだな」

久しぶりの再開。

それなのに相手には渋い顔をされた。

まぁマズイ所を見られた訳だが。

「ふぅ…」

吸い終えたタバコを灰皿で揉み消し、一服を終える。

どうでもいいがまた値段を上げるらしい、他に税金を巻き上げるやり方は考えつかないのか？

「最近はお互い、任務ばっかで全然会えなかったもんな」

「しかしお前が”こっち”に来るとはな…、私はてっきり”向こう”かと思ったが」

「一目…見てみたかったのさ」

時計で今の時間を確認する。

――――時間だ。

目の前にはヘリがすでに出発の準備を終えていた。

俺達はそれに乗り込む。

「このゲームを終わらせた奴らをさ」

ゲームの終焉と組織の崩壊。

長い戦いが終了。

それが今日だ。

「俺にとっちゃ二度目だが、鈴音からすりゃもう三回目になるな」

「あまり足を踏み入れたい場所でもないがな…」

そう答える鈴音は苦笑いだった。

ヘリは俺達を乗せて飛んでいく。

向かう先は因縁の場所。

全ての始まりの場所。

俺達は再び（鈴音からすれば三度）、そこへと訪れる。

あのゲームの行われる建物だ。

―――

「お迎え、ご苦労様！！」

―――

「出迎えご苦労…」

久しぶりに入ったメインルームで俺は一人の女に声をかけられた。

パッと見、どこかの受付嬢かエレベーターガールを連想させるその格好。

「へぇ…なかなか似合ってんな、文香」

「あら、光一君ってば、こういうのが好きなの？コスプレとか？」

そう言って彼女…陸島　文香は冗談っぽく笑う。

今回のゲームでエースが送り込んだ工作員にして、俺の同僚。

「だったら雨宮さんに着て貰ったらいいじゃない」

「わ、私は…、だ、駄目だ！向いてない！！」

そういえば以前、潜入調査中の鈴音を見た事がある。

「そーか？巫女服、似合ってたぜ」

あと満更でもなさそうだった。

「なっ、なぜお前がそれを知っている！？」

顔を真っ赤にさせる。

勘違いされるとアレなんで言っとくが巫女と言っても潜入先は神社とかじゃなくて喫茶だ。

メイド喫茶の巫女バージョン、つーかなんでもそんな風に商売してどーすんだろねぇ。

ヤンデレ喫茶とか需要あるとは思えんが。

「しっかし大変だったな…、怪我は大丈夫か？」

文香からすれば突然エースと組織の命運を握る立場になった訳だ。

「私は大丈夫だけど…、手当てが必要な人が」

「安心しなって、今仲間が運んでるよ、で…あいつ等がそうか？」

今回のゲームに文香以外のエースの仲間は居ない。

だから文香は組織の送り込んだ強襲部隊に対し、一般のプレイヤーの力を借りるしか無かった。

「えぇ、今回の勝利の真の立役者よ」

文香の視線の先を俺も眺める。

おっとりとした見た目の女性に女子高生。

その中心に立つのは…一人の男子高校生だった。

歳は…あの頃の俺と同じくらいだろうか。

その集まりから離れた場所では二人の男が何やら話していた。

帽子を被った見た目アウトローな男がガタイのしっかりした男に親しみよく話しているが相手は適当に相槌しているみたいだ。

この二人は…強いな。

「ほとんど…女子供じゃねーか、よく勝てたな」

「あの二人が最後に美味しい所持ってっちゃってね…」

「なるほど、まんまと囮に使われたって所か」

「失礼ね…、否定しないけどさぁ」

事実らしい。

「それじゃちょっと挨拶でもしようかね、なぁ、鈴音」

「あぁ…」

「えっ…あ、ちょっと！！」

集団に近付こうとする俺達を文香が止めようとする。

「ん？なんだよ、ゲームの立役者達に一言お礼くらい良いだろ？」

「いや…その、ね」

「俺も良いかな？」

文香が言い終わる前にもう一人、別のエースの男が手を上げた。

「是非ともお礼が言いたいんだ」

うーん…コイツ誰だったっけ？名前が出て来ない。

「高砂か…」

高砂…、あぁそうそう、そんな名前だ（名字だけど）。

「あぁ、別に良いぜ」

やんわかと止めようとする文香を適当に促して俺と鈴音、後高砂の三人が集団に向かう。

「よう…」

「え!?あっ…どうも」

突然声をかけられたせいか男子高校生が驚いた声を上げた。

「そう驚くなよ…、とって食いやしない」

「あはは…すいません」

苦笑するその姿はどこから見ても普通の高校生だった。

「私達を迎えに来てくれたんですか～」

間延びした呑気な声でこの中で一番年上っぽい――。

「歳は17歳です」

…自称17歳ののほほんとした雰囲気の女性。

「まぁ…そんな所かな」

何となく作り物の雰囲気を感じたが…まぁ良いか。

「これで…全部終わったんですよね」

続いて声をかけてくる黄色いリボンが特徴の女子高生。

「…あんたらのおかげだよ」

「そんな…俺達は何もしてませんよ」

「あんたらが何もしてないなら俺達はもっと無能になる、だから素直に誇って良いんだよ」

「あ、ありがとうございます…」

俺はチラッと高校生の後ろにもう一人、誰かが居る事を確認する。

高校生にピッタリと引っ付いていてパッと見ではわからなかったがあの頃の日向と似た歳の少女だ。

俺達、ここに来たエースの誰もがその存在を知っている。

組織のボスの娘である色条　優希。

本人にその自覚が無いまま、今回の組織壊滅の引き金となった少女。

その少女がこちらの様子を伺うようにチラッと顔を出した。

「あ…あの」

少女が一言言葉を発しようとしたその瞬間。

俺と鈴音は互いに目を配らせてコンタクトをとる。

俺と鈴音の後ろで高砂が動き出す。

その手には拳銃が握られている。

タンッと鈴音が床を蹴って後ろの高砂へと跳び、手刀によって拳銃を弾き落とした。

「!?」

高砂は突然の出来事に僅かに動きを止めるがすぐに対応するかのように身構える。

流石はエースの同業者、訓練はバッチリ経験済みですか。

ブンッと風を切るような蹴りが鈴音へと向かう。

「鈴音ッ!!」

俺はその間に入り高砂の蹴りを受け止めると。

グルンッと身体を回転させて高砂の身体を床へと叩き付けてやった。

そのまま間髪入れずに鈴音が素早く高砂を拘束する。

「てめぇら…」

高砂は呪うような目で俺と鈴音を睨みつけて来た。

「わかってんのかよ…、そのガキはなぁ、組織のボスのガキなんだぞ」

「だがゲームには関係無い、お前らタカ派は節操が無さ過ぎんだよ」

タカ派は全員船の制圧に回ったという話しだったが念を入れて正解

だった。

エースに入る上での重要な選択を思い出す。

基本的なエースの活動である工作員となるか、高砂のように強攻派となるか。

俺自身、親友をゲームで失っている、組織の連中を皆殺しにしたいって考えた事もある。

だが…観月の事を考えると結局、タカ派にはなりきれなかった。

鈴音も今ではタカ派じゃないし。

ってな訳で仕事終了。

「文香、こいつちょっと拘束しといてくれ」

「…ありがとう、あなた達の中に優希ちゃんまで手にかけようとする奴が居るかもなんて考えつかなかったわ」

「念には念をだよ…」

だからあぶり出す為にわざわざ近付くというエサで釣った。

「でも…光一君に雨宮さんは？」

「ん？俺達か？」

聞かれた事が意外だったので俺と鈴音はお互いに顔を見合わせた。

「こんな小さな娘に文句言っても恥ずかしいだけだろ」

「…そうだな」

そしてどちらからともなく頷きあった。

「ちなみに…この中に組織の人間は居るのか？例えばゲームマスター側とか」

「え？あの…、その」

しどろもどろになる文香を見るとどうやら居るらしい。

「…そいつは隠しといた方が良いな、タカ派に知られれば面倒だ」

「光一君はそれで良いの？」

「組織の被害者を守るのもエースの仕事だと思ってたんだけど、違うのか？」

「そうね、うん、その通りだわ」

文香は嬉しそうに頷いてくれた。

「あの…スパイのお兄ちゃん？」

「…ん？」

声に振り返ると優希が俺の服の裾を握っていた。

つーかスパイって何だ？どんな説明したんだ文香の奴は。

「助けてくれてありがとう！！」

元気の良い、歳相応の可愛らしいお礼。

「いやいや、これも仕事だ」

「スパイ活動の？」

「そ、スパイ活動の」

ニヤリと笑って少女の頭を撫でてやる。

この少女の父親は間違いなくエースに殺されるだろう。

その事に関しては俺は一切の口出しをするつもりも手を出すつもりも無い。

だが…これから少女を待つ過酷な人生は明らかだ。

―強く生きろよ、無責任だけどさ。

「ほら、あの兄ちゃん達の所に行きな」

「うん！！」

頷くと少女は男子高校生と女子高生の所に戻っていく。

こうして三人を見るとまるで親子のように思えた。
あの二人ならば上手く支えてくれるかもしれないと。
「なぁ、あんたタバコ持ってねぇか」
三人を見ていると今度はカウボーイハットを被った金髪の男に声をかけられた。
タバコか、この建物じゃ手に入ん無いよな。
そりゃ苦しかっただろーな、吸わない奴らにはわからない苦しみだ。
「タバコ…まだ吸っていたのか？」
横から鈴音があからさまなジト目で俺を見てくる。
「銘柄はなんでも良いのか？」
「こんな状況だったんだ、贅沢は言えねぇだろ」
「そりゃそうだ…、ほら」
俺は金髪の男にタバコを箱ごと投げ渡す。
「っと、ありがとよ、中身ほとんど残ってっけどまるごと貰って良いのか？」
「あぁ、後ろの男にも分けてやってくれ」

「…あんた強ぇな、さっきの見てたぜ」

早速箱から一本タバコを取り出し、火を付けると金髪の男は後ろの男に箱を投げ渡し、そう聞いて来た。

「あぁ、強いな」

「どうだ？今度俺達と一緒にでかい事しねぇか？」

「さりげなく俺を頭数に入れるな」

金髪の男の言葉に後ろの男がタバコに火をつけてから口を挟む。

鍛え抜かれたその身体を見るにどことなく俺達と同じ匂いを感じた。

「タバコ…全部渡したのか？」

「あぁ、全て終わったんだ、元々今日止める気だった」

「光一…」

「……」

タバコを吸う二人を見る。

唇が寂しさを訴えるかのようにむずむずとした。

「やっぱりラスト一本――」

バシンッと軽く手刀で頭を叩かれた。

「冗談だよ…冗談」

「まったく…お前という奴は」

「ようやく…終わったな」

「あぁ、長かった」

改めて、今回のゲームの参加者達を見回していく。

「これで…組織は壊滅だ」

「…あぁ」

「ゲームももう開かれる事が無いはずだ」

「…あぁ」

「鈴音、もうちょっと肩の力抜いたらどうだ？」

「わ、私はいつもと同じだ」

いや、明らかにいつもよりも力が入っているから…。

「お前の復讐は終わったんだ」

「…光一」

鈴音が身体の力を抜いて、俺の胸にそのままその身体を預けた。

俺は鈴音の背中に手を回し、優しく抱きしめる。

優希や男子高校生達が顔を赤くさせたがヘリの方へ向かって行った。

「長かった…、ようやく…終わった」

鈴音は肩を震わせて泣いていた。

「よく…頑張ったよ」

ゲームによって父親を失い。

母親を殺し。

普通の人達が味わう青春も捨て。

俺の胸の中の”少女”はずっと戦い続けて来た。

それはとても辛いものだっただろう。

「あの時…、俺がエースになるって言った時の言葉、覚えてるか？」

「…あぁ」

―――

『光一…、お前がエースになる必要は――』

――

『まだ終わって無いからな…』

『……』

『俺は取り戻したいんだよ、エースに所属し、組織に復讐を誓う雨宮　鈴音じゃない、本当の鈴音を、そいつを取り戻したい』

『本当の…私』

『つー訳で鈴音、全てが終わったら本当のお前に戻ってもらうぞ』

―――

――

「そうか…そういえば、そんな事を、言っていたな」

「さぁて…んじゃ手始めに本当の苗字でも教えて貰うかな」

「え…いや、それは」

「復讐の為にエースに入って苗字も変えたんだろ？だったらもう良いだろ」

「うぅ～…、光一、ちょっと耳を貸してくれ」

「へいへい…」

言われるままに耳を近付ける。

「――――だ」

小さな声で酷く聞き取りずらいが俺は確かに聞こえた。

「…そうか、なるほどな」

「わ、笑わないのか？」

「いや、むしろ納得したし」

少女の心の中で降り続けていた長い”雨”が止み、ようやく”晴れ”になる。

それは今や、俺だけが知る彼女の本当の姿。

「さて…んじゃ帰るとするか」

「…うん！！」

俺達は手を繋ぎ、ヘリへと向かう。

”雨宮　鈴音”はその役目を終え、一人の少女へと戻っていた。

俺の報酬としては、それで充分だった。

俺は立ち止まり、天井に備え付けられたカメラん見た。

今、船は戦場だ、恐らくこの映像を見ている者は居ない。

だから俺は笑って言ってやった。

「なぁ、トゥルーエンドとまでは行かないけどさ、ハッピーエンドも良いもんだろ？」

エピローグ：隠された13の鍵

こうして一つの物語りが終わった。

ゲームももう開かれる事は無いはずだ。

それでも…時々考える事がある。

あの頃の俺達に向けて。

何か…もっと何か、最善のやり方があったんじゃないかと。

慶吾も死なず、柳も狂行に走らず、観月だって救える道。

ゲームの犠牲者の出ない、トゥルーエンド。

その夢物語りを俺は不可能な事か…と一笑した。

思えばあのゲームのＰＤＡ、各プレイヤーに配布された解除条件は絶妙だった。

柳を狂行に走らせる為の日向の【９】

新城、国枝、藤木等の好戦的なプレイヤーに対してはそのやり方が一番合うＰＤＡを。

俺だってゲーム早々に【Ｑ】の持ち主に会っていたらどうしていたかわからない。

ゲームの目的は単なる俺達の殺し合いでは無いが…、ゲームをより盛り上げる為には殺し合いは必要不可欠。

この解除条件の配布は組織が俺達に殺し合いをさせる為の必然だったのだ。

もちろん、抜け道だってある。

だが何も知らない一般人があのゲームに参加したならば解除条件通りに…。

組織の仕組んだ殺し合いのプラン通りに動くしかない。

例外は観月や中村といったゲームマスター側か雨宮のようなエースとしてゲームに潜入するかの二つ。

だがゲームマスター側はもちろん、エース側だって目的をそう簡単にさらす事はしない。

だから…必要だったのだ。

”組織側でも無ければエース側でも無い、それでいて最初からゲームの詳細を知る者”の協力。

俺達の場合は柳がそうだったのだろうが、柳は日向に会わなければ自殺、会えば日向の解除条件の為に狂行のどちらかだ。

日向のＰＤＡが【９】である限りその結末は変わる事が無いだろう。

組織が柳をプレイヤーに選んだのもその事があるからだろう。

堂々巡りの考えだった。

謎が解けかけても空が閉じたように闇が広がっていく。

闇の中に答えは無い。

だが答えを出す最後の扉はすぐそこにあると…俺は何故か感じた。

あとは隠れた鍵を見つけるだけ…。

扉を開ける　鍵はどこにある?

―――

――

ぐるぐると時計が逆回転を始める。

砂時計の砂が上へ上へと舞い上がる。

時はゲーム終了後。

場所は一軒のボロ屋。

ボロ屋の前にはそれと似つかわしくない高級車が止まっていた。

「そんな…姉さんが」

そのボロ屋の中で一人の少女がうなだれ、床に膝を付き、手で顔をおおい、泣いた。

父親もその家に居たがパソコンの前に座り、ぶつぶつと廃人のように呟いているだけだった。

なのでこの訪問者の対応が出来るのは少女だけだった。

「我々としても残念だよ、彼女は我々の組織の為に良くやってくれた」

少女の目の前には三人の黒いスーツを着た男達が立っている。

その中心に居座る初老の男が少女に向けて言葉をかける。

「君の姉である…鷺宮（さぎみや）　観月はゲームにて命を落とした、残念ながら契約上、こちらはそれに対し何もしてやれない」

ゲームマスターという仕事上で起きた”死”。

その一切の責任を組織は負わない。

「だが…もう一つの契約は有効でね、我々としてはこちらが本題だ」

「はい、わかって…ます、お父さん、父の借金、ですよね」

少女は涙を堪えながら顔をあげる。

「わかっているなら話しは早い」

初老の男はカバンから数枚の紙を取り出し、机の上に乗せた。

「君のお姉さんも頑張ってくれたが、まだまだ君のお父さんが借りたお金は残っている」

観月はゲームマスターとして何度もあのゲームに参加し、賞金を持ち帰っている。

そして借金の返済と家への仕送りに使っていた。

だが…父親はそんな事も関係無く、パソコンによるゲームへの賭けを止めない。

返した借金がまた増え、利息も追加される。

まるで解けない呪いのように。

「どうだい？お姉さんの跡を継ぎたいと…、そう、思わないかい？」

初老の男が優しく、それは正に気味の悪い程の優しい笑みで少女の肩に手を置いた。

「鷺宮（さぎみや）　加奈美（かなみ）君」

「わ…私は…」

声を震わせながら、掠れた声を無理矢理大きくするように。

少女は決意の言葉を告げた。

――

――

「本当に良いんですか？」

「…ん？何がかな？」

ボロ屋を出て車に乗り込み、黒いスーツの男の一人が初老の男に声をかけた。

「彼女、どう考えてもゲームマスター向きじゃ無いですよ、ヘタしてせっかくの舞台をむちゃくちゃにされたりしたら…」

先程の加奈美の様子を黒いスーツの男は思い出す。
終始怯えていて、すぐにでも泣き出しそうなその表情を。

「くっくく…、わかってないな、君も」

「…と、言いますと？」

「人間は見てくれじゃなく、中身の黒さなんだよ、それじゃあ君はゲームに参加してもすぐに死ぬ」

――

――

「…姉さん、なんで？」

男達が帰った後も加奈美は涙を流している。

「…なんで？」

涙は止まる事が無い。

「なんで…なの?姉さん…」

その雫は床にシミを作るようにぽたりぽたりと落ちた。

「なんで…もっと早く、死ななかったのかな」

加奈美の口元は…笑っていた。

「こんなに焦らされちゃったら、嬉し涙も止まらないよ」

そのまま立ち上がり、顔を上げた。

「やっと…私の番が来た、あぁ…、本当、楽しみね」

既に少女は涙を流していない。

変わりに強烈な笑みがその表情には見えた。

姉である観月が家から出て数年。

その年月を家に残された加奈美。

ゲームに狂った父親との生活は加奈美を狂わせるには充分過ぎた。

「お父さん、これからは毎回加奈美に賭けてね、私は絶対に勝つから」

最早返事もしない父親を抱きしめ、話しかける。

「実はね…とっておきの作戦があるの」

返事も待たず、加奈美は言葉を続けた。

「聞きたい？聞きたいよね？良いよ…教えたげる」

加奈美は父親の耳元に自分の唇を近付ける。

その姿は父親に内緒話しをする小さな子供そのものだった。

「最初にＰＤＡが配られた後ね…、ばれないように全員のＰＤＡをシャッフルするの」

―――

――

【一人の思惑は、やがて全てを取り巻く】

後書き

っ…はい！てな訳でシークレットゲームＥｐｉｓｏｄｅ2、無事に完結いたしました。

とりあえずパチパチとセルフ拍手をしてみます。

物語りスタートから一年以上、ちまちまと書き続けて気付けば計75話というＥｐｉｓｏｄｅ1を軽く超える長さになってしまいました。

その間、作風がコロコロ変わったのは御愛敬という事で。

いや、本当は一話にもっと詰め込んで話数を抑える事もできたと思うんですが…自分の場合長文を書く集中力が無いので一話に3ページくらいが限度かなぁ…と。

誤字や脱字も多いですしね、いや、本当すいません（汗っ）

Ｅｐｉｓｏｄｅ1はシークレットゲーム入門編として、

あえて組織の事には触れず、プレイヤー通しの戦いや行動の読み合いをメインにしました。

なので主人公、ヒロイン共に”普通”の高校生にしました。

慶吾はちょっとお人よし過ぎるかもしれませんが特に過去話しも考えてません。

そのせいかちょっと影が薄いとよく感想に書かれますね、自分もそう思います（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ1のイベントは【Ｊ】の慶吾、【Ｑ】の唯、【Ａ】の王生の三人がどう行動するか、ですね。

仕掛けは最後まで【Ｋ】のフリをする王生です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ2では逆に組織側との戦い、このゲームの詳細な所まで展開しました。

なのでバトルメイン…、特に後半は観月、国枝、中村、柳とボスラッシュが続きます。
主人公を万能超人の王生とし、エースの雨宮をヒロインに迎えてスタートしました。

原作ではエースのエージェントである我等が文香さんのルートが無いのでエースのルートを書いてみようという感じですかね。

主人公を慶吾から王生に変えたのは慶吾が後半のボス相手に大立ち回りは不自然過ぎるので（笑）
またヒロインである雨宮の持つ闇を理解できるのは同じく闇を持つ王生だろう…という考えからですね。

Ｅｐｉｓｏｄｅ1で観月を殺した雨宮が歓喜の笑みをしていたのにＥｐｉｓｏｄｅ2ではそれが無かった事にも注目ですかね。

ちなみにＥｐｉｓｏｄｅ1の雨宮は中村と相打ちです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ1の雨宮は誰にも頼らずに組織打倒に突っ走っていたのでその結果はある意味必然ですかね…。

Ｅｐｉｓｏｄｅ2は同時に【9】のＰＤＡを活用する為に柳と日向のエピソードも盛り込みました。

仕掛けはもちろん、一度侵入禁止エリアへと落ちた柳。

藤木が死んだ場所に日向が居たのは原作、キラークィーンのＥｐｉｓｏｄｅ2の優希を意識しました。

シークレットゲームにおける幼女キャラは皆殺しの優希のイメージが強いので日向もそうなのか？という疑いを読者の皆さんに思わせる為です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ2で大活躍？したのはなんと言っても国枝ですよね。

最初はＲＰＧにて何度も戦う中ボスという立ち位置でしたがいつのまにか最後の最後まで王生の生死に関わるキャラになっていました。

ゲームとは全く関係の無い所で暴れ回る彼は読者の皆さんも行動に予想がつかないでしょう、まぁ王生狙いは確実でしたが。

国枝が生き残ったのは王生達主人公組以外のキャラの生存も無いとご都合展開かなと思ったからです。

国枝が最後どうなったか…、描写は書きません。

皆さんの想像にお任せします。

しかし国枝はＥｐｉｓｏｄｅ2で動かしすぎたかな？

Ｅｐｉｓｏｄｅ3でまた王生付け狙うのはパターンみたいになりますが…。

個人的に国枝は王生専属のストーカーのままが良いです（笑）、ど

うしようか悩む所ですね。

さて、王生が最終的にエースになり、原作Ｅｐｉｓｏｄｅ４とリンクしたＥｐｉｓｏｄｅ２ですが。

原作のキャラを動かすのって結構神経使います、もうキャラが出来てしまっている分、好きに動かせないので（笑）
優希と文香さん以外は名前も出していませんが、おおよそ誰が誰だかはわかるはずです。

ハッピーエンドもバットエンドもどちらにしても王生はエースになりますがその性格は１８０度真逆ですね。
バットエンド王生なら優希も見逃さない鬼畜さをみせるのは間違いない（笑）

バットエンドにてスイッチの入った王生は描写こそ無いですが最終的に一人で中村も柳も殺して生き残ってますから。
ちなみにバットエンドの王生が【Ｑ】を持たせる相手も居ないのに生き残れたのはハッピーエンド時の日向と同じす。

さて、Ｅｐｉｓｏｄｅ２も完結しましたが今回のエピローグはまるまるＥｐｉｓｏｄｅ３への伏線と思って下さい。

”鍵”を握るのはもちろん、Ｅｐｉｓｏｄｅ１のエピローグにも登場した加奈美。

ここで各キャラクターのゲーム開始時においての行動方針でもおおよそに整理しますか。

Ａ：王生：【Ｑ】の持ち主に会えば殺害、慶吾に会えば慶吾の生存

を優先、Ｊｏｋｅｒはあれば使う。
２：雨宮：サブマスターである観月を狙う、中村はまだ面が割れていない、他プレイヤーは襲ってくる者だけ対処。
３：藤木：小心者だが一度殺害を犯せば後は積極的になる。
４：夏喜：他プレイヤーとの協力を求める。
５：御子柴：冷静にゲームの流れを見る、ＰＤＡの条件上、移動がメイン。
６：中村：必要な時以外は前に出ず、観月に指令する。
７：観月：組織の命令があれば優先、サブマスターのカメラマンの仕事とＰＤＡの条件上、各プレイヤーと積極的に接触。
８：新城：条件クリアの為、積極的にゲームに参加、臨機応変に物事に対応する、不意打ち、罠、騙し撃ちが大好き。
９：日向：誰と行動するかで変化する、ゲーム開始時の部屋は柳のすぐ近く。
１０：国枝：非常に好戦的、標的を決めればゲームも無視。
Ｊ：慶吾：仲間を求める、仲間の解除条件を満たそうとする。
Ｑ：唯：自分を守ってくれそうな頼れそうな者を求める。
Ｋ：柳：日向に会わなければ自殺、会えば日向の為に他プレイヤーを皆殺しにして自殺しようと考える。

うん、改めて言わせて貰うと…。
こいつら協調性無い奴ばっかじゃねぇかと（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ３では彼等はどのようにゲームの渦中へと巻き込まれるのか…。

さぁて、次回のシークレットゲームは？（サザ○さん風に）

・このシークレットゲーム小説は主人公がコロコロ変わります。
・当然の如くヒロインも変更します。
・Ｊｏｋｅｒも――――以下略（笑）

・一人の思惑による罠が全てを取り巻きます。

今回のエピローグはまるまる次回予告みたいなものなんで。

Ｅｐｉｓｏｄｅ3開始は未定ですが気長に待って貰えたら嬉しいです。

では、僕の考えたシークレットゲーム、Ｅｐｉｓｏｄｅ2、これにて終結としましょう。

実は現在、シークレットゲーム以外のオリジナルのゼロサムゲーム物を思案しています。

タイトルはまだ《未定（むしろ募集中？）》ですが触りの部分だけ、予告という事で載せたいと思います。
興味の無い人はスルーで（笑）

《未定》

※予告編なので内容が変わる、もしくはやらないかもしれませんがご了承を。

――

――

現実から切り離された閉鎖空間。

集められた１４人。

年齢も職業も性別も、何一つ共通点の無い彼等を結ぶキーワード。

【自殺】

「俺には…あんたらみたいなご立派な理由は何も無い」

理由無き者：遼　彼方。

「…死ね」

夢を潰された少女：柏瀬　詩織

「男って奴は二種類に分けられる、ロリコンに覚醒したか、まだ目覚めてないかさ」
二次元依存：大前田　友清

「生きる事は…辛いから」
心弱気青年：深見　柾

「こういう時こそ規律を守るべきよッ！！」口やかましい委員長：宇佐　飯子

「…信仰の救いあれ」
宗教狂い：日向　日景

「私の身体…見せたくないから」
虐待された少女：日向　日向

「いやよ　みいていまさにし　すぺぺとらまたかり　うららららららら♪これで世界は絶望じゃ」
厨二の電波女：勅使河原　社

「だって…怖いから」
男性恐怖症：水茂　めぐみ

「いいよ、だったら殺してあげるから」
ヤンデレ気味のストーカー：国崎　瑞穂

「…これはチャンスか、与えたのは死神だかな」
経歴不明の男：緋泉　紳一

「退屈過ぎて死ぬとこだったぜ、あぁ、もう死んでんだっけか？」
享楽主義者：赤松　慶二

「妻と子に何もしてやれなかったのが心残りだな
リストラされたサラリーマン：榊　昌弘

「ようこそ…、死後の世界に」
冷静沈着な少女：織笠　未娘

彼等に配布される、自殺時に使用した道具。

かつて自らを殺したその手で誰かを殺せ。

世界の謎を解き明かせ――――。

最後のおまけ：世界の中心で出番を叫んだモノ

慶吾「なんで…なんでこんな事になったんだろう」

慶吾「Ｅｐｉｓｏｄｅ１で主人公に選ばれて張り切ったのに…コウに美味しい所奪われて…、Ｅｐｉｓｏｄｅ２じゃ主人公から外されて、数える程しか出番無くて…、いつのまにか死んで」

夏喜「でも光一君を信じて共に戦ったのはあなたよ、慶吾君」

御子柴「私だってＥｐｉｓｏｄｅ２では活躍の場は無かったんだ、ちなみにＥｐｉｓｏｄｅ１では最後に活躍したがな、描写有りで」

新城「俺はなんだかんだでいつも惜しい所行ってんだよなぁ、敵なのによ」

藤木「な、なんというか中途半端なんだよ、活躍する訳でもなく、しない訳でもなく」

観月「気にするな慶吾少年、私はアニメとかでもついついモブキャラの作画や声を気にするタイプだから」

中村「ゲームマスター側から言わせて貰えばもうちょっと前に出て存在感をアピールして欲しいかの、ＢＥＴされるくらいには」

柳「Ｅｐｉｓｏｄｅ１では結果的に、君は私を倒したんだ、自信を持っていい」

日向「誰ですか?知らない人です」

雨宮「心配しなくて良い、お前にも次がある、主人公では無いと思うが」

国枝「いくるみぃぃぃぃぃぃぃ!どこ行きやがったぁ!!」

王生「慶吾…、強く生きろよ、国枝が来てるんで俺は逃げる」

慶吾「駄目だ…また出番をコウに持ってかれる気がする、Ｅｐｉｓｏｄｅ3に俺って必要なんだろうか…」

唯『慶吾さんの馬鹿ッ!慶吾さんはＥｐｉｓｏｄｅ1でちゃんと主人公やってましたよ!キャラ立ってましたよ』

慶吾「そうか…良いんだ」

ピシッ

慶吾「俺はＥｐｉｓｏｄｅ3に出ても良いんだ!!」

ガシャンッ

夏喜「おめでとう」

御子柴「おめでとう」

藤木「おめでとう」

中村「おめでとう」

観月「めでたいな」

日向「おめでとうございます」

柳「おめでとう」

新城「おめっとさん」

雨宮「…おめでとう」

王生&国枝「おめでとう」

慶吾「…ありがとう」

【読者の皆様にありがとう】

【Episode2にさようなら】

【そして】

【結崎ハヤさん、ナイトホークさん、油桜さん、桐島成美さん、ナージャさん、マッチさん】

【ＢＥＴ正解！おめでとう！！】

慶吾・唯「おめでとう（ございます）！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9971l/

シークレットゲーム【episode２】

2011年9月30日12時22分発行